書評

～タンポポのさんぽ～

- 私流文庫・新書の楽しみ
- 学ぶ～ひかりにとける花びら
- 環境・COP15～くさのひかりにあるく
- 裁判員制度～さざなみにうくひかり
- 平和～そよぐ薄紫の野
- ものがたる緑陰の光彩

第133号
2010・春

虚無への供物
中井英夫

アンチ・ミステリーの傑作

田中 登

「小さなひなげしのように」「アルフォンソ」「ムッシュ・ルノーブル」「ガレリアン」「ルナ・ロッサ」「紅いさくらんぼと白い林檎の木」などの唄が、次から次へと登場する本といえば、てっきりシャンソンの名曲辞典かと思いかねないところだが、さにあらず。これは知る人ぞ知る、かの中井英夫が搭晶夫の名で一九六四年に発表した、れっきとしたミステリー、いやアンチ・ミステリーなのだ。

時は発表時から十年ほどさかのぼった一九五四年の十二月、場所は東京下谷・竜泉寺のバア「アラビク」。その扉を開けて中に入れば、そこには、ヨカナーンの首に魅せられた、妖姫サロメのいでたちで踊る少年が一人。その唇には鮮やかな黄色の薔薇が一輪添えられていた、とこんな印象的な一場面から、氷沼一家にまつわる惨劇の幕は切って落とされるのである。

両親を洞爺丸の転覆事故で亡くした氷沼蒼司と、いとこの藍司、氷沼家に起きる事件に深い関心を寄せる光田亜利夫に奈々村久生、そして久生のフィアンセ牟礼田俊夫と、登場人物が名探偵よろしく様々な推理を展開するが、謎はいっこうに解き明かされることなく、かえって事件は混迷の度を深めるばかり……。

二重橋圧死事件や第五福竜丸の死の灰、そして洞爺丸の転覆事故など、不条理な大量殺人という名の事故を背景に、崩壊してゆく氷沼家の悲劇を描いたこの作品は、推理小説にして推理小説にあらず。そこに展開するのは、作者中井英夫の精神の風景であり、まさに天下の奇書の名に恥じないもの。「アンチ・ミステリー」と呼ばれるのもゆえなしとしない。ありきたりの謎解き小説に飽きた推理小説ファンには是非とも薦めたい一冊だ。

（たなか　のぼる・関西大学文学部教授）

講談社文庫
2004年４月刊
本体価格　各695円

表紙画像に1974年３月刊を使用。
現在は、新装版（上）420頁、（下）475頁の二分冊。

私流文庫・新書の楽しみ

『虚無への供物』中井英夫著……田中　登　表2
『早わかり世界の文学』清水義範著……田中　登　表3
『新釈遠野物語』井上ひさし著……板野　智昭　4
『ソロモンの指環』コンラート・ローレンツ著　『檸檬』梶井基次郎著……稲田　貢　6
『フラニーとゾーイー』J・Dサリンジャー著……福田　恭輔　8
『バーボン・ストリート・ブルース』高田渡著……松久　卓也　10
『読書進化論』勝間和代著……上田麻友美　12
『人はいかに学ぶか』稲垣佳世子・波多野誼余夫著……巽　なぎさ　14
『友だち幻想』菅野仁著……松居　義邦　16
『教養主義の没落』竹内洋著……和田裕美子　18

学ぶ ～ひかりにとける花びら

連載　日本語を教えることと学ぶこと　―ロンドン便り（九）―……マイルズ純子　20
書評　非正規教員からの手紙……宇佐見言人　25
『ドキュメント高校中退 いま貧困がうまれる場所』青砥恭著
評論　緊急報告・いつまで続ける？ 朝鮮人・朝鮮学校への差別・迫害……藤井幸之助　30
―日本における民族排外主義団体の最近の活動を中心に―
新連載　素朴・ぬくもり・肉感性　中野重治と教育（第一回）……玉田　勝郎　40
書評　心打つ竹中恵美子の苦難の躍動の半世紀……金谷千慧子　50
『竹中恵美子の女性労働研究50―理論と運動の交流はどう紡がれたか』
（竹中恵美子／関西女の労働問題研究会著）
連載　博物館実習展1　知られざる大阪の伝統工芸〝張り子〟……進元　冴香　58
博物館実習展2　絵双六に見る大阪近代史……園田恵梨果　62
博物館の資料(8)　物が語る歴史　関大博物館　モースの考古学と「石器図」……山口　卓也　68
二年目へ新たな風を「島根展」……小山　怜司　81
～大学生が運営する産直店のメンバーとなって～

（カット・槇原美奈）

環境・COP15 ～くさのひかりにあるく

評　論　ソーラージェネレーション ……太田勇次・北川祥子・小林悠希・高木麻衣子・田所由佳梨　90
～太陽光発電が未来を救う～

評　論　COP15コペンハーゲンの地で ―COP15に参加して― ……良永　康平　103

評　論　COP15から見える先進国と新興国の対立と
日本の温室効果ガス25％削減の可能性 ……木庭　元晴　120

評　論　持続可能な発展（Sustainable Development）について（前編）……室山　勝彦　131

評　論　茨木市の森にみるアカマツ林・落葉広葉樹林の変遷 ……叶　晨　144

裁判員制度 ～さざなみにうくひかり

評　論　裁判員制度と証拠開示問題 ……中北龍太郎　154

評　論　裁判員制度 ……栗野　仁雄　159
「市民参加」の裁判員制度は、大きな問題もなく
粛々と進んでいるかのように報じられている。
果たしてそうだろうか。

平和 ～そよぐ薄紫の野

評　論　米軍基地を誘致するか、それとも撤去するか ……田中　佑弥　164
―「普天間移設」についての私の問題設定

往復書簡　常本一さんへ　9・11（同時多発テロ）をアメリカの学校での体験から ……福田真菜緒　169
福田真菜緒さんへ　アメリカ、日本の国旗・国歌の疑問を語りあいませんか ……常本　一　173

書　評　「戦後文学」の原形③　三島由紀夫を読む ……今村　秀雄　176

書　評　マルクス主義の原則を索めて　―武井昭夫『〝改革〟幻想との対決』を読む ……吉田　永宏　184

旅と絵本・Ⅱ　アジアの本屋めぐり　日常生活の息吹を体験 ……下垣　和美　201

（カット・城 万喜）

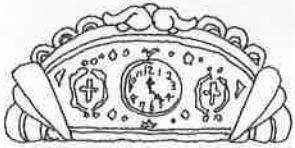
ものがたる緑陰の光彩

創作講座　clasp……大森　紀子　220
創作講座　裏ドラ……岸田　良太　232
掌編小説　フェイスフル……魚日　記　246
書　評　「妄想」と「リアル」の接合点　『夜は短し歩けよ乙女』（森見登美彦著）……城内　裕樹　256

連　載　亀をめぐる造形　―アジア美術の世界9―……長谷　洋一　208
連　載　本のいろいろ　関大図書館　㊻国書総目録……仲井　徳　153
㊼物売りの声　㊽往来物　212
㊾叢書　㊿類書　216
連　載　図書館資料紹介(19)『それでも、ゆとり教育は間違っていない』（寺脇研著）……渡部晋太郎　72
(20)『靖獻遺言』　淺見絅齋著　194

編集メモ……262

表紙画：古谷真理（美術部白鷺会）
イラスト：一瀬優紀・城　万喜・槇原美奈（美術部白鷺会）



（カット・一瀬優紀）

新釈遠野物語

井上ひさし

板野智昭

遠野を旅したのは、私が本学に赴任するずっと前、まだ私が学生で二十を少し過ぎたころのことだった。冬休みに入ってまもないある日、私は誰にも伝えることなく、カメラと量子論の本とわずかな着替えだけを携え、ふらり寝台列車に飛び乗り東北周遊の一人旅に出た。東北に向かった理由の一つは、たまたまそのころ読んだ井上ひさしの新釈遠野物語から、幼少時代より馴染み今の自分の一部を形作った日本の民話の多くが遠野という地方にルーツがあることを知り、この地方に興味を持ったからだ。

旅を始めて三日目の昼ごろに、青森から岩手の県境あたりのトンネルを越えたところで、横殴りの雪が車窓に吹きつけはじめ、それからは視界一面白銀の世界に変貌した。まだ昼だと言うのに太陽は完全に閉ざされ、窓外を光を放ちながら降下していく雪とは逆方向に、まるでタイムマシンにでもなった列車ごと天に向かって加速してくような錯覚を覚えるほどで、釜石線に乗り換えてからは、列車は深く降り積もった雪の中を潜るように駆けた。遠野の駅に降り立つころ、いよいよ勢いを増した雪は風に煽られて私の体を下からも吹きつけ、宿への道に迷っている間に、外套は雪にジトッと濡れて重くなってきた。山に囲まれた土地柄のためか日が落ちるのも早いようで、あたりはどんどん暗くなるばかり、道すがら夕飯を買いにコンビニに立ち寄る間もなく、私は宿への道を急いだ。この日予約しておいた民宿は、駅から一キロほど歩いたところにある河童が住んでいたという淵を右に曲がって、さらに三キロほど旧国道を登ったところにある山あいの民宿であった。雪の中を歩くにはかなりの距離だが、急に降り出したこの雪でそうそう車も走っておらず、寒さに凍え道に迷いながら二時間ほど歩き続け

新潮文庫
1980年10月刊
本体価格 540円

た末、暗い小路の先にやっとの思いで見つけた宿に駆け込んだ。宿の戸を閉めると、外とはまるで別天地のように、中はとても静寂で暖かく、やわらかな明かりが私を包みこんだ。雪をはらい、玄関口でしばらく待っていると、中から若い女性が出てきた。年の頃は二十半ばくらいだったか。やや痩せてはいるが、どことなく色白の器量のいい女性だった。「よくこの雪の中お越しになったね。」

その日の客は私だけで、母屋とは廊下一本で通じる離れの一間に案内された後、私は安心感と疲れとで、何も食べることもなく床に着くと早々に寝入ってしまった。夜も更けたころ頬に刺す冷たい空気にふと目を覚ました。用をたしに、つきあたりにある便所まで冷たい廊下をつま先立ちでそろそろと歩いていくと、母屋の方から漂ってくるなんとも良い香りに、私は猛烈に腹が空いていたことに気がついた。よく考えてみると前日は朝出てから、何も食べていない。自然と匂いにつられて、私は母屋の方へ静かに歩いていくと、廊下づたいには天井の高い十畳ほどもある座敷があった。誰もいない部屋の真ん中にこの地方の旧家らしく立派な囲炉裏が設けてあり、天井から吊り下げられた自在鉤に大きな鍋がかけてあった。その時、鍋の中で煮えているものは何かは分からなかったが、寝ぼけ眼のままついつい香ばしい匂いにつられて囲炉裏端に着いた私は、煮汁を一口だけすすろうと横にあった小さなさじを大鍋の中に差し入れた。その時、私は煮汁の中からふわっと浮かんできた何かを見て、その場に立ちすくんだ。鍋の中では赤ん坊が紫色に煮えていたのだ。「びっくりしたでしょう?」いつの間にそこに立っていたのか、傍らを振り向くと例の女が白い顔をして手に鉈をぶら下げて立っていた。思わず私は「かっ、かっ、勘弁してください。悪気があったのではありません。ただお腹が空いていたので一口だけと思い……」女はゆっくり鉈を振り上げた。「見逃してください。いますぐここを出て寝間に戻ります。今見たことは誰にも話しません。」女は鉈をバサリとふり下ろすと、そこにあった一本の薪が二つになり、それから女は私に向かってにっこり笑った。「それは人間の赤ん坊じゃないよ。猿だよ。」

遠野は、岩手県の中陸部に位置する町で、山を隔ててすぐ東には釜石や宮古などの漁港がある。河童や座敷童子などが出る「遠野民話」を元にした柳田國男の遠野物語で全国的に知られている。それにしても、この地方には今も猿の肉を食べる習慣があったのかどうか。その後は一睡することもできずに朝食も食べずに宿代を置いて命からがら国道からタクシーで乗り帰ったが、あの時、鍋の中の物体には毛がなかったはずで、あの時見たのは本当に猿の肉だったのか?

（いたの　ともあき・関西大学システム理工学部専任講師）

ソロモンの指環
コンラート・ローレンツ　日高敏隆 訳
檸檬
梶井基次郎

稲田　貢

〝ニコニコ顔〟と不安・焦燥感

学生から「なぜ研究者になったのですか」と度々尋ねられることがある。初めて訊かれたときにはそんなことを考えたこともなかったので返答に困ったが、少し考えて「もっと知りたいからだよ」と答えた。今でもその答えは正じいと思っている。私の専門は物理学であるが、私を研究生活にとどめているもの――それは自然科学に対する好奇心だ。一つ課題をクリアしたとしても、また新たな課題が当然のように出てくる。「こうすればどうなるんだろう?」「それはなぜだろう?」という具合に。この自然科学に対する好奇心が湧かなくなったとき研究生活に終止符を打つのだろうと思う。

大学生の皆さんに是非お願いしたいことがある。それは四年間の間に様々なことに関心と好奇心を持つことと、良い友人を持つことである。これまでの私の人生を振り返ったとき、私はつくづく人間関係に恵まれてきたと思

ハヤカワ・ノンフィクション文庫
1998年3月刊
261頁
本体価格 740円

新潮文庫
1967年12月刊
350頁
本体価格 400円

う。いつの時代にも尊敬できる人々に囲まれていた。大学の学部学生だったころも例外ではない。学部学生のときには真に自由な時間がたくさんあって自然科学だけでなく哲学や心理学、教育などについて友人と夜を徹して「ああでもない、こうでもない」と語り明かしたことを覚えている。それまで「常識」とか「当たり前」と思っていたことに対して疑問を持ち、リサーチをして新たな自分の結論を構築する。その結論が間違っていると思ったら再度崩して構築する。そんなことを繰り返しながら、少しずつ成長してきたように思う。もちろんそこに「正しい答え」などあるはずもなく、現在でもその途上である。このような行程のドライヴィング・フォースとなるのも、やはり好奇心である。そしてこの「好奇心を持つ」→「リサーチする」→「結論を得る」という一連の流れは、人生のどの場面においても必要なプロセスなのである。

研究者がその飽くなき好奇心でもって研究に取り組む姿勢を初めて私に教えてくれたのがコンラート・ローレンツの「ソロモンの指環」である。鳥のヒナの刷り込み行動の発見で知られる彼は常識にとらわれず鋭い観察力で動物の行動を観察することで、ときとして奇妙に見える動物の行動の意味を明らかにした動物行動学者である。その文面からは動物の行動の不思議に対する好奇心と先入観に捕われずに観察することの大切さ、そして動物に対する溢れんばかりの愛情が伝わってくる。まるでニコニコ顔で研究成果について話をするローレンツ氏の笑顔が目に浮かぶようである。大学に入学して間もない頃にこの本に出会った私は「あぁ、研究者というのはこれほどまでに好奇心旺盛で自身の研究が楽しいと思える人のことをいうんだろうな」と思ったのを記憶している。先日、出身高校の同窓会で研究紹介をする機会があった。講演後に「楽しそうに研究をしているのですね」と言われたのだが、これは私も研究者の資格を得たということだろうか。動物が好きな人は勿論、そうでない人にも是非お薦めしたい一冊である。ちなみに人間の行動に対する私の観察力は落第点で、生物学を専攻した妻の前では俎板の上の鯉状態である。

さて好奇心の探求も研究もうまくいくとは限らない。むしろ大半の時間は結論が見つからず悶々とした時間を過ごすのが常である。不安と焦燥感が募りついには爆発したくなる衝動に駆られる。そのようなときには梶井基次郎の「檸檬」が良い。前半にまるで共鳴するかのようにグッと引き込まれ、最後の下りで抱いていた焦燥感ともどもスッと解放されるその感覚がたまらないからである。

（いなだ　みつる・関西大学システム理工学部准教授）

私流文庫の楽しみ 4

フラニーとゾーイー（Franny and Zooey）

J・D・サリンジャー　野崎　孝訳

福田恭輔

新潮文庫
1968年８月刊
238頁
本体価格 476円

大学生活の一歩を支えてくれた

二〇一〇年一月二七日、惜しまれながらも、ある文豪が静かに息を引き取った。各国で翻訳され、その累計発行部数は六〇〇〇万部を超えるとされる、一九五一年の『ライ麦畑でつかまえて（原題：The Catcher in the Rye）』の著者として世界的に有名なJ・D・サリンジャーである。二〇〇三年には日本人作家の村上春樹が新訳『キャッチャー・イン・ザ・ライ』を出し、人気が再燃したところだった。享年九一歳である。

私生活に触れられることを極端に嫌い、一九六五年の『ハプワース16、１９２４』を最後に、ニューハンプシャー州の小さな田舎街で隠遁生活を送っていた。世間との繋がりを完全に断ち、小説を日本語に訳す際に、作者の略歴、訳者の解説を加えてはならないという注文をつけたサリンジャー。かつて「私は執筆を愛している。ただ、自分の楽しみにだけ書く」と語り、ファンレターさえ受け取らなかった。それを知りながら、私がいま書こうとしているのは、作者の略歴であり、作品の解説であり、ある意味でファンレターである。おこがましいことは承知の上であるが、哀悼の意を込めて、作品を一つ紹介したい。

『フラニーとゾーイー』を語るにあたって、まず言及しなければならないことは、主人公たちの血縁関係であ

る。フラニーもゾーイーもともに「グラース家」の七人兄妹であるが、このグラース家が、これまでサリンジャーが個別に発表されてきた数編の短編と密接に関係している。『ナイン・ストーリーズ』『大工よ、屋根の梁を高く上げよシーモア―序章―』などに、グラース家の人間たちが登場する。これらの連作物語を読み進めることで、パズルのように血縁関係が明らかになる設定になっているのだ。つまり、サリンジャー文学を俯瞰した時、壮大な「グラース・サーガ」とも言うべきものが浮き上がってくるのである。

グラース家の兄妹は、幼き頃から「これは神童（It's a Wise Child）」というラジオのクイズ番組に次々と出演するほど、異常成熟の天才として描かれている。末っ子のフラニーもまた同様で、大学生の彼女は天才ゆえの思考力、洞察力、感受性の鋭敏さから、凡人には理解し難い精神構造を持つ。エゴとスノッブ（教養人を気取る俗物）の蔓延る周囲の環境に耐えきれず、病的なまでに繊細なフラニーの心理は決壊し、意識を失い、床の上に頽れるまでになってしまう。悲嘆と懊悩で部屋に篭りきりになってしまったフラニーに、同じ天才兄妹の一人である五男のゾーイーはさまざまな説得を試みるが、ますますフラニーを混乱させてしまい……。機知に富んだ二人の天才の会話の応酬は、何度読み返しても秀逸である。何気なく会話に出てくる専門用語は、キリストや釈迦、老子等々の宗教哲学や東洋思想などによるものが多い。切れ味鋭い比喩表現も多く見られ、サリンジャー自身の教養の高さ、精緻を極めた人間観察力が窺い知れる作品である。

私は、ちょうど大学に入学したばかりの頃に本書に出会えた。読み終えた時、言葉にできない爽やかな読後感に身が震えたことを今でも憶えている。あの時、一気に身体を走り抜けたカタルシスが、長い受験期間を終えて、これから過ごす大学生活への一歩を支えてくれた。それからというもの、私が頭を抱えて悩む時にはフラニーが泣き、それでも立ち直らなければならない時にはゾーイーが、心の中で洒落た会話を繰り広げてくれる。

「なぜきみはへばろうとするんだい？つまりだな、きみがもし、全力をつくしてへばっちまうことができるんなら、その同じ力を、なぜ元気で活躍するために使うことができないのかね？」

（ふくだ　きょうすけ・関西大学文学部四年次生）

バーボン・ストリート・ブルース

高田　渡

松久卓也

ちくま文庫
2008年4月刊
271頁
本体価格 720円

「読楽」という境地に導いてくれた〝現代の李白〟

高田渡という人がいる。六〇年代に反戦フォークの分野から登場し、きわめて個性的な作品を残した音楽家だ。反戦といっても、真っ向からそれを訴えるのではなく、普通の人々の生活を歌うことをプロテストの手段とした。酒と旅をこよなく愛し、飄々と自らの時代を渡り歩いた、さながら現代の李白である。惜しいことに、二〇〇八年、五十六歳にして亡くなっている。

そんな高田渡が著した唯一の本である『バーボン・ストリート・ブルース』。彼の生い立ちから、音楽に傾倒していった過程、貧乏生活のこと、当時の世相のこと、旅の魅力、詩への想い、酒への愛……。一見、内容は散漫だが、彼の人柄そのままの文章が作品に一本道を通しており、そこが本書の魅力的な点でもある。

終始リラックスした調子で語られる逸話は、笑いを堪えるのに必死である。しかしこのような調子だからこそ、時折垣間見える彼の鋭い洞察は心に響く。ベトナム戦争反対運動の中でのフォークについての所感から、現在における伝統芸能保護制度の在りようまで、反骨精神を露わにした強烈な批判が言葉の端々から滲み出る。とはいえ、本書からそうした難しいことを得ようと構えて読む

ことを、私としてはお薦めしない。読了後、私の頭に「読楽」という言葉が思い浮かんだ。「音楽」という熟語からの単純な連想ではあるが、本書から私が得たものは、本の内容それ自体だけでなく、この「読楽」の考えなのである。気負わず構えず、気楽に読むことこそが、本作の最良の味わい方なのだ。

高田は本書で、「反戦フォークは結局、反体制の道具として利用されていた」と指摘する。やや乱暴な言い方かもしれないが、ここには、現在の文学賞に相通ずる構図が見て取れる気がする。作品の意図は作者のみぞ知るところであり、読者はそれぞれに勝手に解釈をするだけだ。文学は、評論家の主義主張の道具ではないのだし、書物から何を得るかは読んだ者次第である。賞という冠の下、誰かが一概に「正しい」読み方を決めてしまえるようなものではないのだ。

社会の問題を炙り出すのは、優れた文学の役目である。だが、お偉い審査員さんが某文学賞に出すコメントが、あたかも現代社会の「本質」を代弁しているかのように見せる斯界の風潮には、いささか辟易する。まず読み手が、読むことを楽しむこと、「読楽」が肝要だと私は考えたいのだ。もちろん、作品から深いテーマを読み解くことも読者の自由であり、それもまた「読楽」の一つである。私が言いたいのは、繰り返しになるが、作品の解釈は読者の数だけあり、賞の下に統一されるようなものではないはずだということである。

何を隠そう、じつは私自身、近頃めっきり「読楽」を忘れ、小難しく意味ありげな――それはつまり、評論家が「現代社会の〇〇を体現する」などと絶賛するような――作品を読むことに注力していた。だが、自分はそれを本当に楽しんで読んでいたのだろうか？ 読書が、趣味ではなく義務になってはいなかっただろうか？ 遅ればせながらも、『バーボン・ストリート・ブルース』は、以上のような感想を私に抱かせ、「読楽」の悦びを思い出させてくれた一冊だったのである。

蛇足ながら――私の感想は、この文章を読んで下さっている方々の感想には成り得ない。「読楽人」が言えるのは「この本は面白いよ」の一言だけだ。

（まつひさ　たくや・関西大学社会学部〇九年三月卒業生）

読書進化論
——人はウェブで変わるのか。本はウェブに負けたのか
勝間和代

上田麻友美

小学館101新書
2008年10月刊
254頁
本体価格 740円

読書へ投資した以上、元を取れ！

著者の勝間和代曰く、本は「成功への投資」である。時間に対してとてもケチな彼女は、読んで終わりでは本代と時間がもったいない、と言う。だから、「読んだ本の成果は仕事や生活で活用しなければいけない」と考える。その結果、彼女は「努力が報われる環境」をいかに自分で作るかということを学び、実践することになる。

私はこれまで、本を生活に役立てるなんてことについて考えたことがなかった。自分にとって「読書」は趣味、もしくは雑学の一環であって、その具体的効用など思いつきもしなかったから。あえて役立った場面を取り上げるとしたら、言葉や歴史などの知識を、クイズ番組に回答しながら家族にちょっと自慢げに披露するぐらいのものであった。だから、投資した分を取り返せと言う著者の言葉に、最初はとても驚いた。しかし、言われてみれば納得はいく。何時間もかけてインプットした知識も、アウトプットしなければ知恵にはならない。確かに、自分の時間とお小遣いを投資した分、何かを得たい。読んで良かったと思える瞬間が欲しいのだ。

「本を読まない若者が増えている」と聞く。その理由としてテレビゲームやインターネット（ウェブ検索）がよく挙げられるのだが、果たしてハードがソフトに淘汰されているのだろうか。私にはそうは思えない。著者は、

ウェブ検索と読書は相互補完的なものだと言っている。一つの物事について、ウェブで浅く広く知識を得、読書で深く掘り下げていく。要は使い方の問題なのだ。残念ながら、ウェブで得られる情報は玉石混淆で不安要素が大きい。新しい情報や広い分野を見るのにはちょうど良いが、深く、確かな情報を得るには本が最適なのだ。この部分、わかることはわかるのだが、ソフト媒体にも確かな情報や良い物語は沢山あることも事実。ネット小説の読者といえば、ほとんどが若者だろう。書き手も小説家ではなく普通の学生や社会人であることが多い。読者数の多いネット小説が書籍化することも珍しくない。良いものはソフトからハードへ移行する。また、村上春樹の『1Q84』人気や太宰治生誕百周年のイベントなど、若者が本に触れる機会は確実に存在している。こんなふうに考えると、若者の本離れという通説を鵜呑みにはできない気がする。

さて、読書の楽しさを決定付けるのは、やはり理解できるか／できないか、であろう。いくら無理をして読んでも自分が理解できなければ意味があるとは思えまい。だから著者は、自分の読書レベルに合った読み方から始め、徐々にレベルを上げていくことを勧める。レベルが上がっていくと、目次から構成を理解し、自分に必要な部分が分かるようになる。これぱかりは経験の積み重ねが物を言う。読書レベルが上がると、読める本が増え、必要なものを選び取ることも上手くなる。それには、読んだ後どうするのかということがポイントだ。知識はいつ役に立つか分からないから、自分の中で関連分野を作って仕分けしておく。役立つと言っても、思考補助となる知識がほとんどだから、「この時のアレだ！」と思うことはほとんどない。しかし、確実にどこかで役立っているはずだ――読書進化論は、小気味よく展開していく。

勝間和代の読書歴は長く、書き著した書物もかなりの数に上る。この「本の読み方指南」を書けるだけの経験を積んでいるのだ。レポートの度に「ああ、本を読まなきゃ……」と思う人は、ここは一つ、彼女の功利主義的な「読書」論を実践してみるといいかもしれない。

（うえだ　まゆみ・関西大学社会学部四年次生）

人はいかに学ぶか～日常的認知の世界～

稲垣佳世子・波多野誼余夫

巽　なぎさ

中公新書
1989年１月刊
198頁
本体価格 720円

あなたは、「学ぶ」とか「学習」とかの言葉を聞くと、何を思い浮かべるであろう。多くの人は、学校教育を連想するのではないだろうか。定期テスト、学期末試験、内申点、評定平均……。これらの成績を上げるために、ただそれだけを目的として、ひたすら勉学に励んできた人もいるのではないだろうか。私もかつてその中の内の一人であった。「学習」することが、「生きていくために必要なもの」から良い成績をとり、第一志望校に合格するためにしなければならない「手段」になってしまっているのが現状であろう。このような学習法では、学習することの本来の意味を見失い、何の楽しみもなくただ機械的に学習を進めることになってしまう。「やらなければならないから」、「仕方がないから」といった考えのもとで学習しているのでは、上達や理解の深化は望めない。

本書は、そんな伝統的学習観を払拭し、「学習」は何も学校だけで行われるものではなく、むしろ人の一生涯にわたって学習が行われることを強調している。人間は本来知的好奇心を備え、日常生活の中では能動的で有能な学び手であり、「みずから学ぶ存在」としての人を実証的に描き出している。そして、「学習」のもつ暗いイメージを再考し、新しい学習観にもとづく教育のあり方を提言しているのである。

「学ぶ」といってもそれへのアクセスの仕方は様々である。例えば、現実的必要から学ぶ場合を考えてみてほしい。親元を離れて一人暮らしをしている場合の食事や洗濯、掃除を想像してもらうとすぐにわかると思うが、これらの家事を一切しなかったらどうだろう。部屋は汚くなり、

洗濯物はどんどんたまっていくし、何より生きていくために必要な食事ができないことになってくる。外食ばかりしていたら経済的に厳しくなってくるし、栄養のバランスが崩れ、健康面から考えてもあまり良いものではない。洗濯物だってコインランドリーに預けてばかりはいられなくなってくる。今までは親にやってもらっていたことを、生活上必要な技能を身に付け、現実的必要から学ばざるを得なくなってくるのである。生活上の必要から料理に取り組み、はじめは本と首っ引きで手際も悪かった食事づくりが、毎日やっていればすっかり上手になり、手持ちの材料に応じて手早く、臨機応変にさえできるようになる。

言葉の発達も上に同じである。例えば、幼児は自発的に言葉をしゃべり始め、またたく間に日常生活に必要な言語使用能力を獲得してしまう。言葉を話せないと、意思疎通が困難なため、これもまた現実的必要から学んでいるのである。話す能力だけでなく、聞いて意味を理解し、読む能力を身に付け、書き表す能力を獲得する必要性だって十分にある。これらは、全て現実的必要から学び、能動的でかつ有能に「学習」へと働きかけている例なのである。

もうひとつ、「学習」へのアクセスの仕方を紹介しておこう。人間は誰しも知的好奇心を備えていることは先述した。人は通常、自分がすでに獲得してきた知識を使って環境に働きかけ、これを自分のうちに取り込もうとする。この過程で、予期に反し、思ったようにならなかったという場合も少なくない。これは、「あれ？」という驚きや戸惑いの感情を引き起こし、さらにそれについて調べてみたり、考えてみたりするよう動機づけるだろう。そして、実際にそうした活動に従事することによって、その事象について前よりも深く理解する（学ぶ）ことができよう。これは、知的好奇心によるもので、小学校の理科の実験の授業などで起こりやすい。子どもたちにどの仮説が正しいか討論させると、どんどん質問が出てくるだろう。それに答えたある子に対して、今度は違う角度から質問が寄せられる。それについてクラス全員がまた討論する、といったことを繰り返すうちに、現実味を帯びた結論が出てくる。それを実際に実験で確かめ、その事象に対しての理解が深まる、といった具合に、知的好奇心による学習が進んでいく。

私は、子ども同士のやり取りを促し、知的好奇心をかき立てるような学習を、もっと学校現場に取り入れるべきだと本書を読んで思った。間違うことが尊重され、探索することを奨励される環境にいると、子どもたちはもっと伸び伸びと学習することができるだろう。

（たつみ　なぎさ・関西大学文学部四年次生）

友だち幻想――人と人の〈つながり〉を考える

菅野　仁

松居義邦

ちくまプリマー新書
2008年3月刊
160頁
本体価格 720円

〝友だち地獄〟から脱出する法

私たちは常に人間関係の中で苦しんでいる。孤独・不安・憂鬱・あるいはねたみなどの日常生活で生じる負の感情は、人間関係が原因であることが少なくない。また、とりわけ若い世代に関しては、友だちとの関係の中で疲れ果て、自分を見失うことが多いと言われてもいる。なぜ、本来「心地のよい」はずの友だち関係に、息苦しさを感じるような時があるのだろうか？

本書は、「当たり前の常識」を根本から見直す社会学の視点から、現代社会での人間関係の「見取り図」を描こうとしたものである。たとえば、「人は一人では生きていけない」というありふれた言葉に疑問を投げかけ、現代社会では実は、「誰とも付き合わず、一人で生きる」ことも可能であることを指摘する。また、「友だち一〇〇人出来るかな」という歌詞の裏には、日本のムラ社会の同質的共存性が学校文化の中に未だに存在し続けていることが見て取れると言う。

だが、本書の魅力はそういった常識の解体にとどまらない。誰もが感じているであろう現代社会特有のモヤモヤした「感覚」を、実に巧みに「言葉」にして伝えてくれるのだ。例えば、他者の二重性――「脅威の源泉」・「生の味わいの源泉」、「同調圧力」、「ネオ共同性」、「ルール関係」と「フィーリング共有関係」などだ。著者は、日々何となく感じることを「言語化」することの要を説く。そして著者の繰り出す「言葉」たちは、私が今まで生き

てきた中で感じてきたことのほとんどを、見事なまでに射抜いていく。改めて、言語化は必須なのだと思う。

私が本書中、最も考えさせられたのは先にも少し触れたが、第三章である。昔、学校現場で「全員で仲良く」や「運命共同体」と言われたりしたことには理由があった。ムラでは皆で協力して作業する必要があり、そうしなければ生命の危機さえあったからだ。そうしたかつてのムラ社会的共同性が、今ではその現実的根拠がないにも関わらず現代社会にそのままの形で残ってしまったことで、様々な上手くいかないことが噴出してきた、というのが著者の読みである。なぜKYという言葉やブログ炎上といった「同調圧力」を、日本人はこんなにも求めたがるのか――「私たちが生きている社会システムがムラ社会の文化を受け継いでいるため」だ、という理論は確かに説得的だ（この二月の冬季オリンピックでその服装が話題になった、若い選手の例を想起されたい！）。

現代の日本社会、日本人の課題は、したがってそういった「共同性」から「並存性」への意識変革だというのが、本書の一番大きな主張である。「並存性」とは、自分の中の他者に対する負の感情を処理し、気に入らない相手を「やり過ごす」術である。一方、皆と違っていることをノリや感覚でだけ拒否することは、もはや現代社会において意味をなさない。その行為は、単に行為者自らの首を絞めているということを、本書は気付かせてくれる。相手を拒否するということは常に自分が拒否されるかもしれないということだからだ。では、「友だち幻想」というもの言いは、他者を忌避するようなニヒリズムに行き着いてしまうのか。著者の答えは、否である。同質ではない、自分と全く異質な他者と向き合うからこそ、人生の苦みをかみしめ、旨みを味わい希望を見出すことができるのだと著者は繰り返し主張する。

自分たちの実感に響いてくる語りと社会学的なものの見方が、平易な文章で綴られている本書は、「友だち一〇〇人」を引きずってもがき苦しんでいる中高生あたりに是非薦めたい一冊である。

（まつい　よしくに・関西大学社会学部一〇年三月卒業生）

教養主義の没落——変わりゆくエリート学生文化

竹内　洋

和田裕美子

中公新書
2003年7月刊
278頁
本体価格 780円

痛々しいほどの変容ぶり
——ただ見ているだけでいいのか!?

「教養」とは、実学的な要素は少ない学問知識ではあるが、それを「常識」として知っていることで自らの社会性を高め、人間性を磨くものであると私は捉えている。しかし教養の果たす役割や解釈というものは時代とともに変遷しており、今日では以前とは全く異なる姿を見せているらしい。

本書は「大学生」という存在に焦点を当て、その戦前から戦後に至るまでの彼らの「教養」意識を様々な視点から考察したものである。最初に論じられるのは、戦前から戦後初期の時期の大学生や知識人達の「教養」に対する執着が特に顕著だった点である。この時代、ある者は教養を追い求め至上のものとし、ある者は石原慎太郎のように教養を唾棄するといった具合に、様々な教養の捉え方がなされていた。しかしどのような形で捉えられようとも、当時の人々の根幹に流れる「教養」への認識・意味は実は共通していた。それは「教養」=「自らの泥臭い出自を忘れさせてくれるもの」あるいは「ブルジョアの仲間入りをするためのもの」、というような立身出世主義の諸要素であった。そういった教養に対する潜在的な願望がよく表されているのが、著者が独文学者中野孝次の半自伝小説『苦い夏』から抜粋して傍点を打っている、次の文章である。

「つまりだな、あんたは美だの精神だのってよう口に

するがな、もしかすると自分もそいつらみたいにいい暮しがしたいだけなのかもしれんと思うことがあるよ。（中略）ひょっとしてその底には出世慾もからんどりゃせんか。」（一八九頁）。

こうした隠れた意識が本来の当人の思う純然たる教養の目的を見失わせ、リスペクタビリティ（世間体・立派さ）を無意識に求めてしまう原因になってしまっている、というのが著者の読みである。そもそも、本書中のフランス、エコール・ノルマル・シュペリウールの例にあったように、西欧での「教養」というものは富裕層・上流階級の人々のものである。しかし当時の日本での「教養」は、逆に一種の階級上昇の装置として用いられ、自身を飾るリスペクタビリティとして掲げられた。教養は当時の日本に「近代化」という課題が課せられた時、大きく人々の意識を触発し、近代社会の礎となる思想・精神を生み出したのであるが、近代化（西欧化）の進行とともに広く大学生たちに受け入れられた一方で、諸外国とは異なる人々に、異なる仕方で取り入れられたことを忘れてはならない。

このように、「教養」の概念は当時の日本の発展に大きく貢献したといえるが、その後の変容ぶりは、ある意味で痛々しくもある。近代化を終えて停滞期に入った現在の日本にとって、もはや「大学生」の価値や意味、在り様すらが大きな変化を遂げてしまい、教養の果たしていた役割そのものが「お役御免」になってしまった感がある。大学の一般教養科目が「パンキョウ」とカタカナでいかにも軽薄に略されるように、現代の大学生たちの中に教養意識というものが見られなくなって久しい。

「教養」自体が良いものであっても、著者の言うように今更旧来の風潮をそのまま蘇らせようという試みなどは陳腐な発想であろう。しかし、かといって旧来の特質を捨てきることもなかろう。かつての教養主義の学ぶべき部分は取り入れ、且つ現代の若者の目線にあった「教養」像を再構築する、そんな現代の知識人・若者たち自身の姿勢や取り組みが、やはり必要なのだと思う。

（わだ　ゆみこ・関西大学社会学部四年次生）

ロンドンだより（九）

日本語を教えることと学ぶこと

マイルズ 純子

思い返せば、幼い頃から言葉が好きでした。小学校一年生の時、「おかあさんのこと」という題で書いた小さな作文が新聞に載ったのを覚えています。言葉によって自分のおもいをどう伝えるか、言葉とおもいをめぐる問いがいつも私の中にあったように思います。この国に来て、英語を一生懸命身につけようとしてきたのも、言葉によって人とつながり、なにかを共有できることへの驚き、よろこびに加えて、言葉の可能性、言葉がもちうる力に対する問いが常にあったからだと思います。英語を学ぶにつれて日本語について気づかされる点も多々あり、もっと言葉に近づきたいと思い、昨年九月から日本語の先生になる勉強を始めました。

短い期間ですが、一月からロンドンの南にあるダリッジ・カレッジという学校で、子ども達に日本語を教える機会をいただきました。子ども達といっても、十三歳から十八歳の男の子で、子ども達と呼ぶのはためらわれる気がしますが、いっしょに過ごしてみるとやはり子ども達と呼ぶのがふさわしいようです。時には背伸びし、大人びたふるまいをしながらも茶目っ気は隠しきれず、無邪気ないたずら心を発揮しては私を笑わせてくれます。子どもとはなんと美しいものだろうか。子ども達といるとつくづく感じます。作為がないというか、計算がないというか、迷いがないというか、影の気配すらないまっすぐさによくはっとさせられます。私達が相手によって

ナショナルギャラリーから見る
トラファルガースクエア

あり方を変えたり、複数の顔を使い分けたりするようになるのは一体いつからなのだろうか、また、それはなぜだろうかと帰り道に考えこんでしまいます。子ども達のいる教室の空気はなんとも軽やかで、彼らの前にひろがる未来という時間がキラキラと透けて見えるようです。

＊　＊　＊

一人をのぞいて、子ども達は皆、コンプリートビギナーと呼ばれる完全な日本語初心者です。日本語についてまったく知識がありません。日本語に関するすべてが初めてなのです。私の教える日本語が彼らにとって初めての日本語になるのだと思うと、意気込みよりも責任の重さを感じます。どのような日本語の使い手になってほしいかを常に考え、今後日本語を学んでいくためのしっかりとした骨組み、土台の一部を築けるようにと心がけています。外国で日本語を学ぶ場合、日本語に接する機会はとても限られています。授業中になるべく日本語に親しんでもらいたいと願い、試みのひとつとして、日本語で出席を取ることにしています。最初の授業は私の自己紹介に続いて、敬称の「さん」と返事の「はい」の説明から始まりました。「さん」とは何なのか、どうして自分には「さん」を付けないのか。また、同じに見える「はい」でも、肯定に使われる「はい」と返事の「はい」は異なります。いまでは皆、私が名前を呼ぶと「はい」と元気よく返事してくれます。

また、文字といっても、初めに日本語の文字について知ってもらわなければなりません。日本語では書き言葉において、主にひらがな・カタカナ・漢字の三種類の文字が使われます。これら三種類の文字すべてが一つの文に現われることも少なくありません。まずはどれがひらがなで、どれがカタカナなのか、二つの文字をじっくり眺めながら、皆で語を読む練習ができるように、A4サイズの紙を何枚も何枚も貼り合わせて、大きな五十音図を作りました。私達には一目瞭然のひらがな・カタカナも、日本語学習者にはなかなか見分けがつきません。「注意して見てみて。どう思う？」「ひらがなには丸がある」「カタカナはシャープな感じ」「うん、そうだね、ひらがなはなんかこう丸いよね。カタカナは角張った感じがして、まっすぐな線が多いよね」と二つの文字を観察し、皆で違いを見つけます。語を見せるたびに、「ひらがなですか、カタカナですか」と尋ねます。やがて大きな一つの声になって答えが返ってくるようになります。こつをつかむとでもいうのか、違いをいったん自分自身で感じ取ると混乱することはなくなります。いわゆるアルフ

アベットに慣れている子ども達にはかなの読み方も新鮮で、母音と子音を組み合わせて音を見つける方法を伝えると子ども達は驚き、そのしくみを知るやいなや、私が語を見せると競って音を探して発音するようになりました。私がその音の持つ意味を示すと子ども達はまた驚きます。そうして語彙を一つひとつ増やしていきます。

英語とカタカナの両方で書いた大きな名札を作ってあげるのですが、カタカナで書かれた自分の名前を見ているのがとてもうれしいようで、いつのまにか子ども達は宿題に自分の名前をカタカナで書くようになりました。案ずるより産むが易しとはよく言ったもので、例えば数字や曜日など、子ども達は法則のようなものを見つけるのが上手で、自分達で気づいて、学んでいきます。私の説明や心配はあまり必要でないらしく、過保護になりがちな自分を反省し、子ども達に考えるきっかけを与え、「気づき」をいかにひきだせるかを考えるようになりました。先日もうれしい出来事がありました。資料や宿題を配る時、授業を終えて教室を出る時、子ども達は「Thank you」と言ってくれます。せっかく日本語を学んでいるのだし、可能なかぎり日本語をいっしょに使いたいと私は思います。資料を配りながら、私がさりげなく「Could you pass these to your friends? ありがとう」と何度か言ったところ、子ども達は次々に「ありがとう」を使い始め、「ありがとう」は瞬く間に浸透していきました。その授業の最後には皆が「ありがとう、またらいしゅう」と言って、手を振りながら教室を出て行きました。「Thank you = ありがとう」と教えるのでなく、その言葉、表現が実際に使われる場面を知ることが学習者にとっては大切なんだなあと感じました。

＊　＊　＊

日本語を教えることは日本語を外から見せてもらうことでもあります。日ごろ私達が気にも留めないこと、無意識に身につけている感覚のようなものが疑問として立ち上がってきます。ある生徒が私に尋ねました。「語によって、ひらがなを使うのか、カタカナを使うのか、僕はどうすればわかるの?」。この質問には困りました。日本語にはひらがな・カタカナ・漢字の三つの文字があると先に書きました。さて、私達はこの三種の文字についてどれくらい知っているでしょうか。私達は深く考えることなくこれら三つの文字を使い分けていますが、そこにはどんな約束があるのでしょうか。カタカナは擬音語にも多く使われますが、外国の国・都市名、人名のほか、カメラ、ラジオのように、他の言語（主には西欧

語）より借用され、日本語と同様に広く使われている語に用いられるというのが一般的な説明です。いわゆる外来語にはカタカナが使われるわけです。そう説明しかけて、ためらいました。言葉の背後にある日本の風土や文化に慣れ親しんでいるからこそ、何が外のもので、何が日本に属するものであるのかわかるけれど、そうでない場合、どうやって判断するんだろう……。例えば、果物の中でどれをひらがなで書き、どれをカタカナで書くのかを判断するには日本語というより、日本に関する知識が少なからず必要です。

意味や語じたいを強調するため、故意にカタカナが用いられる例はよく見かけますが、お料理の本などを見ると、最近では胡椒も「コショウ」とカタカナで書いてあるものがあり、なぜそれがカタカナなのかと尋ねられると説明に困ってしまいます。また、外国の国名や都市名はカタカナと言われているものの、中華人民共和国、大韓民国、香港のように漢字が使われているケースもあります。これは言語において漢字を共有しているからだと思われますが、こうした例外は少なくなく、言葉を学ぶことに付随してくるたくさんの物事に驚かされるばかりです。言語だけを教えるのはほぼ不可能で、言語を学ぶということはその言語を話す人々、暮らしやその場所、あるいは歴史について知ることでもあるのかもしれません。

＊　＊　＊

ある言語を習得しようとすると、実際には学ぶというより、覚えなければならないことがたくさんあります。言語とはいわばルールのかたまりであり、強固なシステムです。語順や発音など、「なぜ」と問うたところでいつも明解な答えが見つかるものでもありません。ある言語から別の言語へと移行する時、すなわち異なる言語を使おうとする時、私達は言語ごとに異なるルールの違いに戸惑います。私達は既に身につけた言語やその知識を忘れてしまうことはできません。だったら、逆に、それぞれが身につけてきた言語と日本語との違いを視野に入れることで、日本語をよりよく理解することはできないだろうかと私は考えます。また、日本語学習を通して、それぞれが話す言語、あるいは、言語そのものについて見つめ直す機会へとつながっていけばいいなあと思います。私は常々、子ども達が日本語を使える道具としてしっかり身につけられるようにと心に刻んでいます。日本語というある言語を話せることによって、それまでコミュニケーションできなかった人達とコミュニケーションできるようになる。そして、それが可能になった時、言

葉はもはや単なる道具ではなくなります。日本語を学ぶ楽しさと同時に、言葉を介して人とつながることができるよろこび、驚きを子ども達に感じてもらえたらと思います。

私達には単純に見える一文でも、理解し納得して、自分で語を見つけて作った文を言えた時の子ども達の笑顔は輝いています。日本語という新しい海で子ども達はすくすくのびのびと泳ぎ出しています。教えることは教えられることであると実感する毎日です。「わかった」「できた」というよろこびをともにし、子ども達といっしょに成長していきたいと願っています。

（まいるず　じゅんこ・関西大学卒業生）

ビクトリア＆アルバート美術館、中庭のあじさい

国会議事堂ビッグベンと大観覧車ロンドンアイ

（写真・筆者）

書評

『ドキュメント高校中退
――いま、貧困がうまれる場所』（青砥恭著）

非正規教員からの手紙

宇佐見言人

（カット・城 万喜）

拝啓　教員を志望するあなた様

お変わりありませんか。私はほぼ元気に暮らしています。昨年四月より、某地域にある公立高校で、非常勤講師として勤務をしています。

三月までは、某地域の公立学校で仕事をしていましたが、財政再建をめざす知事のもとで教育委員会は、非常勤講師の報酬（給与）を月給制から時間給制に変え、しかも講師に授業を担当させる時間数も削減しました（正規採用である、教諭の負担はさらに増えたことになります）。

このため私は、より多くの授業を担当させてもらえる現在の職場へ移った次第です。

一度計算をしたのですが、月給から時間給にすることで約二〇パーセントも収入が減りました。これでは生活ができません。年収二百万円以下で生活する人びとを「ワーキング・プア」と言うそうですが、まさにその状況です（時間給は、一時間（一コマ）あたり二七九〇円ですが、教材研究や準備にかける時間を含めると、時給九三〇円。悪くはないと思いますが、週十六時間の授業で、行事などで授業が抜けないことを前提にして――実際にそんなことは絶対ありえません――月に十八万近く。しかし夏休みなど長期休業などを入れると、二か月は授業がありません。他にアルバイトを入れたらいいかも知れませんが、授業の準備は、多くの時間を費やします。

採用試験の勉強もしなくてはなりません。これでは体が持ちません)。社会科(地歴公民科)の非常勤講師の先生がワーキング・プアを授業で取り上げる時、どのような思いで授業をするのか……空恐ろしくなります。

また非常勤講師として生活する人びとは、社会保険は自身で加入しなくてはなりません。国民健康保険、国民年金だけで、収入の二割近くを支払います。大半の非常勤講師は、預貯金を取り崩すか、家族の世話になっている生活をしているのではないかと思います。しかも非常勤講師は、教員をめざして採用試験に挑戦している人が多くを占めています。「この職業(あるいは子供たち)が大好きだから」「来年こそは絶対に試験に受かる!」だから、今は我慢しよう。といった未来の教諭の「善意」を、教育委員会は「悪用」しているとしか思えません。

さて、現在の職場は、地域で最底辺に位置する学校です。学校長が「(生徒に関する)課題の何かと多い学校」であることを認めているくらいです。校長は課題の多い根拠を昨今の「格差社会」に求めているのですが、では格差の問題に対して、生徒たちに何をするのかというビジョンが見られません。

課題が多いのなら、それを克服するための人材や費用がかかります。しかし底辺校では、期限付きで採用された常勤講師や正式採用されて間もない若手教員、そして非常勤講師の占める割合が大きいのです。何十年と経験を積んだベテラン教員は非常に少ないのです。講師を雇うということは、教諭を一人雇うよりもコストがかからないことはご存じでしょうか。ここにも教育委員会の「悪用」が見て取れます。

もちろん生徒は大変です。まずは自分の席に座って、落ち着いて授業を受けることが難しいのです。学校で勉強をすることの意義を理解できる生徒は少ないです。当然、学力は低いです。義務教育段階で履修する漢字が読めないくらいなら、まだましなほうです。九九が言えない、太平洋と日本海の区別がつかない(東西南北が分からない)、割引や文字式の計算ができない生徒が多くいるのです。冗談を言っているのではありません。

生徒同士の会話ひとつにしても、カネ(例えば、アルバイトでいくら稼いだか)、モノ(このブランドの財布を買った、欲しいなど)そして性の話題で持ちきりです。それ以外に興味・関心がいかないのです。また、学校内や周辺での反社会的行動や窃盗や暴力(恋人からのそれも多く聞きます)などの犯罪やいじめはよく起こります。(カネにまつわる話をもう少しします。ひとり親家庭な

ど経済的に苦しい生徒は多くいます。そのため、授業料の減免や奨学金に頼る生徒もいます。腹が立ったことがひとつありました。昨年一〇月に、教育委員会による学校の監査が行われ、その報告が監査翌日、事務長から全教員にされました。曰く「授業料の納付率が悪い、とお叱りを受けました」）

何よりも、私が聞いていて悲しくなるのは、「どうせ自分は、アホやから」と自己否定をする生徒が多い、ということです。そういう生徒に「もっと自分に自信を持ちなさい」と励まし続けてはいるのですが、釈迦に説法と言うのでしょうか、なかなか上手く行きません。

生徒についての課題があまりにも多いので、教員たちは管理を強化しなくてはなりません。例えば、頭髪が校則通りでなければ、「黒彩（こくさい）」というスプレーを吹きつけて強制的に黒くします。「服装の乱れは心の乱れ」といったキャッチフレーズを掲げて、服装指導を徹底的にやります。日常的に暴力をふるう教員もいます。徹底的な管理の様子を数え上げればきりがありません。生徒は、現状に対して怒ることなく、へらへら笑っていたりします。

そして出席率が悪い（遅刻、早退を繰り返す）生徒に対して、教員は平気で「単位制の高校へ異動したら？」と言ってのけます。生徒をこのようなかたちで退学させてしまえる雰囲気にも衝撃を覚えました。「最近、何かあったの？」と一言尋ねる先生もおられますがそれは、私の知るところお一人だけで、たいていは「おまえ、就職志望やろ。遅刻ばっかりしてええんか。そんなんじゃぁ、就職は無理やぞ」といった非難が飛びます。進級する時に一つの学年で、五十人以上の生徒が一斉に退学したこともありました。これによって「学年にいい雰囲気が出てきた」と好意的に見る教員もいました。

現状はこういう学校ですが、昔は進学校でした。どうしてここまで「堕ちた」のか。私は教育委員会がおこなった学校再編にあると見ています。大阪府でもおこなわれたことなのでご存じかも知れませんが、たとえば、通学区域を拡大することがあります。教育委員会の「高校進学を希望する中学生へ学校選択の幅を広げた」とか「入れる学校から入りたい学校へ」などという詭弁のもとに、実際は進学校と底辺校との格差を拡大する施策です。

学校へは最寄り駅から徒歩で二〇～三〇分かかります。学校周辺の企業からの要請があって、自転車での通学を認めていません（企業の言い分を学校が認める、というのもおかしな話ですが）。駅からバスが運行されている

のですが、ラッシュ時に数本運行されるだけという有り様です。辺鄙な場所にある学校に、何の特色もないのに、行きたがる中学生がどれだけいるでしょうか。ここ数年、入試では定員割れをおこしており（このことも「堕ちた」原因にあると思います）、「名前さえ解答用紙に書けば、入試は通る」と生徒に言わしめるほどです。

月日がたち、生徒とのつながりも強まってくると、生徒が私の元へ相談を持ちかけてくるようになります。その中身が悲惨なのです。ここに、いや一生話せないような内容であったりします。そういった話しを聞かされる（この言い方は不適当ですが、そういう気持ちになってしまうのです）私自身が精神的にダメージを受けてしまったくらいです。私は生徒のカウンセリングをすることはできないのかも知れません。聞き流すことがあまりにも下手なのです。

自己の置かれている不安定な現状、教育の現状、学校の現状、そして生徒一人ひとりの抱える問題の大きさ――私は、いったい何のためにこの職業を選んだのか。選択を間違えたに違いない。いつしか、気持ちがふさぎ込むようになりました。そして、あらゆることに無関心でいることが、何て楽なのだろう、と思うようにまでなりました。

こうしたなかで、一冊の本に出会いました。青砥恭氏の**『ドキュメント高校中退――いま、貧困がうまれる場所』**（ちくま新書、二〇〇九年一〇月）です。この本を私は一気に読みました。この学校に来て感じ、思い、悩んだことを一気に吹っ切ってくれたのです。それは励ましではなく、露骨なまでに格差の広がった社会の中で、教育現場に身を置く人びとはどのようにもがき、苦しんでいるかをしっかりと書き出してくれているからです。どうして今まで、誰もここまではっきりと言わなかったのだろう。

校長にビジョンがない、講師が多いと書きましたが、著者はこのように述べています。

低学力の克服は、貧困の解消でしか解決できないことを現場の校長たちもよく知っているはずである。しかし、彼らにはそれをいう勇気と低学力を克服できる学校づくりをしようという意欲が欠けている。

（一七〇頁）

底辺校は教育委員会からの財政、人材の支援も少なく、設備面での支援もなく、地域からの支援もない。

（二〇五～二〇六頁）

生徒を退学に持ち込み、それを良しとする雰囲気にしても著者は、

（前略）……教諭もSA高校に赴任した頃は、生徒を切りたがる教員に強い違和感があって、職員会議などの場で「やめさせよう」という意見に「それはおかしい」と反対していた。しかし、最近は「早くやめてくれれば……」という教員たちの気持ちが理解できるようになった。問題を抱えた生徒が多すぎてとても対応できないのだ。問題が次々に起きて、学校では生徒と話す余裕がどんどんなくなっている。

（二七～二八頁）

今、私は転職を考えています。「おまえは甘すぎる。転職などと逃げに回るな」とお叱りを受けることは充分承知しています。昨今の経済情勢と私の年齢、講師のみという職務経験では、転職がスムーズにいかないことも充分承知しています。しかし、年齢も三十路に近づき、社会的・経済的にも安定していて当然の年齢です。

今までは「来年の採用試験で受かれば、何とかなる」と気骨をもって耐え、努力してきました。こんなことを言う自分自身が情けなくもありますが、もう限界です。私ひとりが辞めたところでどうなるわけでもない、などと悲観的になっています。

ああ、もう止めましょう。著者はこうも言っています。

若者たちの一番近くにいる教師の責任は重い。仕事も金も生きていくための資格もなにも持たず、「おれたちはもう無理だ」と、社会の片隅でじっと肩をすくめながら生きているような若者と社会をつなぐことができるのは教師だ……（中略）……教師の仕事は子ども社会を分断することではない。

（二二九～二三〇頁）

恨みつらみや泣き言などを長々と認め、不愉快な気持ちにさせたと思います。本当に申し訳ありません。末筆ながら、青砥氏のこの著書をぜひともお読みいただきたいと思います。

理想だけで教育活動は進められない。

（うさみ　ことんど　筆名・関西大学卒業生）

ちくま新書
2009年10月刊　240頁
本体価格740円

【緊急報告】

いつまで続ける？ 朝鮮人・朝鮮学校への差別・迫害

――日本における民族排外主義団体の最近の活動を中心に――

藤井 幸之助

最近、「在日特権を許さない市民の会（在特会）」「主権回復を目指す会」などと名乗る集団が全国各地で在日外国人や日本の植民地支配・戦後補償問題などに取り組む市民団体の活動に対して「街宣デモ・署名活動」と称して、民族排外主義を露骨に出した稚拙な〝襲撃〟を繰り返している。

はじめに

京阪神各地でも、支部をつくり、活動を活発化させている。中でも在日朝鮮人の子どもたちに民族教育を行う朝鮮学校や旧日本軍「性奴隷」問題に取り組む人々に対して、攻撃をしかけている。

彼ら彼女らは、「語る保守から行動する保守」、あるいは「語る運動から行動する運動」を標榜し、法制上規制できずにいる警察の〝見守る〟中で、聞くにたえない民族差別・女性差別発言を繰り返している。しかも、一連の行動を自分たちで撮影し、実況中継までし、動画をネット上（YouTube・ニコニコ動画など）で流している。

時を同じくして、民主党政権が昨年出した「高校授業料無償化」法案に対して、今になって朝鮮高級学校を排除しようとする動きが高まってきている。定住外国人の地方参政権（投票のみ）についても警察官僚出身の亀井

静香さん（国民新党）の強力な反対にあって、見送られることになった（同じ亀井が無償化については朝鮮学校を含めることに賛成している）。ここでも朝鮮籍者を排除するという話まであったが、結果的には韓国籍者も排除されたわけだ。

「官（政府）民（民族排外主義団体）が一体になって朝鮮学校つぶしか！」とばかりの差別と迫害がまかり通っている。これではGHQと日本政府が朝鮮人学校をつぶしにかかった六〇年以上前の阪神教育闘争（一九四八年）・朝鮮人学校閉鎖（一九四九年）の時代とかわらない。

「韓国併合」一〇〇年をむかえた今年、草の根ファシスト・政府があいまって、露骨な外国人差別・排斥がすすむこの国は問題だらけだ。中身のある多民族・多文化共生社会の実現のために何が必要か考えたい。

一、「在日特権を許さない市民の会（在特会）」とは？

在特会のホームページによると、二〇〇六年二月に準備会を開き、二〇〇七年一月に正式発足している。当初会員数は一〇〇名ほどであったが、三月現在では八〇〇〇名をこえるという。ただ、会員数にはマジックがあり、会の運営は寄付や事業収入でまかない、会費は無料、ホームページから会員登録すれば、誰でも会員になれる。ホームページ上で〝襲撃〟の呼びかけも頻繁に行われている。会員特典として、メールマガジンが配信され、会員専用のページや掲示板を利用できる。メールニュース送付などがあり、情報がほしくて、会員になる反・在特会の立場の人もいるという。

そもそも「在日特権」とは聞きなれないことばだ。国会議員の「不逮捕特権」というのは、よく聞く。いうまでもなく、国会の会期中は国会議員は逮捕されないというものだ。では、「在日特権」とは何なのか？

「何より「特別永住資格」が挙げられます。これは一九九一年に施行された「入管特例法」を根拠に、旧日本国民であった韓国人や朝鮮人などを対象に与えられた特権です。在日特権の根幹である入管特例法を廃止し、在日をほかの外国人と平等に扱うことを目指すことが在特会の究極的な目標です」（在特会ホームページより）。

これは決して特権といえるようなものではなく、そもそも特別永住資格は朝鮮・台湾の旧植民地出身者とその子孫が日本で安定的に暮らすことができるように、粘り強く運動した結果、かちとられたもので、それまでは基本的に退去強制の対象とされていた。

これらの一団は「行動する保守」を名乗り、各地で「街宣・署名活動」を展開している。構成団体として「主権回復を目指す会」(西村修平代表)、「在日特権を許さない市民の会」(桜井誠代表)、「外国人参政権に反対する会」(村田春樹代表)、「せと弘幸ＢＬＯＧ『日本よ何処へ』」(瀬戸弘幸)、「日本を護る市民の会」(黒田大輔代表)、「日本の自存自衛を取り戻す会」(金子吉晴代表)などがある。他にも「ＮＰＯ法人外国人犯罪追放運動」(有門大輔代表)、「国民社会推進協議会」(中村寿徳代表)など、類似の団体があり、非常に複雑だが、共同で行動している。インターネットの活用が得意で、ブログで〝襲撃〟を呼びかけている。リーダーたちは政治団体「維新政党・新風」つながりである。

各地で繰り広げられている街宣での「マイクデビュー」の効果は絶大だ。参加者一人一人にマイクが回され、演説の機会が与えられる。人によって上手下手はあるが、自分も意見を述べたという満足感が得られるようだ。しかも、嘘も一〇〇回繰り返せば本当になるとばかりに、差別発言を繰り返す。多民族化しつつある日本社会への危機感をあらわにしている。

山野車輪『マンガ 嫌韓流』1～4をはじめ一連の嫌韓流の書籍が教科書となり、ネット世代に興味関心を持たせようとするいろんな仕掛けがある。たとえば「あなた

在特会（在日特権を許さない市民の会）ホームページ

山野車輪（2006）『マンガ嫌韓流』2で、初めて「在日特権」が紹介される。

が最も良いと思う在日のこれからの処遇は？」という五択の「投票・アンケート」をホームページ上でおこなっている。http://www.zaitokukai.com/

在日を全員朝鮮半島に送還する／犯罪者や民団総連関係者を朝鮮半島に送還する／特別永住資格をなくし一般の外国人と同等に扱う／帰化制度をさらに緩くして日本に同化させていく／現状のままで良い

なぜ選択肢がこれだけしかないのか？　歴史的経緯を完全に無視し、在日朝鮮人排除を前提にした無意味なアンケートといわざるを得ない。

二　略年表で見る在特会〝襲撃〟（外国人・子ども・女性を狙う）とそれに対抗した取り組み

在特会らが公然と人前に出てきた背景として、これまでにことあるごとに繰り返されてきた、加害者の「顔の見えない」チマ・チョゴリ襲撃事件や政治家による数々の妄言が下支えしていると考えられる。そして、政府・メディアが一緒になって朝鮮民主主義人民共和国の体制や日本人拉致事件を非難し、直接関係にない朝鮮学校の子どもたちに結び付けてバッシングすることでお墨付きを与える形になっている。何を言ってもかまわないというのが根底にあるようだ。

記憶に残る在特会の〝襲撃〟の甚だしいものは二〇〇九年にはいってから、両親が旅券法違反を理由に退去強制され、一人だけ、在留特別許可で日本に残った、日本生まれのフィリピン人中学生に対して、在特会らが彼女の通う学校や家にまで押し掛けるという暴挙を行ったことだ（西中誠一郎（二〇〇九）「数多くのカルデロンさん一家」『世界』七月号）。外国人の子どもに対する攻撃開始だったといえるだろう。

略年表でざっとその動きを追ってみたい。

二〇〇六年
一二月二日　在特会準備会発足。翌年一月二〇日、正式発足。
二〇〇八年
三月二五日(火)　宝塚市議会「慰安婦」請願採択・意見書可決。以降、全国各地の議会でも採択。
一二月一四日(日)　在特会、京都府宇治市ウトロ地区を〝襲撃〟。
二〇〇九年
四月一一日(土)　在特会、埼玉県蕨市、カルデロンの

り子さんの通う中学校を〝襲撃〟。
在特会ら、この間も各地で〝襲撃〟。
一一月一日(日)　在特会ら、「朝鮮大学校フレンドシップ体験ツアー」を〝襲撃〟。
一一月二八日(土)　在特会ら、「旧日本軍性奴隷問題の解決を求める全国同時企画二〇〇九」大阪を〝襲撃〟。
一一月二九日(日)　在特会ら、「旧日本軍性奴隷問題の解決を求める全国同時企画二〇〇九」京都を〝襲撃〟。
一二月四日(金)　在特会ら、京都朝鮮第一初級学校を〝襲撃〟。
一二月八日(火)～一三日(日)　在日韓人歴史資料館開設四周年記念名古屋特別展「在日一〇〇年の歴史を後世へ」を〝襲撃〟。
一二月一三日(日)　在特会ら、大阪市生野区でデモ。
一二月一八日(土)　『東京新聞』朝刊で朝鮮学校〝襲撃〟に関連して「外国人いじめ　不満はけ口　言い掛かり？不況で民族差別の傾向も」記事掲載。
一二月一九日(日)　在特会ら、記事を掲載した東京新聞本社に〝抗議〟行動。
「12・19緊急報告会　民族差別を許すな！　京都朝鮮学校襲撃事件を問う」(東京)開催。
一二月二一日(月)　京都府警に在特会らの〝襲撃〟を告訴。
一二月二二日(火)　「朝鮮学校への攻撃を許さない！

手に手に大小のハンドマイクを持って、鶴橋付近をデモする在特会のメンバーたち
(2009年12月13日撮影：南栄次〔ナムヨンチャ〕)

12・22緊急集会――日本社会の排外主義を問う――」（京都）開催。

一二月二三日(水)「12・23緊急報告会in大阪　民族差別を許すな！　京都朝鮮学校襲撃事件を問う」（大阪）開催。

二〇一〇年

一月一三日(水)　在特会ら、日本軍「慰安婦」被害女性と共に歩む大阪・神戸・阪神連絡会「「ソウル水曜デモ九〇〇回」に連帯する水曜デモ in 西宮」を〝襲撃〟。参加者一名を暴行、負傷。

一月一四日(木)　在特会ら、再度、京都朝鮮第一初級学校へ。

「朝鮮学校への攻撃を許さない！
12・22緊急集会―日本社会の排外主義を問う―」で高炳棋（ヨピョンギ）校長が事件の経過を報告
（2009年12月22日撮影：藤井幸之助）

一月一九日(火)　京都弁護士会、「朝鮮学校に対する嫌がらせに関する会長声明」を発表。

二月九日(火)「民族差別を煽り立て、卑劣な暴行・襲撃を繰り返す「在特会」と「主権回復会」を厳しく糾弾し、かかる蛮行を許さない特別決議」（「連帯ユニオン議員ネット」二／九大会参加者一同）。

三月二八日(日)「民族差別・外国人排斥に反対し、多民族共生社会をつくりだそう―朝鮮学校への攻撃を許さない！3・28集会」（京都）開催予定。

略年表からも読み取れるように、これら在特会らの動きに危機感を持つ市民の数も徐々に増えてきて、各地で反対する集会を展開している。

三　京都朝鮮第一初級学校に対する〝襲撃〟

京都朝鮮第一初級学校は京都市南区十条に位置し、前身の京都七条朝聯学院は一九四六年に創立され、来年創立六五周年を迎える。幼稚班と初級部を併設している。

実は学校には運動場がない。そのため長年、学校裏門前にある市の勧進橋児童公園を運動場として、歴代京都

市長のリーダーシップのもと、京都市建設局・国際化推進室の支援を得て、地元住民の承認と協力のもとで、体育の授業をはじめクラブ活動など、毎日、教育の場として使用してきたという。ところが、二〇〇四年、公園にかかる場所に阪神高速道路の建設工事計画が進み、同年七月には京都市長宛、一一月に京都市議会議長宛に「京都朝鮮第一初級学校の勧進橋公園使用に関する要望」を出していた。

その後もきちんとした対応のない中で公園を使用し、今回、在特会らによって「不法占拠」しているという言い掛かりをつけられたのだ。

いずれにせよ、学校教育法上（朝鮮学校はカリキュラム上は日本学校とは何ら変わらないが、文科省検定済み教科書を使用し、日本語を教育用語とすることからはずれるため、一条校とみなされず）、国からの助成金が得られず、独自に運動場を持てないということ自体が朝鮮学校を取り巻く根本的な問題だといえるだろう。

〝襲撃〟はこうして起った。一二月四日㈮、京都・滋賀の朝鮮初級学校四校の高学年の児童約一四〇人が集まって交流会をしていた（低学年は授業中。幼稚班は校外学習）。そして、午後一時ごろ、突然、在特会らが大きな拡声器を持って学校の前にやってきて、一時間にわたって騒いだのだ。

在特会　http://www.zaitokukai.com/modules/news/article.php?storyid=308

学校側もビデオを撮影

http://corea-k.net/date/000.wmv

「朝鮮学校、こんなものは学校ではない」「こらあ、朝鮮部落、出ろ」「お前らウンコ食っとけ、半島帰って」「スパイの子どもやないか」「朝鮮学校を日本から叩き出せ」「北朝鮮に帰ってくださいよ」「キムチくさいねん」「密入

2009年12月18日 24
特報部
外国人いじめ 不満はけ口
京都で、保守団体抗議
朝鮮学校の公園使用を「不法占拠」
言い掛かり？ 不況で民族差別の傾向も

『東京新聞』2009年12月18日付（朝刊）記事

国の子孫やんけ」

文字にして採録するのもはばかられるような差別発言のオンパレードである。

学校法人が経営する学校に対して「学校ではない」といったり、「北朝鮮へ帰ってくださいよ」といって、どこに帰れというのか？　また、「密入国」というが、解放後の朝鮮半島本国の混乱期に済州島4・3事件（一九四八～）や朝鮮戦争（一九五〇～）などを逃れてやってきた「難民」が多い。事実を正確に把握すればわかることである。

四　京都朝鮮第一初級学校に対する攻撃へのプロセス

また、在特会らは朝鮮学校に突然やってきたわけではない。次の表を見ればわかる。

学校側は校門を閉め、校長ほか教職員が冷静に対応に当たり、在特会らは帰って行った。在特会らの罵声を聞いた子どもたちに中には泣き出したものもいるという。大人でも怖かっただろう。

学校は京都府警に対して告訴を行い、京都弁護士会は会長声明を出した。

日　時	内　容
	在特会、インターネット上である集会に押寄せると予告
（日時不明）	NPO法人「外国人追放運動本部」メンバー、「勧進橋児童公園」を下見。 http://expulsionmovement.web.fc2.com/kouhou/kouhou2009_12_23.htm
11月21日(土)	在特会、総聯京都本部前で２時間弱騒動。その中で第一初級に押寄せると言う。
11月24日(火)	校長に通報。総聯京都本部内で協議。
11月25日(水)	事前にネットで流された公園内とインタビュー内容及び11・21騒動に対する対策協議（学校で）。
11月26日(木)	京都府会議員に面談、事情説明。議員同席で京都府警に警備を要請。夜、保護者代表たちに説明・対策協議（学校で）。
11月27日(金)	工事会社の所長と面談。ガードマンの再教育要請。
11月28日(土)	警察来校、警備要請。
11月30日(月)	京都市会議員にこの間の報告と対策協議。
12月１日(火)	町内会長面談。
12月４日(金)	南区役所面談協力要請。午後1時ごろに在特会11人、押寄せ１時間騒動。保護者等50余名が対応（日本人弁護士を含む）。※京滋の初級学校４校高学年140名ほどで交流会中。低学年は授業中（幼稚園児は校外学習で学校にいなかった）。
12月５日(土)	京都府・市会議員たちに報告。府会議員が総聯京都本部に来て対策協議。理解のある日本人たちにメールで報告。総聯京都本部内の対策協議続く。
12月７日(月)	学校が保護者たちに文書で報告。総聯京都本部に対策委員会設置。
12月８日(火)	保護者の集いで校長が他の問題とともに12・４騒動の経緯とこれからの対策を説明。京都府会議員と京都府警と南署に申し入れ。

※京都民族教育対策委員会事務局作成の資料をもとに、筆者が加筆した。

「これらの嫌がらせや脅迫的言動は、朝鮮学校に通う子どもたちやその家族、朝鮮学校関係者など在日コリアンに不安と恐怖を生み出しており、国籍や民族による差別をなくすための早急な対策を講じることが必要である。インターネット上で公開されている動画を見る限り、これらの行為は違法な行為に該当する可能性があるので、警察において必要な対処をすべきである」

と指摘している。学校を支援する集会も各地で開かれた。

子どもたちの心に大きな傷を残さないために、日本社会にはこんな大人ばかりではないということを行動することで伝えていく必要がある。

五　人種主義・人種差別・外国人排斥および関連のある不寛容に反対する取り組みを

何よりも「無関心」がこわい。

残念ながら、人種や民族に対する差別を禁止したり、処罰したりする法律が日本にはない。「子どもの権利条約」「国際人権規約」等の周知徹底をはかったうえ、今後法律をつくる必要がある。

二〇〇一年に南アフリカで開かれた反人種主義・差別撤廃世界会議で「ダーバン宣言」が出された（日本語訳 http://www.hurights.or.jp/wcar/J/govdecpoa.htm）。この年はあらゆる形態の人種主義・人種差別・外国人排斥および関連のある不寛容を廃止する政治公約に新しい推進力を与えることを目的として、「人種主義・人種差別・外国人排斥および関連のある不寛容に反対する国際運動年」とされた。

その中で、東アジアにおける人種主義と人種差別の根絶を目指した予防・教育・保護の措置と効果的な救済、回復、是正、補償その他の措置をおこなうべきことをうたっている。

寛容と不寛容。私たちが取るべきはどちらか。

六　在特会らの〝襲撃〟に油を注ぐ政治家たち

今年に入ってから、文部科学省が「高校授業料無償化」法案から朝鮮学校を排除するかどうかという話になって、また朝鮮学校がやり玉に挙げられている。国家公安委員会委員長で拉致担当大臣の中井治（ひろし）さんにいたっては経済制裁云々と関連付けて、対象から除外しろと圧力をかけている。

『朝日新聞』（大阪本社版、三月三日付け朝刊・夕刊）では橋下徹大阪府知事が「高校授業料無償化」問題に関して、ヘイトクライムともいうべき発言が紹介されてい

る。しかも、大阪府助成からも朝鮮学校を排除することを含んだ発言であった。

「拉致問題を切り離して考えることはできないと指摘し在日本朝鮮人総連合会（朝鮮総連）と朝鮮学校の関係を確認して、府民が納得できないような関係があるのなら支援すべきではない」「国が制度の対象とした場合でも、併せて実施する府独自の助成対象から朝鮮学校の除外を検討する考えを示した」（朝刊）

「権力者が授業内容を評価しちゃいけない。そういう視点ではなく、拉致問題を引き起こした北朝鮮と学校の関係性を見る」「北朝鮮という国と暴力団は基本的には一緒。暴力団とお付き合いのある学校に助成がいくのがいいのか」（夕刊）

彼はこれまでもことあるごとに共和国やその指導者と「暴力団」を同じものだとして、共和国や在日朝鮮人を誹謗中傷してきた。発言の撤回を求められても、まったく答えない。府民に対する受け狙いとしても許されるものではない。また、そんなことを喜ぶ府民であってはならない。

一方、同じ三月三日、東京都小金井市議会は「「高校無償化」制度の朝鮮学校への適用を求める意見書」を政府に提出した。また、東京都中野区議会の超党派の中野日朝友好議員連盟も意見書を総理大臣宛てに出したという。どちらがまともな判断か。

日本社会が底のない沼にはまりつつも、希望の光がかすかに見える。この国に暮らす、すべての子どものことは民族・人種・国籍などにかかわらず、この国に暮らす、すべての大人の責任において解決すべきであるということを再確認しておきたい。

参照サイト

在日特権を許さない市民の会（在特会）
http://www.zaitokukai.com/

主権回復を目指す会　http://www.shukenkaifuku.com/

朝鮮学校を支える会・京滋
http://www5d.biglobe.ne.jp/~mingakko/sasaerukai.htm

京都朝鮮第一初級学校襲撃事件報告集
http://www5d.biglobe.ne.jp/~mingakko/sasaerukai091204.htm

（ふじい　こうのすけ・関西大学ほか非常勤講師・「コリアン・マイノリティ研究会」世話人）

新連載

中野重治と教育（第一回）

素朴・ぬくもり・肉感性

●はじめに
●理性的なものにかじりつくの精神
●横行するセンチメンタリズムとの対峙

玉田 勝郎

（カット・城 万喜）

はじめに

「書評」誌より機会を与えられ、このたび「中野重治と教育」という論題について書くことになった。数回の連載となる。中野重治という文学者、その大きな業績、そして際立った昂然たる思想態度、等について触れることになるが、啓蒙・啓発的な語り方は可能なかぎり避けたい。〈中野重治〉を論じること、とりわけ、この掛け値なしに第一級の、優れた文学者のなした「教育論」――文学教育や国語（日本語）教育だけではなく、教育という営み、教育実践、子ども、教師、教育イデオロギー、等々についての見方・考え方、またそれらへの批評・批判を含む――の諸相に分け入り、そこに表現・開示されている叡智と洞察から学びえたことを、いくらかでも対象化し、こんにちの教育課題に引き寄せて意味づけることができればと願う――それは私の永年の念願であった――が、しかしそれは、すこぶる魅力的なテーマであると同時に、それゆえに文学や教育に関する自らの認識のありよう、理解の水準、鑑識眼あるいは透視力の強度、等々を自己切開していく「怖れ」を伴うものである。要するに「胸を借りる」わけであるから、跳ね飛ばされることも覚悟せねばならない。

私にとって、いま、なぜ〈中野重治〉か、という根本的な問いについては、行論の過程でその都度触れること

になろうが、そしてその問いを手放さないようにしたいのだが、そこに入り込む前に、もっと「素朴な」、否「通俗的な」疑問を記すことから始めよう。

現在、この大学で私の接している学生諸君、一般的にいって同世代の青年たちが、いかほどの比率で中野重治という文学者――こんにち「よみがえる中野重治」と評され、「中野重治ルネッサンス」とさえいわれ（栗原幸夫『世紀を超える』）、実に多彩な作家・評論家たちの間に「再発見」への関心を呼び覚まし、またその評論文や研究書が次々と刊行されてもいる、この作家――の作品を読んでいるのだろうか。そもそも、「彼は過敏な神経をもつ近代の豪傑である。現代にありうるかぎりの豪傑である。……豪傑であるからこそ、信じがたいほどのはにかみ屋である。」（本多秋五『増補　戦時戦後の先行者たち』）と評された――こうした中野重治の像は、古くは亀井勝一郎（「中野重治論」・一九三六年）はじめ同時代の多くの人々によって濃淡の差こそあれ抱かれていた――人の名を、今どれくらいの青年たちが知っているだろうか。

私は、この論稿の冒頭に、日本近代文学の作家たちに関するごく一般的な事典の類から、中野についての概括的記事（紹介）を引用しておきたい誘惑にかられもしたのだが、そのような「紹介」を記したとして、作品ひとつ読んでもいない学生諸君にとって何ほどの意味があろうかと反省し、ここでは、その名さえ「忘れられつつある」のではという無念の思いを抑えて、まず最初に、「素樸ということ」と題された名高い文章の一節を引用することにする。このエッセイは、当時「プロレタリア文学・芸術」とよばれた運動の真っ只中で、一九二八年、二六歳の青年中野重治が「僕は」を主語として（すなわち「我々は」という当時の仮構された「党派的主体」としてではなく）その凛とした肉声を表現したものである。

それは、

僕は世のなかで素樸というものが一番いいものだと思っている。こいつは一番美しくて一番立派だ。こいつは僕を感動させる。こいつさえつかまえればと、そう僕は年中考えている。

で書き出される。

最近僕はロシヤの農村でやられている活動写真について読んだ。遠方という言葉がほんとうに使われるような農村で、活動写真を見ながらおもしろくてにこにこしている子供だのおじいさんだのの顔が写真になってのっていた。僕はそれを見ると興奮して、このおじいさんや子供たちにこんな嬉しそうな顔を

させることができるなら死んでもかまわないと思った。

芸術家は常にシェイクスピアもカリダーサもついに車輪の発明家ほどには人類に貢献していないことをわきまえているべきであろう。もちろん僕はすべての芸術家に車輪を発明しろとは言わない。制作にあたって僕らは、いつもその制作を車輪の発明のようにすることを――というのは、車輪の発明者を誰も記憶していない。だが車輪を使わない人間が一人もいないくらいに彼を記憶している。だれも車輪の発明者に感謝していない。しかし人間の残らずが車輪を使用しているということよりも立派な感謝状は一枚もないにちがいない。――念願とするべきであることを言いたいのだ。

人間の歴史は大学の歴史の教科書みたいなものではない。……たとえば、演劇の歴史にしても、そのなかに撚りこめられて素人には見えない演出の歴史、建築の歴史、照明の歴史などを忘れている。忘れているどころか僕などはだいたい少しも知らない。そしてその無知からして、われわれ自身の文字となって残るような仕事だけを仕事と思い込み、それがそれとして人の眼に映るために千万無量のおかげをこうむっている眼に見えない仕事、瞬間に消えて行くような仕事を仕事だとも思わないようになる。それは間違っており、無知であるために不遜であるところのものであり、……こういう輩（やから）からは永久に顧みられないような仕事を一生の仕事としてこつこつと築いていくような賢い人たちからは憐まれるところのものであろう。こういうほんとうの賢さを持った人たちから笑われ憐まれることのないような考え方こそ、僕は、われわれの持つべき仕事にたいする素樸な考え方だと考えている。

私がこのエッセイを初めて読んだのは、一九六〇年代の初頭、学生時代のときであった。そして少なからぬ衝撃を受けた。「素樸ということ」は、「中身の詰まっている」、「中身のつまり方がかっちりしていて、そのためにあえて包装を必要としない」ことだ。こうした率直な、高質な表現に触れて、その語り方に感銘さえ受けた。私自身の内部に蠢いていた「上昇志向」のような心性への、健康な気づきのせいであったかもしれない。同時に、私はいくらか快活な気分で、〈教育〉という営み、あるいは〈教師〉の仕事の基底部にある（あるべき）「素樸ということ」の意味を考えさせられたのだった。それは私の教育認識に、それ以前には持ち得なかった新しい観点

を導きいれたのだが、とはいえ、「素朴であるということ」は、しかし私にとって難しいことでもあった。たとえば、余計な粉飾を凝らした、張りぼての文章を読み返しながら幾度も自己嫌悪に陥るしまつだった。

このエッセイには、中野重治の「教育論」を貫流する、根本の思考態度、生活態度、つまるところ人間観が示唆されていると思われる。

こうした思考態度を貫こうと格闘しつづけた第一級の文学者が存在したということ、それが中野重治という文学者であったことを、若い学生諸君たちが「知らない」という時代状況を、こんにちいたし方のないこととして認めることは、私にはできない。それでいいのか、という思いを私はこんにち一層強く抱いているのである。

ここに言う「こんにち」というのは、多元的な意味を含んでいるのだが、昨今の教育の問題状況、たとえば新自由主義に依拠した「教育改革」下において、教育システムの安直な「合理化」、教育事業のマクドナルド化が推進され、多くの青少年の〈自尊感情〉を不断に打ちのめしていく現実がある。「子供というものは、そもそももっともっとたいしたものだった」（中野）という眼差しの、その反対の「子ども観」が露呈しているのである。あるいは、〈心の教育〉〈心のケア〉〈心の国際化〉云々という標語を想起してほしい。それらがもはや「出来合いの言葉」として流通し、その無批判的な（「生真面目な」）追求によって、教育実践総体のやわな道徳主義化が強められ、「臨床的」生徒指導という名の心理主義的操作が脱文脈的、非肉感的な手法にもとづいて拡大されている。さらには、強められていく「格差社会」のもとで、厳しい競争原理の貫徹する〈企業社会〉、それと陰に陽に結びついた諸組織organizationの官僚主義的管理、「人のぬくもり」や痛覚を衰退させて、生き難さの度合いを強めていく日本社会（世間）の生活実態を我がこととして想起してみよう。このような現実のすべてが、中野重治の文学的実践とその結実へと私（たち）を向かわせるのである。

理性的なものにかじりつく精神

文学者・中野重治は、「私の文学者としての生活は一九二五、六年に始まった」というその出発以降、生涯に亘って〈教育〉に強い、たぐいまれな関心を持ち続けた。かの名作『梨の花』・『むらぎも』をはじめ彼の「自伝的」小説や児童文学作品を含めて、評論（彼の言う「批評文学」）、エッセイ、発言、等を通して、子どもの成長や教師の仕事への彼独自の、鋭利かつ「ぬくもり」のある、

創造的な〈教育論〉を展開した。むろん文学作品そのものをただちに「教育論」なぞということはできない（また許されぬ）が、彼の教育への関心と洞察は、いうまでもなく中野重治という文学者の美意識、その固有の文学（あるいは芸術）観から内在的・内発的に立ち上がってき、関連する多様な教育問題領域に具現されたものとして、持続されたのだった。

いまとり急ぎ、あらかじめ、『中野重治全集』を還流するその〈美意識〉、そこに埋めこまれている教育観の基底部に貫流する価値意識を仮説的に取り出しておくならば、少なくとも以下の三要素（切り口）を措定することができる。

① 素朴であること
② ぬくもり
③ 肉感性

〈素朴〉とは、さしあたり、先述の「素樸ということ」の中に語り出されている〈素朴〉である。要するに、「野暮・無骨な」ほどに、「中身がかっちりとつまっている」ことである。鋤・鍬・鎌・つるべ・車輪……の実用の美の〈素朴〉。おばばの使う言葉とその「言葉遣い」のやわらかさ。昔ばなしの「原始的な」素朴。「育ちざかり」の子どもがもつ素朴。「現実の理法」をとつおいつして追いかける「野暮な精神」の、その素朴。それは、別の視点からいえば、人の実生活と文化の〈根〉から浮きあがった、「不当に抽象化」された、「ちゃらちゃらした」「不健康な」ものへの、鋭敏な抵抗感覚、ないし羞恥心――その並はずれた感受性――につながっている。

〈ぬくもり〉とは、『梨の花』の良平たちが「馬の腹の下をくぐった。くぐるとき馬の腹が**ぬくい**。顔の方からぬくいのがわかる。馬のからだがぬくくて、見ていてはわからぬけれど、腹の下をくぐるとそれがわかるのがおもしろい」の、〈ぬくもり〉である。「（鴎外は）米・炭が不足ならば不足なりに、とにかく子供に食う米を工面するというふうではなかった。……結局して鴎外は、あわれでみじめな国民生活の線まで降りてくることができなかった。鴎外には**ぬくい**心が欠けている。けだものが二ひきくっついて温め合うような心が欠けている」の、〈ぬくもり〉である。「私の求めるものはぬくい動物的な世界だ。家畜小屋の敷きわらにさわったときのようなぬくもり、匂い」（「小説を読むことの意義その他」、一九三六年）の、〈ぬくもり〉である。

〈肉感性〉とは、「作者（森山啓）はいわば観念的に泣いていて肉体的には泣いていない。貧乏の肉感性、病気の肉感性、恋愛の肉感性、家長のエゴイズムの肉感性、

それらの肉感性が描かれていない。」（「肉感性の不足」）の、〈肉感性〉である。「文学的ということを『物に即して』『感覚をとおして』として考える。……ことに幼年・少年期に、こういう傾向を精一ぱい伸ばすか伸ばさぬかはその人の生涯に関係する。……眼で見る線で、舌でなめる線で、手足でさわる線で捕らえること、この線でとらえてこそ、人の痛さがわかる。私は、皮膚感覚をとおして物ごとを受け取る力こそ、またそれをたえず伸ばそうとすることこそ、創造的・芸術的・文学的ということの土台でなければならぬと思う。」の、〈肉感性〉、あるいは〈皮膚感覚〉のことである。「石を石として見ること、桶を桶として見ることは絶対に必要である。しかし同時に、一個の石に石そのままに花咲かせること、一つの桶を桶そのままに一つの無尽蔵にすることも大事である。」（「文学的（創造的）なものと真実」、一九六三年）という、立体的な広がりのなかで捕らえられた、「絶対に必要」なものとしての〈肉感性〉である。それは、「理性的なものに感性的にかじりつく精神」の具体的・実践的な現れにほかならない。

上記の三点に加えて、さらには〈空想する力〉（中野が教育論において力説した「人は空想だけにたよって真実にたどりつくことはできないが、しかし、それなしにはまた辿りつくことができない」ところの「連想し、想像し、空想する力」）をはずすわけにはいかないが、その問題は、後に論じることにしたい。

ここに取り出した三つの「焦点」――中野の教育論のキーワード――に即して論議を進めていくことになるが、そこに入っていく前に、彼の教育論の対象領域（その前景―後景）について、もう少し論じておきたい。それは、考察・論議の視野に関連している。

横行するセンチメンタリズムとの対峙

中野重治による教育問題への論及は、文学教育論、国語教育論、児童文学批評はむろんのこと、教育観（思想）、子ども（子育ち）論、教師論、教育実践論、綴り方教育論、「教育状況」分析、等々の広範な教育研究・実践領域に亘っており、その上に、道徳教育や家庭教育に関するもの、さらには広義の〈教育イデオロギー〉批判を含めれば、残されたその評論・発言の数量は、文学者の「教育論」としては異例ともいうべきおびただしい数にのぼる。しかも、〈教育研究・実践〉に直接する（狭義の）「文学教育論」や「教師論」というものは、中野においては、支配的な（流通する）文化／イデオロギー

への分析・批判と分かちがたく結びついていた。

中野の教育論を考察しようとするとき、私（たち）は、この後者の、（今回、主として前景化して論じる）昭和十年代においては、その多くが「文芸批評（時評）」として表現された文学的実践を視野に入れ、それと教育に関する言説との関連性を見てとらねばならないだろう。言いかえれば、この時期、中野が展開した「中央文壇」における批評活動というものは、「文壇的批評」にとどまらなかった。それは、学校・教室における「教壇的批評」（教育イデオロギー批判）でもあった。少なくともそこに通底していた。そこへ接続する性格のものであった、と言いうる。（この問題については、次回において、教育実践、とりわけ中野が多くの考察・提言を行なった生活綴方教育論に焦点化して論じたい。）

たとえば、昭和恐慌以降、疲弊していく東北農村で進行した残酷な生活破壊、その下での娘の身売りや欠食児童の激増があり、そうした危機的状況において、行政者・教師・世間の救済事業に浸透した眼差しは、窮乏する子どもへの、「涙で曇らされた」同情というセンチメンタリズムを強く帯びていた。それはさまざまな悲しい、あるいは卑屈な〈美談〉を生みもした。農民の親子にのしかかる苛酷な、非人間的というべき生活実態の静態的な把握が、そこを生きる（生きねばならぬ）子ども自身による〈生活の理法〉のリアルな認識へと延びていく道を阻み、退行させていくものとして、さまざまな形の教育的センチメンタリズムが現出していたのである。むろんこのことは、多くの教師の実践と意識にとって無縁ではありえなかった。

あるいは、国家による、「教育」という名の公認イデオロギー（「忠君愛国」という徳目）の強制と注入。さらには、肉感的形象を欠如した、あるいは卑俗化した、児童の「読み物」や、かつての「階級意識」の押しつけの裏返し。要するに、解決すべき現実の課題と実践的に向き合う（状況そのものを肉感的に生きる）という「責任ある態度」へのあきらめと放棄の感情。

これらすべてに底流するセンチメンタリズムの横行と、中野重治は文学的実践を通して闘い続けたといってよい。

その端的な事例を（とり急ぎ）挙げるならば、いわゆる「転向作家」がその痛苦な体験をくぐって著した作品（たとえば島木健作の「一つの転機」や『生活の探求』）に対する、中野の辛辣極まりない、手厳しい、「ねちねちと」繰りだされる批評・批判を想起すればよい。彼が、そうした転向作家の作品や言説に見て取ったものは、さまざまな形をとって陰に陽に表出されてくる、文学上に

現れてくる「新官僚主義」や「横行するセンチメンタリズム」であった。それらは共通して、〈事実をいろどる（粉飾された）イデオロギー的なもの〉の一つとなり、それゆえにまた作中人物やその生活の描写において〈肉感性〉を著しく欠如した、観念的な、「救いがたい、下品なわざとらしさ」に陥るものとなったのである。

一九三四年五月、いわゆる転向（東京控訴院法廷で「共産主義運動から身を引くことを約束」した）後、中野重治は「転向作家」の一人として、昭和十年代、「国防の本義と其の強化の提唱」により苛酷の度を増す言論統制――「保護観察処分」や「執筆禁止措置」――の下で、文字通り孤軍奮闘の「後退戦」を強いられることとなった。彼は、一方では、雑誌「文学界」に依拠して時局（侵略戦争への国民総動員体制の構築）に迎合していく（「出来合ひの言葉」にもたれかかった）文学者たち――小林秀雄や横光利一ら――の「日本主義」・「新官僚主義」、その「ぽんびきの論理」、「反論理主義、反合理主義」の正体（一言で言えば、ファシズムへの「文学的屈服」）を、彼ら自身の使う用語・レトリックを頻繁に引用しつつそれを批判的に反転／暴露していくことで、〈イデオロギー批評〉の文学的実践を追究した。

また他方では、転向作家・島木健作の『生活の探求』（一九三七年）に代表される、民衆（農民）への「使命」・「献身」、インテリゲンチャの側の「誠実な」葛藤という理念（作家の意図）なるものが、その実、生活とその表現の〈肉感性〉を欠如した、その分極めて観念的な、自己と民衆への「傍観的立場」による、事実をいろどる（粉飾された）イデオロギー的なものの一つとなっているとして、中野重治は繰り返し手厳しく批判した。こうした転向作家たちの作品のなかに底流し、あるいは誇張されて表出される観念や感性・感情は、それゆえ、「くすぐりだされた誠実」さであり、「救いがたいわざとらしさ」をともなうものであった。そしてそうしたイデオロギーは、共通して、さまざまな形のセンチメンタリズムを随伴し、また生み出しもする。中野は「横行するセンチメンタリズム」（一九三六）の中で、島木健作の作品（「一つの転機」）に論及しつつ、次のように述べている。

センチメンタリズムの流行が呼び出した告白の流行もやはりつまりは欺瞞的だ。それは告白する当人が欺瞞的であるないにかかわらない。もともと告白も懺悔もすべてつまらぬなどといえるわけはない。しかしある種の告白や懺悔が人を打って高めるのは、それをする人が、その罪や愚昧から逃れでるための努力として苦しんでそれをしているためだ。……お

れはこんな馬鹿だとか、悪党だとか告白することで、実際には馬鹿や悪党の存在権の主張を目論んでいるとすれば、そのときは告白が激烈なだけ欺瞞が事実として強くなる。

当時多くの読者を得たといわれる島木健作『生活の探求』における「素材」主義や「肉感性の欠如」にふれて、中野は次のようにも指摘した。

「生活の探求」の魅力は、観念の遊戯を精神生活であると思いなしている弱い青年の群れを、その観念を甘やかすに適当な農村物語を組みたてることによって、またこの物語のすじをやや古めかしい韻文口調の滑らかさで綴ることによって迎えたという文学的事実によるのである。

（「ねちねちした進み方の必要」、一九三九年）

こうした転向作家たちの作品に浸透したセンチメンタリズム、「生きた皮膚に代えるのに出来あいの言葉を持ちだす」時局迎合の「お手軽さ加減」を痛撃した中野は、文学的抵抗の、素朴かつ真実の論理として、〈桶を桶と言い、桶にたいして桶という言葉を見だす〉ことを、繰り返し、粘り強く提唱してやまなかった。先述した〈肉感性〉の論理である。いいかえれば、「理性的なものに感性的にかじりつく精神」である。

すべて文学は、文学自身の言葉によって正確に研究せられねばならぬ。研究者は、「私は田舎者であり、桶を桶といふ。」という気組みを持ち保たねばならぬ。……あらゆる出来あいの言葉はわれわれになだれかかり、しかしわれわれ自身には、一つの出来あいの言葉も与えられていぬことを合点せねばならぬ。桶を桶と言い、桶にたいして桶という言葉を見だすためには、われわれは行きつ戻りつをいやがらずに、ねちねちと行かねばならぬのである。

かの「佐野・鍋山転向声明」（一九三三年）以降なだれをうつように現出した転向作家たちの、「政治的節操をみずから破ったという苦悶」・「第一義的な敗北、深い恥にみちた最大の支払い」を「第一義的な文学実践の最も強い土台の一つ」として〈文学実践〉的に深めることができず、「事実上の頬かぶりを坊主式懺悔でごまかす」という、そうした「永久の奈落」への導きに対して、中野重治は、「転向の事実」という苦悶、それへの「一般的侮蔑」を凝視しつつ、広く知られているように、昂然たる気組みをもって次のごとく主張したのであった。あまりにも有名な一節なので引用には気が引けるが、後の行論に関係するので、あえて引いておきたい。

もし僕らが、みずから呼んだ降伏の恥の社会的個人的要因の錯綜を文学的総合のなかへ肉づけすることで、文学作品として打ちだした自己批判をとおして日本の革命運動の伝統の革命的批判に加われたならば、僕らは、そのときも過去は過去としてあるのであるが、その消えぬ痣を頬に浮かべたまま人間および作家として第一義の道を進めるのである。

（「文学者に就て」について）

――この項つづく

『中野重治全集』（全二八巻、別巻、筑摩書房）以外の、文庫本を挙げておく。

- 『藝術に関する走り書的覚え書』（岩波文庫）
- 『中野重治　ちくま日本文学全集39』（筑摩書房）
- 『中野重治評論集』（平凡社）

（たまだ　かつろう・関西大学文学部教授）

『藝術に関する
走り書的覚え書』
岩波書店　岩波文庫
1978年11月刊
326頁

『中野重治
ちくま日本文学全集39』
筑摩書房　文庫版
1992年９月刊
480頁

『中野重治評論集』
平凡社
平凡社ライブラリー
1996年５月刊
568頁

書評

『竹中恵美子の女性労働研究50年
――理論と運動の交流はどう紡がれたか』
（竹中恵美子／関西女の労働問題研究会 著）

心打つ 竹中恵美子の苦難と躍動の半世紀

金谷 千慧子

●はじめに　●概要　●四つの時期区分と研究テーマ
●ディーセント・ワークをめざす日本の課題
●第2部　女性労働運動やその他の運動とのかかわり
●おわりに――聞き書きから

一　はじめに

二〇〇九年十一月二七日（金）、夕刻から『竹中恵美子の女性労働研究50年』出版記念・傘寿を祝う集いが大阪府立女性総合センター（ドーンセンター）で開催された。竹中恵美子さんとともに五〇年、労働運動をはじめ様々な活動に関わる女性たちが、先導役の師を仰ぎ見る思いで、感謝の気持ちを込めて集まった。ぬくもりのある空間だった。本著をもとに講演が始まったが、いつものように丁寧なレジュメが用意され、その昔学生討論会で「女にしてはよくやった」といわれ、自身大きな違和感を持ったというあの歯切れのよい張りのある声は、昔ながらである。

二　概要

本著は、著者が竹中恵美子／関西女の労働問題研究会となっており、第1部は「竹中恵美子の研究軌跡」、第2部は「女性労働運動との交流はどう紡がれたか――竹中理論は、私たちの生き方や思想を貫く〝赤い糸〟」に

なっている。まず第1部を開く。

「私が経済学を学びはじめた頃」では、半世紀前の竹中恵美子が蘇る。その頃女性が経済を学ぶことさえ稀有であり、二一六人中三人の女子学生の一人だった。戦争中獄中にあり、大学にもどった教授たちの講義が始まる。「経済学とは金儲けの学問ではない。経世済民の学である」との言葉は、「砂地に水が染み込むように私の心を捉えた」という。「このような経済学と出会いが、男性本位の経済学のなかで、不問とされ軽視され続けてきた女性労働問題に傾斜していく原因となった」(13頁)と書かれている。はやる心の動悸が聞こえてきそうである。本格的に始まる女性労働研究へ二つのスタンスを掲げている。

一つはピラミッドの底辺に研究の軸足を置くこと、二つ目は、ひとつの事象を表と裏、両者を統一的、複眼的に見るスタンスである。「女性労働を日本の労働市場の全体構造のなかで位置づけ、男女の相互関係性で分析するのである。そのいずれもが私の生身の生活実践と深く結びつくものであった。」(13頁)とある。つまり研究にジェンダーの視点を入れることである。すべての研究で女性は無視され続けてきたが、そこへ生活実践を携えた竹中恵美子がジェンダーの視点を持って切り込んでいくことになった。

また、研究生活五〇年間をそれ以前の時代と比べると三つの新しい視点が必要だという。

一つは「労働力の女性化」(ポジティブな面とネガティブな面)の視点

二つは生産と再生産をトータルにみる「アンペイド・ワーク」の視点

三つは「経済単位としての家族の見直し」を生産と(生命の)再生産の両領域に男女を相互に乗り入れる視点である。この主張は、近年の「ディーセント・ワーク(decent work)論」に引き継がれていく。竹中の女性労働研究は四時期に区分されている。各時期ごとにみていく。

三　四つの時期区分と研究テーマ

(一)　第I期(一九六〇年~七〇年代)
――『女のしごと・女の職場』『現代の婦人問題』

一九六二年三一書房から出た『女のしごと・女の職場』は、多くの女性に鮮烈な道しるべとなった。著者自身も「同書は、女性労働を成り立たせている根源を、戦後の日本資本主義の社会・経済の構造的特質に関わらせて明らかにしようとしたもの」(22頁)と並々ならぬ評価をしている。『女のしごと・女の職場』を読んだ私は、物ごとを考えはじめた高校生だったが、その後は講演会や大会には竹中恵美子という名前にひかれて、女の大学の

先生の姿を見に行った。続く『現代の婦人問題』(創元社)『婦人の賃金と福祉』(ミネルバ書房)は、当時の女子学生に「ゲンフモン」と「フチンフク」と呼ばれ、読まねばならない重要な本として学習会のテキストになっていたそうだ(第2部Ⅲ竹中理論との出会い木村涼子225頁)。

その後私は、単位互換が可能になり、竹中ゼミで単位を取った。そして「ゲンフモン」(『現代の婦人問題』)の第2章「家事労働論」を書かせてもらった。書きながら叫んでいた。「結婚がなぜ女が家事をすると約束をしたことになるのだ!」と。そして竹中先生とよく似た状況を背負うことになっていった。共同保育所づくりとその運営の苦しさ、研究と子育てと睡眠不足、ポストがないなどなど、である。しかし一方で、「結婚退職制は憲法違反」(住友セメント鈴木節子さん)や三十歳定年制憲法違反判決が出、七〇年代は労働運動が高揚感にあふれていた。たしかに「賃金」は労働運動の最大の課題であったが、ときにパートタイム労働者の大量出現や日本経済の高度成長から低成長時代への移行、一九八〇年代後半の社会主義の崩壊という世界史的出来事が重なり、男女同一価値労働同一賃金原則(ＩＬＯ一〇〇号条約批准一九六七年)にも関わらず、賃金論争と賃金闘争は一旦休止という時期を迎える。

・もうひとつのテーマは「育児休業」だった。これは一九六五年全電通と電通公社が交わした労働協約でスタートしたが、竹中は、この育児休業は女性のみに育児責任を負わすことを前提とした制度で、その意味で「歴史的限界であった」(48頁)と記している。第2部の「女性労働運動との交流」との関わりで、竹中は、育児休業は、「母性保護機能に対する基本的解決のないところで、リーダー組合の果たすべき役割を期待して」、あえて「育児休業制度の意義と限界」を語り(182頁)、運動の道筋を示した。

(二) 第Ⅱ期(一九八〇年～九〇年代はじめ)
――女性差別撤廃条約と女性労働運動

●女性差別撤廃条約と賃金理論と育児休業

竹中理論は女性差別撤廃条約とともに国際的な奔流になっていく。私が一九八〇年の国際女性会議(コペンハーゲン大会)に出たきっかけは、「私はいけなくなったから行っていらっしゃい」と竹中先生に背中を押されてだった。そこでは、女性差別撤廃条約が登場し、「労働権は譲り渡してはならない権利である」と謳われた。私を含めた世界の多くの女性は、女性差別撤廃条約を軸に国連と連携した運動の渦の中に巻き込まれていった。そういえば竹中先生はそれほど外国へ出る方ではなかった。

「家のことがあるしね、原稿が書けていないの」が口癖だった。諸外国へ飛ぶよりも、いつもいつも冷静・沈着に書くこととで格闘してきた方である。

国内的には、世界をリードしていく女性差別撤廃条約を日本でも批准させようと、女性たちが一つになっていった。日本政府が一九八五年のナイロビ世界女性会議までに批准するためには男女雇用機会均等法（かなり問題はありながらも）の成立が必須条件であったのだ。「均等法」成立時に、平等とは「機会の平等」か「結果の平等」かの議論があった。経営者側はもちろん、「機会の平等」で、「結果の平等」ではないと繰り返した。しかし、竹中は、「結果の平等」だという。女性差別撤廃条約は女性が実質的不平等であることを宣言したもので、そのために性別役割業の社会システムを変えていくことが結果の平等につながるのだという。機会の平等は、結果の平等の推進に不可欠であり、それが綿密に結びつくほど、性別分業体制を克服する社会になり、やがて出産休暇以外の女性の暫定措置が不用になる社会システムが可能になると記している。そこで女性への「特別措置」の合理性が主張される（61頁）。「特別措置」は、米国・カナダなどのアファーマティブ・アクション、北欧を中心とするクォータ・システム、イギリスの間接差別などがそれにあたる。「機会の平等」論には落とし穴がある。「結果の平等」をめざす真の雇用平等法制をめざさねばならない、と竹中は、女性たちに激を送った（190頁）。

●女性労働の「特殊理論」と大沢真理さんとの論争

一九九二年社会政策学会のテーマは「現代の女性労働と社会政策」だったが、そこでの大沢論文は「〝女子労働の特殊理論〟に終止符を！」だった（大沢真理「日本における〈労働問題研究〉と女性――社会政策学会の軌跡を手がかりに」『現代の女性労働と社会政策』（社会政策学会年報第37集）お茶の水書房一九九三年所収）。「特殊理論」とは竹中理論である。竹中理論はベロニカ・ビーチとも呼応するものだが、「女子労働問題は、女性の抑圧と結びついており、女子労働のもつ特殊資本主義的性格を明らかにする必要があり」、「女性＝特殊、男性＝一般としたわけではなく、女性労働の特殊性とは、低賃金労働者としての位置づけのことである。低賃金になる一般理論を明らかにしたい（73頁）のだ」いう。この「反論：私の女子労働の特殊理論が意味したもの」は大変迫力、説得力があり、反論としての効力を発揮している。よく以下のような声を聞く。「今や女性は差別などされているのではなく、特殊扱いされる時代ではない」とか「特殊理論としての女性労働論

ではなく、セクシャル・マイノリティなどを含む性にセンシティブなアプローチが必要なのだ」とかである。しかし、竹中理論は性にセンシティブになるというだけでは何の意味ももたない。どのようにセンシティブなのか、そのために、性差別を生み出す社会・経済構造の理論的解明が必要である(73頁)という。女性労働が置かれている特殊資本主義的構造はまだ理論化も不十分であり、課題も未解決であると痛切に思う。

(三) 第Ⅲ期(一九九〇年代はじめ〜二〇〇〇年)
——アンペイドワーク(UW)

一九九五年の国連「北京世界女性会議」の「行動綱領」では、無償労働計測の重要性について、「無償労働は計測されないことが多いが、無償労働のタイプ、程度、分布を完全に目に見える形で表すならば、責任分担の改善に寄与する」としている。竹中はUWの経済的評価の積極的意義を「UWを主婦役割に囲い込むことによるマイナスを除去し、社会を男女両性に担い分ける方策を打ち出すことにある」との目的意識があった。女性がほとんどUWを担っている社会では、女性の労働市場へのアクセス権が侵害され、社会保障への平等なアクセス権も侵害されるのである。しかし日本は、その後も正社員の「男性の稼ぎ手モデル」を変更せず、制度・政策を組み替えないままである。

●一九九六年の竹中論文
「男女賃金格差とコンパラブル・ワース」

一九九〇年代になると、同一価値労働同一賃金原則こそ有効な手段だと、賃金論争・賃金闘争は再び活発になる。コンパラブル・ワースのフルネームは、"Equal Pay for Worth of Comparable Worth"である。異なる職務であっても同一価値の労働であれば、同一賃金が支払われるべきとする原則で、ジェンダー・バイアスのかかった職務評価を正すことで、女性の賃金を引き上げる有力な手段となりうる。コンパラブル・ワースというのはアメリカで使われている用語であり、イギリスやオーストラリアでは、Equal Value、カナダではPay Equityと呼ばれている。

日本でのペイ・エクイティの実践は、一九九八年四月二七日、京都地方裁判所に提訴された「京ガス賃金差別事件」で、日本ではじめて、同一価値労働同一賃金原則が適用され(森ますみ意見書)、勝訴した。二〇〇〇年二月には「均等待遇二〇〇〇キャンペーン」が発足し、以後、運動の中で 男女同一価値労働同一賃金原則は、雇用形態による差別を是正すること、つまり、正規・パート間

で平等賃金を実現する手段としても位置づけられている。

（四） 第Ⅳ期（二〇〇〇年～二〇〇九年）
――フェミニズムの功績とジェンダーアプローチ

二一世紀に入ると、竹中理論は新しい社会政策理論の核心に迫り、変革社会の支柱になる。フェミニズムは、女性が担ってきたUWを社会的に見えないものにされてきたことへの告発から始めた。市場経済活動＝経済活動の背後にあってこれを支える膨大な非市場活動は、公然と無視されてきた。女性たちのこの経験を可視化させ、UW（アンペイド・ワーク）と名付けた。また労働の概念を拡げ、労働の再生産だけではなく、「家族」「公的セクターの福祉領域」も含む「社会的再生産（ケア労働を含む）」という概念を生み出した。

●フェミニストたちのジェンダー・アプローチ

フェミニストたちは二つのジェンダー・アプローチで実践していく。

まず「社会的市民権からのアプローチ」。社会的市民権とは、公的援助にもとづく国民の社会保障・社会福祉の権利であり、女性も同じように稼ぎ手となり、社会的給付をうける資格を持ことと家庭内における女性のケア労働の社会的評価を行い、〝社会的給付資格〟をもつようにすることである。もう一つは「時間のフェミニスト政治からのアプローチ」で、これはオランダの時間確保型社会化に通ずるもので、社会全体で子育てコスト、働き方（労働時間、労働パターン）のヴァリエーションで支払われるものである。

●ケア労働のジェンダー平等化戦略、「ケアレス・マン」ではなく

「ケアレス・マン」を超えてというサブタイトルには、〝納得！〟である（127頁）。「ケアレス・マン（ケア不在の男性の稼ぎ手モデル）ではなく、男女が経済的に自立し、ケアを両性が共有する。「ケア労働の価値を重視し、働く時間・遊ぶ時間・生理的時間しかない男性の生活パターンではなく、一日を四等分して六時間労働制にし、男性も子育てや介護に関われる時間政治（time politics）を提唱している。

四 ディーセント・ワーク（Decent Work）をめざす日本の課題

●めざすべき政策課題

まずILOが二〇〇〇年を機に宣言した「ディーセン

ト・ワーク」（decent work）の一環となる「ワーク・ライフ・バランス」を男女両性の問題として制度化すること。その際、自己責任・企業の社会的責任に委ねるのではなく、社会的セーフティ・ネット（社会保障・税制・保育・介護などの社会サービス、雇用政策や労働市場規則など）も併せて確立すること。第二の課題は、「時間政治のフェミニスト」の活用である。これは時短運動の転換をはかりながら、両性の労働市場へのアクセス権の保障と「ディーセント・ワーク」を両性に保障するものである。第三に、政策の単位を「男性稼ぎ手」モデルから「個人単位」モデルに転換することである。日本では「男性稼ぎ手」モデルは、いまや生活保障システムとして破綻しつつあるにもかかわらず、頑なに維持されており、持続的な社会のために差し迫った課題である。

●決して自動扉ではなかった

第1部の最後の一文は以下である。

「五〇年間の研究の軌跡を振り返って思うことは、経済の利害に翻弄され、様々な試練を経験しながらも、新しい社会に向かって歩んで来た歴史でもあった。しかしそれは決して自動扉ではなかったと実感する。それぞれの時代が当面する問題に真摯に取り組んできた理論と実践とが結ばれてきたからこそ今日があると痛感する。このささやかな研究回顧が、のちに続く研究者たちにとって他山の石であり得るならば望外の幸いである。」

竹中恵美子先生の人柄と研究姿勢がにじみ出ていて「有終の美」を飾る一文だと思う。このあと竹中恵美子著作目録（一九五三～二〇〇九）が一〇頁にわたって埋め尽くされている。圧巻である。

五　第2部　女性労働運動やその他の運動とのかかわり

第2部は、もう一方の著者関西女の労働問題研究会執筆で、三つの構成になっている（168～257頁）。第一は、竹中理論や論文の時期と絡まって、女性労働運動がどのような影響を受け、それが導きとなったかをまとめている。一九九〇年までは、大阪総評を中心とする運動とともに、九〇年代以降は女労研の活動がともに記されている。当時の総評婦人対策部長山本まき子さんは、竹中理論を連載し続けたことについて、「だって、男女差別賃金のについてこんなピシッと理論立ててくれる学者は他におられないもの」といっていたとか（177頁）。竹中論文が、女性リーダーたちにとって闘いへの意欲と展望の源泉だったことを物語るものである。また竹中は、財団

法人・大阪社会運動協会編纂の「大阪社会労働運動史」第六～八巻（低経済成長期上下・転換期）の監修を引き受けた。労働運動だけではない幅広い市民運動全般に関わる執筆者十数人に一人ひとり、まるでゼミ生の面倒をみるように、論文としての形状の整え方から史実の注釈にいたるまで真摯に鍛えた。私も執筆者として加わったが、鍛えられたという実感がある。あのころは座れないし、杖も必要だという最悪のコンディションでの力投が続いていた。第二は、「高齢者をよくする女性の会・大阪」の運動との関わりが記されている。第三は、それ以外の様々な活動の様子が綴られている。

六　おわりに――聞き書きから

本書は、竹中恵美子を囲む周辺の勤勉で献身的な人々の織りなす曼荼羅のような作品である。とくに248頁からの「竹中恵美子への聞き書き――怒りが私の変革の原動力」は、シャープな理論家、きめ細やかな指導者という側面だけでなく、丸ごとの竹中恵美子が綴られている。半世紀にわたる竹中恵美子の苦難と躍動の歴史の彩りを鮮やかに浮き立たせる一文である。この本を心打つものに仕立てあげている功績はここにあるといえる。

さて本文も最後になる。本書を読み返すとき、竹中先生を追いかけながら走ってきた私に、これからどうするの？と呼びかけられている思いが何度もした。

「二一世紀は、経済の時代ではなく社会の時代だ」といったP・Fドラッガーにも後押しされて、私ももうひと踏ん張りしようと思う。「労働は人類の譲り渡すことができない権利である」（女性差別撤廃条約第11条）を耳にした時の感動を胸に、「ネクスト・ソサエティ、それは、NPOが答え」「都市社会にはじめて出現する市民社会、NPO社会で、人類ははじめて性別差別を克服できるのである」というドラッガーの最終ページに向かって歩んでいくことにする。

（以上）

（かなたに　ちえこ・人権問題研究室委嘱研究員・
関西大学非常勤講師・女性と仕事研究所代表）

201頁収載写真
（女性労働の基礎理論、歴史、現状分析、展望まで学んだ「ゼミナール『女の労働』」で講義する竹中恵美子）

ドメス出版
2009年10月10日刊
本体価格 2,300円　268頁

博物館実習展

知られざる大阪の伝統工芸〝張り子〟

進元冴香

張り子

顔を軽く触ると頭を上下に振る、何とも愛らしい張り子人形。津々浦々に存在し、お土産品として有名なこの人形が、実は大阪の名産であることをご存知であろうか。

今回、博物館学芸員資格課程、博物館実習において、私達の班は〝張り子〟について展示を行った。そのことについて述べようと思う。

張り子は木彫りの原型に水で濡らした紙を一面に張り付け、その上に和紙を次々と重ねていき、乾燥してから型を抜いて鮮やかな配色で施された人形のことを指す。技法は室町時代に中国から伝来し、軽くて丈夫な上に、和紙を活かして着色も効果的にできるという事で江戸時代には多く生産された。

ではなぜこの張り子が大阪の名産であるのか。これは大阪人独特の発想が大量生産へと導いたのかもしれない。

もともと貴重な紙を多く使用する張り子は宮中や貴族

達の間によって珍重されていた。江戸時代、公家が多く、紙がある場所と言えば京都。しかし反古紙が大量に出て紙が盛んに使用されていた場所といえば、商都として繁栄した大阪。〝この余った紙を上手く活用できないものか〟と考え、生まれた物が張り子人形であった。そして、この京都の張り子から発展した大阪張り子は、西日本のルーツとなるほど生産が活発化していくこととなる。

楠田工房を訪ねて

戦前は大阪で活躍する張り子職人は多かったそうだが、疎開や戦後の混乱により減ってしまい、現在専門製作されている方は二組だけとなってしまった。信貴山朝護孫子寺の張り子の虎の製作を行う峯工房と、道修町少彦名神社の神農虎を製作をする楠田工房である。

今回、私達は楠田工房に協力していただいた。今から百年前、初代の与三郎氏が上本町で修行を積み、その腕を認められて師匠の後を継いだのが楠田工房の始まりだ。この工房では、家族一丸となって丹精こめて手作りで製作され、一九九〇年には日本民芸公募展で「大阪府知事賞」を受賞するなど、今もなお工芸師として活躍されている。では、この楠田工房が製作する神農虎についてふれたいと思う。

少彦名神社と神農虎

一七二二年（享保七年）に、八代将軍徳川吉宗が和歌山から江戸に向かう途中大阪で病気に罹った。その時、献上された薬が大阪府東区の道修町のものであった。これにより、吉宗は一二四軒の「道修町薬種中買株仲間」を認め、諸国から薬を入荷する際、吟味する特権を与えた。しかし薬を

吟味することは人命に関わるため、一七八〇年（安永九年）に、京都五条神官により少彦名命（医薬神）を勧請し、以前より道修町で薬の神として祀っていた神農氏と合わせて祀ることとなった。これが現在「神農さん」として親しまれる少彦名神社の始まりである。

一八二二年（文政五年）、コレラ（虎列刺）が大阪で大流行し、多数の死者がでた。当時コレラを治す治療法はなく、虎は古くから悪霊を退治し、病魔も退散させると言われていたため、道修町株仲間が厄病除薬として「虎頭殺鬼黄円」という丸薬を作った。その際病除祈願のお守りとして配布したのが〝張り子の虎〟である。以後、少彦名神社では無病息災のお守りとされ、毎年一一月二二・二三日に執り行われる「神農祭」では、五葉笹に吊るし、腹の部分に「薬」の朱印の入った張り子の虎が売られている。

展示にあたって

学芸員とは博物館法に基づき、博物館資料の収集、保管、展示などに関する専門的な業務を行う者をさす。この資格取得課程である実習内容は、一年を通して様々な専任の講師による講義や、近畿圏や東京の施設見学等であった。講義によっては実際に資料を扱うものも多く、実践的なカリキュラムで構成されていた。そしてその集大成として班ごとに学生の手で展示を行う、特別展示会を開催したのである。

展示テーマを張り子にした理由は二つある。

一つは班員が様々な都道府県出身で、集まる場所がこの関西大学のある大阪であったこと。もう一つは電子ゲーム機の発達により手作り玩具に触れて遊ぶ子供たちが減り、伝統工芸が失いつつあるのではないかと懸念したためであった。

そこで思いついたのが〝張り子〟である。大人の「懐かしい」から子供の「初めて知った」まで、幅広い年齢層で楽しんでいただき〝地域に密着した展示〟を目標にした。

手作り張り子

今回の展示を進めるにあたり〝地域の繋がり・そして後世に残したい〟が大きなテーマであった。そこで私たちは地域と連携した活動を行う吹田市社会福祉協議会に協力を依頼し、「子育てサロンちゃちゃ」に参加するお母さんや子供たちと共に展示で扱う巨大達磨の製作にとり

かかった。製作においては幼い子では和紙では困難なため画用紙を用いた。会場では初めて達磨を見て怯える子、糊まみれになりながらも班員やお母さんと黙々とお手伝いしてくれる子など様々で、子供たちに手作りの温もりや文化を残したいという班員の気持ちが実った瞬間でもあった。

保存と伝承

今回の展示では、大阪、そして地域の張り子を扱ったが、感じたことは急激に数が減少しているということであった。昔は神社の屋台などで張り子は売られていたが、今はその姿を見なくなったと話す来館者もいた。紙というありふれたものに生命を吹き込んでいく技術と伝統。そこには歴史を刻んできた人々の想いが息づいており、私達の生活の中で脈々と受け継がれている。昔は当たり前にあったものが段々と姿を消していく。後世にどのように残していけるのか、それが今回展示を行った私達が考えていかなければならない課題であると感じる。

最後に、この実習では一年を通じ、博物館学を超越した多くの物事を学んだ。この博物館実習は、来年度で五〇周年を迎えるという。是非ともより多くの人に受講し、経験していただきたい授業である。

（しんげん　さやか・関西大学文学部四年次生）

班員：進元冴香・伴丈加奈美・井沢純子・岡村香寿美・杉田　章・杉原瑠美・土井康子・野口　海・半田愛美・藤沢雅直・藤枝杏奈・外屋敷達也・前田桃世・松崎満里奈・丸末理詠子・三好　俊

博物館実習展
絵双六に見る大阪近代史
――資料の借用を通して――

園田　恵梨果

はじめに

博物館の実務に精通されている先生方が担当される、「博物館実習」は、他の科目にない興味深い点があります。授業の一環として博物館へと足を運び、書物から得られない知識を得ることができます。この博物館実習の最大のイベントは、実習を通して学んだことを「博物館実習展」として実際に発揮できることです。

平成二一年一一月一六日～二〇日、「関西大学博物館実習展」が開催されました。総勢一六名の私たちが選んだテーマは、「絵双六に見る大阪近代史」でした。さいころを振り、コマを進め、アガリへと近づいていくあの遊びです。遊戯とは言え、絵双六は当時の世相を映し出す鑑です。双六の一コマ一コマから当時の社会に何が起こり、人々が何を見て、どのように生きていたのかを知ることができます。鉄道の開通、百貨店の登場、戦争と復興、万国博覧会等々。絵双六を通して大阪の庶民が近代以降に歩んできた道のりを、この展覧会を通して観覧者の方々に見ていただこうと思いました。

展示の企画や準備など、何もかもが始めての経験でした。中でも資料の借用の際に書類を取り交わして法的な手続きを行ったことや、借用を通して知らない方々にお会いできたことは、社会経験の少ない私たちにとって新鮮なことでした。そのときの様子をご紹介したいと思い

ます。

双六資料――山本正勝先生を訪ねて――

双六の借用にあたって、二人のコレクターの方から資料を借用させていただきました。枚方市で皮膚科の医師をされている山本正勝先生、大阪天満橋でEXPO・CAFEを営まれている白井達郎さんです。

山本正勝先生を知ったのはインターネットサイト「双六ねっと」からでした。双六マニアによって運営されているこのサイトの一文に、双六を六千点以上も所蔵されている山本正勝という方がいる、という情報を見つけたのです。また、山本先生が出版された双六に関する本も見つけました。

資料収集係が山本先生との接触を試みたのは実習展の二ヶ月ほど前。勤務先への電話は避け、山本先生の自宅がある箕面市の郷土資料館を通して連絡を取りました。そして、何度か山本先生の自宅へ足を運ばせていただくようになり、資料の借用も快諾してくださいました。

山本先生は自宅に紙の資料の劣化対策として「翔奉庵」という温湿度管理の整った収蔵庫をお持ちです。素人同然の私たちが不慣れな扱いで資料を劣化させてしまってはいけない、と私たちはなるべく実習展の日にちが近くなってから資料をお借りすると決めました。一方で、図録の編集などにもとりかからなければならなかったため、事前に山本先生に許可を得てデジカメで撮影させていただいた写真をもとに資料の調査・研究を行いました。図録に掲載する写真は後日、撮影機材を用いて取り直したものを使用しています。

借用のため翔奉庵を訪問したのは実習展の二週間前でした。借用依頼書をお渡しし、梱包作業にとりかかりました。当日は身だしなみを整え、細心の注意をはらって臨みました。事前に準備しておいた資料調書に現在の資料の状態を記入し、山本先生に確認をしていただきます。それが終わると資料を薄葉紙ではさみ、丈夫な厚紙と一緒に大きめのクリアーファイルに入れ、持ち運べるようにさらに大きめの袋に入れました。当日は雨が降っていたので万全を期し、晴れた翌日にもう一度資料を取りに訪れることにしました。

梱包作業でずいぶんと手間取らせてしまったにもかかわらず、その後も貴重な双六を見せてくださいました。漫画家手塚治虫氏直筆『ジャングル大帝レオ』の双六原本や、『ひょっこりひょうたん島』の双六原本などを見たときには感動しました。なじみのある週刊コミックや、小さい頃読んでいたような子供向け雑誌、新聞の織り込みチラシなどにも双六が描かれていました。これからは私も双六を見つけることが楽しくなるでしょう。

EXPO・CAFEを訪ねて

EXPO・CAFEは近未来をイメージしたファンタジックでおしゃれなカフェです。店内のいたるところにEXPOグッズが飾られています。七〇年の大阪万博を体験していない私にとっては新しくもありレトロな雰囲気も漂う空間でした。

大阪万博開催当時、白井さんは、池田市に住まわれ、毎日のように自転車で万博会場に通われていたそうです。万博が終了してからもなんとなく万博グッズを集め、気づくと一万点以上にもなっていました。その後脱サラし、EXPO・CAFEを開いたそうです。せっかく集めたものも公開しなければ死蔵する、ということで自宅を万博ミュージアムにしてしまったというから驚きです。

そのような白井さんの夢とロマンの詰まった空間で、万博に関する数々の面白いエピソードを聞かせていただきました。たとえば、大阪人だけがエスカレーターの右側に立つのはなぜか。それは万博の際、「左側を歩く人、右側を並ぶ人」という国際的なルールを設定したからだそうです。それが今日もなお大阪人の常識となって残っているのです。

白井さんとは事前に借用の依頼をすることができなかったので、当日、準備しておいた借用依頼書と調書を持ってお願いしたところ、瞬時に快諾してくださいました。万博双六は大阪万博を記念して作られたというかわいらしい布でした。

一つの時代とともに放っておいたら忘れ去られてしまうもの、そういったものにお二人は価値を見出し、当時の貴重な記録として残そうとされてきました。お二人のような方たちのおかげで文化は継承されていくのだ、ということを実際に身近で感じられることができました。

また、リスクを承知で大切な資料を貸してくださるということに感謝の念を感じつつ、誠実な態度で責任ある行動をとるようにと終始気が引き締まる思いでもありました。

借用を通して、資料に関する知識のみならず、その扱い方を知っておくことはむろんのこと、作法や礼儀といった人との接し方を意識した経験となりました。

さいごに

借用先の方々が快く協力してくださったおかげで実習展を成功裏に終えることができました。また、地域の方々からも暖かい言葉をいくつもかけていただきました。この博物館実習展を通して人の優しさに触れられたように思います。人と人とのつながりを実感できた体験でもありました。

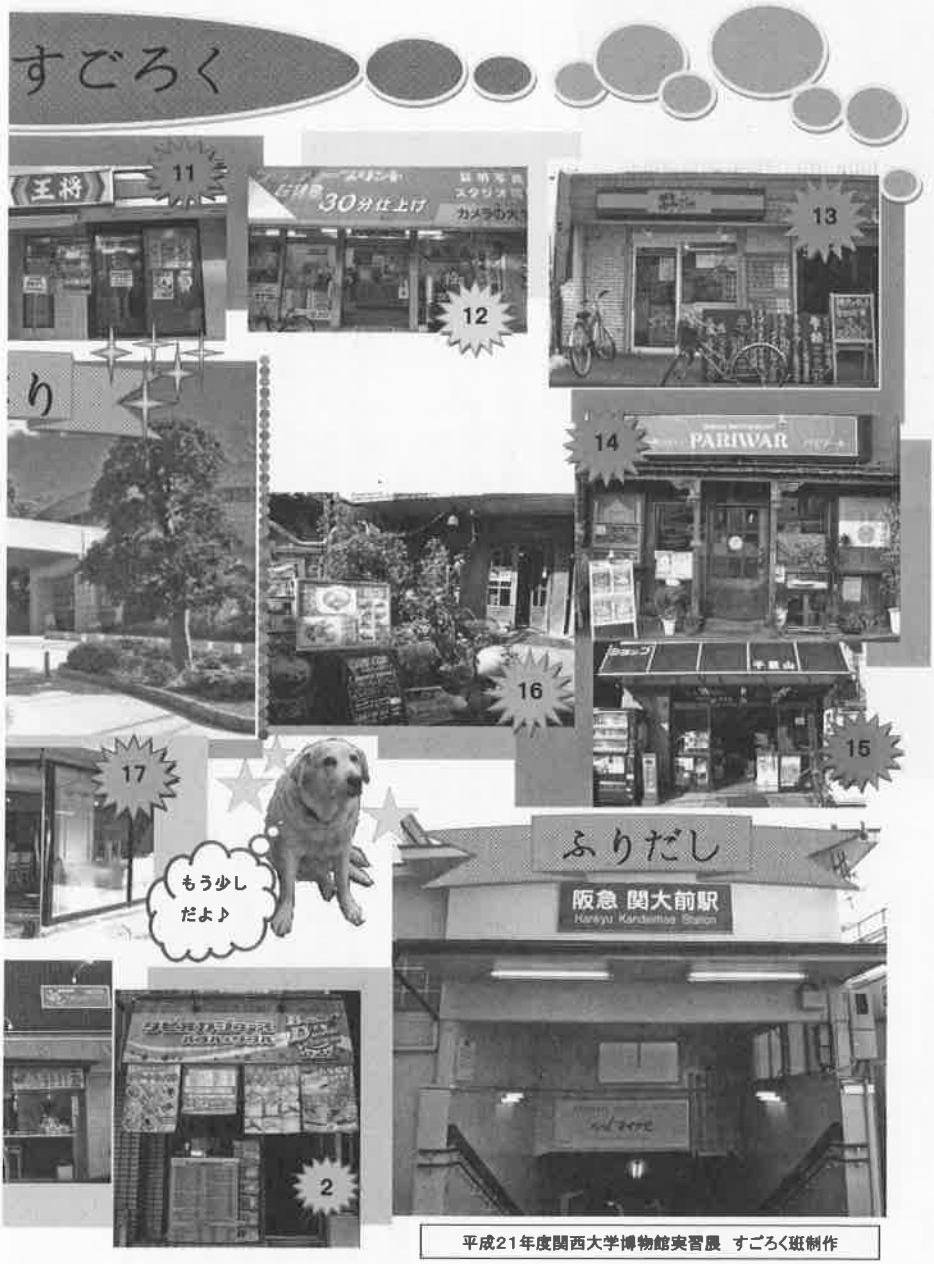
また、双六や近代大阪に関する勉強をし、資料の借用にあたって箕面市や天満橋を訪れ、広報活動をするにあたって関大前や近辺の図書館を訪ね、展示作業をしたりと、するべきことは山ほどありましたが、どれもやりがいのあることばかりでした。博物館実習を終えたときには達成感を感じました。それと同時に、がらんとした博物館展示室を見ると寂しい気持ちも残りました。学芸員という仕事がより身近に感じられた充実した体験でした。

（そのだ　えりか・関西大学法学部法律学科四年次生）

お世話になった方々（順不同）

関西大学博物館事務室、博物館実習担当の先生方、関西大学総合図書館、吹田市立博物館、箕面市立郷土資料館、阪急電鉄淡路駅、吹田市立図書館、関大前通りの各店舗、白井達郎氏（EXPO・CAFE）、山本正勝氏（翔奉庵）

班員：青井理恵子、阿部鈴、井上靖子、内田恵子、大西沙紀、蒲原悠子、川崎千嘉、木村直樹、清川敦子、小南聡、阪口真理、柴田萌、鈴木千絵、園田恵梨果、橋本千明、吹田倏



平成21年度関西大学博物館実習展　すごろく班制作

関大前
9
10
8
あが
20
7
関西大學
19
1回休み
6
甲賀流
関大前店
18
3
iS-KARA
インターネットカフェ・カラオケ
5
4
から揚げ

博物館の資料(8)

物が語る歴史

――関大博物館

山口卓也

図1　モースの大森貝塚発掘調査報告書収録土器実測図
石版印刷で出土した土器類の実測図を掲載する。破片を回転させて復元図にすることも行われている。

博物館資料の由来3　――モースの考古学と『石器図』――

日本に「考古学」という学問をもたらしたのは、日本滞在中にダーウィンの進化論を時差なく日本に紹介した動物学者エドワード・モース(Edward S. Morse 1838-1925)である。モースは明治一〇(一八七七)年に来日、東京に向かう列車の窓から大森貝塚を発見した。東京大学の初代動物学生理学教授に任用されて、すぐに貝塚を発掘し、発掘調査報告書『SHELL MOUNDS OF OMORI』MEMOIRS OF THE SCIENCE DEPARTMENT, UNIVERSITY OF TOKIO, JAPAN VOLUME I PART I. 1879 を刊行している。大学の研究成果を、報告書にまとめて刊行すること、客観的な検証に耐えうる実測図やデータを収録・公開することが、この報告書で初めて行われた。出土した土器や石器、骨角器、貝塚の貝類のきれいな図面が、精緻な石版印刷で収録されている。モースは、大学で生物学・動物学を講義する傍ら、遺物観察と実測の方法を日本人学生に教え、作図と印刷方法を画工にも伝えた。日本に、考古学とともに「科学的観察」と「検証資料の提示」の方法をもたらしたのである。

図2　柏木政矩の『石器図』表紙
和紙を繋いで絵巻としたもの。「柏」の印がある。

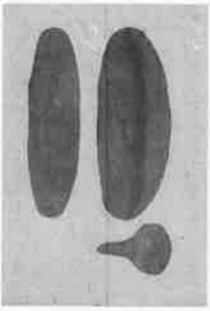


図3　3面展開された「石器実測図」
立体物は、九〇度ごとに六方向から観察すると、形状が捉えられるという展開方法のうち、特徴の捉えやすい二面と断面を展開作図したもの。関西大学博物館に実物がある。下絵無しに直に石器類を実測している。烏口かペンのインクで一気に輪郭が描かれ、修正した箇所はない。彩色は丁寧で、実物を見ながら行ったものと思われる。

○柏木政矩の『石器図』

平成二〇年、堺市在住で考古学に関心のある植田兼司氏から関西大学博物館に寄贈された『巻紙』がある。この巻紙は石器類を描いた目録で、押された印章から柏木政矩のものであることが判明した。彼は、明治初期の著名な古美術鑑定家で、文部官僚でもあった蜷川式胤や神田孝平などと親交があり、明治一五(一八七七)年にはモースと面識を得たという。正倉院の宝物調査などを手がけ、明治五(一八七二)年に仁徳陵前方部で石棺が発見された際、石槨内部状況を図化した人物として有名である。

石器図は、和紙を張り合わせて、勾玉、子持勾玉、石斧、有溝石錘、両頭石斧、御物石器、半月形石器、青竜刀形石器、石鏃等、合計四九点の石器が手書きされ、関西大学博物館が所蔵する資料も含んでいる。大形の勾玉類や石斧類の一部は見事な彩色が施されている。江戸時代の弄石家の絵図のように、身近な顔ぶれに回覧するためのものであろう。

体裁は古めかしいが、図面には明治の革新が表現される。石器の特徴を捉えるため、作図面を九〇度かえて立体として展開し、多くが二面、一部は三面図となっていること。石器の輪郭が、インクを含ませた烏口により引かれていること。石器の輪郭や稜線で、変化点に測定点の痕跡が認められ、実物を計測しながら描かれていることなど、明治初期に西欧から伝わった学術的作図方法を正しく学んで描かれた特徴が、はっきりと認められる。原図に直に彩色が行われているため、いわゆる印刷原図ではなく、このまま作品として扱われたものとみていい。

現在博物館蔵の石器類との参照作業を行っており、四九点中の一七点を所蔵していることが確認できている。それらは、今の考古学専攻の学生に同じように描けるだろうかと思うほど正確に描かれている。

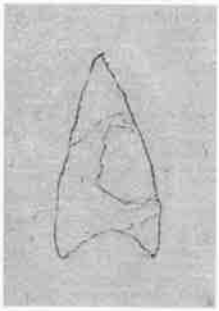


図4　針跡の残る石鏃実測図（未完成）
小さな石鏃を紙の上に据えて、針で角をマークして形を写している。中に針穴を繋いだ線が見えるが、石鏃の剥離面の稜線を描いたもので、石鏃が剥片石器であることを理解して描こうとしていることがわかる。剥離面を意識した、日本での最初の剥片石器実測図である。小さな石鏃なので、今のところ関西大学博物館蔵品のなかに参照を果たせていないのは残念である。

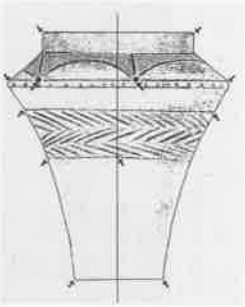


図5　大森貝塚の土器実測図原図にのこる針跡
土器の直径と高さを測り、模様を割り付けて復元した実測図。

○実測図の作成と観察の方法

現在の考古学では、石器の研究をするとき、石器がどのような材質か、どのように作られたか、どう使われたかわかる痕跡があるか、壊れた部分はどこかなど、石器を観察しながら読み取り、解釈して、それを製図用紙に正確に描く。これを実測図という。いわば石器研究の個別カルテである。遺跡から発見されるすべての石器類にこの観察と実測をおこなって、全体を集計評価して、たとえば農耕用具が多いとか、狩猟用具が少ない、ドングリの粉食調理が盛んだなど、ようやくその遺跡の考古学的解釈が下せるのである。

研究をまとめて報告書を出版するときには、調査者が下した考古学的解釈が妥当であるかを、読み手が納得できるように、この実測図を製図して、印刷掲載する。モースの大森貝塚の報告書の図面も、資料を観察研究して実測原図を作成し、それを製版して石版印刷したものであった。特に発掘や遺物研究など、実資料からはじまる考古学では、帰納的に積み上げられる調査成果の報告書に求められることは、自然科学における手続きとも同じである。

現在、考古学研究者は、出版された報告書を入手できれば、掲載された石器の実測図から特徴や作り方、使い方、壊れ方の差異などを読み取ることができる。どの報告書にも多量の遺物実測図、遺構実測図が掲載されているが、日本考古学の実測図重視は、このモースの大森貝塚の報告書にはじまっているといえる。モースは生物学者であるので、あたかも貝類を分類、整理、記述するように、遺物を観察し、実測図にし、さらに報告書に収録している。もし、モースが生物学者でなかったら、日本考古学は、遺物観察と情報公開に、少し違った研究作法を身につけた

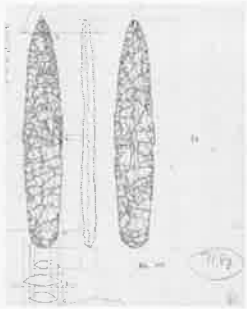


図6　現在行われている石器の実測図

製図用紙に鉛筆で、石器の形を正確に写し、打製石器を作る剥離が、どういう順番で行われたかをわかるように描いた図。三面の展開と断面の作図を行っている。手馴れた研究者でも、作図に大体二日かかる。このままでは印刷できない。

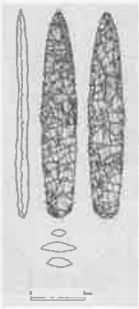


図7　印刷された石器実測図

鉛筆で描かれた実測図を、製図ペンでトレーシングペーパーに写し取り、版下にする。印刷時には青は取り込まれないので、方眼紙に貼り付けて位置決めをする。

かもしれない。

○　どちらが早い？

柏木政矩の『石器図』に載せられた石器類は、柏木の手で出版されることはなかったが、神田孝平により明治一七（一八八四）年に『NOTES ON ANCIENT STONE IMPLEMENTS, &c. OF JAPAN』に一部が収録される。関西大学博物館には、この神田孝平がまとめた石器コレクションが収蔵されている。柏木がこの絵巻を描いたのは、明治一七年より前であることになる。モースの来日が明治一〇年、大森貝塚の報告書刊行が明治一二年で、明治一五年にモースが柏木宅を訪問する際には、すでに石器実測方法を習得していた可能性がある。モースの大森貝塚報告書にない石鏃実測図や三面展開図は、彼の独創的な作図力と西欧の学問についての情報収集の所産であろう。柏木は、仁徳陵前方部ですばやい作図で記録を残した技術者でもあったので、実測の技術的なノウハウは、神田孝平や東京大学の門下生、場合によっては画工から得たのではなかろうか。ただ、柏木自身には石器研究を広く公開出版する必然を感じなかったので、実測図を出版せず、「絵巻」と仕立てたのであろう。

柏木政矩の『石器図』に描かれた石器類は、考古学史的にみると、日本最初の「石器展開実測図」「剥片石器実測図」であり、江戸時代の好事家の蒐集が、明治の「お雇い外国人教師」モース、知識人を経て、近代科学である考古学にまとまっていく過程をうかがわせる重要な史料であると判断できる。

（やまぐち　たくや・関西大学博物館学芸員）

図書館資料紹介 ⑲ 寺脇研著『それでも、ゆとり教育は間違っていない』

渡部 晋太郎

ゆとり教育世代の制度設計を担う文部官僚

丁度本誌が発行される二〇一〇年四月は、いわゆる「ゆとり教育世代」一期生の多くが大学を卒業し社会に出る時期にあたる。コンサルティング会社社長の柘植智幸氏は、その著書『「ゆとり教育世代」の恐怖』（PHP研究書、二〇〇八年）の中で、この時期について次のような近未来シミュレーションを描いている。

2010年4月1日　大手メーカーに大学を卒業し、新卒として30人が入社した。入社日のこの日に、30人すべてが出社してくると誰もが思い込んでいた。ところが、5人現れない。人事部の課長は慌てて、彼らのもとへ電話を入れた。携帯電話にも家の電話にも出ない。机の上にあるパソコンを除くと、一人からメールが入っていた。

「内定を辞退します」

これだけ書かれてある。署名はない。おそらくA大学の彼だろう。そう思った課長は、急いで電話を入れてみた。だが、音信不通。どうやら電源を切ってあるようだ。「内定辞退」は、昨年夏に内定を出したときに申し出るべきだ。そんなことを強くいいたかった。

夕方になりようやく、もう一人の携帯電話につながった。彼は悪びれた様子がない。そして「違う会社に入ることにしました」という。課長は放心状態になってしまった。

（前掲書二二頁）

著者の柘植氏はコンサルティング業務で得た知識と経営者としての経験から、上記のシミュレーションのような事態がかなりの確度で実現すると見ており、この四月は「きっと、日本の産業史に残る大きな〝イベント〟になるに違いない」と予言する。そして、もし柘植氏の予言通り、日本の企業社会に大きな混乱がも

たらされるとするならば、その元凶は間違いなく「ゆとり教育」に求められることになるであろう。

ここで、いわゆる「ゆとり教育」とは具体的には何を意味するのかについて解説すると、それは一九九八年（平成十年）から一九九九年（平成十一年）にかけて全面的に改正された学習指導要領に基づく教育を指す。その実質的な開始は二〇〇二年度（平成十四年度）からで、

（1）公立学校が完全週五日制になることによる授業時間数の減少

（2）小学校及び中学校における学習内容を大幅に減らした新学習指導要領の実施（教科横断的で体験学習を重視する授業「総合的な学習の時間」の導入を含む）

の二つがその大きな特徴となっている。中でも新学習指導要領における学習内容の削減の影響は大きく、以前に比べて約三割の内容が削減されたことにより、例えば中学校の数学では二次方程式の平方の形に変形して解く方法は習熟させないという検定方針の下、解の公式が消えている。また、小学校四年生用の理科の教科書では、夏に咲く「一年生植物」しか扱わないという学習指導要領に基づき、多年草であるタンポポやサクラが載せられなくなったりもしたのだった。

しかし、こうした授業時間数の削減と学習内容の削減は決して一九九八～九年の学習指導要領の改定において突然生じたわけではなく、一九八〇～一年度実施と一九九二～三年度実施の学習指導要領の改定においても削減が行われていた。そして『「ゆとり教育世代」の恐怖』の著者である柘植氏はこの事実に基づき、「30代や40代の人が「ゆとり教育って、バカを大量生産している」というが、それは違うだろう。すでに、その世代が小中高校のころから授業時間数は減らされていたのだ」と反論し、「「ゆとり教育」というと、これまでとはまったく違う教育が行われているかのごとく、レッテルが張られる風潮がある。これは事実誤認であり、私としては「ゆとり教育世代」が気の毒な気がして仕方がない」と弁護する。

だが、このような正当なる弁護とは裏腹に、「ゆとり教育世代」が際立った印象を多くの人々に与えていることも事実である。例えば、京都大学の大嶌幸一郎工学部長は次のような体験談を紹介している。

工業化学科の1学年は235人。従来、私の授業では1割程度が単位を落としていました。ところが、現在の3年生から急に4割ほどの学生が単位を落とすようになりました。

有機化学の授業で工学生にとって特別に難しいことを教えているわけではありません。2つの薬品を混ぜ合わせたらどうなるかといったことです。同じように授業をし、同じように試験をしていたのに、明らかに従来と違っている。

思い当たる理由は「ゆとり教育」です。2006年度に入学した学生は、ゆとり教育が本格導入された第

1世代なのです。噂には聞いていたけれども、授業で学生を見ていても分からなかった。出席率は従来と変わっていなかった。学生が授業内容を十分に理解できていなかったということなのです。試験で半分弱も落ちるのは明らかにおかしい。

（「日経ビジネスリポート」二〇〇八年八月二六日（火）「京大工学生はゆとり世代から学力低下」～さらば工学部（7）京都大学・大嶌幸一郎工学部長に聞く http://business.nikkeibp.co.jp/article/manage/20080825/168719/）

おそらく「ゆとり教育世代」は様々な局面で事あるごとに「これだから〝ゆとり〟は……」「これが〝ゆとり〟クオリティか！」と言われ続けることになるであろう。もちろん、「ゆとり教育」の制度設計をしたのはもっと上の世代の人達であり、本人たちにはその制度の制定に係る責任は存在せず、たまたまその世代に生まれついたに過ぎない。にもかかわらず、「ゆとり教育」を受けたことに対する軽蔑を伴った周囲の反応は、ひょっとすると一生涯続くことになるのかもしれないのである。

ところで日本には「ゆとり教育世代」とは別に、「昭和一桁世代」や「団塊の世代」と呼ばれる世代が存在する。しかし、これらの世代の呼称と「ゆとり教育世代」という用語との間には決定的な相違が存在する。それは、「昭和一桁世代」も「団塊の世代」も、単に当該世代の時間指標的または量的な特徴を表しているに過ぎないのに対して、「ゆとり教育世代」は当時の行政が推進した教育制度を呼称に取り入れたものであり、いわば人為を特徴とする世代用語だという点である。従って、「ゆとり教育世代」は行政の動向次第では、〝ゆとり教育〟を受けていない世代になり得ていた可能性があるのである。

このように、「ゆとり教育世代」は間違いなく人為の産物であるわけであるが、ではその世代を輩出した「ゆとり教育」という制度はどのようにして生み出されたのであろうか。

その淵源は中曽根康弘政権の下にできた臨時教育審議会の答申にまで遡ることができるが、直接的には中央教育審議会が一九九六年（平成八年）七月一九日に提出した「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について（第一次答申）――子供に「生きる力」と「ゆとり」を――」及び一九九七年（平成九年）六月二六日に提出した第二次答申に基づいて改正された学習指導要領が「ゆとり教育」を生み出したのであった。従って、「ゆとり教育」の責任者を求めるとするならば、形式的にはこの答申を提出した第十五期中央教育審議会の専門委員を含む委員、そしてその答申に基づいて学習指導要領の改正の告示とその実施を担当した文部大臣（文部科学大臣）となるであろう。すなわち、以下の人々が「ゆとり教育」をもたらした責任者と考えられるのである。

第十五期中央教育審議会委員・専門委員名簿（平成八年七月十九日現在）

会　長　有馬朗人（理化学研究所理事長）

副会長　鳥居泰彦（学校法人慶應義塾長）

第一小委員会

委員　市川芳正（前東京都教育委員会教育長）、薄田泰元（社団法人日本ＰＴＡ全国協議会会長）、河合隼雄（国際日本文化研究センター所長）、（座長）河野重男（東京家政学院大学長）、國分正明（日本芸術文化振興会理事長）、高木剛（ゼンセン同盟書記長）、田村哲夫（学校法人渋谷教育学園理事長、渋谷幕張中学・高等学校長）、永井多恵子（日本放送協会解説委員）

専門委員　油井誠（静岡県島田市立初倉中学校教頭）、佐々木初朗（盛岡市教育委員会教育長）、薩日内信一（東京都渋谷区立大向小学校長）、里中満智子（漫画家）、末吉裕郎（社団法人全国子ども会連合会相談役）、那須原啓子（前茨城県ＰＴＡ連絡協議会母親委員会委員長）、蓮見音彦（東京学芸大学長）、増井俊明（前東京都立九段高等学校長）、牟田悌三（俳優）

第二小委員会

委員　江崎玲於奈（筑波大学長）、川口順子（サントリー株式会社常務取締役）、（座長）木村孟（東京工業大学長）、小林善彦（学習院大学教授）、坂元昴（放送教育開発センター所長）、俵万智（歌人）、土田英俊（早稲田大学教授）、根本二郎（日本郵船株式会社代表取締役会長）

専門委員　青木保（東京大学教授）、河田耕一（埼玉県立伊奈学園総合高等学校教頭）、小澤紀美子（東京学芸大学教授）、児島邦宏（東京学芸大学教授）、サムエル・Ｍ・シェパード（日米教育委員会事務局長）、中進士（前東京都港区立青山中学校長）、山極隆（富山大学教授）

文部大臣　小杉隆　一九九六年（平成八年）一〇月七日～一九九七年（平成九年）九月一〇日

※第十五期中央教育審議会第一次答申及び第二次答申提出時の文部大臣

文部大臣　有馬朗人　一九九八年（平成一〇年）七月三〇日～一九九九年（平成一一年）一〇月四日

※上記答申に基づき全面改正された小中学校学習指導要領（一九九八年一二月一四日告示）及び高等学校学習指導要領（一九九九年三月二九日告示）の告示時の文部大臣

文部科学大臣　遠山敦子　二〇〇一年（平成一三年）四月二六日～二〇〇三年（平成一五年）九月二一日

※全面改正された小中学校学習指導要領の実施開始時の文部科学大臣

文部科学大臣　河村建夫　二〇〇三年（平成一五年）九月二二日～二〇〇四年（平成一六年）九月二六日

※全面改正された高等学校学習指導要領の実施開始時の文部科学大臣

だが、「ゆとり教育」の責任者を上記の人々に限定してしまうと実態を見誤る恐れがある。というのは、終戦直後の国語改革において形式的には国語審議会が改革の役割を担ったように見えても、その実態は保科孝一を中心とする文部官僚が改革を主導したのと同様に、「ゆとり教育」についても文部官僚がその実現にあたって少なくない役割を果たしていたと見做し得るからである。そして、その役割を担った中心人物の一人と目されるのが「ミスター文部省」こと寺脇研氏である。

ここで寺脇研氏の経歴を簡単に説明すると、寺脇氏は一九五二年（昭和二七年）に福岡市で生まれた。小学校の時、父親の転勤とともに鹿児島市に移住し、その地にある六年一貫教育校の鹿児島ラ・サール中学に入学する。そして、同高校を卒業後、東京大学文科Ⅰ類（法学部）に入学し、一九七五年（昭和五〇年）、東大卒業とともに文部省に入省したのだった。

入省後の経歴は、まず、初等中等教育局教科書管理課への配属から始まり、入省翌年の一九七六年（昭和五一年）に同局教科書検定課、一九七八年（昭和五三年）一〇月に大学局高等教育計画課へと異動して、教科書検定や放送大学の創設などの仕事に携わる。そして、一九八一年（昭和五六年）四月に大臣官房総務課への異動の後、同年九月に臨時行政調査会事務局へ出向。その出向が終り総務課へ戻った後、一九八四年（昭和五九年）四月に福岡県教育委員会課長として出向し、一九八六年（昭和六一年）四月に高等教育局私学助成課課長補佐、一九八八年（昭和六三年）四月に社会教育局社会教育課課長補佐、同年七月に生涯学習局生涯学習振興課課長補佐、一九九二年七月に初等中等教育局職業教育課長の役職に就く。そして、一九九三年（平成五年）一二月に広島県教育委員会の教育長として出向し、一九九六年（平成八年）四月に高等教育局医学教育課長、一九九七年（平成九年）に生涯学習振興課長、一九九九年四月に大臣官房政策課長となった。寺脇氏が「マスコミに向けてスポークスマン的な役割を果たし」（『官僚批判』二三三頁）たのはこのポストの時代であり、「その結果、「ゆとり教育の旗振り役」といわれるようになった」（同前）のだった。

その後、二〇〇二年（平成一四年）に文部科学省の外局である文化庁の文化部長へ異動、二〇〇六年（平成一八年）四月に大臣官房広報調整官となり、同年一一月一〇日付で文部科学省を退官する。現在、京都造形芸術大学芸術学部映画学科教授として教鞭を執る一方、在日韓国・朝鮮人の子供を対象にした中高一貫のインターナショナルスクールであるコリア国際学園理事の役職も果たしている。

映画評論家としても知られる寺脇氏は文才に長けていることもあって、官僚時代から多くの書物を著しており、単著だけでも『動き始めた教育改革　教育が変われば日本が変わる!!』（主婦の友社、一九九七年）、『21世紀へ教育は変わる

競争の時代はもうおしまい』（近代文芸社、一九九七年）、『なぜ学校に行かせるの？』（日本経済新聞社、一九九七年）、『何処へ向かう教育改革「どうなる学校」の疑問に全回答』（主婦の友社、一九九八年）、『中学生を救う30の方法』（講談社、一九九八年）、『21世紀の学校はこうなる〝ゆとり教育〟の本質はこれだ』（新潮OH！文庫、二〇〇一年）、『格差時代を生きぬく教育』（ユビキタ・スタジオ、二〇〇六年）、『それでも、ゆとり教育は間違っていない』（扶桑社、二〇〇七年）、『さらばゆとり教育　学力崩壊の「戦犯」と呼ばれて』（光文社、二〇〇八年）、『官僚批判』（講談社、二〇〇八年）、『百マス計算でバカになる　常識のウソを見抜く12講座』（光文社、二〇〇九年）などがある。また、Magazine Plusで調べられるだけでも二〇〇以上の雑誌論文を寄稿しており、その他、新聞へのインタビュー記事も多数存在している。

「新聞・雑誌に掲載されたものを含めて寺脇氏のほぼすべての著作に目を通してみた」高崎経済大学教授の八木秀次氏は、「率直なところ、むしろ寺脇氏が文部科学省内の〝世論〟をリードしているのではないかという感想を抱」き、「著作を読む限り、まるで寺脇氏個人の経験や思想に基づいて今次の教育改革が行われているといった方が正確なようなのだ」との判断を下しているが（「日本の教育を牛耳る寺脇研の正体　汝、亡国の文部官僚なりや」『諸君！』平成一一年一〇月号参照し、その判断の当否は別として、恐らく、寺脇氏の活発な広報活動が無ければ「ゆとり教育」の実現は難しかったと推測されるのである。

では、「ゆとり教育」の実現に与り大きな役割を果たした寺脇氏は教育についてどのような思想の持ち主なのであろうか？　一言でそれを述べると、寺脇氏は教育に対して理想主義的な考えを有しており、「ゆとり教育」はそれを具現化する理念として捉えているのである。寺脇氏の理想主義的な一面は、日本の教育を変えるためにあえて二流官庁として揶揄される文部省へ入省したという経歴からも窺える。寺脇氏は文部省入省の動機を次のように語っている。

自分が自分らしく生きたいという欲求を、誰もが満たせるような世の中に近づくための仕事がしたい、と思うようになりました。では、その職業とは何かと考えた時に、教師というのも浮かびましたが、現場に立つよりも、マネジメントをするほうが自分には向いているような気がして、それならば文部省だと思いました。（『21世紀へ教育は変わる　競争の時代はもうおしまい』一三三頁）

また、寺脇氏は山村明義氏のインタビューで「「日本全国にいる子供を育てる」という仕事に徹するため、自らの子供は作らなかった」（『諸君！』平成一一年四月号）と答えているが、これは来るべき日露戦争において戦死することを覚

悟し、生涯独身を通した広瀬武夫中佐を彷彿させる、自らの理想に殉ずる覚悟を示す発言であると言えよう。

だが、寺脇氏は自らの理想を具現化する「ゆとり教育」が全うされるのを見ることなく文部科学省を去ることとなる。世の中の「ゆとり教育」に伴う学力低下批判を受け政府が方針転換し、「ゆとり教育」の見直しを行ったためである。具体的には、二〇〇五年（平成一七年）に中山成彬文部科学大臣が中央教育審議会に学習指導要領の見直しを指示し、その指示を受けて中央教育審議会は二〇〇八年（平成二〇年）一月一七日に「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」を出し、その答申に基づき、授業時間を全体で三～六％増加させた学習指導要領が二〇一一年度（平成二三年度）から小学校で、二〇一二年度（平成二四年度）から中学校で実施されることになったのである。

ゆとり教育への批判

高い理想を掲げて実施されてきた「ゆとり教育」は、一方で、学力低下の批判に曝される教育制度でもあった。例えば、大森不二雄著『「ゆとり教育」亡国論　学力向上の教育改革を！　現役文部官僚が直言』（ＰＨＰ研究所、二〇〇〇年）、西村和雄編『ゆとりを奪った「ゆとり教育」』（日本経済新聞社、二〇〇一年）、和田秀樹著『「ゆとり教育」から子どもをどう守るか』（講談社α文庫、二〇〇二年）、和田秀樹著『「ゆとり教育」から我が子を救う方法』（東京書籍、二〇〇二年）、小堀桂一郎編著『「ゆとり教育」が国を滅ぼす　現代版「学問のすすめ」』（小学館文庫、二〇〇二年）、西村和雄編『もうやめろ！ゆとり教育　聞いてほしい、国民の声』（日本評論社、二〇〇三年）、櫻井よしこ、宮川俊彦共著『ゆとり教育が日本を滅ぼす』（ワック、二〇〇五年）など、「ゆとり教育」を批判する数多くの図書が出版されている。これらの図書で取り上げられている「ゆとり教育」批判の論点は多岐に渡るが、最も簡潔にその論点をまとめているのが、自ら経営する塾の講師として子供との接触を持つ小浜逸郎氏による論考「歴史上最愚策「ゆとり教育」の元凶を糺す」（『週刊新潮』平成一四年四月一一日号）である。

まず小浜氏は「子供が詰め込み競争で苦しむという考えは、そもそも何の根拠もない」、「今の子供は総じて競争に苦しんでなどいない。少子化と平和とそこそこの豊さという社会的条件に支えられて、意志さえあれば大多数が高等教育を受けられる状態にある」、「年少者の自殺は、中高年の自殺が増大しているのに比べて少しも増えてなどいないから、相対的に見て減っている」というように、「ゆとり教育」の前提となる現状認識に対する批判を加えた後、次のように「ゆとり教育」の理念を支える思い込みを批判する。

「ゆとり教育」の理念は、学力をつけることや画一的な教育を受ける

ことが個性や創造力や考える力を伸ばすことと矛盾するかのような思い込みにとらわれている。およそ個性や創造力や考える力は、基礎的な訓練を十分に受けた上に初めて花開くのであって、吸収力の旺盛な低年齢の子どもには、「読み書きそろばん」をみっちり仕込むことが何よりも大切である。

学習内容を易しくすれば、わかる子どもが増えると考えるのは安易な発想で、知的刺激を少なくしてしまうのだから、脳の活性化の習慣がつかず、結局わからない子どもの率は変わらないか、または増えるのである。加えて、できる子ども、やる気のある子どもの心を腐らせてしまい、授業離れの気持ちを一層促進する。

そして、上記のような「ゆとり教育」批判の世論に押されて政府は学習指導要領の見直しを行い、寺脇氏もまた退職勧奨を迫られ、文部科学省を辞めることになったのであった。では、寺脇氏は「ゆとり教育」が誤っていたと考えているかというとそうではない。文部科学省退官後に著した『さらばゆとり教育　学力崩壊の「戦犯」と呼ばれて』（光文社、二〇〇八年）の中で寺脇氏は次のように書いている。

共通に学ぶ知識を最低限に抑え、好きなものが見つかった時点で、学ぶことを選択し、「好き」を伸ばしていくことができる。これこそまさに文化的な教育である。少なくとも、私はそう信じてきたし、いまでもこの考えに誤りはなかったと思っている。なぜなら、「ゆとり教育」こそが、いまの時代にふさわしい一種の理想教育ideal educationであるからだ。

このようにたとえ文部科学省が「ゆとり教育」の見直しを図った後であっても、「ゆとり教育」の理念そのものは誤りではないと考えており、その確信の揺るぎなさは退官後の著書全てに一貫しているのである。二〇〇七年に扶桑社から刊行された『それでも、ゆとり教育は間違っていない』もその中の一冊で、「ゆとり教育」の意義とその必要性を様々な角度から説いたアポロギアの書となっている。特に興味深いのは、この書に収められている対談の部分で、日能研代表の高木幹夫氏、「プレーパークせたがや」の理事でもある世田谷ボランティア協会の天野秀昭氏、〝ミスター総合学習〟と呼ばれる新宿区立大久保小学校教諭の善元幸夫氏、大阪府池田市から不登校生のサポートを委託され、新しい学校作りに取り組む「ＮＰＯ法人トイボックス」代表理事の白井智子氏、星槎グループ会長の宮澤保夫氏など、「ゆとり教育」現場の最前線に立つ各界の識者との対談を通じて現代の教育が抱える問題点を分かりやすく解説している。

今後、ＩＥＡの「国際数学・理科教育動向調査（ＴＩＭＳＳ）」やＰＩＳＡ（学

習到達度調査）などを始めとする各種学力調査から、「ゆとり教育」は学力向上に寄与しなかったことが一層はっきりと示されるであろう。だが、カール・ポパーが「経験的反駁は常に回避し得る」と言っているように、どれほど客観的なデータを積み上げたとしても、それをもって「ゆとり教育」の理念を決定的に反駁し去ることは難しいと考えられる。寺脇氏の著書『それでも、ゆとり教育は間違っていない』はそれを証立てる格好の実例であり、その意味で、関西大学図書館の学習用図書の一冊として備えつけられているこの書は、ディベート技術の学習教材として、学生の専攻如何にかかわらず活用することができるであろう。また、自身の実存を形作るのに多大な役割を果たした制度設計者の〝いま〟を知るためにも、「ゆとり教育世代」全てが関心を持ち得る一書であると考えられる。

最後に。前述した通り、二〇一一年度から小学校において新しい学習指導要領が実施されるので、二〇〇四年四月以降に生まれた者はいわゆる「ゆとり教育世代」ではなくなることとなる。恐らく、二〇〇四年四月以降の出生者は長じて後、自分が「ゆとり教育世代」と見做された際には、「私は〝ゆとり教育世代〟ではありません！　あんな世代の連中と一緒にしないでください!!」といった反応を示すことになるであろう。かくの如く、「ゆとり教育世代」を挟む上下の世代からの視線は極めて厳しいものになると予想される。だが、たとえ自身が「ゆとり教育世代」であることをもって理不尽な態度を示されたとしても、激昂するには及ばない。ただ、静かに次のように反問すれば良いだけの話である。「正漢字、正かなづかいという正統表記による読み書きができないあなた方もまた、〝自覚せざるゆとり教育世代〟なのではないですか？」と。

参考文献

小松夏樹著『ドキュメント　ゆとり教育崩壊』（中公新書ラクレ、二〇〇二年）

（わたべ　しんたろう・関西大学事務職員）

〔お詫びと訂正〕

書評132号（二〇〇九年秋号）での図書館資料紹介⑰「有価証券報告書」の148頁下段14行～18行に誤りがありました。お詫びして訂正します。

〔誤〕

これまでの日本的終身雇用制度を維持した方が良いのか、それとも正規雇用の流動化を図った方が良いのかどうかも判然としていない。今のところ明確なコンセンサスは得られてはおらず、例えば、

〔正〕

これまでの日本的終身雇用制度を維持した方が良いのか、それとも正規雇用の流動化を図った方が良いのか、今のところ明確なコンセンサスは得られてはおらず、そもそも理想の雇用制度なるものが存在するのかどうかも判然としていない。

二年目へ新たな風を「島根展」

～大学生で運営する産直店のメンバーとなって～

小山　玲司

大阪市淀川区三国のサンティフル三国商店街東口近くの「島根展」三国店内

はじめに

島根展とは、島根の産品を大阪・三国と新千里西町の商店街の店舗を借りて、月二回第二・四回目の水曜日に学生で運営している産直店です。第一次産品を中心に、手づくりのこんにゃくや漬物、はちみつなどの加工品も販売し、今年の二月で開店からちょうど一年が経過しました。

そもそも何故このような活動が始まったのか？私を含め何故、関西の様々な学生が集まっているのかをご紹介します。

仕掛け人は島根大学生・後藤匡彬

彼は島根大学生物資源科学部（旧農学部）二年生です。生まれも育ちも大阪で、高校卒業後しばらくは実家の酒屋を継いでいた後、縁あって島根大学に入学。それまでは島根には行ったことも無かった彼は、自動改札のない駅や人の少なさなど、大阪の街とあまりにもかけはなれている現実にとまどいを感じ、当初はしばしば大阪へ戻っていたそうです。

しかし、せっかく島根に来ているのだから、それなりの楽しみ方もしたいと考えていたところ、大学の講義で

環境保全に関わる中海の漁師さんと知り合い、親しくなりました。それをきっかけに農家とも接点を持つようになり、自宅に遊びに行くことも。初めて自宅を訪問したのにもかかわらず、おいしいお茶請けを用意して温かく迎え入れて下さった。畑に案内してもらうと、見たこともないような野菜ばかり。白菜も初めて生でかじった。衝撃の連続だった、と言います。

しかし、日々話をする中で問題点も浮き彫りになります。例えば、道路脇にある一〇〇円野菜コーナー。普通に考えれば安いし売れるはず。しかし、交通量の少なさや、周辺の住民も野菜を作っていること、もともとの量がスーパーのように多くないため、売れたとしても、金額で言えば安すぎて困難。直売所に持って行くにしても、自分で値札を貼り、運搬するには負担が大きいのです。

またJAなどに出荷をしたくても、規格内に収めると、商品になる野菜が少なすぎて最低出荷数に満たなかったり、虫食いや豊作などで出荷が出来ないことがあるのも事実です。水産でも獲れすぎても売り先がなかったり、安売りになったりと同じような問題を抱えていて、それではもったいない！少しでも役に立ちたいと思いはじめます。それでは自分が生まれ育った大阪に持って行けば人も多いし広まっていくのではないか？幸い実家に空店

島根の生産者を訪ね、「庭先集荷」する後藤の作業をみる生産者

集荷した野菜

三国店内に集荷した野菜揃えて

舗があり、売る場所もある。あとはやるしかない！と考えたのが島根展開催のきっかけだ、と本人は語っています。

島根でのメンバー集め

島根展に出荷する品物は、「庭先集荷」という形で後藤が車を運転して各農家を回り、島根展前日に集荷をしています。島根大学内では昨年「楽しまね」というサークルを立ち上げました。島根展の仕入先の農家の方々とも協力して、流通しない地元食材のカフェを開催。関西の学生との交流が出来ることも大きな魅力（メリット）なので、島根展のメンバー（集荷、バーコード貼りや、大阪訪問組など）を募集し、現地の学生の協力も促しています。

大阪での出会い

いざやってみるとお客さんの反応は上々。しかし後藤一人では手が回らなくなり、人出も要るので、アプローチしたのが関西大学。名前を聞いたことがあって、近くにあったからだとか？ＨＰなどで情報を集め、経済や流通マーケティング、地域政策など関係のありそうな教授を探し、最初は怪しまれつつも、会いに行った。そして講義で取り組みを紹介してもらえることになった。たまたまその講義を受けていた私の友人が、「何か元気な学生が島根から来て、商店街で産直をやっているみたいや。今度のぞきに行かへん？」と誘われ、私も参加しました。

私の場合、なぜ活動を続けるようになったのか

料理も好きなので、おいしいものがあるのならと友人にも薦められたのもあって行くことにしました。店内に所狭しと並べられた商品、そして賑わい。話をしている場合ではないほど大変そうなので、売り子を手伝ってみました。漬物の試食をしてみると、何ともいえぬおいしさ。野菜本来のうまみがあり、うす味。お米もあり、注文を受けてから精米をします。そこには聞いたことがない「藻塩米」。こだわりがあって、この生産者は田んぼに藻塩（あらめという海藻

２月上旬、冷たい雨の降る中、常連客と話しをしながらの豊中市新千里西町「島根展」（２店目の千里中央店）

をまぜて、海水を二日間煮詰めて作られた島根の塩)を撒いている。故にミネラルタップリのお米ができ、飼育している牛の堆肥を肥料として使っているので一層安心です。

生産者も明らかで、どれも自信をもってお薦めできる品物ばかりで、初めて売るのにも安心感がありました。一方で客寄せや大阪生まれの私が何故島根の物を売っているのだろう?決して楽でもないし……とも思いましたが、後藤のこだわりや始めたきっかけ、学生自身にもメリットがあることを聞くうちに、私にもやる気がうまれたのだと思います。

しかし、聞いたことよりも、自分でやったことの方が印象に残るのは、紛れもない事実です。一週間も経てば、あれはおいしかったけれど、売るのしんどかったなぁ~位にしか覚えていません。その内に私も就職活動が始まり、しんどいので就活と言う理由をつけて!?二カ月ほど島根展に関わらない時期もありましたが、学生時代に何かやり切りたい!人出が足りていないし、この活動を知ったからには、少しでも力にならねば……といった単純な気持ちが重なり、再度関わるようになりました。

活動を始めて約一年。まもなく卒業ですが、濃く非常に貴重な経験ができたと思っています。県庁職員の方や、教授、様々な立場の方とお会いする機会も増えました。今こうやって文章を書いているのも、良い経験。感謝しなければと思っています。

島根の生産者回りで

島根展を終えた翌日には、売れ残りがほんの数%でも品物を返しに島根へ戻ります。私たちは委託販売という形で、売り上げから手数料を頂き、ガソリン代や賃料などの経費に充てています。学生にとっても貴重な経験ができると思っていますが、大事な時間を費やし、交通費や食費もかかるので、活動支援金としてわずかですが、学生にも費用を支払っています。

月二回の開催なので関西のメンバーにとっても、二週に一度格安で島根へ行く機会となり、大阪から五~六人乗り合わせて向かうこともあります。島大生との交流だけでなく、生産者と直接話ができ、売れ行きの報告や、アドバイス、生産者から調理法やPR法を聞くことができます。毎回お茶を用意して「お上がりなさい」と誘って頂くこともあります。本当は売り切ってしまいたいのですが、少なからず、毎回ロスはでます。たくさん残ってしまった時は申し訳ない気持ちでいっぱいですが、「いいよ、これからもよろしくね!」と逆に励ましの言葉を掛けていただき、胸が熱くなったりします。

生産者に賑やかに歓迎された昨年末の島根回り

何かと忙しい時期なので、軽く挨拶だけにしようと一軒目に立ち寄った狩野さん宅。「よう来たねぇ～」と明るく迎えて頂き、お茶を出してくださいました。出雲地方では、「お茶を勧められたら二杯は飲む」というローカルルールなるものが存在するそうで、頂くうちに、お茶請けとして、たくあん漬や手づくり大福、煮物に炒め物がどんどんと出てきました。ついご飯をください！と言いたくなるような物ばかりで、朝から厚かましくもすっかりお腹いっぱいになってしまいました。その内に、近くの生産者さんも合流。いつのまにか賑やかになっていました。私たちの活動で月数万円程度ですが、収入も増え、年金生活者にはありがたい、「生きがいにして頑張ろう！」生産者の中には島根展での売り上げで「温泉旅行に行ってきた♪」と言う声も聞こえます。つい長居をしてしまいましたが、他の地域にも行かなくてはなりません。

次に向かったのは大東町という地区。年越しそばを打つので、あとで公民館においでとのこと。他の用を済ませお昼前、だしの良い香りが漂い私たちを惹きつけます。自家栽培のそばと具にはネギ、鶏肉、かやくごはん。そして地元の方がやかんと湯のみを持ってお酒を注いでくれました。やかんに日本酒、おちょこは面倒だからコップで。運転手一人を残し、お昼前から

島根での生産者会で親しく懇談

生産者に声かけて、そばの実の脱穀をする

生産者を訪ね、あれこれと話しをする筆者

宴会の！？始まりです。お酒に気をとられ、肝心の手打ちのそばは一杯しか食べられませんでしたが、美味しいお酒まで頂くことができました。

夕方には県庁や学生との会議があったので、すべてをまわることが出来ませんでしたが、後に聞いた話によると、おいしいお肉も用意してわざわざ待っていて下さった生産者さんもいらっしゃったようです。まさか自分が島根県内で、ここまでディープな経験をするとは思ってもいませんでした。ここまでとは行かなくても、毎月島根へ行く機会があるので、他のメンバーもどんどん参加して、現地の声にも耳を傾けて欲しいです。

島根展の現況

始めて一年。気になる売り上げは五〇〇万円を超えました。一度で二〇～三〇万の売り上げですが、経費等を引くと収支はトントン位で、まだまだ賃金はだせるには至っていません。ただ、給料を出すことが目的では無く、大まかに考えると、①地方の一次産業の安定した販路を作る。②商店街などに出店することで、学生の賑わいで少しでも活気づける。③学生自身の経験の場を作る。ということなどを主な目的として動いています。

昨年十月からは豊中市役所の紹介で、新千里西町商店街にも協力をいただき、二店舗目を運営しています。三国商店街と比べ、商品の売れ筋も異なる部分があり楽しいです。私がここの店長をやっていますが、消費者とのつながりを大切にすることで、顔見知りも増え、一〇時～一四時の間ですが、お蔭様で雨でも八〇組ほどのお客様がいらっしゃいます。まだまだ周知されるまで自作のご案内を配ることも必要と感じていますが、評判は上々で、益々やる気も出て来ました。

今後の課題

言うまでも無く課題は山積です。

1・初めての世代交代。新たな学生メンバーの獲得、ノウハウの継承と役割分担。

2・店内の配置やＰＯＰの工夫。いかに消費者をつなぎとめるか。

3・新たな消費者への認知度をあげる。

4・活動資金の問題

少なくとも以上四点が大きな課題であると認識しています。

課題の解決～その先には～

先ほどの四つの問題について、考えられる範囲で挙げ

たいと思います。

1・初めての世代交代。新たな学生メンバーの獲得、ノウハウの継承と役割分担

参加する学生は関西圏だけでも、延べ人数にすると四〇～五〇人はいたと思いますが、月一回は活動に参加する学生を、コアな学生とすると、一〇人未満です。そのうち私を含め、この三月に卒業を迎えるのが三名。このままでは人手不足に陥るのは明らかです。ここに問題が一つ。

1-1・何故五〇人も参加したのに、一度きりの学生が多かったのか？

1-2・四月からの展開

1の原因の一つに、「ただ売らされているだけ」という気持ちがあったからだと反省しています。当時は対応に精一杯でした。初めての学生にはきちんと役割を与え、この活動の重要性を伝えなければいけないと痛感しています。そして先輩学生からのアドバイスやフォロー、役割分担をしっかりすれば一度来た学生のリピートが増えるのではないかと考えています。

1-2・四月からはもちろん新たなメンバーが必要となります。しかし、三月に卒業で四月からでは遅いのではないか？その通りです。いまのところ私の周りで考えると、後輩やアルバイト先、友人、大学の教授に声を掛けメンバーを募っています。数は少ないですが、次代のコアメンバーとして有望です。加えて、四月に新しい学生を集めることも必須です。このために、少しずつ動き始めています。大学でのPRとサークル活動としての広報。前者は色々な大学をまわり、教授や関係者の方々とお会いしてきました。結果として、K大学でのPR活動、学生寮への掲示、O大学の新入生講義での講演などの話が浮上しています。後者は目途が立っていませんが、他大学でのビラまきも前提条件として、メンバーが集まれば、いずれはそういった形にするのも一つの案だと考えています。

生産者の名前を入れた野菜や肉厚な原木シイタケなど島根の農産物

2・店内の配置やＰＯＰの工夫。いかに消費者をつなぎとめるか

三国店での消費者から「最近工夫足りんのちゃう？最初の方より手抜きな感じがするで！」という声をいただきました。確かに、商品を並べるだけで、整頓やレイアウトにまで余裕がなかったように思えます。落ち着いて分析すると、売り上げでも三国に限って流れが悪くなっています。いかにリピーターとなっていただき、島根展のファンになっていただくか……商品のＰＲをするかで売れ行きにも変化が表れるのではないでしょうか。ただ陳列しているだけでは売れない商品なので、試食や体験談をもとに商品説明にも力をいれなければなりません。

学生が運営する「島根展」
上・三国店　下・千里中央店

3・新たな消費者への認知度をあげ、応援団を

昨年秋に千里の開店から続けていることが、手づくりの案内配りです。これはしばらく開催日程が認知されるまで続ける必要があります。三国では閉めている間にも島根の観光パンフレットや島根展の案内を貼り付けています。それは手書きですが、当初から変わっていないので、新しいものに変更し、より見やすく充実させ、毎月作り直して消費者に新鮮な印象を与え、そこからファンを獲得し、消費者による応援団なるものが出来ればと思います。

4・活動資金の問題

いまの収支はトントン。商品にはいたずらに安い価格設定はさけ、生産者に適正な利益をもたらす価格にしています。私たちも活動に必要な最低限の利益はあげなければなりませんが、販売手数料を上げて利益を増やすことは考えていません。ただ、もう少し利益をあげる必要があります。どうすればいいのでしょうか。

① 補助金の申請

② 規模の経済を生かすため、三店舗目の出店

③ 新たな事業形態への挑戦

①については、申請作業の煩わしさや負担、難易度も

あり大変ですが、入った資金で設備の導入やソフト面の充実も可能になります。しかし、依存しすぎると自立不可能な状況に陥ることも予想でき、勉強が必要です。

② 三店舗目の出店。問題は学生数です。千里のような店舗が可能になれば、固定費用がさがり、収益性の増加が見込めます。いかにメンバーを集めるか、それにかかっています。

この方法が、支出面でも容易な気がします。

③ 新たな事業形態への挑戦。難しく聞こえますが、基本は店舗が落ち着いて回るようになってからで、第一歩は店頭での実演販売です。また生産者からの要望や提案もあり、残りのメンバーがそれらを反映し、発展させてくれることを願っています。

「学生の活動はせいぜい二年」は悔しい！

現在、食に対する関心が高まっています。そして、これからは第一次産業が重要だとも囁かれています。しかし、日本に数多くある田舎（地方）に目を向けると、高齢化・収入の減少による人離れ、減反、耕作放棄地の増加で消費者の声に反比例して、生産量は減少しています。実際に生産者からも「子どもには農業・漁業をすすめない。それは売ってもお金にならないし、子どももそんな大変さを知っているから」といった意見を聞きます。

大きく話を膨らませれば、従事者が減るということは日本の食糧自給率の低下にも少なからず関係してくると思います。私たちの行っている島根展は、ご飯粒ほどの小さな小さな活動でしかありませんが、まずは少しでも従事者の家計の足しになりこの活動が広まれば、地方も元気になり、都市部の人間もおいしく安全なものを手に入れることができるようになります。ひいては、日本の底上げにもなっていくのではないか？と大きな夢と野望を抱いています。

ある方がこう言っていました。「若者、ばか者、よそ者が地域を活性化させる」

しかし、こんな声もあります。「学生の活動は続いてもせいぜい二年」せっかくの活動がそのようになるのも悔しいです。

そんなことばには負けずに「島根展」が元気な若い力の結集で様々な壁を乗り越え、これからも新しいさわやかな風を吹かせ続けてくれればと強く思っています。

私は社会に出ても、出来る限り何らかの形で島根展に関わり、元気をもらい、心温まる交流を続けていきたいと思っています。

（こやま　れいじ・関西大学経済学部二〇一〇年三月卒業）

ソーラージェネレーション
～太陽光発電が未来を救う～

●経済危機と環境危機
●太陽光の時代
●関西と太陽光発電
●持続可能な社会に向け

太田　勇次・北川　祥子
小林　悠希・高木麻衣子
田所由佳梨

第一章　経済危機と環境危機

グリーンニューディール

二〇〇八年一一月、アメリカのオバマ大統領は、経済危機への対策として「グリーンニューディール政策」を打ち出しました。これは、道路やダムなどを造る従来型の公共事業ではなく、環境対策に投資することによって、環境危機と経済危機の二つを同時に克服することを目的としています。オバマ大統領の掲げる環境対策は、太陽光発電や風力発電など再生可能エネルギーの拡大、バイオ燃料の開発、プラグイン・ハイブリッドカーの普及などを対象としています。エネルギー分野だけで一〇年間に一五〇〇億ドル（約一五兆円）の国費を投入し、五〇〇万人の雇用を生み出すことを目標にしている大きな政策です。前ブッシュ政権が「環境保全の取り組みは経済成長を妨げる」と反対していたことに対する、完全な方向転換だと言えます。

このような環境対策を推進する動きは世界中で広がってきており、景気刺激策に占める環境分野の割合は、韓国では七九％、中国で三四％、フランスで一八％に上る

と国際環境計画（ＵＮＥＰ）によって報告されています。日本においても同様に、民主党が「緑の成長戦略」を掲げ、環境対策によって経済危機を克服しようとしています。しかし、ＵＮＥＰの報告によると日本の景気刺激策に占める環境分野の割合は六％にすぎず、具体的な施策も未だ見えてきません。また、二〇〇八年末に行われた、二〇一〇年度予算の無駄を洗い出す「事業仕分」においても、いくつかの環境分野の活動予算が廃止・削減されました。いくら日本の環境関連産業に国際競争力があるからといっても、このまま放っておけば、環境対策を強力に推進するという世界の波から取り残されてしまうかもしれません。日本がこれからも環境分野でリーダーシップを発揮し、環境先進国であり続けるためにも、よりいっそう環境対策を推進することが必要なのです。そこで私たちは、日本に合った環境対策とはなにか、「日本版グリーンニューディール」を考えることにしました。

地球温暖化問題

人間の生活が豊かになり、経済活動の拡大や人口の増大が進むにつれて、環境問題も深刻化してきました。その一つに地球温暖化問題が挙げられます。地球温暖化とは、地球表面の大気や海洋の平均温度が上昇する現象のことを言います。世界の年平均気温は、一〇〇年あたり約〇・六八℃の割合で上昇しており、特に一九九〇年代半ば以降、高温となる年が多くなっています。また、日本の年平均気温は、一〇〇年あたり約一・一三℃の割合で上昇しており、他の国々と同様、特に一九九〇年代以降は高温となる年が頻出しています。

地球温暖化が進行することによって、世界では海水面の上昇や砂漠化、異常気象の増加、気候の変化、生態系の変化などが発生しています。日本に住んでいる私たちは、このような地球温暖化の脅威を感じづらい状況にあるかもしれません。しかし、近年増加傾向にある熱帯夜やゲリラ豪雨、食料価格の高騰なども地球温暖化が原因であると言われており、私たちの生活にも影響を与えているのです。

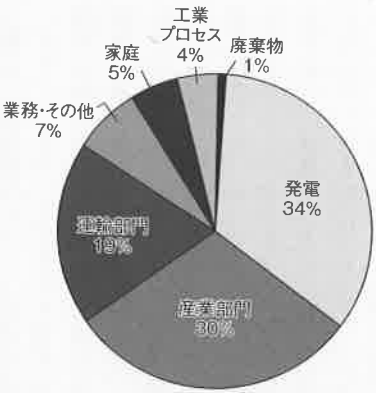
地球温暖化の主な原因は、CO_2による温室効果であると言われています。日本は年間一三億四〇〇万トンものCO_2を排出しており、この量は国民一人当たりに換算すると、世界第四位の排出量です。いつまでも日本がこのように大量のCO_2を排出し続けて良いはずがありません。地球温暖化をこれ以上進行させないためには、CO_2の削減が必要不可欠なのです。

日本のCO_2排出の現状

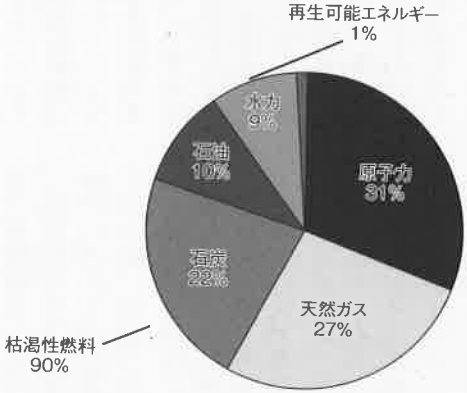
では、まずどのような部門からCO_2が排出されているのか、CO_2排出の内訳を見てみましょう。日本のCO_2排出割合のグラフ（図表1）より、発電におけるCO_2排出が三四％を占めていることが分かります。電気を作るということが、日本で最も多くのCO_2を排出する部門だったのです。

次に、発電時に使用するエネルギー源の割合を調べました。図表2より、原子力や石油といった枯渇性燃料が九〇％を占めていることが分かります。枯渇性燃料は可採年数が限られており、今後も長期間に渡って使用できるかどうかは不明確です。また、これらのほとんどは化石燃料であり、発電時に多くのCO_2を排出してしまいます。一方、枯渇せず、CO_2の排出もない再生可能エネルギーの使用割合は、わずか一％にしかすぎません。このままの発電方式は、資源枯渇問題・環境問題の両面から見て、いずれ持続不可能になってしまうのです。

そこで、再生可能エネルギーを普及させ、発電におけるCO_2を削減することが、「日本版グリーンニューディール」の主役になりえるのではないかと私たちは考えました。



図表1　日本のCO_2排出割合（2007年）
出所：環境省



図表2　発電に使用するエネルギー源の割合（2007年）
出所：環境省

第二章　太陽光の時代

再生可能エネルギーとは

最近、再生可能エネルギーという言葉をよく耳にする人も多いのではないでしょうか。再生可能エネルギーとは、自然環境の中で繰り返し起こる現象から取り出すエネルギーのことであり、太陽光・風力・水力・バイオマスなどが該当します。このような再生可能エネルギーはエネルギー源を自然環境に頼るため、不安定であるといったデメリットがあり、電力の安定的供給などの課題が残されています。しかし、再生可能エネルギーは資源を枯渇させずに利用することが可能であり、石油などの枯渇性燃料が持つ有限性への対策、地球温暖化の緩和策などに効果があると期待されています。

現在、世界では風土に合った再生可能エネルギーの利用が進んでいます。例えば、風資源に恵まれたデンマークでは、風力発電を積極的に取り入れています。その結果、国内電力の二〇％以上を風力発電で賄うようになりました。さらにデンマークは、今後二〇～三〇年間で風力発電の割合を五〇％まで引き上げるビジョンを掲げており、環境先進国として、また風車の国としてのイメージが確立されつつあります。このような、国の大規模な取り組みは、国民の環境意識向上にもつながるでしょう。

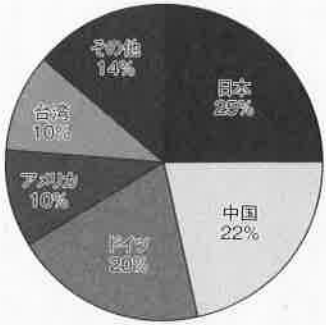
日本に向いている再生可能エネルギー

では、日本にはどの再生可能エネルギーが向いているのでしょうか。結論から言えば、私たちは太陽光発電であると考えます。

太陽光発電はこれまで使用していた火力発電などとは違い、発電時にCO_2を排出しないクリーンなエネルギーです。つまり、第一章で挙げた地球温暖化の原因となるCO_2を削減できるといったメリットがあるのです。クリーンなエネルギーと言っても、太陽光パネル生産時にはCO_2を排出してしまいます。しかし、製品の一生を通じての環境負荷を評価するライフサイクルアセスメント分析を行うと、排出したCO_2は約三年で削減できることが分かりました。太陽光パネルは平均で二〇年以上使用することができるので、最初の三年の後は大幅なCO_2削減効果となるのです。

それだけではなく、日本特有の理由もあります。日本は日照時間が年間を通じて安定しているため、太陽光発電に適した風土であると言えます。また、基本的にパネルの設置場所は屋根なので、国土の狭い日本でも十分に発電することが可能です。さらに、日本には高い技術力

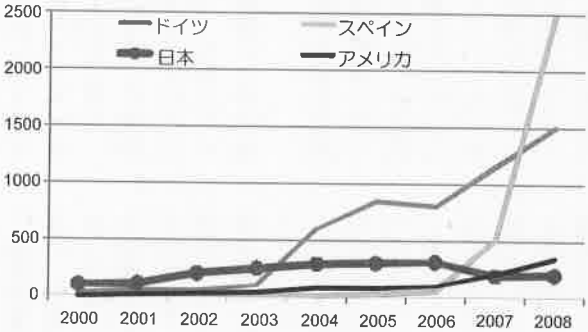
があります。図表3は世界の太陽電池生産シェアのグラフです。日本は全体の二四%を占めており、世界における日本の太陽光発電に関する技術力は高いと言えます。このように日本には太陽光発電が適していると言えるさまざまな理由があるのです。



図表3　世界の太陽電池生産割合（2007年）
出所：国際エネルギー機関（IEA）

日本の太陽光発電の現状

では、日本の太陽光発電の普及の現状はどうなっているのでしょうか。図表4は各国の太陽光発電設備の単年度導入ペースを表しています。グラフからもわかるように、二〇〇〇年台初頭は、日本の太陽光発電の導入ペースは一位でした。しかし、二〇〇四年にドイツ、二〇〇七年にスペインによって相次いで導入ペースを抜かれてしまいました。



図表4　各国の太陽光発電設備の導入ペース（単年）
出所：新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）

なぜ、日本の導入ペースは進んでいないのでしょうか。

日本の太陽光発電が普及していない理由は二つあります。まず、一つ目に導入費用が高いという問題です。例えば、家庭に平均的な太陽光パネル（三・五kWシステム）をつけるには、約二二〇万円かかってしまいます。したがって、環境に高い関心を持ち、お金に余裕がある人しか積極的に設置できないのです。二つ目は費用回収が難しいという問題です。家庭で太陽光発電を行うと、発電された電力を自家消費に使うことで、電気代の節約ができます。また、余剰電力を電

力会社に売電することによって家庭は売電利益を得ることもできます。しかし、これら二つの利益をあわせても導入費用の回収はできません。そこで、この問題を解決するために、二〇〇九年一一月一日から「固定価格買取制度」が開始されました。「固定価格買取制度」とは、電力会社に余剰電力を一〇年間、現在の買い取り価格の二倍の四八円で買い取るように義務付ける制度です。この制度によって、家庭は以前よりも多くの売電利益を得ることができるようになりました。しかし、この制度が開始されても導入費用の回収には一五年以上という長い期間がかかってしまうのです。

つまり、日本で太陽光発電が普及しない理由としては①導入費用が高いこと、②導入費用の回収に長い期間がかかってしまうことが挙げられます。これらコスト面での課題を解決することができれば日本で太陽光発電は普及するのではないでしょうか。

第三章　関西と太陽光発電

私たちが太陽光発電を推す理由はもう一つあります。それは、実は関西と太陽光発電が密接にかかわっているからです。

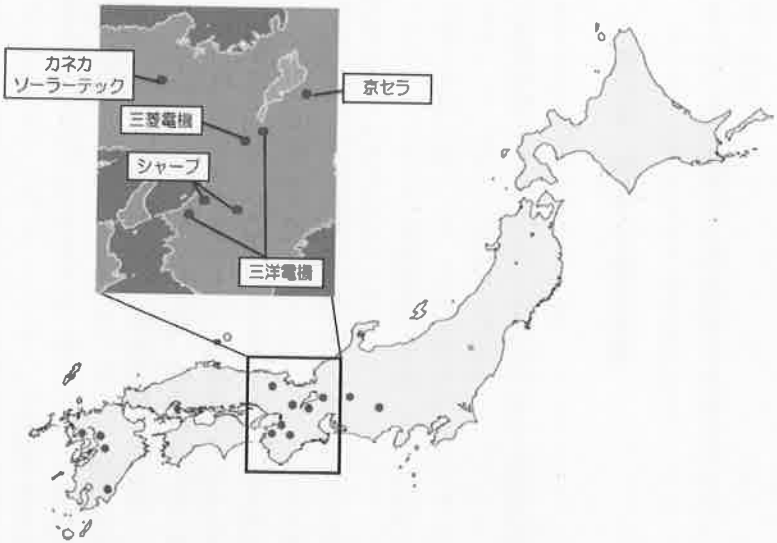
太陽電池の生産

太陽光パネルの基盤となる太陽電池を生産している国内企業の上位五社は、シャープ、京セラ、三洋電機、三菱電機、カネカソーラーテックとなっています（二〇〇九年四月分、資源総合システムより）。図表5からも分かるように、太陽電池のほとんどが関西で生産されており、その量は日本の生産量の約七割にも上ります。

また、関西では新規の工場建設や増資計画も活発化しています。シャープは太陽電池の新工場を大阪府堺市に建設し、生産を開始しました。さらに堺市は関西電力、シャープと共同で「メガソーラー発電計画」を推進しています。シャープの新工場で生産された太陽電池を使用して、堺市臨海部で大規模な太陽光発電施設を建設するというものです。発電出力は最大で二八メガワットと世界最大級の太陽光発電所となり、CO_2削減量は年間約一万トンになる見込みです。この太陽光発電所は二〇一一年三月からの操業開始が予定されています。

関西大学での研究

私たちの身近なところにも太陽光発電装置が設置されています。関西大学には凜風館の屋外フェンス、第一学舎の一号館と五号館の屋上に太陽光発電装置があり、発



図表５　日本の太陽電池生産工場所在地
出所：各社HPより作成

電された電力は学内に供給されます。場所によって設置角度が異なっており、どの角度が一番適しているのか、また、状況の悪い場所でどの程度発電できるのかなどについて研究が行われています。（図表６参照）

図表６　関西大学の太陽光発電
左上：凛風館、右上：第１学舎１号館、下：街灯型パネル

さらに、化学生命工学部では石川正司教授がキャパシタと呼ばれる蓄電装置の研究を行っています。太陽光や風力などの再生可能エネルギーは天候に左右されやすいため、電力を安定的に供給することができない課題があります。例えば、太陽光発電は太陽が出ている昼間は発電することができますが、夜間は発電することができません。現在、太陽光発電導入者は夜間の電力を電力会社から購入していますが、昼間に発電された電力の余剰分を貯めておき、夜間に使用することができれば、さらなるCO_2の削減や電気代の節約につながるでしょう。電気を貯める器具として一般的に電池がありますが、キャパシタは電池よりも素早く充電や放電ができるというメリットがあり、注目されています。しかし現在開発されているキャパシタは電気容量が小さく、広く実用化されるまでには至っていません。石川教授はキャパシタの電気容量を向上させるための研究を行っています。この研究は二〇〇九年三月に文部科学省科学技術政策研究所が行った、「政府投資が生み出した成果の調査」報告書で一〇五二件の中から「代表的成果三九事例」に選ばれました。さらに研究が進み、実用化されると、キャパシタなどの蓄電装置に関する産業の発展が期待できるでしょう。

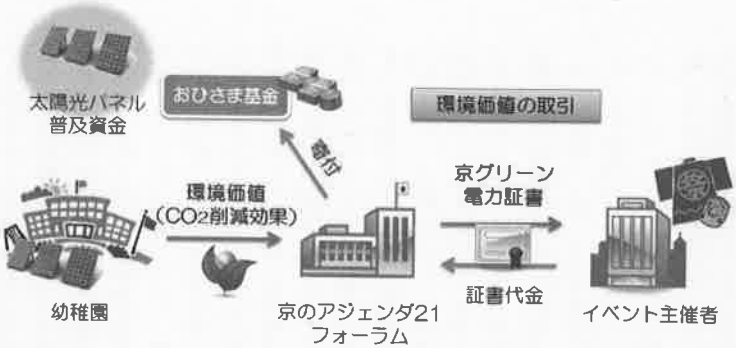
このように関西大学では太陽光パネルの設置や蓄電装置の研究が積極的に行われており、私達が太陽光発電を身近に感じるきっかけにもなっています。

京都市での取り組み

京都市では「京（みやこ）グリーン電力制度」が行われています。これは、グリーン電力証書を利用した京都市独自の制度です。

太陽光などの再生可能エネルギーを使って作られた電力は、電力そのものとしての価値だけではなく、CO_2削減効果といった「環境付加価値」があります。この環境付加価値を証書にしたものがグリーン電力証書です。

「京グリーン電力制度」では、京都市内の保育園に太陽光パネルを設置し、そこで発電された電力の環境付加価値を京のアジェンダ21フォーラムに認証してもらいます。そして、その環境付加価値を京都市内の会社やイベント主催者が「京グリーン電力証書」として購入します。二〇〇八年は六か所の保育園の太陽光発電設備で発電され、二条城のライトアップなど二八の会社やイベント主催者が「京グリーン電力証書」を購入しました。証書を購入することによって、購入者は環境に優しい電気を使って事業を行っているというアピールができます。また、証書代金は認定ＮＰＯ法人「きょうとグリーン



図表７　京グリーン電力制度の流れ
出所：京のアジェンダ21フォーラム

ファンド」の「おひさま基金」に寄付され、保育園に新たに太陽光パネルを設置するための資金となります。（図表７参照）この取り組みは、京都市内の太陽光発電設備で発電された電力を京都市内における事業活動やイベントで使っているため、再生可能エネルギーの地産地消にもつながっています。

この三つの例からも分かるように、関西には太陽光発電を普及させるためのヒントやアイディアがたくさんあります。太陽光発電が普及すれば、地盤沈下が進んでいる関西経済の復権も期待できるのではないでしょうか。

第四章　持続可能な社会に向けて

提案：ソーラーエナジー制度

第二章でも述べたように、太陽光発電を普及させるためにはまずコスト面での課題解決が必要不可欠だと考えています。そこで、この課題を解決するために「京グリーン電力制度」をもとに「ソーラーエナジー制度」を提案します。先ほど第三章で紹介した「京グリーン電力制度」では制度の対象が幼稚園とイベント会社となっていましたが、ソーラーエナジー制度では家庭と企業を対象とします。家庭には、環境価値をグリーン電力証書として販売することで、補助金やコスト回収といったメリットがあります。また企業には、グリーン電力証書を購入することによって、環境に配慮し「企業の社会的責任」（CSR）を果たしていると評価される、といったメリットがあるのです。

このソーラーエナジー制度では、企業がグリーン電力証書を購入するという前提によって成立しています。し

かし、企業は本当にグリーン電力証書を購入するのでしょうか。

近年、CSR活動を積極的に行っている企業が増加しています。CSRとは、Corporate Social Responsibilityの略で、日本語では「企業の社会的責任」と言われています。企業も社会を構成する一員であることから、持続可能な社会を構築する取り組みに積極的に参加し、責任を果たすことが求められているのです。このCSR活動の一環として、実際にグリーン電力証書を購入している企業はたくさん存在しています。（図表8参照）つまり、環境に配慮した企業であると社会に認知されるということは、企業にとって大きなメリットになっているといえるでしょう。

企業名	購入量
ソニー	3150万kWh
野村ホールディングス	590万kWh
ヤマダ電機	450万kWh
アサヒビール	330万kWh
ミクシィ	205万kWh
東京放送（TBS）	200万kWh
富士ゼロックス	170万kWh

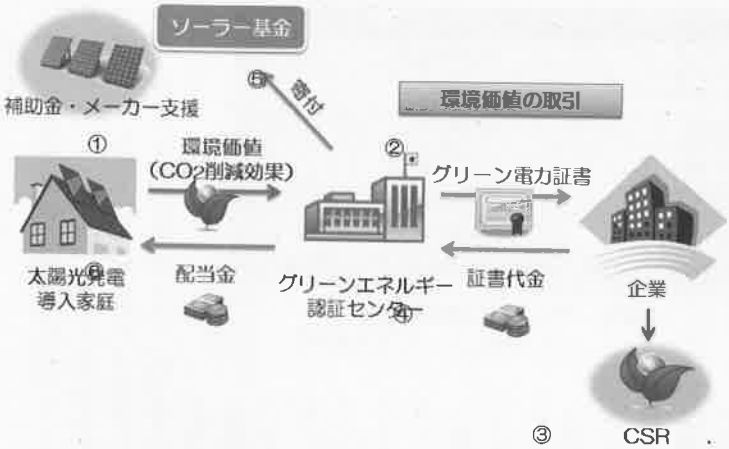
図表8　グリーン電力証書購入事例
出典：環境エネルギー政策研究所

では、次に図表9で「ソーラーエナジー制度」の流れを見ていきましょう。まず、太陽光発電で発電された電気の環境価値を「グリーンエネルギー認証センター」が認証します。次に、企業はその環境価値をグリーン電力証書として購入します。これによって、企業は社会的責任を果たしているという評価を得るのです。また、この証書代金はソーラー基金に寄付され、新たな太陽光発電の普及支援に繋がります。それだけでなく、環境価値を認証された家庭には配当金がわたされ、コストの早期回収が可能となります。企業はグリーン電力証書を購入することで、間接的に太陽光発電の普及に貢献することができるのです。

この「ソーラーエナジー制度」が開始されると、太陽光発電導入者は四つの利益を得ることができます。

- ソーラー基金による補助金
- 自家消費によって浮いた電気代
- 電力会社に売電したことによる利益
- ソーラーエナジー制度によって得られる配当金

この四つの利益によって、現在十五年かかってしまう

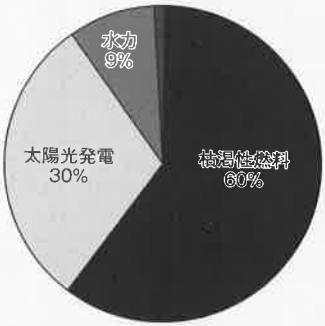


図表９　ソーラーエナジー制度の流れ

太陽光発電設備の導入費用の回収が十年以内に短縮され、コスト面の改善が期待できるのです。この私たちの提案によって太陽光発電は大きく普及するでしょう。

太陽光発電の効果～環境面～

政府は二〇二〇年までに日本における太陽光発電累積導入量を二八七〇〇ＭＷにすると掲げています。二〇〇八年までの太陽光発電累積導入量は一九一九ＭＷ（ＩＥＡ／ＰＶＰＳ二〇〇八年九月発表）でしたので、二〇〇九年から二〇二〇年までの一二年間で、これまでの一五倍もの導入を目標としていることになります。この数値からも分かるように、政府は太陽光発電を推進しています。前述の通り、現在の日本の総発電量約二億三〇〇〇万ｋＷのうち、枯渇性燃料が全体の九〇％をも占めています。（第一章図表２参照）しかし、この目標が達成されれば、太陽光発電が全体の三〇％を占めるようになります。（図表10参照）これによっ



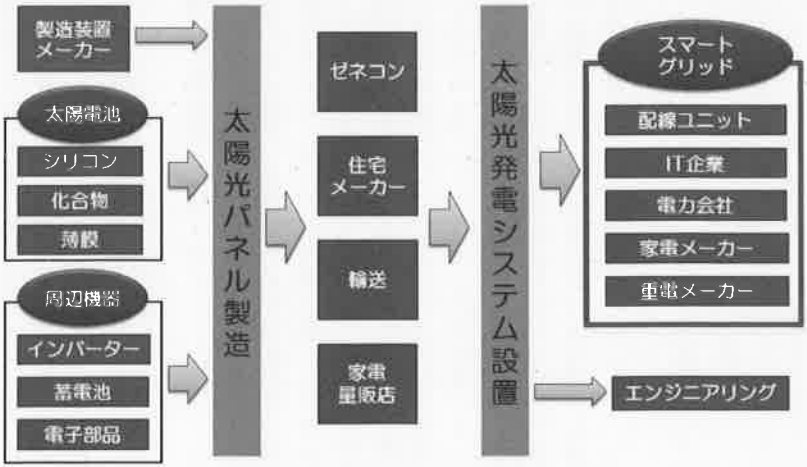
図表10　発電に使用するエネルギー源の割合（2020年目標）

て、一年間で約二〇〇〇万トンものCO_2を削減できるのです。これは、車のCO_2排出量に換算すると、約八七〇万台分と同等のCO_2削減効果となります。

太陽光発電の効果～経済面～

国内の太陽電池生産メーカー一〇社の二〇二〇年の予定生産量は、合計八五四〇MWです。これは、二〇〇八年の日本の太陽電池生産量八五四〇MWの八倍に相当します。政府と同様に、国内メーカーも太陽光発電を推進しているのです。図表11は、太陽光発電をめぐる産業構造を示しています。太陽光発電は関連産業が多いので、太陽電池メーカーが大規模な事業拡大を行えば、その効果は多くの産業に波及していきます。

そこで、私たちは二〇二〇年の太陽電池予定生産量をもとに産業連関分析を行い、太陽光発電による経済効果を試算しました。太陽電池メーカーやプラスチックメーカーへの直接効果として約九兆円の経済効果と約三七万人の雇用増加が見込めます。さらに、直接効果による所得の増加によって農業や教育などの他産業にも間接効果が生まれます。これら直接効果と間接効果を合計すると約一〇兆円の経済効果と約四九万人の雇用増加が期待できるのです。



図表11　太陽光発電をめぐる産業構造

しかし、ここの一つの問題があります。それは、太陽光発電が大規模に普及すれば、従来の送電網では対応できなくなってしまうという問題です。なぜなら、電力会社が各家庭に電気を送電するだけでなく、各家庭からも大量の電力が電力会社に送電されるようになり、電力の動きが活性化するためです。そこで、この事態に対応するために「スマートグリッド」という次世代送電網の開発が進められています。「スマートグリッド」とは、ＩＴ制御によって電力の需要と供給を管理する送電網のことであり、供給者から需要者への効率的な送電を可能にします。また、太陽光発電の天候に頼るため不安定であるというデメリットも解決してくれるのです。この「スマートグリッド」の開発にもたくさんの産業がかかわっています。例えば、ＩＴ管理機能ではGoogleが、電力管理機能では関西電力が積極的に「スマートグリッド」の研究開発を行っています。

このように太陽光発電は産業の裾野が広く、多大なる経済効果が見込めるのです。

以上のことから、私たちは太陽光発電が、環境対策によって経済成長を生む「日本版グリーンニューディール」の主役であると考えています。もちろん、経済も環境も何か一つの対策を行えば急激によくなる、といったものではありません。複雑で困難な問題を解決し、日本を持続可能な社会へと導くためには、太陽光発電だけでなく様々な取り組みの積み重ねが重要なのです。

良永ゼミからのメッセージ

今、世界は一〇〇年に一度と言われるほどの経済危機に直面しています。企業の倒産や設備投資の縮小など経済活動は停滞し、私たちの就職活動にも大きな影響を与えています。世界は、日本は、ピンチなのです。しかし、本当にピンチなのでしょうか？このピンチこそ、新しいことに挑戦するチャンスだと私たちは考えています。今こそ日本が一つになり、経済危機、そして環境危機に挑戦していくべきではないでしょうか。その舵取りを担うのは、これから社会に出て行く私たち学生なのです。その使命を受けたことを私たちは誇りに感じて、社会に出て行きたいと思います。

（おおた　ゆうじ・きたがわ　さちこ
こばやし　ゆうき・たかぎ　まいこ
たどころ　ゆかり
関西大学経済学部四年次生　良永ゼミ）

COP15コペンハーゲンの地で

――COP15に参加して――

●COP15への参加
●COP15の意義と顛末
●パレードに参加
●環境NGOの役割と意義
●エコ・ビレッジを訪ねて
●自然エネルギー大国・デンマーク
●デンマークの環境
●グリーン・ニューディールの必要性

良永康平

はじめに

関大生協及び大阪府生協組合連合会のご厚意により、今回、大阪の環境NGOであるCASAのCOP15参加メンバーに加えて頂き、昨年一二月にコペンハーゲンで開催された国連気候変動枠組条約の第一五回締約国会議(COP: Conference of the Parties)に、関大文学部の木庭教授と筆者が参加した。そこでこの小稿では、木庭先生の論考と多少重複する部分もあると思うが、その参加の顛末、感想等を報告したい。

COP15への参加

実際のCOP15は一二月七日～一八日という期間に開催されたが、われわれの行程は一二月一〇日にデンマークに向けて出発し、一二月一七日に帰国するというかなり忙しいものだった。そもそも「COPに参加するというのはどういうことか」、「政府代表団という公的立場でもなく、NGOメンバーの一端に加えてもらっただけのわれわれにできることは一体何なのか」、そんな自問をしながらCOPの会場であるベラ・センターに到着した。

まず入場ゲートではセキュリティーチェックがかなり厳しく、飛行機に搭乗する際のチェックとほとんど変わりなかった。飲料用ペットボトルは本当に飲料かどうかを、検査官の前で飲んでみせることが求められ、ベルトのバックルまで金属検査が行われる徹底ぶりだった。ある一人の女性が観光気分でこの光景を写真に撮ったところ、係官が飛んできて写真を削除することを求め、その確認がとれるまでこの女性は解放されなかった。その後に顔写真の撮影とIDカードの作成が行われたが、混み合っていたこともあり入場までに一時間半も費やしてしまった。

ようやく中に入ると、まずさまざまなブースが並んでおり、研究機関やNGOが地球温暖化を中心に環境問題の現況やら政策の資料等を展示、配布していた。ツバルのような島嶼国からも、中国・韓国などのアジア諸国からも、南米やアフリカからも、そしてもちろんEU各国からも出展があった。日本からは国立環境研究所、経済産業省、さらにNGOの気候ネットワーク、われわれが

COP会場の外で

COP会場の入り口付近で

COP15のIDカード

一員として加わったＣＡＳＡ等がブースを出していた。木庭教授が経産省の研究員に「削減義務の六％はともかくとして、どうやって一九九〇年水準まで削減する予定なのか、本音の部分を聞きたい」と食い下がっていたことが印象に残っている。

このようなブース展示やサイドイベントは重要だが、メインとなるのは各種会議である。テレビによく映し出される総会（プレナリー）や各種セッションが同時並行的に開催されたが、政府関係者以外には非公開の会議も多く、政府関係者、報道関係者、ＮＧＯ関係者という資格によって参加できる会議は制限されていた。さらに今回のＣＯＰ15では参加者が過去になく多い（約四万人）ことや、首脳級の政府要人が出席することもあって、日程の後半ではかなりの入場制限が行われ、われわれのＣＡＳＡからも五分の一のメンバーしか入場できなかった。

プレナリー会場

セッションの様子

ＣＯＰ15の意義と顛末
――危機深まる温暖化――

周知のように、一九九七年の第三回締約国会議ＣＯＰ３が京都で開催され、京都議定書が採択されてから一二年、今年のＣＯＰ15がＣＯＰ３と異なるのは、ＩＰＣＣ（気候変動に関する政府間パネル）の第四次評価報告書によって地球温暖化に関する因果関係や影響が明らかとなり、これらの科学的根拠を前提として、京都議定書以降の枠組に関する議論ができる点である。すなわち、地球の平均気温上昇が二度

を超えると、海面上昇、生態系の破壊、干ばつ・水不足といった被害が世界的に拡大すること、それを避けるために上昇を二度以内に抑え込むには、二〇五〇年には世界全体のCO_2排出量を少なくとも半減する必要があること、そして中期目標である二〇二〇年までに、先進国は一九九〇年比で二五～四〇％削減する必要があること、等が共通の前提である。しかし二年間にわたる事前の交渉で新しい議定書の採択は見送りになっていたため、COP15の議長国デンマークが目指したのは「拘束力のある政治合意」であり、これが新しい議定書の土台となるはずだった。

COP15が近づくにつれて、主要排出国が相次いで削減目標を掲げだした。まず政権交代した日本が二〇二〇年までに九〇年比で二五％、EUは二〇％（ただし他の国も削減に取り組む場合に限って三〇％）、ロシアが九〇年比で二〇～三〇％、さらに京都議定書からは脱退したままになっており削減義務のない米国が二〇〇五年比で一七％削減[1]、中国も絶対量ではないが、国内総生産あたりの排出量で二〇〇五年比四〇～四五％減[2]、そして韓国やブラジルまで削減目標を打ち出した[3]。まだまだ先進国全体では不足ではあるがCOP15に向けて弾みがつくだろうと思われたし、筆者を含め国際交渉に疎い一般の人からみれば、京都議定書で削減義務のない国まで今回削減目標を掲げたことは、明るい兆しであると感じられた。

とはいえ、インドネシアのバリで開催されたCOP13では、二〇〇九年末のCOP15を交渉の期限として、二〇一三年以降の削減目標と枠組、そしてそれに至る作業計画を検討することになっていたにもかかわらず見送りとなり、翌年ポーランドのポズナニで開かれたCOP14でも、それ以降の交渉でも何の進展もなかっただけに、コペンハーゲンでは何か決まるのだろうかという危惧はあった。なかでも当初からの先進国vs途上国という根本的な対立が依然として根深く、COP15開催前から暗い影を落としていた。すなわち、「温暖化は経済発展過程でCO_2を排出し続けた先進国の責任であり、途上国には削減義務はない。それでもなお排出削減を求めるならば、まず資金と技術を提供せよ」という途上国側の主張と、「地球環境への責任には差異があり、先進国が応分の負担を負わなくてはならないのは当然だとしても、途上国側も一定の負担をすべきだ」という先進国側の主張の対立である。

COP15が実際に開催されても事前の懸念が覆ることはなかった。「コペンハーゲン合意」と名付けられた議

長国デンマーク案は、先進国は全体で排出量を二〇五〇年までに九〇年比で八〇％以上削減するが、途上国も全体として、温暖化対策を特に取らなかった場合の排出量に対して二〇年までに削減する割合や、総排出量が減少に転じる年、といった自主的に定めた削減計画を国連に登録するといったものだった。さらには「気候基金」を創設して途上国を資金支援することも「合意」に入っていたが、途上国側はいかなる形であれ削減の義務を伴うような合意はできないとし、先進国の削減率を強化した上で京都議定書の延長を求めてきた。一方、たとえば日本は、アメリカや中国などの主要な排出国が意欲的な削減目標を約束しない限り、二五％削減という日本の目標は「合意」には盛り込まないとしていた。

こうして閣僚級会合に至るまで対立したまま時間だけが過ぎて行き、決裂を回避した妥協の産物である「コペンハーゲン合意」が承認されて閉幕した。この「合意」には、二〇五〇年の先進国全体の削減目標の記述はなく、最大のポイントだった二〇二〇年までの削減目標の義務づけも盛り込まれなかった。ただ削減目標（先進国）や削減計画（途上国）をリスト化することだけが謳われ、唯一の成果らしきものは、途上国への資金支援として二〇一二年までに一〇〇億ドル、二〇二〇年時点では年一〇〇〇億ドルを用意することが決まったことぐらいである。

このように、今年メキシコで開催される予定のＣＯＰ16に向けて、前途多難な結果となってしまったが、根本的には先進国vs途上国の対立の根深さが、資金支援という形でも乗り越えられなかったことが原因となっている。ただ、排出量全体ではアメリカを超え、世界への輸出量でもドイツを超えて世界一にならんとしている中国が、一人あたりの排出は先進国に到底及ばず、電気も来ていない家庭が存在している途上国であることを主張し、経済発展の足かせとなるような約束はできないと、

（1）一九九〇年比では四％程度であり、日本の二五％よりもかなり低く落胆するような数値である。

（2）「ＧＤＰあたりの削減」とは、「一定の経済成長をするために必要なCO_2は減らします」ということであって、高い成長を遂げればそれだけCO_2排出絶対量は増えてしまうことに変わりない。そもそも中国は、この削減数値は国情に基づく『自主行動』によるものであって、『国際的な実行義務』ではない、という立場を繰り返し強調している。

（3）韓国は何の対策も取らなかった場合に比較して三〇％の削減、ブラジルも同等の場合と比較して三六・一～三八・九％削減を打ち出している。

途上国の代表として君臨している姿が目立った。[4] 途上国といっても、高度成長を遂げつつある途上国と、離陸できずに貧困に喘いでいる途上国を一括することはできないが、もしたとえば高度成長中の中国が、一人あたりの排出量が先進国並になるまで排出を続けるとしたら、その時までに地球は「元には戻れない時点(Point of No Return)」を越えて温暖化が進んでしまうのではないか、そんな危惧を強く抱いた。中国はそれをどう考えているのだろうか。

パレードに参加

今回のCOPでNGOとしての最大のイベントは、一二月一二日に行われたパレードである。参加者は主催者側発表で九万人、警察側発表で三万人と言われているが、CASAのCOP常連参加者に拠ると五万人を下回っていることはまずないようだ。それだけ多くの市民やNGOメンバーが、市内からCOP会場であるベラ・センターまでの約六キロを三時間かけて練り歩いた。思い思いの衣装やプラカード、横断幕を掲げながら、地球温暖化問題解決の重要性を訴えていた。歌を歌いながら練り歩く団体や、劇場さながらの演技・パーフォーマンスをしながらの団体も見られた。この時期デンマークは朝九時に夜が明け、午後三時半には日没といった具合に日照時間が短く、さらに石畳の街路は特に冷え込みも厳しいが、そのハンディーを打ち消すかのように、コペンハーゲン市民の歓迎ムードのなかでパレードは熱気に溢れていた。

CASAも、「温暖化防止COP15ネットワーク関西」

日本隊のパレード

着物で参加のNGO

We need an agreement at Copenhagen.

Stay below 2℃！

の代表団約九〇名の一部としてこのパレードに参加し、手作りの白クマ帽子をかぶりながら、「Stay below 2℃」と書かれた横断幕をかざしながら練り歩いた。各自でパレードの前日にホテルで作成した紙製の白クマ帽子は、センスが良かったこともあって常に注目を集め、ＮＨＫをはじめ各国メディアの取材対象となった。着物で参加された日本のご婦人達も喝采を浴びていた。

日本隊は数万人のパレードのなかではかなり早い方のスタートだったが、後方では興奮した人々が過激な行動に走り、千名を超える逮捕者が出たとのことである。幸いわれわれはこれに巻き込まれることなく、日本市民の考えを伝え、各国のＮＧＯやコペンハーゲン市民と交流できたことは、今回最大の成果であり、意義深いものとなった。

環境ＮＧＯの役割と意義
――交渉姿勢を改めるよう環境大臣に要望する――

国際会議のなかにはＮＧＯなどの市民団体の参加を許さないものも多いが、ＣＯＰは伝統的にＮＧＯの参加を許しており、環境問題がそれだけ市民生活にも密接に関わっていることを示している。今回も、ＣＯＰ15参加四万人のうちかなりの割合を各種ＮＧＯ団体が占めていた。ではＮＧＯの役割や意義とはいったい何なのだろうか。ふだん

（4）ＣＯＰ15の会場で中国代表団が、先進国の途上国への削減圧力に対抗するために、ブラジル、南アフリカ、インドとともに新しいグループ（四カ国の頭文字を並べて「ＢＡＳＩＣ」、ただし「Ａ．Ｓ」は南アフリカを指す）を発足させたことを公表した。

日本でＮＧＯに所属していないものにとっては、何となく頭では理解しているつもりになっていても、明確でなくわかりづらい。しかしＣＯＰのような国際会議に参加して、実際のＮＧＯメンバーの動きを見ているとはっきりとしてくる。

まず第一に、政府の公報やマスコミに拠らずに、市民の立場から市民目線で情報を市民に伝達・開示するという大きな役割がある。すなわち他者の情報選択や評価を交えることなく、自分たちで体験し感じたことを直接に市民に伝えるという役割を担っている。今回参加のメンバーにも、ノートパソコンをＣＯＰ会場の各所に絶えず携帯し、目の前で起こっていることをリアルタイムでホームページに書き込んで、情報発信し続けている人達が数多く見られた。ホームページだけではなくニュースレターやメールマガジンといったサービスの提供や、パンフレット、出版物、ＤＶＤ等の刊行、さらにはセミナーやシンポジウムの開催まで行っているＮＧＯ団体も多い。[5]

第二に、市民の視線や立場からの意見や提案を政府関係者に伝達し、世界に向けても発信するという役割も担っている。今回のＣＯＰでもそれを象徴するような出来事があった。ＣＯＰでは一種の余興として、世界のＮＧＯネットワーク「気候行動ネットワーク（ＣＡＮ）」が交渉に最も消極的ないしは後退的な発言をした国に、「本日の化石賞（Fossil of the Day Awards）」を贈っている。もちろん皮肉であり、不名誉な賞である。ＣＯＰ15では一二月一四日に日本がなんとその化石賞第一位を獲得した。日本は、一部の先進国だけに温室効果ガスの削減を義務づけている京都議定書を、そのままの形で二〇一三年以降も延長するような提案は受け入れられない、主要な排出国が削減をしないのならば、日本は第二約束期間はやらない、という旨の発言をしたためである。もちろん発言の趣旨は理解できるし、その通りである。日本やＥＵだけが削減をしても、地球温暖化問題の解決にはほど遠いからである。しかし他方で、世界をリードしてゆかんとする国の発言ではないことも確かであり、それをＮＧＯから後退的と受け取られたのであろう。そして日本のＮＧＯ六団体（気候ネットワーク、ＣＡＳＡ、ＷＷＦジャパン等）が共同で、小沢環境大臣に交渉の姿勢を改め、より柔軟に対応するよう要望する手紙を出した。これこそがＮＧＯの真骨頂であり、市民を代表して、市民の声を政治家に届けているという実例である。

こうした情報の提供や、意見表明、ロビー活動の他に

も、パレードの企画・開催、さらには自然エネルギー等の分野で事業活動を行うＮＧＯ団体もある。ここまで市民活動が活発化してきたのは、一九九二年のリオ・デ・ジャネイロ（ブラジル）の地球サミットや、特に日本では一九九七年の地球温暖化防止京都会議（ＣＯＰ３）以降のことである。今回ＣＡＳＡをはじめＮＧＯ団体と行動を共にして、非常にそのレベルは高いと感じた。もちろんそこには大学教授や研究所研究員などの専門家が参加していることもあるが、一般のＮＧＯ団体の環境意識はきわめて高く、意欲的に環境の勉強をしていることも実感した。

環境対策を話し合い、実践する
エコ・ビレッジを訪ねて

せっかく環境先進国の一つであるデンマークを訪問したのであるから、ＣＯＰ会場だけではなくその他の環境施設等を見学しようというツアーが多々組まれていた。たとえば風力発電施設の洋上見学や、廃棄物発電所の見学などである。ＣＡＳＡもコペンハーゲン近郊のロスキレにあるムンクセゴーというコムーネ（市町村行政区）の見学を企画しており、さまざまな施設・設備の見学と、デンマークの環境政策に関する簡単なレクチャーが行われた。

基本的には賃貸住宅と所有住宅の住民がコムーネを作り、お互いに話し合い、また助け合いながら、環境との調和を図れるような生活を目指しているのがデンマークのエコ・ビレッジである。一九七〇年代から約四〇年の歴史があり、デンマークでは一五カ所ぐらいあるとのことだった。話を聞いていると、彼らの環境活動は、

（1）ゴミとリサイクル、（2）エネルギー利用、（3）住宅・食・交通等ライフスタイルに区分できると感じた。

まずゴミはコムーネで分別収集を行い、もう使わなくなったリユースできるような衣料品等は一部屋に集められ、必要な人がもってゆくことができるようにしていた。これは無料の常設ノミの市といった感じで、まさに共同生活の利点を活かしている。プラスティックや瓶類、紙ゴミの分別収集も、野外の大きな空間と容器によって細かく行われており、一〇数種に分別されていた。各家庭ではコンポストを設置し、生ゴミを農園等で利用する肥料にしていた。このように分別が徹底されて

（5）たとえば書籍では、気候ネットワーク編（二〇〇九）『よくわかる地球温暖化問題（新版）』中欧法規、デジタル媒体では、ＣＡＳＡ（二〇〇九）『ＣＤ-ＲＯＭ版　地球温暖化資料集二〇〇九』等がある。

ムンクセゴーの集落図

ゴミ分別収集場

コムーネでは、川の水を汲み上げ農地に回すための風車は回っていたが、それを電力にする風力発電はしていなかった。

もちろん生活全般にわたっても、余分なエネルギーや電力をなるべく使わないための様々な工夫がなされている。コムーネは駅に近いこともあり車がなくても生活はでき、ほとんどの家庭は自転車を常用しているが、いざという時のためにカーシェアリングで八～九台の車も共同所有している。街は高速道路以外の自動車用道路と歩道の間に、自転車専用道路を敷設しており、自転車を重視した設計となっている。

コムーネの住宅は、断熱のために二重ガラスは当たり前であり、さらに屋根や床下にカラス貝を敷き詰めている。カラス貝は安く、断熱性に優れ、また廃棄物の有効利用にもつながるそうで、床下には深さ七〇㎝も敷き詰めているとのことだった。驚いたのは雨水をそのまま洗濯に用いていることだった。日本では雨水をトイレや庭

いたが、分別できないような混合ゴミはなるべく減らしたいとのことだった。

またエネルギーに関しては、デンマークをはじめ欧州では一般的な、木材チップや藁などの可燃廃棄物を燃やして水を沸かし、その蒸気（スティーム）をパイプで地域巡回させる暖房が、このコムーネでも小規模ながら行われていた。さらに屋根で太陽熱を利用して水から温水を得る太陽熱温水器も取り付けられていた。ただ訪れた

木、洗車の水として用いている人はいても、洗濯に用いることはあまりない。説明に拠れば、雨水は軟水だから洗剤を多く使わなくて済み、環境への負荷も少ないそうだ。当地では水道水が硬水で泡立ちにくいという事情もあるのだろう。

コムーネには三〇エーカーの農地があり、家畜を飼ったり、農作物も栽培されていた。もちろんコムーネに住む二五〇人全体を賄うほどの規模はないが、さまざまな野菜が作られていた。デンマークでも食と環境への関心が高まっており、食生活の見直しが行われているそうだ。ここ二～三年、農業や肥料製造から排出されるCO_2が問題となり、肉や卵を少なくして、地元で採れた野菜を多く食べるような試みが学校でも行われているとのことだった。

この話を聞いて、ＩＰＣＣ（気候変動に関する政府間パネル）現議長であるラジェンドラ・パチャウリ氏の、

古着のリユース

木材チップによるスティーム暖房装置

地球温暖化の51％以上は肉が原因だ

肉食を改めるだけで地球温暖化問題はかなり解決する、という趣旨の発言を思い出した。ベジタリアンでもあるパチャウリ氏は一昨年のパリでの記者会見で、肉はCO_2を大量に排出する商品であることを述べている。後日調べた結果、一キロの肉を生産するには三六・四キロものCO_2が排出されることがわかった。そういえば、ＣＯＰ会場の近くでも右の写真のような垂れ幕が掲げられていた。

エコ・ビレッジは、もちろんそのままの形で都市生活に取り入れられるようなものでもないし、日本でも一部は行われているものも多い。しかしさまざまな環境対策を一カ所で、しかも住民が話し合いをしながら実践している試みには学ぶ点も多いと思った。

自然エネルギー大国・デンマーク

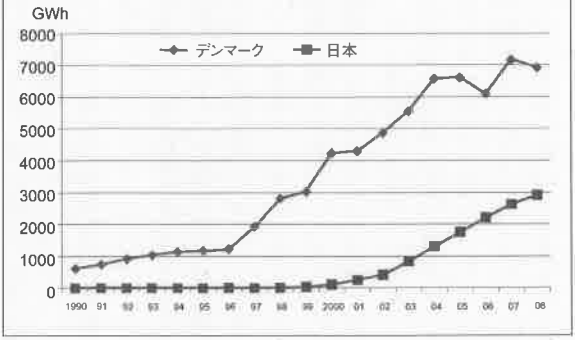
筆者は二〇〇五年にも在外研究で半年ほどヨーロッパに滞在し、たとえばオーストリアとハンガリーの国境付近や、ドイツの農山村等のあちこちでウィンドファーム（風力発電施設群）を目にした。当時もドイツ、デンマーク、スウェーデンの国境付近は、海辺に近く風が強いこともあり、かなりウィンドファームが多かったが、今回はさらに増えているのを見聞して驚いた。ＣＯＰには、コペンハーゲンでの宿泊が予約できなかったこともあり、隣のマルメ市（スウェーデン）に宿泊しつつ通うことになったが、国境を渡る長い橋の上から海を見渡すと、橋の左右に林立する風力発電機が見えた。二〇〇五年以降も増加の一途をたどっているそうで、噂には聞いていたがその景観には非常に驚きつつ、自然エネルギーにかけるデンマークの意気込みを感じた。

では実際にはどのくらいの風力発電が行われ、電力需要のどの程度を賄うまでになっているのだろうか。以下の図表は、ＣＯＰ会場で入手した最新資料やＩＥＡ（国際エネルギー機関）のエネルギー統計に基づいて計算したものである。まず図表1を見ると、デンマークは一九九〇年代後半の急激な伸びによって風力発電量が増加し、日本との差も開いたことがわかる。日本も二〇〇〇年以

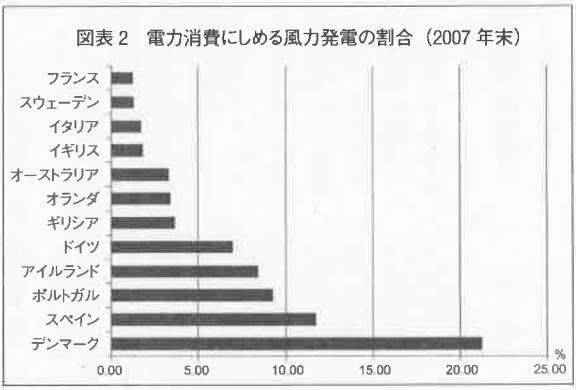
洋上ウィンドファーム

降は増加が始まってはいるが、デンマークとは依然として倍以上の格差がある。デンマークでは二〇〇四年頃までに、国内のあちこちで風力発電機が設置されたために発電量が増え、電力消費全体にしめる割合も徐々に増加していった。その結果二〇〇七年末には図表2に示すように、電力消費のうち二〇％以上が、風力発電によるものとなっており、世界で最も高い数値となっている。このような比率でみると全般的にＥＵ諸国が上位を占め、スペインやポルトガル、アイルランド、ドイツで五％を超えている。一方日本は、図表2には名前すら登場して

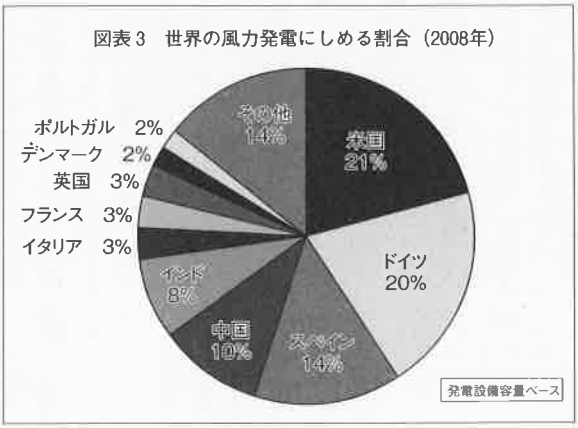
図表１　風力発電量



図表２　電力消費にしめる風力発電の割合（2007 年末）



図表３　世界の風力発電にしめる割合（2008年）



いないが、それは風力発電の割合が〇・二％ときわめて低いためである。

デンマークが風力発電大国たるゆえんは、一〇〇年以上の歴史があること、それゆえに技術的にも先行し、ヴェスタス（Vestas）社をはじめとする有名企業が世界中に輸出して、世界の風力発電機の約半分はデンマーク製と言われるまでになっていること、洋上ウィンドファームの構築にも実績があることなどにあるが、自国でも実際に導入を進め、前述の通り風力発電に二〇％以上も依存するようになっていることが大きい。しかしデンマーク企業が製造したものであっても、海外に輸出・設置されれば海外の風力発電量となる。図表3を見ると、風力発電容量で見るとアメリカ、ドイツ、スペイン、中国の順に大きく、デンマーク国内の風力発電量は九番目で、世界の風力発電総容量の僅か二％をしめるに過ぎないことがわかる。

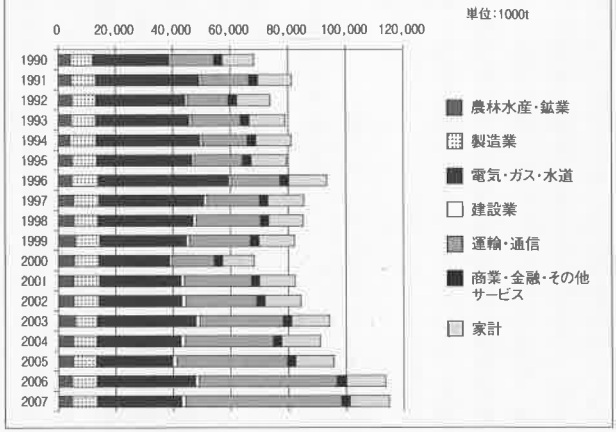
日本でも自然エネルギーを重視する欧州の事情を紹介した本が多数出されている。たとえば、松岡憲司『風力発電機とデンマーク・モデル』（新評論・二〇〇四）、ケンジ・ステファン・スズキ『デンマークという国―自然エネルギー先進国―』（合同出版・二〇〇六）、和田武『飛躍するドイツの再生可能エネルギー』（世界思想社・二〇〇八）、等である。デンマーク・モデルやエネルギー・デモクラシーといった言葉まで誕生している。また小稿では風力発電にしか触れてはいないが、デンマークではバイオガスからコジェネによって電気と温水を作るバイオマス発電や、廃棄物発電が盛んに行われており、これも再生可能エネルギーに該当する。このようにバイオマス発電が普及した理由は、デンマークが世界有数の酪農国であり、土壌汚染を防ぐために大量の家畜糞尿を保存したタンクからバイオガスが発生するからである。他に麦わらや、木屑を原料としたペレット、ブリケットもエネルギー源として有効利用されている。

デンマークの環境――増加するCO_2――

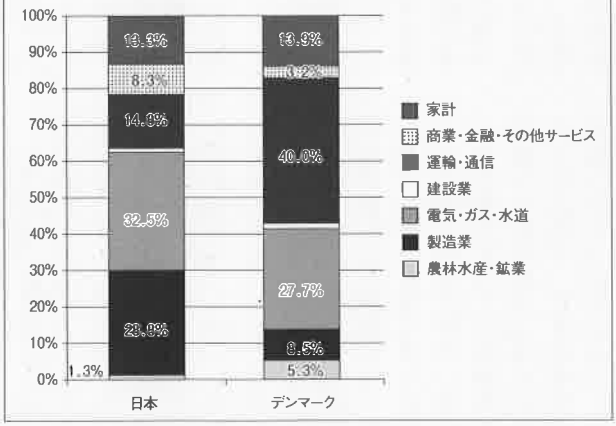
ゴミやバイオマスによる発電、林立するウィンドファームによる風力発電等を考えると、さぞかしデンマークではCO_2の排出量も減っているだろうと思わず想像してしまうことだろう。ところが実際には減ってはいない、むしろ増加しているのである。

図表4を見ると、CO_2排出総量は世紀末の一九九六年から二〇〇〇年にかけて減少傾向を示したが、その後増加傾向となっていることがわかる。全体として減少傾向を示したのは、電気・ガス・水道を生産する際に排出され

図表４　デンマークの部門別CO_2排出量



図表５　部門別二酸化炭素排出割合（2005年）



の削減も滞ってしまい、逆に運輸・通信から排出されるCO_2が急激に増加したために、全体としての増加となっている。特に二〇〇六年以降著しく増加してしまった。(6)

もちろんこのことは、風力発電の効果がなかったということを意味するものではない。化石燃料を用いて発電していたら、CO_2はさらに増加したことだろう。そもそも電気というのは、あくまでエネルギー転換によって一次エネルギーを別の形にしたものであるCO_2が減少し、徐々に増加している運輸・通信から排出されるCO_2を完全に相殺してしまったからである。これこそが風力発電によるエネルギー転換の効果である。ところがその後、図表1からも読み取れるように風力発電量が若干停滞したために、電力・ガス・水道からのCO_2排出

(6) 二〇〇五年から翌年にかけて海上輸送が一三・五％、航空輸送が一四・二％、さらに道路輸送でも六・七％サービス生産・提供額が増加している（デンマーク「実質価格産業連関表」より）。

のであって、運輸に利用されるガソリンやディーゼル燃料など電気以外のエネルギー利用を含めた総合的な検討が必要だ、ということである。

図表5は日本とデンマークの家計も含めた部門別のCO_2排出構成比を表している。国情によって大きく異なっていることがわかるだろう。日本は製造業やエネルギー転換部門である電気・ガス・水道からの排出割合が高い。それに比べるとデンマークは、確かに風力やバイオマス発電等によって電気・ガス・水道部門の排出割合は低いが、逆に農林水産業や運輸部門の排出割合が異常に高くなっている。[7] 市民生活には日本よりも自転車が多用されてはいるが、国全体としてさらなるモーダルシフト等を検討してゆく必要があるのだろう。

結びにかえて
――グリーン・ニューディールの必要性――

COP15は、すでに述べたように期待された結果を出せず、残念な結末となってしまった。先送りした検討事項や懸念材料も多過ぎる。今後も世界情勢や国際交渉のゆくえは目が離せない。それとともに、日本も着々とCO_2の排出削減を進めなくてはならない。残念ながら、京都議定書の公約である一九九〇年比でマイナス六%の削減も果たせそうにない状況である。これでは途上国に排出削減を呼びかける際にも説得力がない。日本は環境技術大国で、エネルギー効率も高く、これ以上の削減は「乾いた雑巾を絞るに等しい」と言い訳したところで、すでにしている国際公約も守れないような国の言うことを誰が聞き入れるだろうか。自ら襟を正すことが必要である。

いま日本に必要なことは、まずはどうやって京都議定書の公約を達成し、その上で二〇二〇年までに一九九〇年比で二五%もの削減を行うのか、その道筋を考えることだろう。もちろん環境税や排出権取引といった経済的手段の導入は必要不可欠であるし、環境関連の技術開発も重要である。その上でさらにデンマークのように、再生可能エネルギーを本格的に導入することがますます必要となって来ている。それは温暖化問題の懸念とともに、ピークオイルを近々越える予想がされており、資源枯渇問題もまた間違いなく深刻化してくるからである。

そして今、世界はまさに不況のどん底にあり、多くの国では眼前の景気対策に追われ、環境問題どころではなくなってしまっている感があるが、アメリカのオバマ大統領は、就任早々「グリーン・ニューディール」をいち早く唱え始め、焦眉の環境問題への解決を通して経済も再建しようとしている。これは一挙両得をねらう賢明な

策である。太陽光・風力発電といった再生可能エネルギーによるエネルギー転換、ＩＴ機能も併せ持った賢い電線網（スマート・グリッド）、ハイブリッド車や電気自動車といった環境の改善に繋がる技術の普及によって、経済の活性化と景気の回復も目指している。先進的な環境技術を持っている日本も同様に、掛け声だけではなくもっと積極的にグリーン経済の構築に邁進すべき時である。

環境問題には、常にNIMBY（ニンビー）（Not in my Backyard）という消極的な姿勢がつきまとう。「大事なのはわかるが、うちの裏庭ではやらないで！」という意味である。地球温暖化問題の文脈で言えば、「重要なのはわかるけど、私一人が犠牲になるのは嫌よ！」、もう少し具体的に言うならば、「自国の経済発展を犠牲にしてまで温暖化対策は取りたくない！」といった意味になるだろう。このような姿勢が蔓延した状況を打ち破るには、環境こそが価値を生む、すなわち環境対策が新たな経済発展の基盤となることを、日本が身をもって示すしかないのではないか、その意味でも日本はグリーン・ニューディールにいち早く着手して、その成功を世界に示すことが重要なのではないか。暗礁に乗り上げたＣＯＰ15に参加して、そんなことを考えながら日本に帰国した。

最後に、二〇〇九年に刊行された以下の書物を参考文献として推薦したい。

村沢義久『日本経済の勝ち方　太陽エネルギー革命』文春新書
三橋規宏『グリーン・リカバリー』日本経済新聞出版社
佐和隆光『グリーン資本主義――グローバル「危機」克服の条件』岩波新書

（よしなが　こうへい・関西大学経済学部教授）

（7）因みに国内生産額に占める運輸サービスの割合は日本が四・三％であるのに対してデンマークは九・五％、農業の割合は日本が一・四％であるのに対してデンマークは二・九％である（いずれも二〇〇五年）。

COP15から見える先進国と新興国の対立と日本の温室効果ガス25%削減の可能性

木庭元晴

●はじめに　●コペンハーゲン合意とリスト
●中国の高い存在感　●日本の25%削減の実現性

はじめに

昨年一二月、デンマークの首都コペンハーゲンで開催された「気候変動に関する国際連合枠組条約[1]第15回締約国会議」COP15[2]の催しにNGOの一員として参加した。この参加に関わる顛末は行動を共にした関西大学経済学部の良永康平氏の「COP15コペンハーゲンの地で――COP15に参加して――」に誌されている。この報告ではCOP15で露呈した先進国――新興国対立と、吾々日本人に最も関心がある日本の25%削減の可能性を中心に示したい。

一　コペンハーゲン合意とリスト

(1)　コペンハーゲン合意まで

COP3は京都で一九九七年に開催され、温室効果ガス[3]の削減目標を定める「京都議定書」が採択されている。これには先進国の削減義務だけが定められており、これに対する反発や国内事情もあって当時最大の排出国アメリカ合衆国が参加していないなど問題も多いのであるが、一定の役割は果たしてきた。この議定書の実行期間は二〇〇八年から二〇一二年までに限られている。それで、二〇一三年以降（略称：ポスト京都）の先進国と発展途上国の役割をCOP15で定める必要があった。

しかしながら、周知のごとく、COP15ではこの目的を達成することはできなかった。COP15の日程は一八日までで何らかの合意の実現すら危ぶまれたのであるが、一九日の午前中までかかってやっと法的拘束力も持たない次のような合意[4]が得られたのである。

長期目標：　気温上昇は2℃を越えるべきではないという科学的見地を認識。できるだけ早く排出量を減少に転じさせるために協力する。ただし、途上国が減少に転じる時期は先進国より遅くなる。

先進国の削減目標：　先進国は二〇二〇年の温室効果ガス削減目標の提示を約束する。各国の目標は二〇一〇年一月中にリスト化する。京都議定書の締約国は京都議定書によって削減目標を補強する。先進国の削減や資金支援の取り組み状況は検証される。

途上国の削減計画：　途上国は国内法などにより削減計画を実行し、二〇一〇年一月中にリスト化する。削減計画の取り組み状況は二年に一度、国連を通じて公開される。国際的な支援を受けた取り組みは、国際的に検証される。

途上国への資金支援：　二〇一〇～一二年に計三〇〇億ドルが先進国から提供される。温暖化被害対策への支援は最貧国や島国、アフリカ諸国が優先される。途上国による削減計画の実効性と透明性を確保する観点から、先進国は二〇年時点で一千億ドルの資金流通が可能になるように努力する。

このような内容に至った経緯や意味を次に簡単に示す。「COP15開幕の翌日の八日に議長国デンマークがまとめた草案が英国メディアに報じられたことから混迷が始まった。その草案は途上国に削減努力を促す内容で、途上国は一気に態度を硬化させた。交渉の継続の望みが繋がったのは、一七日のクリントン米国務長官の記者会見である[5]」。

二〇一〇年から京都議定書の期間が終わる二〇一二年までは先進国が毎年一〇〇億ドル拠出するという国連の

---

(1) United Nations Framework Convention on Climate Change, 略称：UNFCCC
(2) Conference of the Parties, COP
(3) GHG：greenhouse gasの訳
(4) 朝日新聞一二月二〇日号COP15・コペンハーゲン合意要旨
(5) 朝日新聞一二月一九日号「決裂回避を優先」

提案についてはアメリカなども受け入れてきた。日本は一六日に単独で官民あわせ総額一兆七五〇〇億円（一五〇億ドル相当）の拠出を打ち出している。先進国負担分の半額に相当する。デンマークはその後二〇二〇年までについて総額一千億ドルの支援構想を用意していた。先進国の負担割合は、国内総生産ＧＤＰと温室効果ガスの排出量を加味して算出するという。この構想に先進国の代表格アメリカが乗ったのである。クリントン氏は、資金源として「官民さまざまなもの」と述べた。資金は温暖化被害を受けやすい最貧国や島国の支援や森林保護などにあてられ、削減を着実に進めているかどうかを検証する仕組みの構築も挙げた。[6]

一七日夜、閣僚級会合で参加国代表の演説が続く中、日本など二十数カ国の主要排出国の首脳級が別の部屋に集まった。中国は、温室効果ガス排出削減の国際的検証[7]に反発していたが、このような先進国の負担表明の流れのなか、一八日には一一九カ国が集う首脳級会合の合間を縫って、温家宝首相はオバマ米大統領と会談した。世界の排出量四割を占める二大国が政治合意に向け話し合った。[8]

合意文書の原案は、一八日午前中にアメリカを含む先進国と中国・インドを含む途上国の首脳で作られた。その後、他の途上国の反発もあり、前述のように一応の形を見たのは日程を越えた翌日であった。

この合意文書では、先進国も途上国も削減努力をして、産業革命以来の気温上昇を2℃以下にするという「長期目標」が示されている。「先進国の削減計画」の後段では、アメリカを含まない京都議定書の締約国について削減目標を補強するとなっている。これは、中国が京都議定書の強化延長のみで温暖化対策を実施するよう主張し、アメリカが京都議定書への参加を拒絶したことと関連がある。「途上国の削減計画」について、国際的な支援を受けた取り組みは国際的に検証される、と表現されているのは、中国などの新興国の希望に則している。「途上国への資金支援」で、最貧国や島国、アフリカ諸国が優先される、とあるのは先進国の新興国に対する牽制である。

(2) 提出されたリスト

表1[9]に一月末までというコペンハーゲン合意に沿って提出された主要国（域）の削減目標を示す。京都議定書を批准した日本と先進的なＥＵは基準年がスタンダードの一九九〇年で高い数値を提示したのに対して、かつて議定書から離脱したアメリカ合衆国とオーストラリア

表１　温室効果ガス削減率の目標値

	削減率％	基準年など
京都議定書批准国		
欧州連合　EU	20	1992年　他国の貢献度が高い場合30％
日本	25	1992年　すべての主要国の参加が前提
離脱した国		
アメリカ合衆国	17	2005年　地球温暖化法案の年内成立困難
	4	1990年
オーストラリア	5～15	2000年
BASICグループ		
中国	40～45	2005年　GDP当たり二酸化炭素排出量
インド	20～25	
ブラジル	36.1～38.9	対策を取らなかった場合の20年時点の排出量見込み
南アフリカ	34	

朝日新聞２月３日号「ポスト京都交渉再始動」に掲載された表２を整理して示している。

は、基準年を一九九〇年に遡ることなくアメリカ合衆国については基準年を二〇〇五年とし、批准国が使う一九九〇年比で見ると約４％に過ぎない。[10]

ＢＡＳＩＣグループというのは、新興国と呼ばれる中国、インド、ブラジル、南アフリカ共和国が自ら頭文字を取って結成したものである。[11]一月二四日に各国担当相がニューデリーで集まって、今年の一一月から始まるＣＯＰ16に積極的に参加すると早くも表明した。新興国が結束した理由の一つは削減義務が課されるのを避けるためである。工業力の成長著しい新興国は、温室効果ガスの排出のこれまでの責任は先進国にあるとして、削減義務は負わないと主張してきた。しかしながら、ＣＯＰ

（６）朝日新聞一二月一八日号「ＣＯＰ15　アメリカ『先進国で年九兆円』途上国支援参加表明」

（７）先進国は、途上国に対して、国際的な支援の有無に関係なく国際的な検査を求めていた。

（８）朝日新聞一二月一九日号「決裂回避を優先」

（９）朝日新聞二月三日号「ポスト京都交渉再始動」の二つの表を整理した。

（10）朝日新聞一二月八日号「温室ガス減　世界合意は」

（11）Brasil(B), South Africa(as), India(i), China(c)。

15では、地球温暖化による海面上昇で水没を懸念している南太平洋の島国などの連合AOSIS[12]は新興国にも削減努力を迫った。それゆえ、その対策として先進国とは独立して南南支援で関係強化を図る狙いがある。

二　中国の高い存在感

(1)　BASICグループの削減率

表1のBASICグループの削減率の読み方は難しい。ここでは今や温室効果ガス排出世界第一位の中国の削減値の意味をここに述べる。[13] この目標の土台は、中国国家発展改革委員会エネルギー研究所「中国二〇五〇年低炭素発展への道」の報告書[14]にある。これには三つのシナリオが考えられており、中国の二〇二〇年目標値として表1に掲載されているのは最も実現容易な省エネシナリオである（図1）。

省エネシナリオ（GDPあたり二酸化炭素排出量を〇五年比で40～45％削減、二酸化炭素原単位-44％）を達成するには次の努力を必要とする。

- 一次エネルギー消費の15％前後を自然エネルギーや原子力に。
- 森林面積を四千万ヘクタール、森林容積量を一三億立方メートル増やす。

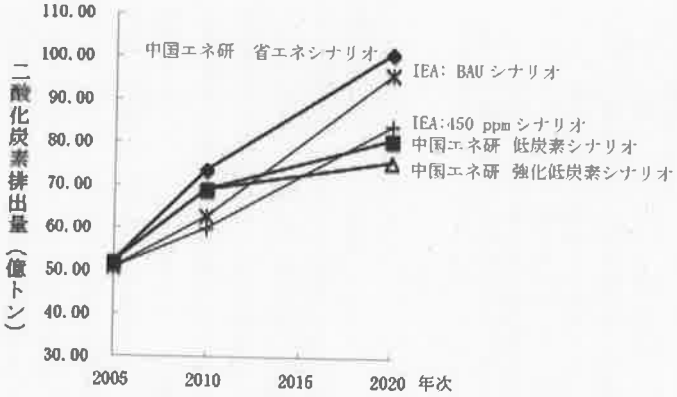


図1　複数のシナリオによる中国の排出量（エネルギー起源）

明日香・盧（2009*）から改変。

５本の折線のうち、３本は中国エネルギー研究所の計算によるもので、排出量の多いものから、省エネシナリオ（二酸化炭素原単位－44％）、低炭素シナリオ（二酸化炭素原単位－57％）、強化低炭素シナリオ（二酸化炭素原単位－60％）となる。他の２本はIEAの計算によるもので、BAUシナリオと450ppmシナリオを示している。

＊明日香壽川・盧向春、2009・12・7　中国の排出削減数値目標の見方
――中国政府発表CO_2原単位 40～45％削減をどう評価するか――ver.1.0.
http://www.cneas.tohoku.ac.jp/labs/china/asuka/chinatarget.pdf

・温暖化対策の法律や税制政策などを定め、管理・監督制度を整備する。

このような対策をしても、しない場合に比べて削減率は数％に留まるという。[15] 明日香・盧（二〇〇九）[16] に基づいて削減効果を次に見てみよう。図1に前述の中国エネ研とIEA[17]のシミュレーション結果を示す。二〇二〇年で最も高い排出量の折れ線は、中国エネ研の省エネシナリオ（二酸化炭素原単位[18]-44％）である。信じがたいことだが、二〇〇五年に比べて総排出量はほぼ二倍に増える。三つの中国エネ研のシナリオで最も優れた強化低炭素シナリオであっても一・四六倍に増える。

IEAによると中国BAU[19]シナリオ（対策なし）では九五億トン余りで、IEA450ppmシナリオを採用した場合は八四億トン（一・六六倍）になるという。IEA450ppmシナリオが中国採用の最も緩い第一のシナリオに対応しているというのであるが、IEAはこの計算結果から中国を高く評価している。

図1にみられる中国エネ研とIEAのシミュレーション結果の大きな違いは両者が想定している中国のGDP成長率に由来している。中国エネ研は二〇一〇年九・六七％、二〇二〇年8・38％、IEAは二〇一〇年、二〇二〇年のいずれも8・00％を採用しているのである。

いずれのモデルが適当であっても、世界第一位排出国

---

(12) エイオーシスAlliance of Small Island States 小島嶼国連合。

(13) 朝日新聞一二月九日号「低炭素社会へ中国台頭」

(14) 中国国家発展改革委員会エネルギー研究所 http://www.eri.org.cn/

(15) 上の記事中にあるが、東北大学の明日香寿川氏の評価。

(16) 明日香壽川・盧向春、二〇〇九・一二・七　中国の排出削減数値目標の見方――中国政府発表CO_2原単位40～45％削減をどう評価するか――ver.1.0. http://www.cneas.tohoku.ac.jp/labs/china/asuka/chinatarget.pdf

(17) International Energy Agency 国際エネルギー機関。石油を中心とするエネルギーの安全保障を目的とするOECD（経済協力開発機構）の下部機関。石油消費国側の機構で、OPEC（石油輸出国機構）に対抗する目的のもの。http://kotobank.jp/word/IEA

(18) 原単位とは製品の単位生産量に対する必要エネルギー量で生産効率を客観的に表す指標。問題なのは生産量が増加すればエネルギー使用量も増えるのに、全エネルギー使用量に占める照明などのエネルギー消費の割合が減るため、一般的にエネルギー原単位は減少してしまう。http://www5f.biglobe.ne.jp/wakannai/gentani.html

(19) Business as usualの頭文字。ある課題について特段の対策活動をしない場合の将来予測値をいう。OJI用語解説から。http://www.ecosearch.jp/pdfdata/ojss0414.pdf

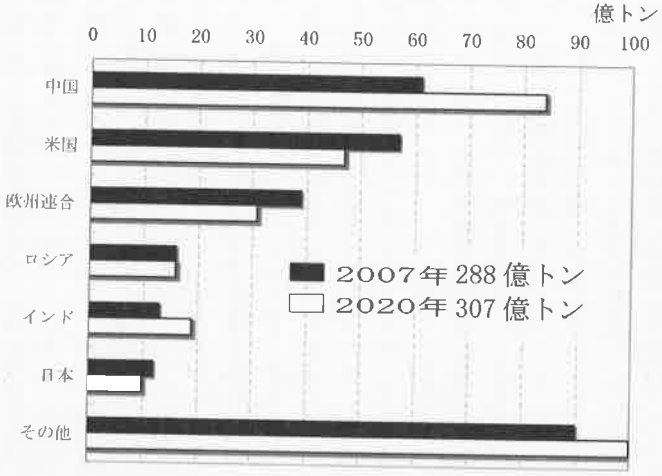


図2　主要国の2007年および2020年の二酸化炭素排出量
朝日新聞2009年11月27日号「低炭素社会への扉開くか――COP15来月開幕」から作成。

の中国が今後も激烈な勢いで排出して行くのは確実で、もしIPCCの予測モデルが適当であるなら、中国は国際的な監視や何らかの削減義務を回避するのは難しいことだろう。

図2のグラフ中には二〇〇七年現在と削減努力を進めた場合の二〇二〇年世界の二酸化炭素排出の合計値を示している。[20] この二〇二〇年の値は次の前提に基づいている。一九九〇年に比べて昇温を2℃以内に抑えるためには、IPCC第四次評価報告書[21]によると、二〇五〇年には世界全体の排出量を少なくとも半減する必要がある。その中間点である二〇二〇年までに、先進国は一九九〇年比25～40％を削減し、途上国も排出量の伸びを抑える必要があるということである。図2の中国の値は図1のIEAの450ppmシナリオに対応している。中国やインドの新興国は排出量が増大し、米国、欧州連合、日本は削減される方向が示されている。この図2には示していないが、IEAのシナリオによれば、二〇三〇年には中国は削減されインドはさらに増大する形になっている。

(2)　中国の世界シェア

中国の二酸化炭素排出量は世界第一位である。これは

石炭消費量、粗鋼生産量（日本の六・五倍）、自動車販売台数がいずれも世界第一位であるから当然の結果ではある。GDPも世界第二位の日本をすでに越えたのではという観測もある。

胡錦濤は「経済発展が最優先」とはいうが、温暖化対策をしていないかというとそうではなく、風力発電導入量（六三〇万kW）は世界の23％で第二位、太陽熱温水器導入量（八四〇〇万kW）は世界の67％で第一位、後に述べるクリーン開発メカニズムCDM（六五二件）は35％を占め世界第一位を誇るのである。詳細は世界銀行のウェブページ[22]に掲載されている。

中国は地下資源の確保のためにアフリカなど広範な開発を実施しており、国内でもハイテク技術に欠かせないレアアースの世界生産量の九割超を占めており現在の世界市場の不景気下にあって価格が多少下落しているため輸出制限をかけており、入手が懸念されている[23]。

中国の人口は世界の20％を占めている。未だ高度成長に浴している比率は高くはない。都市化、生活水準が向上してゆけば、温室効果ガスの排出は途方もなく大きいものになろう。中国は今後の地球環境の行く末を握っていると言ってもよいだろう。

三　日本の25％削減の実現性

(1)　京都議定書に関わる日本の実績

一九九二年の地球サミット以降、または京都議定書が議決された一九九七年以降、果たして温室効果ガス削減の成果は日本では見られたのであろうか。木庭（二〇〇九）[24]に掲載した図をここに再掲する（図3）。この図によれば、温室効果ガス排出量と景気動向はほぼ対応関係にある。つまり、削減努力が見えない。

昨年の一一月には、二〇〇八（平成二〇）年度の温室

(20)　朝日新聞二〇〇九年一一月二七日号「低炭素社会へ扉開くか――COP15来月七日開幕」。

(21)　http://www.data.kishou.go.jp/climate/cpdinfo/ipcc/ar4/index.html

(22)　http://web.worldbank.org/WBSITE/EXTERNAL/COUNTRIES/EASTASIAPACIFICEXT/CHINAEXTN/0,,contentMDK:21644195~pagePK:141137~piPK:141127~theSitePK:318950,00.html

(23)　朝日新聞二〇〇九年一二月二四日号「希少金属レアアース　合金の調味料　中国さじ加減」。

(24)　木庭元晴、二〇〇九　地球環境問題とは何か（第1章）『地球環境問題と社会活動』（木庭元晴編）、古今書院。

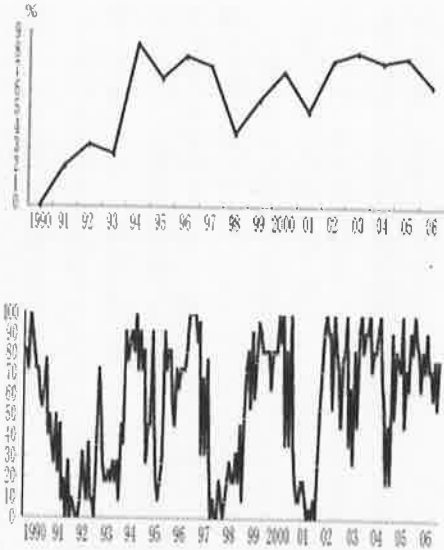


図3　温室効果ガス増加率（規準年原則1990年、上パネル）と内閣府景気動向DI一致係数の変化（下パネル）

上パネル資料：2006年度の温室効果ガス排出量（確定値*）

下パネル資料：内閣府景気動向指数結果**

なお、1990年～1992年については景気の低下傾向にかかわらず排出量が増大している。

*http://www.team-6.jp/report/news/2008/05/080516b.html
** http://www.esri.cao.go.jp/jp/stat/di/di.html

効果ガス排出量が環境省から速報[25]された。これによると、一二億八六〇〇万トン（二酸化炭素換算）であった。一九九〇年比プラス1・9％となり、前年比6・2％も減少している。これは削減努力の結果というより、「金融危機の影響による年度後半の急激な景気後退に伴う、産業部門をはじめとする各部門のエネルギー需要の減少などが挙げられる」とされる。一部の「原子力発電所利用の長期停止がなければ、総排出量は一九九〇年比で3・1％減となる」という。

京都議定書での約束は二〇〇八～二〇一二年の全五年度について、規準年比マイナス6％を実現する必要がある。排出削減努力はマイナス0・6％まで、残りの5・4％は森林吸収源対策と京都メカニズムで賄う予定である。森林吸収源対策の現状に関する情報は未だ提示されていない。

この報告には原子力発電所の稼働率が84・2％であったと仮定した場合の二酸化炭素削減値が示されている。原子力発電への期待が込められていると言えるだろう。実際の稼働率は、経済産業省のウェブサイトに公開されており、平成二〇年度の実績では60・0％（加圧水型73・7％、沸騰水型51・1％）である。[26]平成一一～一三年の間については両者で80％ほどの稼働率を記録しており、これが理想値として想定されていると考えて良いだろう。

このように京都議定書でさえも産業部門を除くと景気の悪化以外で排出削減の痕跡は認められないのである。

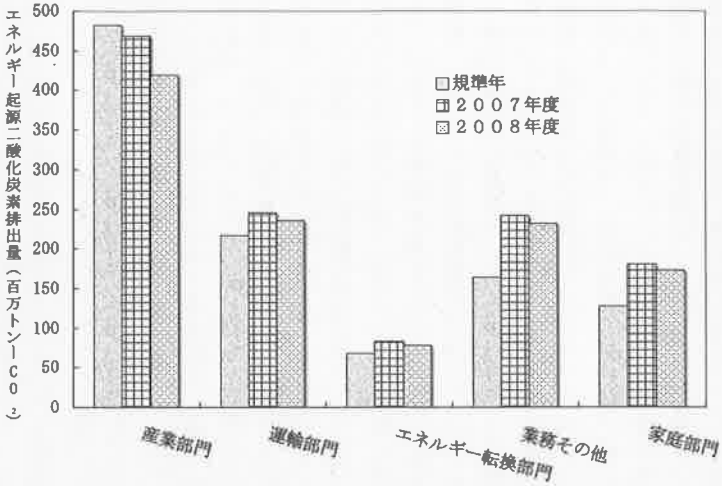


図４　日本の各部門のエネルギー起源二酸化炭素排出量内訳
環境省報道発表「2008年度の温室効果ガス排出量（速報値）について」の表２から作成
http://www.env.go.jp/press/press.php?serial=11766

(2)　温暖化基本法

日本を含めた先進国経済の斜陽化、ＢＡＳＩＣ新興国の急速な経済発展の傾向は今後ますます大きくなるだろう。その中で先進国の二酸化炭素排出量は減速方向にはある。化石燃料によるエネルギー消費は国際競争に生き残る上で重要だ。そういった状況で、25％削減を日本が選択した意義は大きい。

日本の主要一〇〇社に対する朝日新聞のアンケートの結果が一一月二九日に示されているが、賛成二五社、反対一八社、その他・無回答五七社であった。利潤追求が目的の企業であっても、日本でもそういう流れにある。

日本の各部門のエネルギー起源二酸化炭素排出量の内訳を図４に示す。各部門について、比較のため、一九九二年（規準年）、二〇〇七年度、二〇〇八年度（急激な景気の後退年）の排出量を示している。これを見ると、産業部門だけが減少傾向にある。図の右側に配置した業務その他、家庭部門の増加傾向は著しい。こういう現状だか

(25)　環境省報道発表「二〇〇八年度の温室効果ガス排出量（速報値）について」
http://www.env.go.jp/press/press.php?serial=11766

(26)　経済産業省　平成二一年一一月二六日訂正ニュースリリース「平成二〇年度の原子力発電所の設備利用率について」
http://www.meti.go.jp/press/20090417004/20090417004.pdf

ら、産業部門やエネルギー転換部門に属する日本鉄鋼連盟、日本製紙連合会、電気事業連合会などが鳩山政権に対して否定的な見解を発表してきた[27]のも当然ではある。

環境NGO「気候ネットワーク」は電力・鉄鋼を中心にした一六一の発電所・工場などに対して、強制参加の排出量取引制度が不可欠としている。二月三日には、二〇二〇年25％削減のための環境相の工程表（案）が発表された[28]。それによると、国内での削減分は15～25％となる。15％だとすると残りの10％は海外主に中国やインドからCDMなどを購入することになる[29]。家庭部門については過去全く削減努力が見られないので18～31％（二〇〇五年比だと40～49％）と大幅削減が義務づけられる。工場など削減努力をしてきた産業部門では17～24％、オフィスなど業務部門では5～21％となっている。

国民の生活に直接かかわる家庭部門の大幅削減の方法については、四～九世帯に一世帯の割での太陽光発電を普及、新車販売の半数をハイブリッド車に、大型風車を五千～一万基導入、地球温暖化対策税の導入などが挙げられている。こういった方策は比較的余裕のある社会階層に不要な消費を誘い、比較的生活の厳しい階層には消費控えを生み出す。現行のエコポイントも消費をあおる効果があり、廃棄物を増大させる。

二月九日、政府が今国会に提出する（三月上旬に閣議決定）地球温暖化対策基本法案が明らかになった[30]。この内容で最も重要な部分は、企業毎に排出量の上限を定め、過不足分を企業間で売買させる国内排出量取引制度の創設を明記していることである。実施年は二〇一二年度以降としている。

環境税の内容はいまだ明らかでないが、国民の負担は確実に上昇する。化石燃料の輸入者や採取者さらに製造業者の段階で数兆円規模の課税が予定されている。これも価格に転嫁される。この手法などを積み上げても削減効果は数％ほどでしかない[31]。未だ実現可能性は見えない。

（こばま　もとはる・関西大学文学部教授）

---

(27) 朝日新聞一二月二四日号「25％削減なんて無理　温暖化対策　鉄鋼や電力予防線」

(28) 朝日新聞二〇一〇年二月四日号「家庭排出40％削減案　温室効果ガス　〇五年比環境相提示」

(29) 京都議定書では削減目標を達成するための柔軟措置として、排出量取引 Emissions Trading、クリーン開発メカニズム CDM：Clean Development Mechanism、共同実施 JI：Joint Implementation が利用できる。

(30) 朝日新聞二月一〇日号「排出量取引一二年度以降　温暖化基本法に創設明記」、一月一八日号「温暖化基本法　低炭素時代を引っ張れ」

(31) 朝日新聞一二月三日号「環境税、くらしどうなる」

持続可能な発展（Sustainable Development）について（前編）

室山勝彦

- はじめに
- 持続可能な発展の概念
- 循環型社会
- エコロジカルフットプリント

はじめに

筆者は本学に赴任する（平成二年）以前より環境保全技術に関する講義を担当あるいは分担してきた。環境に関する問題は、今から四〇年ほど前までは公害防止技術を考えることと同義であったが、一九七〇年代から越境酸性雨の被害、廃フロンによるオゾンホールの形成、温室効果ガスの排出に伴う地球温暖化など地球環境問題のウエートが益々強くなり、講義内容について毎年のように修正が必要となった。さらに地球環境問題の解決にはＩＰＣＣなどの国際的な調査機関の役割、京都で一九九七年開催された気候変動枠組条約第三回締約国会議（ＣＯＰ３）のような国際間の会議、などが地球環境問題の解決、各国の取り組みの意義づけや方向付けに極めて重要な役割を果たすようになっている。これは地球環境問題の広がりと深刻化がもはや個人の努力などでは解決できないレベルにあることを意味している。

日本国内では、環境省が毎年改訂して発行している「環境白書」（環境白書、循環型社会白書、生物多様性白書）の内容が環境問題の最も充実した最新で信頼できる資料・ハンドブックとして使用できるようになっている。さらに、日本では地球環境問題の国際間の議論の深まりを受けて、「環境基本法」、「循環型社会形成基本法」等の関連法案が制定され、これらによって地球環境問題を視

野に入れたうえで、人間社会への直接的な影響だけでなく、広く生態系の保護までに配慮した環境対策の方向が決まったといえる。加えて今後の環境対策の方向が「循環型社会」、「低炭素社会」、さらに将来の社会モデルとして提案された「自然共生社会」の三つの社会モデルを軸として進むことは間違いないと思われる。ここで強調したいのは、これらの社会モデルの基調にあるのが「持続可能な発展」という概念であるということである。本稿では、私見を含めて持続可能な発展という概念を基礎において日本における環境問題の現在と未来について述べてみたい。

一　持続可能な発展の概念

「持続可能な発展（Sustainable Development）」という概念が、世界的な会議で議論されたのは一九九二年ブラジルのリオ・デジャネイロで開催された国連環境開発会議（UNCED）においてであり、その基本的なコンセプトは、環境を保全し、資源の無駄使いをさけて、貧困や疫病などを克服して、グローバリゼーションを維持しながら、各国が経済発展を目指そうとするものである。二〇〇二年に開催されたヨハネスブルグでの持続可能な発展に関するサミットにおいてもその方向性は変わっていない。日本語の訳語に関してDevelopmentを「開発」と訳す向きもあるが、開発には「破壊」といった負のイメージがつきまとう。一方、「発展」という訳語を当てはめると、新しい「展開」といったポジティブなイメージに結びつけることが可能なのでより適訳とは言えないだろうか。

さらに、「持続可能」という意味について考えておこう。「持続可能」ということは結論から言えば「定常状態」ということである。「定常状態」とはもともと自然科学現象の用語と思われるが、相当長期に（何世代にもわたって）安定的に自然環境・生態系を、地中資源を、次世代の要求を損なわない形で受け渡しながら人類が豊かな生活を続けてゆくことを意味している。産業革命以来、工業生産力、農業生産力、交通機関の発達、利便性に富む快適な生活、先進国を中心とした経済発展、これらが達成されたのは、化石燃料による豊富なエネルギーの供給があってのことである。しかし、いまや人間の活動に伴う環境負荷が不可逆的に増大し持続的に発展できなくなる事態が生じている。中でも問題なのは、化石燃料の多消費に伴う地球の温暖化、過剰な工業生産の引き起こす地中資源の枯渇である。また、人間をもその中の一員として包含している生態系が破壊され、疲弊しているこ

とである。開発途上にある国も含めてすべてがアメリカと同じ水準の経済活動を目指したとすれば、世界の資源使用量が現在の七倍になるという。これは、経済の成長や経済の発展が資源とエネルギー利用の拡大と深く結びついているからである。

ハーマン・E・デイリー[1]は、図1に示すジョージェスク・レーゲン[2]による「エントピーの砂時計」を引用し、次のように持続可能性への警告を与えている。砂時計は閉鎖系で地球を表している。ここで砂時計はエネルギーと資源のフローに伴いエントロピーがどのように変化するかを表している。クリーンな太陽エネルギーは地球に普遍的に降り注ぎ、定常なフローを形成して自然環境や生態系を育成保護しながら仕事をし、役割を終えると宇宙空間に廃棄される。一方、黒い筋で表された流れは、人間によって引き起こされた主に化石燃料と地中資源の利用の流れを表している。これのもとは砂時計の天井に付着している地中の在庫（枯渇資源）を意味する。太陽光によるエントロピーの流れは、最終的に同じ量が宇宙空間に放出されて戻されるので砂時計の底（地球の環境）にたまり続けることはないが、地中資源の利用に伴う廃棄エントロピーは閉鎖系の地球（宇宙船地球号）から逃げることはできず地球を汚染し続ける。化石資源のフローを大きくするとストックは枯渇に向かい底にたまる汚染エントロピーがますます拡大する。このフローは太陽光のものと違ってほぼ不可逆である（化石資源のストックはおそらく古生代以来の数億年という時間の経過をかけて太陽光がエネルギー源となって形成されたが、このストックの内で容易に採掘できる部分の使用年数は数一〇〇年に過ぎない）。これは、人類活動が引き起こしている持続可能の不可能性を砂時計で模擬した例である。な

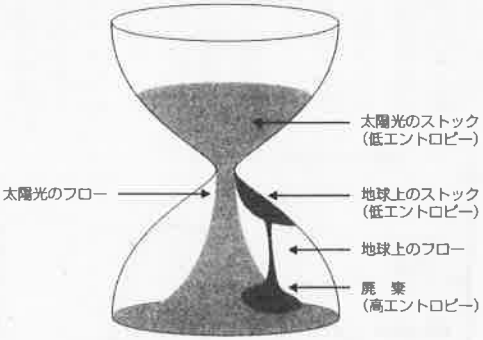


図1　エントロピーの砂時計（ジョージェスク・レーゲンによる）
ハーマン・E・デイリー著、新田他訳：持続可能な発展の経済学，みすず書房(2005)より引用

お、デイリー[1]は持続可能性に関して次の三つの原則、第一：再生可能な資源（土壌、水、森林、魚など）の消費ペースは、その再生ペースを超えてはならない、第二：化石燃料、良質鉱物資源、化石水などの再生不能資源の消費ペースは、それに代わりうる持続可能な再生可能資源が開発（太陽エネルギーなどでの置き換え）されるペースを上回ってはならない、第三：汚染の排出量は、環境の吸収能力を上回ってはならない、と提案した。

デニス・メドウズ[3]は、人類は現在、資源消費と排出で重大な限界を超えつつあることを、農地、残っている原生林、木材や石油の生産量、水中の酸素濃度、大気の温暖化ガス濃度など多くのデータをもとに、システム・ダイナミクス理論に基づいたシミュレーションによって裏付けている。唯一の成功例として「オゾン層の破壊のくい止め」をあげ、人類の英知として「行き過ぎを引き戻す能力がある」ことを強調している。持続可能でない領域に進み出している現状を様々な側面から検証しながらも、どのような引き返す方法があるか、どのような原因が行き過ぎ（オーバーシュート）と崩壊に導くか様々なシナリオについて解析した。図2にオーバーシュートの概念図を示す。仮に、人間活動が環境収容力を越えて行われたとしてもその時点では破壊に至らないが、自然資本の衰退のため、やがては人間活動が支えられなくなり、崩壊に至る可能性があることを示す。持続可能性のためには人口増加の停止（安定化）、生態系の衰退の停止と修復、資源とエネルギーのスループットの減少、後述のエコロジカル・フットプリントを減少させることの重要性を指摘している。また長期的な視野での行き過ぎを回復し持続可能性に導くための選択肢を考察している。

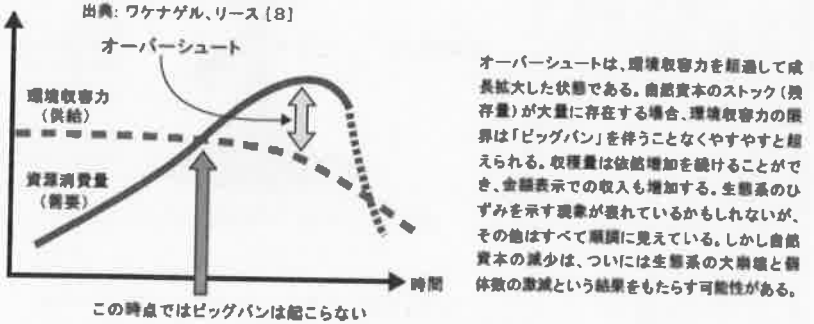


図2　オーバーシュートの概念
サステナビリティの科学的基礎に関する調査，（2006）より引用

二　循環型社会

レーゲンのモデルでは、あるいはデイリーの考え方では資源の利用量を減らしてスループットを減らすことを提唱しているが、これに対して疑義が生じる。資源の利用量を減らすことは経済発展の停滞になるかも知れない。現在日本で提唱されているのは循環型社会の構築であり、「大量生産・大量消費・大量廃棄型のエネルギーを大量消費する経済システム」を変革し、廃棄物を減らし、再利用し、資源化（マテリアル・リサイクル）し、「最適生産・最適消費・最小廃棄型の循環型社会の構築」を目指している。つまり、図1の地球の物質のフローが廃棄の下向きの流れだけでなく、廃棄の流れが地中に届く前に逆向きの流れを作り、正味の廃棄エントロピーの流れをできる限り細くすることを目指している。資源のリサイクルが増えれば、資源利用の総量は減らさなくてすむので、物質生産の経済活動を維持することが可能であり、環境負荷（廃棄物）を環境の劣化をこれ以上進ませることなく自然の回復能力が維持される範囲にとどめることが可能になるに違いない。

(1)　環境基本法から循環型社会基本法へ

我が国では一九七〇年代以降国際的な枠組みで議論が進められてきたフロン問題や温暖化など地球環境問題への対応を考慮し、公害対策基本法に替わって環境基本法（一九九三）を定めた。次いで環境基本計画（一九九四）によって環境負荷を監視しながら計画的に環境負荷削減を達成する仕組みを作り、実効ある環境負荷削減に向かって先進国の中でも類を見ない環境立国への道を進めている。すなわち「循環型社会形成推進基本法（循環型社会基本法）」（二〇〇一）を定め、「循環型社会形成推進基本法」をサポートする一連の法的仕組み、廃棄物処理法（H15・12改正）、資源有効利用促進法（H13・4全面改正）、容器包装リサイクル法（H12・4）、家電リサイクル法（H13・4）、建設リサイクル法（H14・5）、食品リサイクル法（H13・5）、自動車リサイクル法（H15・1）、グリーン購入法（H12・5）、と矢継ぎ早に制定した。また「循環型社会推進基本計画」（H15・3）が施行され、環境負荷の低減の実効状態を点検し見直す仕組みが作られた。

図3に循環型社会の資源リサイクルのフロー[4]を示す。循環型社会の構築に当たっては、第一に原材料の効率的利用などによる廃棄物の発生抑制（Reduce）第二に使用

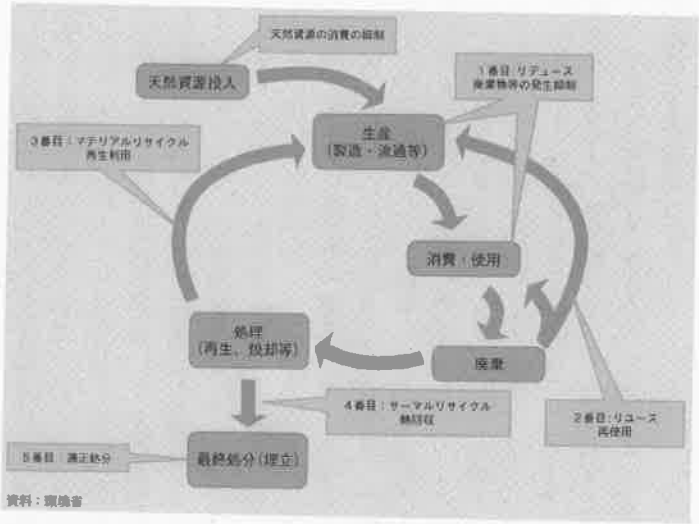


図３　循環型社会の姿[4]

済み製品またはその中から取り出された部品などの再利用（Reuse）、第三に使用済み製品の構成部分などを分解して原材料として再生利用する（Material Recycle）、のいわゆる〝3R〟が大事である。さらに第四に環境への負荷がさらに増加するなどの理由でこれらの方法を適用するのが不適切な場合、エネルギーとして利用する（Retrieve energy, またはThermal recycle）等の方法を採用する。また第五に、最終的に再生利用が不可能になった焼却残さなどに関しては安全な最終処分（埋立）（Reasonable management, またはRight disposal）などが残される。この後の二つを加えて、〝5R〟とする場合もある。

循環型社会基本法では施策の基本として排出者責任と拡大生産者責任という次に示す二つの重要な考え方を定めています。

【排出者責任】まず排出者責任であるが、これは廃棄物の排出者がその適正処理に関する責任を負うべきであるとすることです。これは排出者が廃棄物の内容を熟知していることから、その廃棄物・リサイクル対策に責任を負うこと、例えば、事業者自身が、廃棄物の分別、資源化処理を行い、環境負荷低減に責任を負うことが当然であろう。またこれは、廃棄物による汚染に対して汚染者自

身が責任を負うという汚染者負担の原則につながるものである。

【拡大生産者責任】次に拡大生産者責任は、生産者が、その生産した製品が使用され、廃棄された後においてもその製品の適切なリユース・リサイクルや処分に一定の責任（物理的又は財政的責任）を負うとする考え方です。そうすることで、生産者自身が、その製品のライフサイクルにおいて環境負荷の少ない製品を設計製作、さらに使用中の環境負荷がすくない、使用後リサイクルしやすい製品づくりのインセンティブが持てるように誘導できるわけです。

(2) 都市鉱山について

携帯電話、パソコン、ハイテク電気製品などで使われ、廃棄される、金、銀、インジウム、タンタル等の貴金属や希少金属の我が国内の蓄積量が、世界の埋蔵量の一割を超えることが独立行政法人物質・材料研究機構、元素戦略クラスター長の原田幸明材料ラボ長によって明らかにされた。これは危惧されている将来の金属資源の利用に対して、「都市鉱山」と呼ばれるこれまでわが国内に蓄積されリサイクルの対象となる金属の量を算定し、わが国の都市鉱山は世界有数の資源国に匹敵する規模になっていることを明らかにしたものです。計算によると、金は、約六、八〇〇トンと世界の現有埋蔵量四二、〇〇〇トンの約一六%、銀は、六〇、〇〇〇トンと二二%におよび、他にもインジウム六一%、錫一一%、タンタル一〇%と世界埋蔵量の一割を超える金属が多数あることが分かった。また、他の金属でも、国別埋蔵量保有量と比較すると白金などベスト五に入る金属も多数あるとしている。

表1に日本の都市鉱山の推計[5]を示す。

表1　日本の都市鉱山規模の推計（大和総研ホームページより）

元素	日本の都市鉱山蓄積	対世界の埋蔵量	対世界の年間消費量	主要用途
バナジウム(V)	140,000t	1%	224%	特殊鋼
クロム(Cr)	16,000,000t	2%	80%	特殊鋼
コバルト(Co)	130,000t	2%	226%	二次電池、特殊鋼
ニッケル(Ni)	1,700,000t	3%	110%	特殊鋼
モリブデン(Mo)	230,000t	3%	128%	特殊鋼、触媒
タングステン(W)	57,000t	2%	78%	特殊鋼
リチウム(Li)	150,000t	4%	711%	二次電池
アンチモン(Sb)	340,000t	19%	304%	難燃助剤
タンタル(Ta)	4,400t	10%	341%	小型コンデンサ
インジウム(In)	1,700t	61%	378%	透明電極
プラチナ(Pt)	2,500t	4%	562%	自動車排ガス浄化用触媒
レアアース(RE)	300,000t	0%	244%	磁石、触媒

（出所）物質・材料研究機構「わが国の都市鉱山は世界有数の資源国に匹敵」等よりDIR作成

これらは、特殊鋼、充電池、ハイテク製品の電子部品などに使用されており、ハイテク産業の構築に不可欠な原料資材となる戦略物質でもある。日本は高度に産業が進んだためにこれらを工業製品として又は廃棄物として国内に蓄積していると言うことである。しかし、これらの金属はハイテク電気製品などが廃棄される時に基盤に実装されて廃棄される、あるいは特殊資材が生産されていたプラントが廃棄される時に廃棄物として廃棄されるため、低価格で中国などに輸出されることが問題である。これでは資源を無為に他国に売り飛ばしあるいは捨てているに等しい。再資源化について例をあげると、基盤的金属資源であるアルミニウムの廃棄物の再生は処女資源地金製造の場合の三～五％のエネルギー投入ですむのです。直ちにこれらの貴金属、希少金属資源についても鉱物からの処女資源の精製の場合に比較して、低エネルギーで、また環境負荷が少ない方法で、再生資源化するプロセスを構築する必要があります。

(3) エコタウンプラン[6]

平成九年より地域の産業蓄積を活かした環境産業の振興を通じた地域振興と、地域の独自性を踏まえた廃棄物の発生抑制・リサイクルの推進を通じた資源循環型経済社会の構築を目的にモデル事業としてのエコタウンプランの提案に支援が行われてきました。平成一九年までに全国二六カ所で事業が展開されました。エコタウンプランの目的は、都市において廃棄物量の増大と処理費用の上昇に対する対策として、資源循環型社会の構築を目指す指標である「ゼロ・エミッション構想」の推進を掲げて個々の地域の特性を生かして、環境産業の振興、地域独自の廃棄物抑制、再資源化、再生利用等による減量化及び資源の有効利用を推進してゆくことにあります。広域行政主体としての地方公共団体が「エコタウンプラン（環境と調和したまちづくり計画）」を策定した場合に助成措置をとって事業を促進する仕組みがとられています。さらに、「隣接エコタウン地域同士の連係による資源循環からさらに全国の各地域が連携した資源循環」へと段階的に進むよう支援が進められています。こういった問題では環境ＮＧＯなど民間団体の活力や地方行政の積極さの度合いと環境政策立案能力が問われています。

(4) ゼロ・エミッションの追求[7]

ゼロエミッション（Zero emission）とは国連大学が一九九四年に提唱したゼロエミッション研究構想（Zero Emission Research Initiative＝ZERI）であるといわれ

ている。二一世紀における生産活動は、「ゼロ・エミッション」を目標に行うことが基本となる。以来ゼロ・エミッションとは廃棄物ゼロを意味する概念となり、企業・産業が環境と調和して持続的に生産活動を行う基本概念となった。理論的な意味でのゼロ・エミッションは、製造業など産業活動で投入される総インプット（原料など）がその産業、製造工程で完全に消化され、総アウトプット（産出物）に等しくなり、無駄な副産物や廃棄物が生じない生産システムで達成される。このような生産システムは、従来の化学生産においての無公害プロセス、製造工程において環境汚染物質を排出しない、いわゆる「クローズドシステム」にその基本的なアイデアを見出すことができる。しかしながら物理理論的には熱力学第二法則の制約によりゼロ・エミッションを完全に達成することは不可能である。

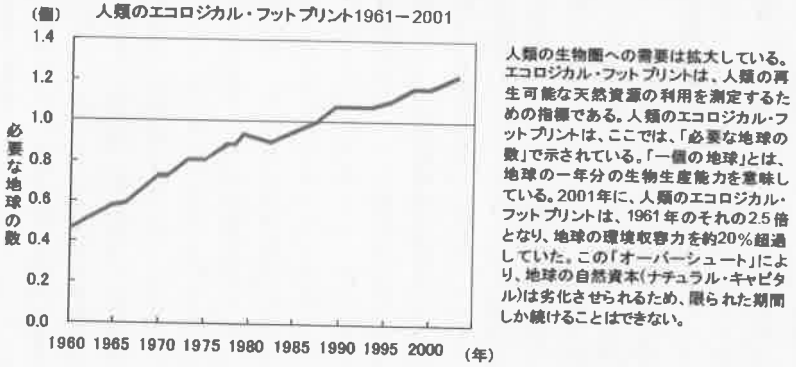
このようなシステムは、単一の企業ではなかなか成立しがたい。なぜなら、最終製品に対して原料は多種にわたり、複雑な工程の組み合わせで行われることが多く、従って、一企業での生産においてすら何種類もの副生成物や廃棄物が生じる。副生成物ごとに、また廃棄物ごとにそれらを利用する製造プロセスを新たに形成することは一企業では無理なためである。この問題を克服する方法は、複数の業種・企業、または異なる産業間で、ある企業Aから排出される廃棄物が別の企業・産業Bにとって原料となり、またその企業Bの廃棄物が産業Cの原料となるような「廃棄物（副産物）と原材料の産業連鎖（ネットワーク）」を形成することである。

ゼロ・エミッションの実行をバイオマスを利用する産業で考えてみよう。食品産業を例にとって説明する。ビールの製造は、ビール小麦を糖化して搾り、糖化液をさらに発酵させることによって行われるが、大量の搾りかすが生じる。この搾りかすは、そのままでは腐敗しやすいが、繊維質やタンパク質を含んでおり、乾燥あるいは発酵処理によって畜産用の飼料として利用できる。畜産では糞尿などの廃棄物が出るが、これをコンポストにすれば、有機肥料としてあるいは土壌改良材として農家で使用できる、または畜産廃棄物は、メタン発酵によってエネルギー資源に変換できて、農家での加熱用熱源として使用でき、発電して有効に利用する事もできる。このように、バイオマス資源の場合にはその利用の過程で排出される廃棄物を飼料、コンポスト、メタン発酵によるエネルギー化、燃焼によるエネルギー回収、等の様々な循環資源として利活用することが二酸化炭素の削減につながることが理解できる。ここで注意すべきは廃棄物の

処理で新たな環境負荷が生じないようにすべきである。例えば発酵残さ、畜産廃棄物、活性汚泥などろ過残さのようなウェットバイオマス廃棄物は含水率が八〇％程度あり、これを従来は焼却処分することが行われていたが、これでは化石燃料を助燃剤として使用するため大量の二酸化炭素の排出になる。今後はどんな廃棄物も資源と考え、その資源化処理もエネルギーの投入を抑制し、ネットでのエミッションを最小化すべきである。また、ゼロ・エミッションのネットワークはいくつもの産業にわたることによって形成できることが理解できる。

三　エコロジカルフットプリント

エコロジカル・フットプリント（Ecological Footprint: EF）に関して述べる。EFはWWF International[8]（中国、スイス、オーストラリア、米国など一〇カ国以上に事務所を有する国際的な組織）が提案した人間がどの程度環境に依存しているかを表す指標である。すなわち、あるエリア（例えば国）の経済活動の規模を、それを成り立たせる食料、資源、輸入資材や物品などの総計の準備に必要な土地や海洋の面積で評価し、これをそのエリア内の人間一人当たりの土地や海洋の「表面積（ヘクタール）」に換算して表示するもので、日本ではEF＝四・三ha／



出典：WWF Living Planet Report 2004

図4　エコロジカル・フットプリントの世界総計
サステナビリティの科学的基礎に関する調査，(2006)[11]より引用

人、世界合計（公平な割り当て面積）ではEF＝一・八ha／人と評価された。[9,10] このことは、世界中のひとびとが日本人のような暮らしをはじめたら、地球が約二・四コ必要であることを示す。米国の場合はなんとEF＝九・五ha／人、世界中のひとびとが米国人と同様な経済活動をはじめたら、地球が約五・三コ必要ということになる。図4に人類全体のEFの合計の経年変化を地球一個を一とする尺度で示す。人類全体のEF総計は一九八六年時点で地球一個の土地面積（生物生産力）に等しい状態であったが、二〇〇一年次点ではそれをすでに約二〇％超過した。さらにその延長線は上に延び続けている。

サステナビリティの科学的基礎に関して、人類社会の持続可能性に関わる気候変動、エネルギー資源、再生不能資源（鉱物資源）と廃棄物、再生可能資源（食料・土壌・水・森林）、生物多様性、環境の経済的評価などの動態についての我が国の研究者による調査結果[11]がまとめられている。これによれば、①気候変動に関しては気温の上昇、海面水位の上昇、氷河の後退、などが顕在化していることより温暖化の大半が人為的活動によるものであると結論している。②エネルギーに関しては、化石エネルギーへの依存が高く次なる基幹エネルギーへの転換が困難であること、こうした中で、今後、供給と需要の両側面からエネルギーシステムやエネルギー関連技術の革新を押し進めることが緊急の課題であるとしている。③資源利用に関して、地核存在量は膨大であっても採掘可能限界量に消費量累計が近づくと、採掘技術の向上が無い場合は枯渇が生じること。レアメタルに関しては枯渇に備えて備蓄する必要性の高いものが存在することを指摘している。また、日本は廃棄物の利用に関して、家電品・自動車など工業製品に関して世界に例を見ないような資源の循環システムを構築しつつあるが、化学物質に関しての予防的・包括的な管理システム作りが必要であることを指摘している。しかし、資源・原料・製品及び廃棄物さらには廃棄物資源化の物質循環は国境を越えて起こっていることから、グローバルな視点からの持続可能な資源・環境管理システムの構築が必要であるとした。これは「都市鉱山」の考えに継続する。④食料と水についてはかなり悲観的な見通しである。地球人口の未来予測に関しては一九九〇年の五三億人から、二〇五〇年には八九億人に、ほぼ直線的な伸びに対して、食料は現在の数倍の量が必要になるとされているが、耕地面積の伸びは期待できない。残るは分配を工夫するしかないことになる。人口増に対して水資源を確保することが困難になり、「水不足（水利用が一、〇〇〇㎥／人以下）」、「水ス

トレス水利用が一、七〇〇㎥／人以下）」に曝される国、地域が北米、中国、インド、中東地域で広がると予想される。⑤生物多様性に関しては、遺伝子・種・生態系といった三つのレベルを安定に保全することが、土壌、自然環境が、水、食料をはじめ、人間に健康で豊かな生活環境を提供するなど様々な「生態系サービス」の継続的な供給を可能にしていることをまず認識すべきである。これなしでは人類の継続的生存が不可能になることは確実である。⑥ライフサイクル環境影響評価（Life-Cycle Impact Assessment: LCIA）は人間活動によって発生しうる環境影響の評価手法として極めて有用であり、より環境負荷の少ない代替技術、代替プロセスの選択に役立つ。同手法は人類の様々な活動の地球に与える影響をより的確に捉え、より持続可能な方向への転換に対して合理的根拠を与えるものと期待される。図5に、報告書に記載された興味深い図を示す。同図では各国の一人当たりのEFは、その国の「寿命」、「教育水準」、「一人当たりの所得」から計算される人間開発指数（HDI）に対して良い相関があることを示している。日本は持続可能な国のグループから持続不可能な国のグループの輪に入りつつあるように見える。さらにEFを減らす必要がある。

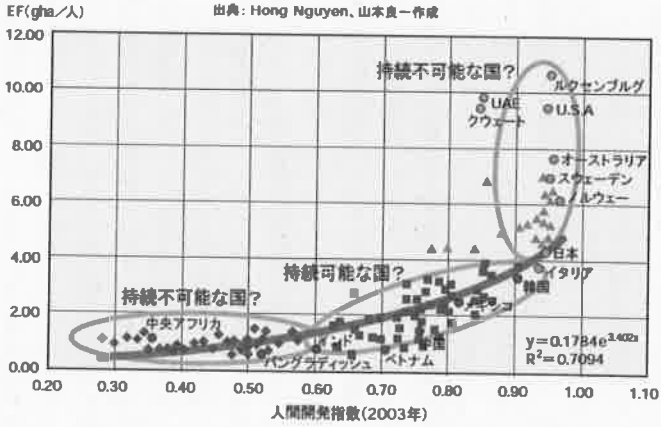


図5　エコロジカル・フットプリント(EF)と人間開発指数(HDI)の関係
サステナビリティの科学的基礎に関する調査，(2006)[11]より引用

(To be continued)

文献

[1] ハーマン・E・デイリー著、新田功他訳：持続可能な発展の経済学、みすず書房（二〇〇五）

[2] ジョージェスク・レーゲン著、高橋正立他訳：エントピー法則と経済過程、みすず書房（一九九三）

[3] デニス・メドウズ著、枝廣淳子訳：成長の限界　人類の選択、ダイヤモンド社（二〇〇五）

[4] 環境白書・循環型社会白書・生物多様性白書、http://www.env.go.jp/policy/hakusyo/ http://www.env.go.jp/policy/hakusyo/kodomo/h20/index.html

[5] http://www.dir.co.jp/souken/research/report/emg-inc/biz-model/08102001biz-model.html

[6] 経済産業省、環境省：地域におけるゼロ・エミッション構想推進のためのエコタウンプラン（環境と調和したまちづくり計画）策定要領及び承認基準等について、平成一六年三月 http://www.meti.go.jp/policy/recycle/main/3r_policy/policy/pdf/ecotown_outline.pdf

[7] 文部省科学研究費特定領域研究（#292）「ゼロエミッション」平成九年度～平成一二年度研究成果報告、ゼロエミッション総括班（一九九八）～（二〇〇一）

[8] WWF International の国際的な活動の内容はホームページ http://panda.org/ 参照

[9] ニッキー・チェンバース、クレイグ・シモンズ、マティース・ワケナゲル著 五頭美知訳：エコロジカル・フットプリントの活用 地球一コ分の暮らしへ、インターシフト（二〇〇五）

[10] マティース・ワケナゲル、ウイリアム・リース著、池田真理訳、和田喜彦著：エコロジカル・フットプリント――地球環境持続のための実践プランニング・ツール、合同出版（二〇〇四）

[11] サステナビリティの科学的基礎に関する調査プロジェクト：サステナビリティの科学的基礎に関する調査、（二〇〇六）、ホームページ http://www.sos2006.jp よりダウンロード可能

（むろやま　かつひこ・関西大学環境都市工学部教授）

茨木市の森にみる
アカマツ林・落葉広葉樹林の変遷

●はじめに
●植生景観の復元
●地籍境界と植生境界

叶（よう）　晨（しん）

（カット・槇原美奈）

はじめに

日本の現存植生は、人間活動の影響によって自然植生の破壊の結果生まれた代償植生に近いものである。人為的影響が永く及ばないと、その場の自然環境に対応した植生が卓越するようになる。それを潜在植生と呼ぶ。日本の潜在植生は主に気候の観点から大きく四種類の樹林帯に分けられるが、茨木市域は、関東地方から西日本にかけて広く分布する常緑広葉樹林帯（厳密にはヤブツバキクラス域）に属している。

茨木市（図1）周辺の潜在植生を図2に示している。市のほぼ全域がカナメモチーコジイ群落で占められる。そのほか、市域の北西縁にシキミーモミ群落、市域の南端部にはナナメノキーアラカシ群落、東端に近く南北に安威川に沿ってイロハモミジーケヤキ群落などが分布するはずとされる。しかしながら、ここで示す明治中期以降の植生については、潜在植生とはかなり異なる代償植生が形成されてきた。

ここでは江戸時代からの農山村の生業が色濃く残る明治中期（一八八九年前後）と、戦後の高度経済成長を終え、家庭や商店の燃料が炭・薪炭から石油やガスに移行し、農林業従事者から都市労働者への転換が進んだ一九八九年までの現存植生の変遷を、とくにアカマツ林と落葉広葉樹林に注目して示したい。

図１　茨木市の位置

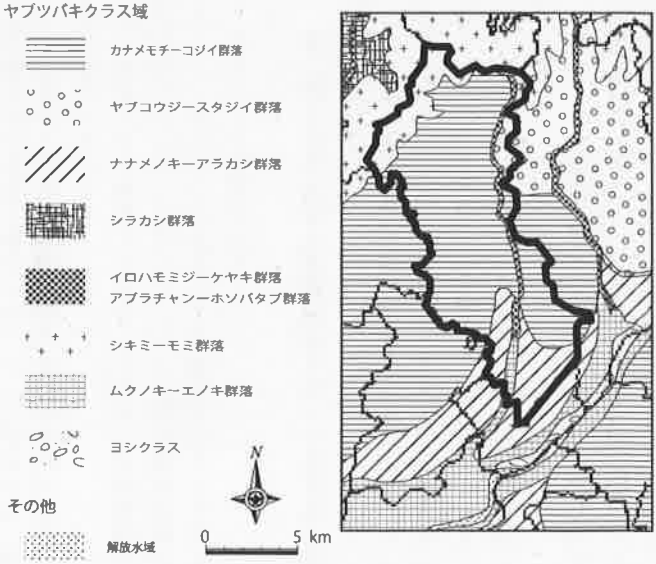


図２　茨木市の潜在植生

一　植生景観の復元

(1)　仮製地形図地類界を使った明治中期の植生

明治中期は二万分の一仮製地形図（明治二二（一八八九）年測量、「大岩村」「茨木村」の両図幅）の植生情報をもとに、当時の植生を復元した（図3a）。

茨木市域北部には山地、中部には丘陵が分布しているが、ここではアカマツ林（図3aの黒色域部）が広く分布している。小椋（二〇〇二）の京都盆地周辺の研究に基づけば、茨木市の「アカマツ林」のほぼ全域は、アカマツの低木を主としながらも、裸地、低い常緑や落葉の雑木、ススキやササなどが混生しているような植生であったと考えられる。地図の凡例によれば、アカマツのほとんどは高さ五m未満のものである。これは社会不安または管理不足によって過度に山林が破壊された状況を示している。明治中期から一九九一年まで、社会が安定してゆく過程で、アカマツ林は減少し落葉広葉樹林がひろがってきた。

北部東端の車作（くるまつくり）（図3cの「二〇〇七年植生図の範囲」付近）には、比較的広く落葉広葉樹林（濃いグレイ域）が分布する。この付近は安威川またはその支流河谷沿いに対応している。この西方の泉原や見山などにも散在している。大字で見ると、圧倒的に車作で、安本、忍頂寺にも及んでいる。この分布から、茨木市域では車作が落葉広葉樹の薪炭生産の拠点であったことがわかる。現在でもこの車作では二カ所で、里山復興運動の一環として炭焼きが行われている。

この北隣の白く表現した部分（下音羽（しもおとわ））は地形図では植生記号が示されていない。これより後の植生情報から考えると、恐らくこの時期にこの地は皆伐されて間もないと考えるのが適切であろう。

(2)　第二回自然環境保全基礎調査を使った高度経済成長期後の植生

日本全国の植生調査が過去何度か実施されている。茨木市域に関連しては、第二回自然環境保全基礎調査（植生調査）（一九七九年度現地調査）（環境庁、一九八一）の五万分の一現存植生図『京都西南部』『大阪東北部』『広根』がある。

まずはこの三図幅の植生図をスキャンして得たデジタル画像を画像処理ソフトで繋げた。その画像をベースマップとしてベクトル編集ソフトで植生区分をトレースし、それに着色した。仮製地形図と比較するために縮尺を揃えた（図3b）。

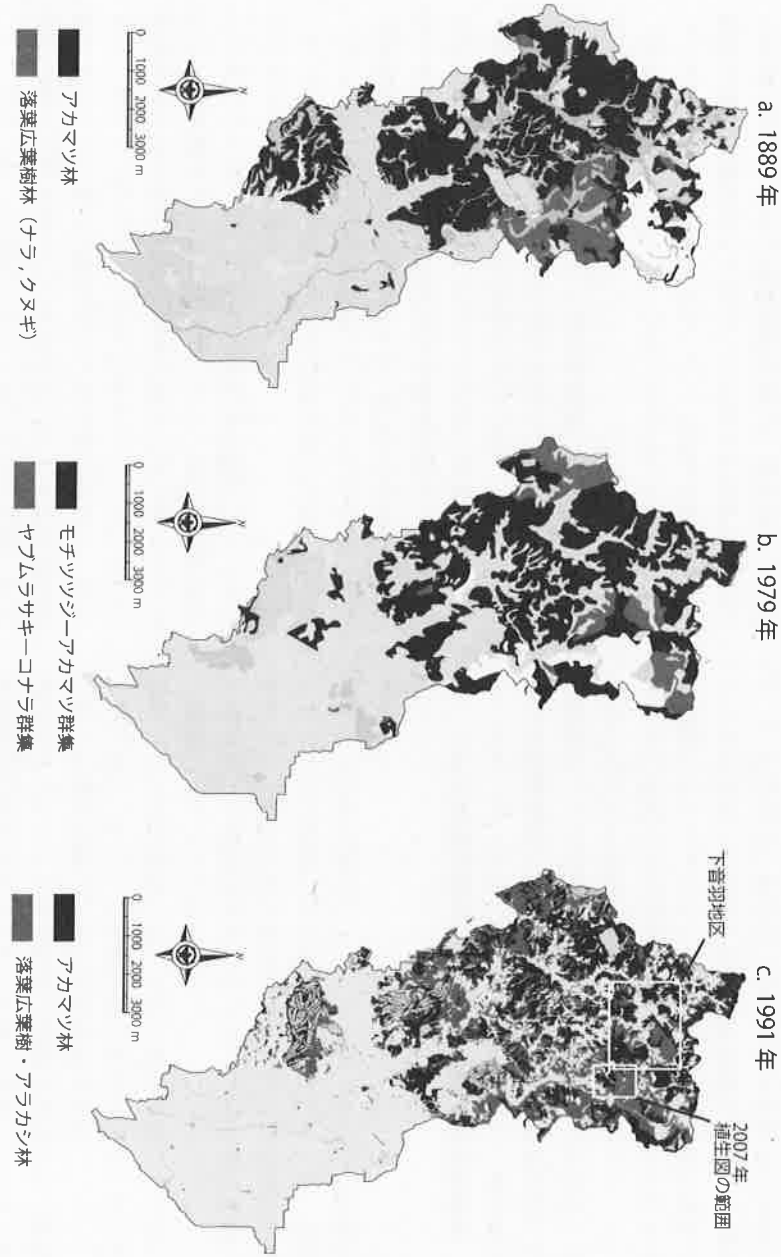


図３　３時期の現存植生図

この時期は第二次世界大戦から高度経済成長期・燃料革命を経た時期であり、この時期の山林の利用状況が反映されている。永く主役であった炭や薪にかわり、都市ガス、プロパンガスなどが急激に普及した。これにより、薪炭生産主体の里山地域の存在意義は一気に薄れてしまった。落葉樹コナラ林は薪炭林として人為的に維持されてきたものであるがこの存在意義がほぼ消失してしまったのがこの時期である。

ここで注目すべきは、北部の安威川沿いに白色で表現しているアラカシ群落が出現していることである。それは仮製地形図から復元した植生図（図3a）の白色部の南半分と重なる。一八八九年現在の仮製地形図と一九七九年現在の環境庁植生図との間に九〇年間の開きがあることも考慮すると、伐採域が安威川沿いに南下してきたことを示している。そして伐採後に放置されて、潜在植生に至る前に出現するアラカシ群落が卓越していると考えられる。

図3aではかなり縮小していることやカラーが見えないこともあって判別できないが、一八八九年の時点で狭い落葉広葉樹林域であったのが、一九七九年の時点（図3b）では拡大する。どちらも両時期の間に、薪炭林として展開してきたものである。車作周辺では、かつての落葉広葉樹林は伐採されたりアカマツ林が拡大している。落葉広葉樹林とアカマツ林が同時に放置されると、一時的にアカマツ林が卓越していく傾向が見られる。

北縁部ではアカマツ林の面積が増えている。この原因は乏しい土壌の斜面にはアカマツ林が最初に生えることと関連しているだろう。

丘陵部では鉄道駅などを中心として住宅地化が進んできたが、一九七〇年に開催された日本万国博覧会を機に行われた住宅開発には目覚ましいものがあった。住宅開発やゴルフ場の開発によって、アカマツ林はかなり破壊された。

(3) 土地分類細部調査結果を使った昭和後期の植生

一九九一年（平成三年）に茨木市によってまとめられた土地分類調査（細部調査）の一つの営林現況図・植生現況図をもとに図3cを作成した。元図は五千分の一の大縮尺で八枚の平面直角座標系地図に分割されている。それぞれの地図ごとに植生情報をトレースしてデジタル化した後、ベクトルソフト上で八枚の地図を接合縮小して一九九九年の二万分の一平面直角座標系地図上に配置した。この図は前二者の図に比べてかなり詳細に区分されている。図3cの凡例に注目していただきたいが、前二者

では落葉広葉樹林が独立した凡例であるが、図3cでは落葉広葉樹林に代わって落葉広葉樹・アラカシ林となっている。

図3cの茨木市域北部・中部では、図3bと比べるとアカマツ林が減少し、落葉広葉樹・アラカシ林が増加してアカマツ林とほぼ同面積になっている。アカマツ林と落葉広葉樹林はいずれも、人が放置すれば消失するものである。この地では自然植生として成り立たないから、アカマツ林と落葉広葉樹林ともアラカシ林への移行過程にある。

図3a、b、cを通じてアカマツ林の面積はかなり減少したが、残存部の大枠は仮製地形図の分布とほぼ対応している。この域内では落葉広葉樹・アラカシ林は確実にひろがっている。過去、薪炭生産や有機肥料の利用のために落葉広葉樹が選択的に維持管理されてきたが、エネルギー革命によって、里山の管理は行き届かなくなり、常緑広葉樹が卓越する樹林に移行してきたことが見える。

(4) 二〇〇七年の植生

現在の竜王山域の植生状況を知るために、グーグルマップに掲載されている空中写真（二〇〇七年二月撮影）の判読及び現地調査によって植生分布図を作成した。図4には東斜面の植生図を示す。

比較的活発に管理されているこの地の植生は、ケヤキ自然林、落葉広葉樹・アラカシ林、スギ林、ヒノキ林、竹林の五植生に分けることができる。現地調査から、渓谷部ではケヤキ自然林が分布し、それ以外はかつて落葉広葉樹林であったことが明らかとなった。現在、国などの補助金によってスギやヒノキの植林が展開しているのであるが、枝打ちや間伐などの管理は滞っている。かつては限られていた竹林は森林域に拡大して問題になっている。

二 地籍境界と植生境界

植生と土地所有の関係について調べた結果のうち、下音羽地区について示す。土地台帳をもとに、山林と原野の地目六〇六ヵ所の土地所有者をまとめ、一覧表を作成した。そして、景観復元図の筆界線が描かれていない山地・山林の部分に加筆して、地籍図に基づいて地番を記入した。最後に、土地台帳から集めた所有関係と地目を地番と対応させながら、復元図に落とした。この作業によって、明治期の地番ごとの土地所有と山林の内訳が明らかになった。

作業の当初の目的は、山林の所有者が地元在住者か不

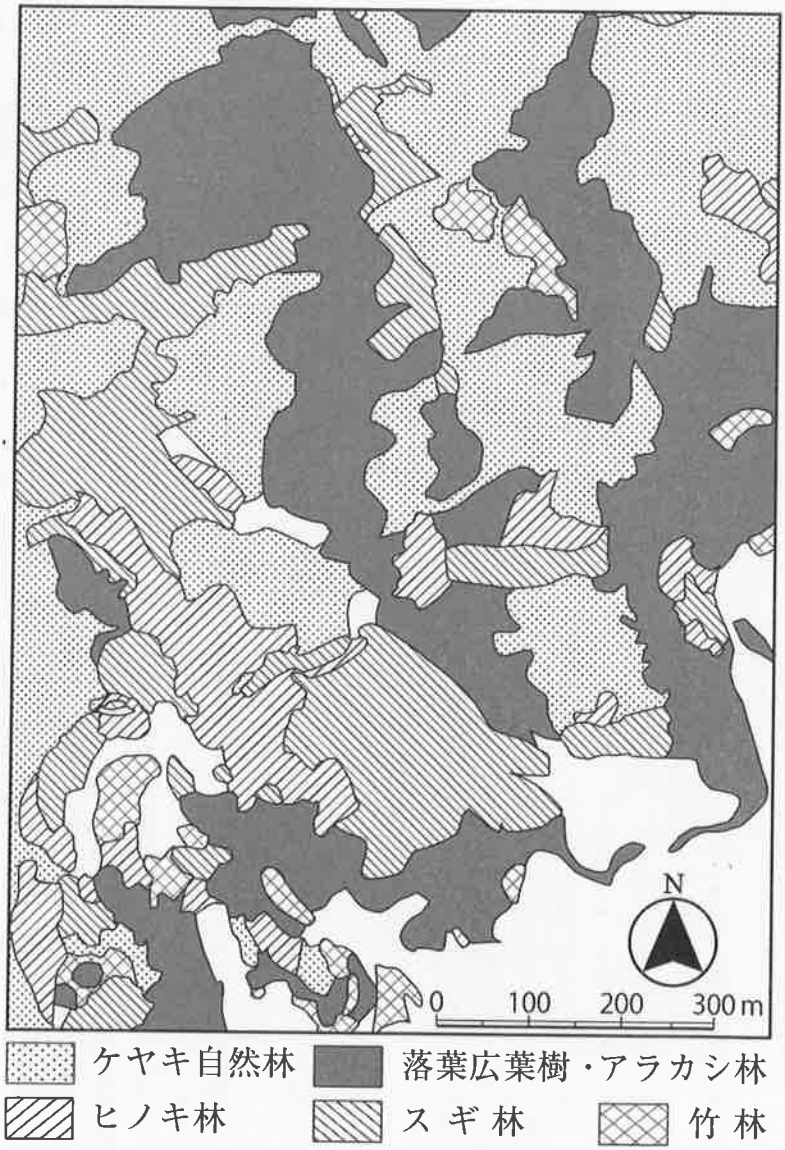


図 4　竜王山東斜面の2007年現存植生図

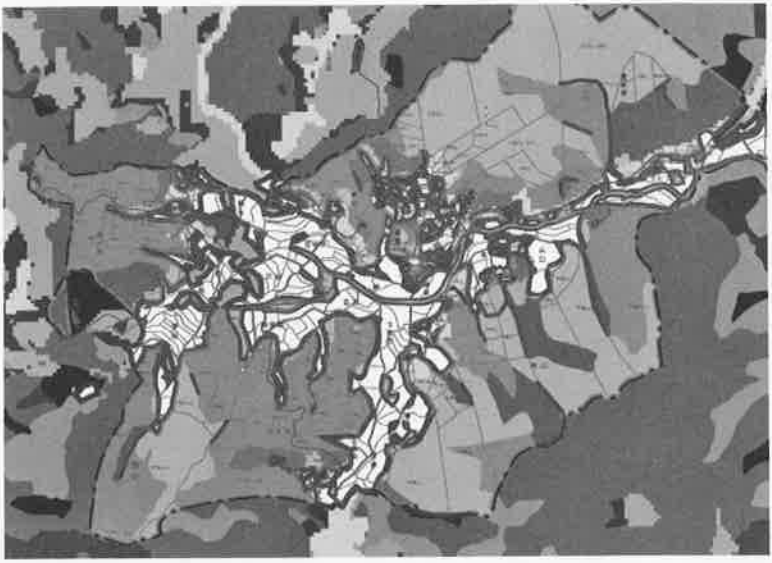


図5　下音羽地区の地籍境界と1991年現存植生境界の対応関係
字界と植生界が一致する所を太い実践で表現

在地主かの違いや共有地・入会地の関連で植生に差異が生じていると考え、検証することであった。仮製地形図及び一九九一年の現存植生図と重ね合わせたが、植生分布と個々の所有者境界とは関係がないことが確認された。

一九九一年の植生境界については、大字界、小字界と一致するところが多く見られる（図5の太い実線）。アカマツ林と落葉広葉樹林の二次林は、土地所有者境界を越えて、分布しており、樹種は地域社会によって決定されていることがわかった。二〇〇四年度の北野航氏の卒業論文での「アカマツ林とコナラ林の境界と字境界が一致する部分が多数あった」という結果をこの限られた地域ではあるが、より大きな縮尺で裏付けることができた。

私たちの周辺にはアカマツ林や落葉広葉樹林がまるで自然植生のように分布している。スギ、ヒノキ林は明らかに人工林であり、古くからの所有境界であった字界と境界が一致していても不思議ではない。アカマツ林や落葉広葉樹・アラカシ林の境界と字界の一致が多々見られるとしたら、これらも二次林であることが改めて理解できるのである。

おわりに

一八八九年、一九七九年、一九九一年の三時期の植生

図と二〇〇七年二月の植生図から、茨木市では明治中期から一九九一年まで経済環境の変化のなかで、アカマツ林・落葉広葉樹はともに減少し、アラカシ群落が展開してきたことが明らかとなった。従来の里山利用がしぼむなかで、いわば潜在植生への回帰のベクトルが強くなっている。

地籍境界と植生境界が一致するところは多々見られるが個人所有境界を大きく越えている。これは個々の個人所有域を越えて森林種が決定されてきたことを物語っている。

アカマツ林と落葉広葉樹林の二次林の分布は、土地所有者境界を越えて分布しており、樹種は地域社会によって決定されると考えられる。

関西大学文学部地理学教室の木庭元晴先生、同非常勤講師の水田憲志先生には本研究のご指導を頂いた。茨木市史編さん室の田中祐三氏および石坂澄子氏には地籍図関連資料の収集などでご協力頂いた。感謝する。

参考文献および資料

茨木市（茨木市史編さん委員会）、二〇〇四．新修茨木市史。第八巻史料編地理．

小椋純一、二〇〇二．明治中期における京都府南部の里山の植生景観．京都府レッドデータブック、自然生態系、http://www.pref.kyoto.jp/kankyo/rdb/eco/rs/rs04.html

環境庁、一九八一．現存植生図『京都西南部』、『大阪東北部』、『広根』（縮尺一：五〇、〇〇〇）．第二回自然環境保全基礎調査（植生調査）（一九七九年度現地調査）．

環境省　第六回・第七回自然環境保全基礎調査植生調査情報提供ホームページ、http://www.vegetation.jp

北野　航、二〇〇四ＭＳ．茨木市の森林植生の成因――いわゆる二次林境界と字境界との関係――．関西大学文学部地理学教室二〇〇三年度卒業論文．

宮脇昭編著、一九七七．『日本の植生』、学研．

宮脇昭編著、一九八四．『日本植生誌五：近畿及び五：近畿付表および植生図』至文堂．「近畿地方の潜在自然植生図」一：五〇〇、〇〇〇（宮脇ほか、一九八四）所収．

陸地測量部、一八八七．二万分の一仮製地形図『茨木村』（一九八五年測量）．

陸地測量部、一八九二．二万分の一仮製地形図『大岩村』（一九八九年測量）．

（よう　しん・関西大学大学院文学研究科博士課程前期課程地理学専修（自然地理学）平成二一年度修了）

連載

本のいろいろ 56 関大図書館―国書総目録―

仲井 徳（いさお）

国書総目録「好色一代男」の画面

日本の古典籍（和書・国書）を捜し、調べるのになくてはならないツールが『国書総目録』である。

『国書総目録』 全九冊 岩波書店編 一九七六年（昭和五一）刊行

国初から江戸時代末慶応三年（一八六七）までに、日本人によって著作、編集、翻訳された書籍（国書）が全国のどの図書館や文庫に所蔵されているかを記載した総合目録。一四〇年前（明治時代）から以前の一大・悉皆所蔵目録である。

国書の数五〇万点。書名の五〇音順で探す。九冊目は著者名索引。

詩学書、書画、絵画、地図、古文書、拓本（とくに法帖）類は収められていない。

書名、ヨミ、編著者名、冊数、分類、成立年、写本と版本の別、所蔵館名、複製（ファクシミリ版）、翻刻（現代活字に直したもの）の有無、どの叢書（全集）等に入っているかも分かる。一大解題目録である。

『古典籍総合目録』 全三冊 岩波書店編 一九九〇年（昭和五五）刊行

『国書総目録』の続編・補遺、新たに約一万点が収録されている。

『国書人名辞典』 五冊 市古貞次ほか編 一九九三～一九九九年刊行 岩波書店

『国書総目録』に収録された著編者の伝記・人名辞典。三万人の生没年、名号、家系、経歴、著作が分かる。たいへんな苦心の末成った。

『国書総目録』と『古典籍総合目録』は情報化の波に乗って、データベース化され無料で使用できることになった。ありがたいことである。

DB「日本古典籍総合目録」 国文学研究資料館 二〇〇三年から

和漢書誌学の泰斗・長澤規矩也博士の『国書総目録』への苦言 ①全国の文庫・図書館からデータを集めたため、遺漏、誤記がある ②刊本について、版種（同一出版物の中での改版や重版による異動）、印（初刷りと後刷り）、修（補修の有無）が無いなどについてはデータベース化によってある程度補訂されているといってよかろう。

（なかい いさお・神戸女子大学文学部准教授）

裁判員裁判と証拠開示問題

●はじめに　●冤罪を生み出す証拠隠し
●刑事裁判の原則と証拠開示　●自由権規約と諸外国の証拠開示
●新刑事訴訟法の証拠開示制度　●証拠開示のニューウェーブ

中北龍太郎

はじめに

検察官は有罪立証に役立つ証拠だけを弁護人に見せ、無罪の証明につながる証拠や有罪立証にマイナスの証拠は隠す、これは刑事裁判ではありふれた現実である。そして、こうした証拠隠しが冤罪の重要な原因となってきた。これが刑事裁判における病ともいわれる証拠開示問題である。この病は改善されつつあるとはいえ、未だ深刻な状態にある。裁判員裁判で冤罪を生み出さないようにするためにも、検察官が被告・弁護側に捜査機関が収集した証拠をもっと幅広く開示する方向での改善が求められている。

冤罪を生み出す証拠隠し

松川事件では、捜査機関が隠し続けていた被告人たちの無実を裏付けるアリバイ証拠が開示された結果、死刑判決がひっくり返り無罪となった（『書評』第一三一号掲載の拙稿を参照）。

一九八三年七月から翌年七月のわずか約一年の間に相次いで、三人の死刑囚が再審で無罪になった。三事件のいずれも、捜査機関の証拠隠しが死刑判決の大きな原因だった。他方、再審段階で開示された新証拠が、再審開始と無罪判決の獲得に大きな力となった。

私も弁護を担当した甲山事件（兵庫県西宮市の知的障

害者施設「甲山学園」において一九七四年に二名の園児が学園内の浄化槽から死体となって発見された事件で、当時保母をしていた山田悦子さんが犯人として起訴されたが、九九年に無罪が確定。）では、最大の有罪証拠と位置づけられた園児の目撃供述が捜査官によって誘導されたものであることを暴くのに、証拠開示が重要な役割を果たした。

真犯人が現れ〇七年に冤罪が明らかになった氷見事件の場合、捜査機関は犯人にされた柳原浩さんのアリバイを証明する電話通話記録を持っていたにもかかわらず、それを隠し続けたことが誤った有罪判決の大きな原因であった。狭山事件では、三メートルにも及ぶ証拠が未だ隠されたままである。

これらの驚くべき実態はほんの氷山の一角に過ぎない。

刑事裁判の原則と証拠開示

証拠開示が問題化したのは、戦後の刑事訴訟法の改正の結果である。戦前の刑事裁判では、判断者である裁判官が職権で事実調べをすることになっており、起訴と同時に検察官手持ちの証拠一切が裁判所に提出され、裁判官は捜査機関の心証を引き継いで審理に臨むという構造になっていた。そのため、弁護人も裁判所に出された証拠を見ることができた。こうしたシステムは、裁判官が予断を持って審理に臨む点や自己の追及した線に沿った判断をしてしまいがちになりやすいことなどから誤判の危険が高く、戦後民主改革の一環として改革された。戦後、刑事裁判の仕組みは、職権主義から、検察官と被告・弁護側の両当事者に立証させ、裁判官は中立の立場に徹する当事者主義へ一八〇度転換された。それとともに、裁判官の予断を排除するために、検察官は起訴時には起訴状のみを提出し、証拠は提出できないことになった（起訴状一本主義）。この裁判構造の改革が、皮肉にも証拠開示問題を胚胎させることになった。

捜査機関が集めた証拠の中には、検察官が裁判所に証拠調べ請求する証拠と、それ以外の証拠がある。前者については検察官に開示義務があるが、後者については、二〇〇五年一一月から実施の刑事訴訟法の改正により証拠開示に関する規定が設けられるまで、法律上は空白であった。そのため、検察官の証拠開示義務の有無、その範囲、裁判所の証拠開示命令権の有無・基準・範囲などをめぐって深刻な争いとなってきた。

大阪地裁は戦後間もなくのころ検察官に全面的な証拠開示を命じる決定を出したが、最高裁はこれを取り消した。その結果、検察官の証拠隠しが大手を振ってまかり

通るようになり、証拠開示問題は冬の時代を迎えることになった。法改正以前に転機となったのは、一九六九年の最高裁決定だった。この決定は、裁判所の訴訟指揮権に基づき、一定の要件・基準のもとで検察官に対し証拠開示を命じることができるとした。しかしながら、この要件・基準による証拠開示の範囲は狭く、最高裁決定には大きな限界があった。

こうした証拠開示の範囲を狭く限定する運用は、刑事裁判における基本理念に反しているといわざるをえない。証拠開示問題は、検察官は強大な権力と組織を持つ捜査機関が強制捜査権限を使い税金を注ぎ込んで集めた証拠を手中にしているのに対し、被告側には金も組織も力もなく、証拠収集の面で圧倒的な差があるという厳然たる事実を前提に考えなければならない。この格差を正さなければ、被告・弁護側は防御権を有効に行使できず、また無罪立証を妨げられることになる。

刑事裁判の基本理念である公平な裁判を実現し、また刑事裁判の基本構造とされる当事者主義を生かして冤罪をなくすようにするには、証拠開示を徹底して両当事者の利用できる証拠を対等にしなければならない。また、憲法三一条で定められている適正手続きの保障のためにも、証拠開示の徹底が不可欠である。しかも、捜査機関が収集した証拠は、真実を究明し真犯人を適正に処罰するための公共の財産であって、検察官が証拠を独占することは許されるはずがない。

自由権規約と諸外国の証拠開示

日本も批准している「市民的及び政治的権利に関する国際規約」（自由権規約）14条3項（b）は、「防御の準備のために十分な時間及び便益を与えられ並びに自ら選任する弁護人と連絡する」権利を保障している。ここでいう「便益」には、刑事裁判の準備のため検察官手持ち証拠を利用することも含まれていると解釈されており、この規定により、弁護人の証拠開示請求権が保障されている。ところが、証拠開示の範囲を狭く限定する日本の証拠開示の実態は、自由権規約とかけ離れているといわざるを得ない。そのため一九九八年、国際人権自由権規約委員会は日本政府に対し、「規約14条3項の保障に従い、その法律と実務において、関連するあらゆる証拠資料に弁護側がアクセスすることができるようにして、防御権が阻害されないよう確保すること」を勧告している。

目を外に転じて見よう。刑事裁判において職権主義的制度を採用している欧州の多くの国々では、戦前の日本と同じように検察官手持ち証拠が一括して開示されるこ

とになっているので、証拠開示問題は起きていない。当事者主義をとる国々で、証拠開示が重要な課題となり、ほとんどの国々で証拠開示が幅広く認められている。アメリカでは、連邦最高裁判所一九六三年ブレイディ判決により、検察官は被告人に有利な証拠を開示すべき憲法上の義務を負うことになり、公判前の早い段階からほとんど全面開示に近い運用となっている。

カナダでは、殺人事件で真犯人が現れ無実が判明したマーシャル事件を調査した王立委員会が、誤判の原因が証拠未開示にあるとして証拠開示に関する勧告を出し、また最高裁判所一九九一年スティンチコム判決は、「検察官の手中にある捜査の成果は、有罪を確保するための検察官の財産ではなく、正義がなされることを確保するために用いられる公共の財産である」と判断し、これら勧告・判決が契機となって、事前・全面証拠開示制度が定着している。イギリスでは、証拠開示に関する基本法である一九九六年法により、検察官は、関連するすべての証拠の標目と訴追側立証を崩す可能性のある証拠を開示し、また、弁護側主張を補強する可能性のあるすべての証拠を開示しなければならないことになっている。

新刑事訴訟法の証拠開示制度

改正後の新刑事訴訟法が定める公判前整理手続とは、刑事裁判の充実や迅速化を目的として、第一回公判前に、裁判官、検察官、弁護人が協議して、公判における争点や証拠を絞り込んで審理計画を立てる手続のことである。この手続において、検察官が取調べを請求した証拠だけでなく、一定の類型に属する証拠（いわゆる類型証拠）及び被告側の主張に関連する証拠（いわゆる主張関連証拠）の開示が定められている。証拠開示が明文化され、その範囲が拡大されたことは、一定の前進と評価できる。特に、証拠開示を被告・弁護側の権利であり、検察官の義務であることを明確にした点は、大きな意義がある。もっとも、証拠開示の徹底という点では、開示の範囲が全面的証拠開示に比べてまだまだ狭く、大きな限界になっている。また、捜査機関にある証拠のリストが弁護人に開示されない結果、弁護人には捜査機関にどのような証拠があるかを知り得ず、そのために、被告人に有利な証拠があっても、それらを開示させることができない事態が生じてしまうといった制度的欠陥もある。

証拠開示の規定によってどのような証拠が開示の対象となるのかについて、最高裁が比較的前向きの姿勢を取

り、開示の範囲は徐々に広がってきている。例えば、①被疑者取調べにおける捜査官の取調メモ、②証拠収集手続における捜査官の捜査報告書、③証人予定者を捜査段階で取調べた捜査官の捜査報告書なども、裁判所による開示命令の対象として認められようになっている。

証拠開示のニューウェーブ

証拠開示規定の新設とその積極的な解釈が契機となって、再審や冤罪を理由とする国家賠償訴訟でも、最近証拠開示を広く認めるニューウェーブが起きている。

布川事件再審請求審では、有罪判決の重要な証拠となっていた目撃証言を否定する別の目撃者の供述調書が開示され、それが再審開始決定の決め手となった。足利事件再審公判では、菅家利和さんを取り調べた際に録音したテープが開示され、捜査機関によって嘘の自白が作られていったプロセスが明るみになった。

狭山事件再審請求審で、東京高裁は〇九年一二月、弁護人の証拠開示勧告の申立を受けて、有罪判決の主要な証拠となってきた自白や身代金要求のための脅迫状の筆跡鑑定が信用できるものかどうかを明らかにするために必要な次の証拠の開示をするように、検察官に勧告した。①殺害現場とされる雑木林内における血痕反応検査結果、②捜査官が犯行時間帯に本件雑木林の直ぐそばにいたAに関する捜査報告書、③警察官が本件雑木林の実況見分をした際に撮影した八ミリフィルム、④警察側が作成した被害者の死体に関する鑑定書などに添付された写真、⑤石川さんの取調べに関する捜査官の取調メモ、⑥石川さん作成の文書。

氷見事件で柳原さんが国や県などに損害賠償を求めた国賠訴訟の第三回口頭弁論で、富山地裁は一〇年一月、柳原さんが求めていた刑事裁判の記録とともに、検察官が刑事裁判に提出していなかった捜査記録を裁判所に提出するよう求めた。

布川―足利―狭山―氷見、これらの事件を通じて、積極的な証拠開示の流れが着実に前進している。この流れが定着すれば、冤罪の防止・克服の課題は大きく前進を遂げることになるであろう。

（なかきた　りゅうたろう・弁護士、大阪弁護士会登録）

裁判員制度

昨年五月から導入された「市民参加」の裁判員制度は、大きな問題もなく粛々と進んでいるかのように報じられている。果たしてそうだろうか。

粟野仁雄

識者の妙な「裁判員礼賛」

昨年八月に東京地裁で行われた裁判員裁判第一号は超過熱報道だった。足立区で昨年五月に七二歳の男が近所の六六歳の女性を刺殺した殺人事件が対象。三日間の審理で判決は懲役一五年となったが公判の途中、何度もレポーターが法廷から飛び出し、裁判員の質問や被告人の回答の様子を逐一報告する。撮影は冒頭だけとはいえ、各放送局はまるで「実況生中継」の有様だった。司法の歴史的転換点とはいえ、被害者、加害者問わず肉親や関係者はたまったものではなかろう。

この裁判、「識者」が裁判員を必要以上にもてはやす姿も気になった。一人の裁判員の女性が被告人に「どうして犯行に（親の）形見のナイフを使ったのですか」と尋ねた。それをとらまえて、元最高検検事の堀田力弁護士は「市民感覚の素晴らしい質問です。プロの裁判官ならまず考え付かないでしょう」などと、えらく感心してテレビ解説していた。果たして職業裁判官には考え付かない質問だろうか。

昨年九月に神戸地裁で行われた裁判員裁判を傍聴した。四〇歳の息子が父を殴って怪我させた傷害事件自体は注目されたものではないが、西日本初で相当の報道合戦

だった。閉廷後、司法記者クラブの求めを了承した裁判員の会見があった。ぴりぴりとした空気で裁判所職員が逐一メモしていたが、「問題があった場合、連絡があります」などと紙が配られた。

裁判員を守る名目だろうが「裁判官の裁判員への誘導」などと報じられないために見えた。女性検事は裁判員を絶賛し、「裁判員制度は国民とともにあることを実感しました」など法務省広報担当のような会見、渡辺修甲南大学法科大学院教授は「裁判員の方はプロ並みの質問ですばらしい。制度は根付くと思います」と評価していた。

「首尾よくスタート」までにもマスコミを巻き込んだ法務省、最高裁などの入念な「仕込み」があった。数々の模擬裁判は典型。どれだけの金と手間をかけたのか。コンクール好きの日本人らしく高校生模擬裁判コンクールまでやっていた。裁判員裁判は刑法などの素人が被告人を本当に死刑にできるかどうかなのだ。演じている「被告人」を相手にいくらやっても意味はない。

法廷は紅白歌合戦か

これぞ民主主義とばかり「市民参加」が錦の御旗になった裁判員裁判。だが、検察は「いかに素人の裁判員に受けるか」に腐心している。四年前、奈良県で一六歳の高校生が自宅に放火し、家族三人が死亡した事件で、取材していたジャーナリスト草薙厚子氏に少年の鑑定医が供述調書を見せたことで、医師が「秘密漏示罪」に問われた裁判を奈良地裁で傍聴して驚いた。

検察の冒頭陳述である。若い女性検事が草薙氏役をやり、男性検事二人が医師、講談社編集者の役を務めた。「鑑定の時ってこんなたくさんの資料を全部読むんですか、先生」「そりゃそうだよ」「うわあーっ、すっごーい」など、検事たちが完全に芝居をしている。

従来、冒頭陳述は一人の検事が読み上げた（読み疲れて検事が交代することはあるが）。この裁判は裁判員裁判ではないが「素人受け」を重視した裁判員裁判を睨んでのことだった。今後、こうした「法廷芝居」が増え、極端に言えば、紅白歌合戦の審査のようになるのではないか。裁判所は「劇場」になった。

「市民参加」を隠れ蓑にした公判の秘密化

証拠や証人の選定などがすべて、公判前整理手続きや期日間整理手続きに託される。こうしたものは従来、傍聴人から見えるところで行われていた。両手続きは裁判官、検察官、弁護人の三者が密室で行う。「弁護人も入っているから問題はない」とするのは法曹界の人間の奢り

でしかない。裁判員制度の少し前から導入した整理手続きは事実上、裁判の秘密化である。「裁判の迅速のために争点を整理してから公判に出す」にもまやかしがある。事件によっては何が争点かわからないようなものだってある。何が争点なのか、誰を証人にするか、などを決める段階から傍聴人の前でやってこそ真の「公判」のはず。要は公判の一部が公判でなくなった。委員会など水面下ですべて決めてからNHK中継させる国会本会議のようなものだ。

「上々の滑り出し」は当然だ。本格的に起訴事実を争う大事件が始まっていないからだ。一昨年夏、舞鶴市で女子高生が殺害された事件では昨年春、六〇代の男性が逮捕され、とっくに起訴されているが京都地裁の初公判がさっぱり始まらない。公判前整理手続きばかり重ねている。滋賀県で女性が汚水槽に投げ入れられた殺人事件も被告人が全面否認、公判は始まらない。

公判前整理手続きは裁判官に求められてきた重要要件も葬った。予断を排除するために、裁判官は初公判まで起訴状以外のものには一切、目にせず「真っ白な」状態で臨む「起訴状一本主義」も「公判前整理手続き」で崩れたのだ。

裁判員裁判に託すべきでない強姦事件

裁判員裁判に託すことがとりわけ疑問のある事案が強姦事件だ。兵庫県内で小学女児を強姦した男が神戸地裁で裁かれた。裁判員対象事件となり男は求刑懲役一二年に対して懲役九年の判決となった。被害者の母親が傍聴席からは見えないように衝立を立てられ、弁護士や検事、裁判官、裁判員の質問に答えていた。閉廷後、裁判員の記者会見で私が「被害者の名や顔も伏せなくてはならない強姦事件のような事件を裁判員が裁くことをどう思いますか」と聞いたら、裁判員の女子大生が「お母さんは私に顔を見られてしまったということで大きなプレッシャーになると思います。こういう事件は裁判員制度には向かないと思います」と答えてくれた。被害者の親ですらそうなのだ。被害女性本人ならどんなに負担か。医者に裸を見られるのと同様、姿を見られても相手が職業裁判官だと思うから、ある程度納得できるのではなかろうか。

青森県での強姦事件裁判では裁判員の牧師が涙ながらに会見していたが、こうした真摯な人ばかりが裁判員になるとは限らない。裁判員選任の基本は籤だが、裁判員を裁判官がじっくりと人定する余裕もない。ネットなど

で面白半分に被害者の氏名などを流されれば、取り返しがつかない。裁判員を罰したところで遅い。職業裁判官なら職を失うから、そのようなことは考えにくかったが。

裁判員の生活に合わせざるをえない拙速裁判

昨年一〇月、大阪地裁で覚せい剤使用、強盗致傷罪で起訴された男を裁く裁判員裁判を傍聴した。夫の逮捕直後に出産した妻は、「待ち続けます。少しでも早く刑務所から戻って子供を抱いて欲しい」と涙ながらに訴えた。一八歳で手を染めた覚せい剤がやめられず、刑務所暮らしを繰り返した男は今回、「薬で気が大きくなった」（本人）とビデオ店に押し入り店員に怪我をさせた。検察は懲役七年を求刑。判決は六年の実刑だった。法務省の広報ビデオに使えそうなこの裁判、実は予想外のことがあった。

台風で三日間予定の公判はたった二日間で終わったのだ。二日目は午前中に証人尋問や被告人質問を終えて、午後から裁判官と裁判員が「評議」し、夕方に再開した法廷でさっさと判決を下した。会見に臨んだ補充裁判員の女性は「今日の肉親などのお話を聞いて考える時間が一晩は欲しかった。こんなに大事なことを決めるのに二日間でいいのかと思います」と吐露した。評議がまとまらなかった時のために裁判所も予備日は取っていた。しかし職業裁判官だけなら日程の都合をつけやすいが市民裁判員は多くが困る。早く終わらせる方向に動いただろう。

「わかりやすい裁判」の落とし穴

かつては「甲第何号証、乙第何号証」などばかりが聞こえ、傍聴席からでは何をやっているのかさっぱりわからないことも多かった。関係書類も日本語になっていないものも多かった。起訴状や判決文など長々と句読点がなく、主語もわからないこともあった。法曹界の人たちがこうした「技術」を駆使して悦に入ってるように見えた。裁判官の調書至上主義や法曹界の空虚な「権威主義」が崩れ、「わかりやすくなった」ことは評価したい。

だが、「わかりやすさ」というのは極めて危険なのだ。事件というものは、わかりやすいものだけではない。人を刺した本人もなぜ刺してしまったかわからないようなことはいくらもある。刑法三九条がある限り、精神鑑定が重きをなす裁判も多い。

〇五年一一月、大阪市浪速区で二七歳と一九歳の姉妹がマンションに押し入った男に殺害された。有名な事件で被告人は昨年死刑執行された。私は本を執筆するため

すべて傍聴したが、精神鑑定した医師が証人尋問で検察、弁護双方から質問されていた。専門用語も多く、後日、鑑定人の医師に解説してもらうべく会いに行った。その頃、前述の奈良の調書漏洩事件があり、ジャーナリストの私は苦労したが、鑑定医師（洛南病院院長の岡江晃氏）は快く信用してくれた。この事件は裁判員裁判ではなかったが、裁判員裁判では鑑定書もこれまでよりずっと薄っぺらいものになった。無駄を省くのは必要だが、裁判員のレベルに合わせるためにそこまで単純化、簡略化することの方が危険なのである。

素人参加より裁判官の資質充実を

裁判員も起訴状は見るが鑑定書はおろか、供述調書も読まない。法廷内で見聞きしたことだけで判断する。ある意味、短時間被告人に接した「直感や印象」で人の運命を決めるのである。ペーパーテストエリートたる職業裁判官のある種、「浮世離れ」や、社会常識とは遊離した書類主義の誤った判決も見てきた。しかし、だからと言って、社会経験の不足した学生まで籤で選ぶのは間違いだ。まずは職業裁判官のレベルを上げるべきだ。

人生経験を含んだレベルである。司法試験の成績で振り分けて二十代から裁判官になるのではなく、検事や弁護士を経験した後、年齢も三五～四〇歳位から任官させても十分だ。ある時、「もう始まってしまった裁判員制度を批判しても意味がないでしょ。私だって裁判員を一度やってみたいんだから」という女性に出会った。他人の運命を決するのに「やってみたい」などという動機で臨むこと自体が恐ろしいことである。私はこんな人に裁かれたくはない。「市民感覚」も大事だが、人の運命を決する人間は高い知性と教養、高潔な人格を兼ね備えた人物だけにしてほしい。

多くの人は自分が刑事被告人になど絶対にならないと信じ切り、「被害者になったら」の発想で裁判員になるかもしれない自身を重ね合わせるのだろうが私は違う。痴漢をはじめ、いい加減な捜査でいつ誰が冤罪に巻き込まれるかもわからない世だ。「被告人になったら裁判員に裁かれたいか」の発想で考えることにしている。

（あわの　まさお・神戸市在住ジャーナリスト）

米軍基地を誘致するか、それとも撤去するか

――「普天間移設」についての私の問題設定

田中佑弥

- まずは自己紹介
- 「普天間移設」問題の経緯
- 沖縄／日本／アメリカの関係史
- 関空移設
- 沖縄への応答として

まずは自己紹介

縁あって『書評』に寄稿させていただくことになりました。大阪で専門学校の教員をしている田中と言います。私は昨年末に『辺野古の海をまもる人たち――大阪の米軍基地反対行動』という本を東方出版から刊行させていただきました。「辺野古」というのは沖縄県北部の名護市にあり、普天間飛行場（米軍基地）の「移設」先とされてきた地域です。辺野古の海を埋め立てて新たな基地を造るという計画を日米政府が策定したため、この計画に反対する行動が、地元住民、そして名護市外、沖縄県外（さらには日本国外も含めた）さまざまな人びとによって継続されてきました。基地建設に向けての環境影響評価手続きが政権交代後も続けられ、陸上部分の工事は行なわれていますが、海上での工事は粘り強い抵抗によってまだ行なわれていません。

大阪の大学生も、この「反対運動」に参加してきました（私は存じ上げませんが、関大生で参加したひと、現在参加しているひともいるのではないでしょうか）。「反対運動に参加」なんて言うと、特殊な考えを持ったひとがやることだと思うかもしれませんが、そんなことはないと私は思います（何を「特殊」と思うかは主観的な問題ではありますが）。大阪出身で立命館アジア太平洋大学の学生だった松本亜季さんは、辺野古現地で基地建設阻

止行動に参加した一人です。大阪に帰って来てからは「辺野古に基地を絶対つくらせない大阪行動」というグループをつくって、現在も活動を続けています。

私は神戸大学の大学院在学時に、この「大阪行動」のフィールドワークを行ないました。理由は、みんな政治に関心がない、特に若者は政治に関心がないと言われているなかで、政治に積極的に関わっている人たちはどんな人たちかを知ることで、私たちが政治に関わっていく可能性を見い出したいと考えていたからです。私は同志社大学法学部政治学科を経て神戸大学大学院に進学したのですが、同志社大学では政治学科に在籍しながらも「政治」とは無縁の世界にいました。学友会（学生の自治組織）は解散し、学生会館は小奇麗に建て替えられ、学生運動はとっくの昔に死滅していました。残念ながら関西大学に行ったことはありませんが、おそらく同じような状況ではないかと推測します（今もがんばっているひとがいたらすいません）。神戸大学では学生運動の「伝統」が細々と受け継がれていましたが、それが一般の学生とつながりを持って展開されているとは思えないものでした。

こういった問題意識を持っている私にとって、フィールドワークで大阪行動を訪ね、ミーティングでさまざまなひとの声を聞き、居酒屋で語り合ったことは貴重な経験でした。大阪行動との出会いを通して私が考えたことは『辺野古の海をまもる人たち』をご参照いただくことにして、この文章では「普天間移設」にどう向き合うかについて書きます。大阪に住む、あるいは本土（ヤマト）に住む私たち（ヤマトンチュ）の問題設定として辺野古への「移設」に賛成か反対かという二択ではなく、米軍基地を大阪に誘致するか、それとも基地を誘致せずに沖縄の基地を撤去するかという二択を設定したいと思います。両極端で性急な問題設定だと思われるかもしれません。しかし、なぜこの両極端な二択しか設定できないかについて以下に論じたいと思います。

「普天間移設」問題の経緯

政権交代によって「普天間移設」問題は改めてクローズアップされ、新聞等でこれまでの経緯をご存知の方も少なくないと思いますので、ここでは簡単に書きます。

一九九五年九月に沖縄で米兵三名が小学生をレイプする事件があり、翌月にこの事件に抗議する県民大会が開かれました。この事件を契機に改めて基地の整理縮小を求める世論が高まり、日米政府は九六年に普天間基地の返還を発表しました。しかし、他の場所に代替基地を造ることが返還の条件となり、辺野古が「移設」の候補地

になりました。九七年十二月に基地受け入れの是非を問う市民投票が辺野古のある名護市で行なわれ、反対が過半数を占めましたが、三日後に市長が受け入れを表明し辞任しました。その後、基地容認の市長・知事が当選し、二〇〇四年、基地建設のための調査が始まりました。調査に反対する人びとは陸上で座り込みを行ない、海上ではカヌーや船で調査を阻止しました。

昨年の衆院選で鳩山由紀夫民主党代表が県外移設を表明したため、政権交代は辺野古の基地建設計画撤回につながるものと期待されましたが、政権交代後も基地建設に向けての環境影響評価手続きは継続されています。なぜ選挙前に党首が公言したことが守られないのでしょうか。なぜ、基地が集中している沖縄に新たな基地を造るのでしょうか。そもそも、なぜ沖縄に基地が集中しているのでしょうか。

沖縄／日本／アメリカの関係史

昨年は、薩摩侵攻から四百年、琉球処分から百三十年の年でした。四百年前の一六〇九年に薩摩藩は琉球王国に侵攻し、百三十年前の一八七九年に明治政府は沖縄県を設置しました。一九四五年の沖縄戦では甚大な被害を受け、一九七二年までアメリカの軍政下にありました。米軍は一九四五年、沖縄を占領すると、旧日本軍の軍事施設を米軍の軍事施設にしました。住民を収容所に入れ、その間に民有地を接収して基地を建設しました。普天間基地もこのようにして造られた基地の一つです。戦後、本土にも多くの米軍基地がありましたが反対運動もあり主権回復後、本土の基地は減っていきます。これに反比例するかのように沖縄の基地は増えました。沖縄の海兵隊は岐阜県と山梨県から移転してきました。沖縄に米軍基地が集中しているのは沖縄が軍事的に重要な場所にあるからだという主張がありますが、沖縄が米軍統治下にあったため土地接収・反対運動抑圧が比較的やり易かったことが大きな理由であると指摘されています。屋良朝博沖縄タイムス論説委員は著書『砂上の同盟』（二〇〇九年・沖縄タイムス社刊）で、米軍基地が沖縄に集中したのは軍事的に必要だったからではなく、基地維持のための政治的な都合に過ぎないと主張しています。

関空移設

昨年十一月三〇日の毎日新聞配信記事によれば橋下徹大阪府知事は、沖縄戦など「沖縄には多大なご負担をかけたので、本州の人間は十分配慮しないといけない」と述べ、関西国際空港への移設について「政府から正式に

話があれば、基本的に（議論を）受け入れる方向で検討していきたい」と発言したそうです。

これを受けて朝日新聞の武田肇記者は、本土移設について識者にインタビューしています（朝日新聞二〇一〇年二月十五日、十六日の朝刊大阪面に掲載）。反対の立場からは「九条の会・おおさか」事務局長の吉田栄司関西大学法学部長がインタビューに答えています。吉田教授は、橋下知事の発言を「彼特有の思いつきのパフォーマンス的発言」とし、違憲の疑いのある「基地をどこかに移せばいいという話ではない」と述べています。

これに対し、沖縄の女性グループ「カマドゥー小たちの集い」のメンバーでライターの知念ウシさんは、つぎのように述べています。「沖縄はもう待てません。沖縄に基地があるのは地理的要因という誤解がありますが、米高官は沖縄にこだわっていないと明言しています。沖縄一％、本土九九％という人口比率からも明らかですが、安保条約を支持する圧倒的多数は本土の人々。ならば安保が解消されるまで、基地負担は本土で背負うのがスジではないでしょうか」。また、「関西空港に嘉手納基地を、神戸空港に普天間基地を引き取ることを検討してほしい」とも述べています。

私たちはこの難しい問いに対して賛成とも反対とも言いにくいというのが正直な感想ではないでしょうか。基地はない方がいいけれど、なくなってしまうと不安だと感じているひともいるでしょう。しかし、憲法九条は必要だが米軍基地も必要だという私たちの矛盾が、米軍統治下に置かれ憲法の枠外にあった沖縄に負担を押しつけ続けてきたのではないでしょうか。吉田教授は「『本土移設』については今一度、市民レベルで是非を真剣に論じ合う必要があると思い始めている」とインタビューに答えていますが、私たちに残された時間は多くはありません。なぜなら、この原稿が製本される頃には県内移設が決まっているかもしれないからです。基地は必要で沖縄以外に「移設」先はないという選択は、これまでの沖縄の過大な負担を考えればありえません。私たちには、米軍基地の必要性を認めて普天間基地を誘致するか、それとも沖縄の真の負担軽減のために米軍基地を撤去するかという二択しか与えられていないと思います。関空移設は暴論のようでも実は私たちが取りうる数少ない選択肢の一つなのです。

沖縄への応答として

大阪で米軍基地撤去を求める行動の一つである「辺野古に基地を絶対つくらせない大阪行動」を紹介したいと

思います。大阪行動は前述の松本亜季さんなど有志が集まり、二〇〇四年八月から毎週土曜日に大阪駅前で街頭アピールをしています。辺野古の基地建設計画の白紙撤回、普天間基地の即時撤去を求める署名を集め、累計四万筆以上を防衛省に提出しました。現在も毎週土曜日の三時半～五時までJR大阪駅南側のバスターミナルで街頭アピールを行なっていますので、賛同される方は署名にご協力ください。松本亜季さんは京都の二条で「カフェ・パラン」というカフェをしているので、そちらを訪ねてみるのもいいかもしれません。

また私が関わっているイベントですが、「辺野古カフェ」というイベントが不定期に大阪の中崎町のカフェで開かれていますので、関心のある方はこちらもチェックしてみてください。（http://groups.yahoo.co.jp/group/henoko_cafe/）

最後に私事になりますが、忙しい毎日のなかで基地問題に関わるのは本当に難しいと感じています。本はおろか新聞を読む時間を十分に確保できないのが現状で、この文章もまとまりのないものになってしまいました。それでも私自身は「米軍基地を誘致するか、それとも撤去するか」という問題設定に対して、普天間基地の「移設」なき返還を求めるという選択をしたいと思っています。

（たなか　ゆうや・専門学校教員）

『辺野古の海をまもる人たち
～大阪の米軍基地反対行動』
田中佑弥編著
東方出版㈱　2009年12月12日
198頁　本体価格 1,500円

常本一さんへ（「大学における平和学のすすめ」）

9・11（同時多発テロ）をアメリカの学校での体験から

福田　真菜緒

アメリカ国歌を歌い

私は外交官である父の仕事の関係で一九九八年から二〇〇二年の四年間アメリカ・ジョージア州・アトランタに住んでいました。

私が小学校六年生の頃に、世界中に衝撃が走った二〇〇一年9月11日アメリカ・ニューヨーク世界同時多発テロが起こりました。

ニューヨークにはいなかったものの、アメリカ国内にいたので、大きな混乱に巻き込まれました。そして今でもあの事件の時の事を鮮明に覚えています。

二〇〇一年9月11日、私は現地校にいました。教室に移動中突然、「生徒は速やかにホームルームに戻って、先生方はすぐにテレビをつけてください」と緊急アナウンスが校内中に流れました。すぐに生徒たちは教室に集められ、先生がテレビを慌ててつけました。テレビをつけた瞬間、旅客機が世界貿易センターに突っ込んでいく映像が目に入りました。最初は何が起こったのか全く分からず、ただどこの放送局もずっと旅客機がビルに追突していく映像を流し続け、先生はテレビを見ながらずっと「Oh my god!! Oh my god!」と叫び、生徒たちもざわざわとざわついていました。

私の母は当時ネイルスクールに通っていて、車でそこへ向かう途中で車の中でいつも聞いていたラジオ音楽番組をかけたらニュースが流れていて、どこの局も報道を流しており、非常事態であることを知り家に戻ろうとし

たそうですが、とりあえずネイルスクールへ向かいました。そこでは校長先生が「早くこちらへ来なさい！」と言って、母やマニキュアを塗りかけのお客さんを校長室に連れて行き、一緒にその部屋のテレビを見るとちょうど世界貿易センタービルが崩れ落ちているところで、先生もお客さんもやはり「Oh my god!」と悲鳴をあげ、「私たちの国が壊れてしまう！」と泣き出したそうです。

その後、ハイジャックをされた旅客機が四機あり、そのうちの二機が世界貿易センタービルに、一機がアメリカ合衆国国防総省本部庁舎（ペンタゴン）、そしてもう一機が標的を外し、何もないところに墜落したことが分かりました。

歴史上稀にないこの攻撃はアメリカ全土を恐怖に陥れ、メディアというメディアがこの話題で持ちきりになっていました。「まるで神風特攻隊のような攻撃である」と報道した局もあり、翌日学校で私の後ろにいたアメリカ人の男の子が、「ビルを攻撃したのは日本人だ！」と言い、思わず私はその子を睨みつけると、「ごめんね。君のことじゃないよ」と訳の分からない言い訳をしましたが、とても不愉快でした。

実際にアメリカの学校では真珠湾（パールハーバー）の日には当時の出来事のビデオを授業で見たりします。そのビデオの内容が日本人を敵視しているので、その授業の間私は教室に居辛かったです。そしてこの報道で、やはりアメリカにとって真珠湾攻撃は未だに衝撃的で、忘れてはならない事件であるということが色濃く残っているとそのとき幼いながらに感じ取られました。

のちに、この同時多発テロがアフガニスタンのオサマ・ビンラディンをリーダーとするイスラム派のテロ組織、アルカイダの犯行であると判明しました。

事件後、アメリカ全土がパニック状態で、各州でデマが広がりました。アトランタでも一時、次はアトランタ国際空港が狙われるのではないか、CDC（エボラ熱や世界中の未知のウイルスが保管されているアトランタにある疾病管理予防センター）が狙われ、ウイルスがばら撒かれるのではないかと本気で心配され、まるで映画の中のような世界でした。

心配や不安などのストレスで体調を崩すアメリカ人もたくさんいたそうです。

このときのテロ事件で多くの人々が亡くなり、家の庭や車、店のウィンドー、ジョギングしている人のジャンパーなどに弔意として国旗が街中にあふれていました。スーパーマーケット、公共機関でも半旗が立てられていました。アメリカの学校では教室の国旗の前で胸に手を

当てて国歌の忠誠をたてるのが日常的に行われていましたが、テロ事件がおきてからはしばらく毎日アメリカ国歌や、アメリカの歌を歌いました。

始めは亡くなった人々への弔意が見られましたがだんだん報道がエスカレートし、たくさんの店で国旗が売り切れるなどの現象が起こりました。

ラジオでも国歌、"God bless America"や「アメリカ人であることを誇りに想う」といったアメリカの歌が流され、アメリカの歌をたくさん収録したCDが飛ぶように売れました。また、有名な歌手たちもこのような曲を歌ってCDをリリースしていました。私の弟もまわりのアメリカ人の友達に感化され、日本人でありながら母にCDを買ってもらっていました。テロ事件をきっかけに、アメリカ人がひとつになり、自分の国を守るといった動きがみられ、軍国主義のような異様な雰囲気でした。

ニューヨーク日本総領事館の車の外交ナンバープレートが〝AF〟であったために"Afghanistan"と勘違いされ、ニューヨークにいた父の知り合いは車に石や物を投げつけられ、アメリカ人のドライバーから罵声をあびたりしたそうです。父の車のナンバープレートも頭文字がAFとなっており、アメリカ人に不信な目で見られたそうで、ナンバープレートをAFからJPNに変更したそうです。

ナンバープレートを変更するまでの間は怖いので、アメリカの国旗を車に飾ろうとしましたが、どこの店を回っても国旗が売り切れており、父は妹が幼稚園で描いた画用紙のアメリカ国旗を車の窓に貼っていました。母も、買い物のあと駐車場へ戻ると、うちの車のナンバープレートをじろじろと見ている人がいて、気持ちが悪かったそうですが、日本人の車だと証明するため「Hi!」とフレンドリーに挨拶をしたそうです。

同時多発テロ事件が起こった時期にアメリカに滞在していたことによって、〈アメリカ人は団結力や愛国心が大変強い国民であることを実感しました〉。幼稚園から高校まで、毎朝朝礼で、教室に掲げてある国旗の前で国家の忠誠を誓い、旗係と呼ばれる人が手袋をして、校庭に国旗、州旗を揚げます（この係は名誉ある仕事だと言われていました）。このような事なども愛国心を培うベースとなっている気がします。

また、入学式や卒業式でもないのに国歌やアメリカの歌を学校で日常的に歌うなど、教育の場において軍国主義的な一面が含まれており、これは一種のマインドコントロールのようなものだと私は思います。私も毎日学校で国家の忠誠を復唱し、何度もアメリカ国家を歌ってき

たので日本に帰国して七年以上経ちますが、まだしっかりと覚えています。

ふりかえって『日の丸』・『君が代』

常本一さんの『大学における平和学のすすめ』には平和教育、大学での平和学について述べられていました。その中で、私が疑問に思ったのは学校で九九年代から国旗・国歌法が現場の教師を萎縮させていることと、『君が代反対』などです。

第二次世界大戦の敗戦国であるドイツ・イタリアは国旗・国歌を変えている中、日本は『日の丸』・『君が代』を変えませんでした。『日の丸』・『君が代』に反対を示す人々が多いのならば、私は国旗・国歌を変えるべきだと思います。私は国旗・国歌を大事にすることは当たり前だという教育をアメリカで受けてきました。入学式、卒業式で国旗の前に立って国歌を歌うことを批判している教師がいること自体が私にとっては不思議です。平和教育を行う中で、国の象徴である国旗・国歌は学校教育から外してはならないものであり、日本はアメリカのように愛国心を養う教育をしなければならないと私は思います。自分の国を理解しようとする必要があります。

平和教育には戦争体験の継承、過去を知ることが重要であり、最近の戦争体験の風化は若者の姿勢が問われる前に平和教育のメソッドを提供できない教育者に原因があると述べられていますが、私は平和教育を提供できる環境が日本は整っていないと思います。教育者自身が形式だけの平和教育しか受けていないので授業の流れの一環程度にしか考えていないような気がします。私自身も帰国してから印象に残るような授業はありません。アメリカでは全地域で幼稚園・低学年から国歌斉唱、国への忠誠、戦争に関するビデオ鑑賞を行っています。四年という在住期間の中でしたが、心に残っていることが幾つもあります。それ位学校教育というものは影響力も大きいのだと思います。日本の未来、そして世界の未来のために、平和学がこれから浸透し、教育現場の一つの基盤となることを願います。

（ふくだ　まなお・関西大学文学部三年次生）

（カット・城 万喜）

福田真菜緒さんへ

アメリカ、日本の国旗・国歌の疑問を語りあいませんか

常本　一

そのとおりです

福田真菜緒さん、お手紙拝見しました。いや、手紙というより迫真のルポと呼ぶべきかもしれませんね。私も9・11の時は、アメリカ人の友人から「国中が国旗で埋め尽くされているわ」とか、「カミカゼと呼ばれていることは気にしないで」などという便りをもらいましたが、その舞台裏について、さすがに現地にいただけあって詳細に書かれていて、ぐいぐい引き込まれてしまいました。

周囲のアメリカ人が「悲鳴をあげ、『私たちの国が壊れてしまう！』と泣き出した」のに比べて、あなたは冷静でした。アメリカ中が国旗で埋め尽くされたのは、幼稚園のころから国歌を日常的に歌うなどというアメリカの教育に原因があり、そういう教育は「軍国主義的な一面が含まれており、これは一種のマインドコントロールのようなもの」だと見抜いています。

そのとおりです。これはしばしば「ファシズムの心理」と呼ばれ、戦争の大きな原因のひとつなのです。個人的にはアフガニスタンという国に好意を持っていても、星条旗を掲げないと国家への忠誠を疑われてしまう。そうして戦争が避けられなくなる。そしてそう行動してしまう土壌がアメリカの教育にあるということなのです。

アメリカは本来自由な国です。そのことは私にも留学経験がありますからわかります。9・11というあまりにもショッキングなできごとに、その自由な国も今述べた「ファシズムの心理」という戦争の社会病理にしばらくお

かされていましたが、今は少しは収まったようです。でも福田さんはその体験により、そういう国こそ普通の国家であり、「国旗・国歌を大事にすることは当たり前」だと感じるに至ったようですね。なるほどそれでは帰国してカルチャーショックを受けてしまうのもしかたがありません。

殺されたくない、殺したくない

そうです。実は日本は普通の国ではなくて、特異な国なのです。あの悲惨な戦争を体験し、「もう、一人の日本人も殺されたくない。もう、一人の外国人も殺したくない」と固く誓った、平和に偏った国なのです。日本はあの戦争に大きな責任があります。それゆえ戦後、徹底的な、時にはマゾヒズムと揶揄されるほどの総括をくり返してきました。そういう特異な国なのです。

もちろん自国の国旗・国歌を大事にするという普通の感覚も大切です。日本もまたそう考え、総括をくり返す過程で、少しずつその普通の感覚を取り戻し、国旗・国歌法の国会可決まで来ることになりました。しかしまだ、あの戦争を完全に過去のものとするような総括はできていませんし、一番大切なことは、その総括は徹底的に自由な場で行われなければならないということです。

それなのに、学校こそ生徒に自由を教えなければならない場所なのに、その学校現場で国旗・国歌の押しつけが見られます。法的処罰をちらつかせながら。それが私のいう「現場の教師の萎縮」なのです。「君が代」を歌うことに抵抗を感じていた教師が歌おうと思うようになることは、むしろ望ましいことです。でもそうなるためには法的処罰ではなく、自らの完全に自由な意志で、あの戦争に何らかの答えを見つけてからでなければならないと考えるのです。

でも、福田さん。私は日本が、戦争が終わって六〇年以上にもなるのに、いまだにあの戦争の総括ができずに特異な国のままでいることを、実は誇りに思っているのです。全世界で五千万を超えるともいわれる死者を出したほどの戦争です。たった六〇数年で忘れてしまうなんて許されません。人の命は地球より重いのですから。その意味では、国旗・国歌でゴタゴタが続く日本のほうがより普通の感覚を持っているのかもしれませんね。

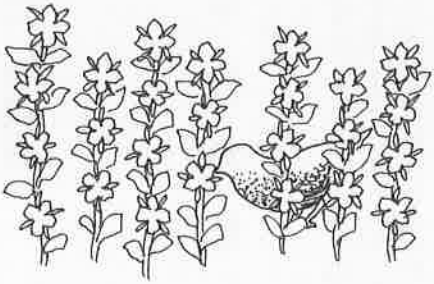
「平和教育を提供できる環境が日本は整っていない」そのとおりです。その理由、つまり平和学の制度化が未熟なままである理由については、拙稿「大学における平和学のすすめ」に書きましたのでくり返しませんが、それもまた元をたどれば、あの戦争の総括が不十分であるこ

との問題に行き着くようです。

ディスカッションしましょう

さて、私の返信はどうだったでしょう。もし福田さんがアメリカ流のディベートを得意としているなら、「そのとおりです」を連発する私の手紙に困惑を感じ、納得していないのではないでしょうか。私もこの手紙で言い足らないことがたくさんあります。どうでしょう。一度春学期にキャンパスで会いませんか。福田さんが感じた疑問は大きなテーマですから、他の人も加えて大いにディスカッションしましょう。もし実現するなら、その時にお会いできることを楽しみにしています。

（つねもと　はじめ・関西大学政策創造学部非常勤講師）



（カット・一瀬優紀）

「戦後文学」の原型③

三島由紀夫を読む『仮面の告白』『愛の渇き』『金閣寺』

——戦後日本vs仮面の美学——

●「平和日本」の自決
●終末戦争という夢
●おそろしい女性の出現
●「美」の滅亡という逆説

今村秀雄

1　「平和日本」の自決

一九七〇年、ノーベル賞候補作家だった三島由紀夫は、東京自衛隊駐屯地で「天皇陛下万歳！」と叫んで、割腹自殺した。三島がバルコニー上に立って演説した、憲法改正を求める決起の呼びかけは、集まった若い自衛隊員たちから罵倒や嘲笑によって無視された。

時代錯誤でグロテスクな印象のみを残した事件について、人々はなぜか？と問いかけて、謎のまま忘れてしまった。三島の企ての意図は彼の内部にだけ秘されたことになる。四十年を経て今からならば、あたかもパソコンの戦争ゲームに熱中する少年が、画面上で自分の腹を切り裂いている仮想シーンのようにも思い出される。彼は生きかえり、またトコトコと歩き直すのではないか。

自伝的小説『仮面の告白』では、主人公の「私」が誕生する光景を「私」自身が見つめていた、という人工的視線の主張から語り始められる。

が、私には一箇所だけありありと自分の目で見たとしか思われないところがあった。産湯を使わされた盥のふちのところである。……ゆらゆらとそこまで水の舌先が砥めるかとみえて届かなかった。しかし

そのふちの下のところの水は、反射のためか、それともそこへ光りがさし入っていたのか、なごやかに照り映えて、小さな光る波同士がたえず鉢合わせをしているようにみえた。

まだ目も見えない新生児が初めて遭遇する、柔らかい世界の形成が空想されている。もちろん人間に生死の瞬間を自覚できないのは、人が自分の意志では生まれ得ないからだ。だがその不可能を、右のように生々しく仮構させた出発点は、やがて作家が自死に至る闇の中への意識的な突入を、予兆させる。

小説では、この生と死の中間にしかない人生が、まさしく異様な人間の生長史として語られる。

大正十四年（昭和になる前年）、「私」は、祖父が元植民地の長官で、女中が六人いるという上流家庭に誕生した。生まれてすぐ母の手から離され、祖母の部屋で溺愛を受ける病弱な子だった。

幼年期に入り、「私」は自身の奇妙な性癖に気づくようになる。まだ五歳のとき、近所の坂道を降りて来る汚穢屋（糞尿汲取人）の青年の姿から目を離せなかったのが、最初の記憶だ。鉢巻をして、肥桶を前後に荷い、紺の股引をはいた下半身の輪郭が、幼い「私」をとりこにした。

練兵帰りの兵士たちが発する汗臭い匂い、また祭りの日、神輿をかついだ若衆たちが乱舞する肉体に対しても、密かな興奮を抑えられなかった。

十三歳になった。「私」は、父が所蔵する画集から「聖セバスチャン」の殉教図を盗み見する。夕空と森を背景にローマの美青年が半裸のまま処刑されている絵だ。

矢は彼の引緊った・香り高い・青春の肉へと喰い入り、彼の肉体を、無上の苦痛と歓喜の焔で、内部から焼こうとしていた。

死苦に至る凶々しい恍惚をながめながら「私」はエレクトした。初めての射精がほとばしった。勃起した欲望は、正常な方向には発射されない。

2　終末戦争という夢

『仮面の告白』は、前半、主人公が変態的同性愛に目覚めるイタ・セクスアリス（性的自伝）と、後半の純真な少女との恋物語が継ぎはぎされたものと、批評家たちから指摘されている。二つの継ぎ目を、あの日米最終戦争の赤い炎が覆っている。

昭和十九年十九歳になった「私」は、父親に強制され

るまま大学の法科に入った。いずれ自分も徴兵され戦死するだろうと考えていた。

そんな戦時下のある日、「私」は親しい友人の家に招かれ、たどたどしいピアノの練習音を聞く。

「年は？」「十八。僕のすぐ下の妹だ」

友人が軍隊に召集されたことをきっかけに、妹と「私」は急に親しくなってゆく。東京山の手の双方の親も黙認する中、恋人たちはラブレターを書き、互いの写真を交換し合った。「私」にとって唯一の逡巡は、はたして自分が正常な肉の欲情をもって彼女を愛し得るかどうかの不安であった。

やがて「私」は、彼女の家族が疎開した高原の村に訪れ、運命の時を迎えることになる。少女と二人で林の間を歩き、抱き合った。

園子は私の腕の中にいた。息を弾ませ、火のように顔を赤らめて、睫をふかぶかと閉ざしていた。その唇は稚なげで美しかったが、依然私の欲望にはうったえなかった。……

私は彼女の唇を唇で覆った。一秒経った。何の快感もない。二秒経った。同じである。三秒経った。

――私には凡てがわかった。

「私」には女性に対し欲望し得ないことが露呈された。と同時に、この社会というか世界一般に向けて〈正常に〉生き、感じてゆくことへの虚脱感が明瞭になった。「凡てがわかった」とは、その自覚だ。

ことわっておけば、同性愛者のすべてが異常者だとはいえない。むしろ巧緻な文体で強調された性的倒錯の自己史は、作家自身にはそんな事実がなくほぼ虚構の挿入であることが、三島の研究者たちによって明らかにされている。

だから『仮面の告白』とは、仮面の下の真実が吐露されたのではない。逆にわざと異常愛という「仮面」を被ることで、だまされるべきは作家本人ではなかったのか。

実は小説中に最もリアルに活写されているのは、昭和二十（一九四五）年という終末の時代光景だ。空襲警報が鳴る闇の中、B29が飛来して、夜空に一瞬の美しい青空が出現したかのような東京大爆撃のふしぎな光景。

都内の電車では九割方が罹災した群衆たちが、大災の到来を、声高にむしろ意気昂然と語り合っている喧噪。すべては戦争という巨大な虚無（死）へ向けて捧げられていた。

「私」たちの小さな恋物語は、この大きな世界崩壊を予兆としてこそ、成立すべきであった。小説では恋人たちにこう語り合わせている。

「僕たちだって――いつまで生きていられるかわからな

い」

「どんなにいいかしら――何かこう、音のしない飛行機が来て、こうしているとき、直撃弾を落としてくれたら」

巨大な沈黙の闇の中へと、歪曲されざるを得なかったのは、むしろ普通の男女の性愛だったといえる。

＊

けれど、日本は敗戦を受け入れ、戦後社会という日常生活が再開される。その直前、妹と結婚する意志はあるかという友人からの懇切な申し出に、「私」は婉曲な拒絶を示した。彼女は他家に嫁いで行った。

この小説は、敗戦の亀裂を経て、戦前戦中の作家の青春が回顧されたものだ。戦前と戦後という歴史の断絶点に、「三島由紀夫」という仮面（文体）が表出せられたように思える。その異常な「仮面」の＝真実こそが、戦後社会という白昼の虚構を照らし出すこととなる。

3　おそろしい女性の出現

三島由紀夫（本名・平岡公威（きみたけ））は一九二五年、祖父、父が高級官僚の家に誕生。

学習院初等科～高等科に在学中、早熟な文才を認められ、天才的作家がいるとうわさされた。

戦後一九四七年、東大を卒業後、大蔵省に勤める。絵に描いたような名家の血筋のエリートコースだといえる。

しかし彼は大蔵省を九カ月で退職。一九四九年二十四歳のとき、初めての書き下ろし長編『仮面の告白』で文壇にデビューした。「この告白を書くことによって私の死が完成する・その瞬間に生が恢復しだした」と若い著者は自作宣伝している。

この後の三島は、まるで計算どおりのようにベストセラーを次々と刊行して有名作家への階段をはせ登ってゆく。

戯曲や新作歌舞伎にも才能を発揮した。作家自身はボディビルやボクシング、剣道まで始め、鋼鉄の筋肉で身体を鎧った。つまり「仮面」は、超人的な意志により強化されていったわけだ。

私には、三島の「仮面」が強化されるほどに「仮面」を内側から支えるはずの屈折された正体が、空虚化していったのではないか、と考えられる。だが、この作家の

『仮面の告白』
解説・佐伯彰一
新潮文庫　1950年6月刊
（本体価格438円）281頁

内面的空虚は、戦後風俗に対してはその実態をますますよく写し出す鏡として作用した。

『仮面の告白』の翌年、相次いで三島は中編小説『愛の渇き』を書き下ろしている。女性を主人公とする戦後的な愛欲ドラマであることが、私が取り上げようと思った理由だ。

舞台は大阪府の片田舎、農村に住宅地が開発され始めた豊中に設定される。登場人物は次の通り。

杉本弥吉……小作農の出から大企業の社長にまで立身出世。引退後は農園を経営する邸宅の主。

謙輔と千恵子……長男夫婦。無為徒食のインテリだが、独り者の父親に寄生。

悦子……次男の妻、この小説の主人公。新婚の夫がチフスで急死したあと、舅に呼ばれて来た。

浅子と子供二人……三男の嫁だが、夫がシベリアからまだ帰還しないので身を寄せている。

三郎、美代……若い農作業員と女中をする少女。

物語は、和服姿の悦子が、大阪梅田のデパートの喧噪の中へ出掛けて、男物の靴下を買うシーンから始まる。それを園丁の三郎に贈る目的は、冒頭では隠されている。

一年前に夫を亡くした悦子は、すでに義父である老人の愛撫に肉体を任せるようになっていた。彼女が淫蕩に見えたとするならば、「溺れる人が心ならずも飲む海水のように」どんな運命をも飲み込んでゆく、泥のようなニヒリズムからだ。

東京での結婚時代、悦子には夫の浮気に翻弄され、二度服毒自殺を図った過去がある。夫が病院に隔離されてからは、死へのプロセスを熱情的に看病した。夫を懐かしいなどと思ったことはない。

その無表情で優雅な貴婦人の悦子が、使用人である貧しい三郎青年に魅せられて、密かな情熱を燃やすことで、ドラマが開始される。

作者はここで、金持ちの主人と妻の倦怠、妻がよろめく純情青年との恋、という西欧小説では定番的な三角関係の構図をそのまま援用している。

『愛の渇き』
解説・吉田健一
新潮文庫　1952年3月刊
（本体価格400円）237頁

しかしこの日本の戦後小説が独特なのは、女主人公と青年の間にどんな心理的交情もあり得ない、断絶を前提として展開されるからだ。彼女は青年の純朴さなどに惹かれていないし、彼の側は主人一家の婦人に対して柔順に接するだけだ。女には何が求められたのか？

象徴的な村の秋祭のシーンが描かれている。悦子はいっしょに来た家族たちから離れ、神社の篝火と闇の中、乱舞する若者らに混じった三郎の背中を追い求めた。

悦子の指はそれに触れたいとひたすらにねがった。……比喩的にいうと、彼女はあの背中を深い底知れない海のように思い、そこへ身を投げたいとねがったのである。……投身のあとに来るものが、今までと別のもの、兎にも角にも別の世界のものであればよいのである。

群衆に押されて、悦子の爪が鋭く三郎の汗に濡れた肉に立った。彼の血が彼女の指の間に滴るのを感じた。

同じ祭の夜、女中の美代が倒れ、美代は三郎の子を妊娠していることが判明した。この若い健康な男女間による自然な成行に、悦子の側からは、嫉妬によるヒステリーが燃え盛ってとめられない。

使用人の男女を結婚をさせようという弥吉の妥当な意見に抗し、悦子は、妊娠四カ月の女中に暇を出し、荷物を背負わせ追い出してしまう。

やがてクライマックスの深夜、悦子は三郎を農場裏の温室に呼び出して、かなわぬ恋の告白をすることになる。晩秋、昼のように明るい満月の下で。

「恕して頂戴。あたくしは苦しんだのよ……」と女は言葉を尽くし口説き続けるのだが、他方若者の側では、彼女が自分を愛しているというそのことが不可解で、途方に迷うだけだ。言葉が逆に、二人を分断する。

諦めて女が立ち上がろうとしたとき、この柔らかい絹に包まれた婦人の身体に、敏捷な若者の体が飛びついて押し倒していた。待ち望んでいた彼の両腕に羽交い締めにされ、もつれ合いながら、なぜか悦子からは「助けて」という矛盾した叫びが発せられる。

嫁の悲鳴を聞き付けた老人がおろおろと駆けつけて来た。

そして逃げ出そうとする三郎に向かって、悦子は、傍らの鍬を振り上げ、首筋を裂き頭蓋を割った。

「何故殺した」と老人は震えながら聞く。

「あたくしを苦しめたからですわ」

「お前は本当におそろしい女だ」

4 「美」の滅亡という逆説

『愛の渇き』の悦子が、愛しい若者と抱き合いながら「助けて」と叫んだのは、彼女の恋においてヴァギナ（女性器）を所有しないからだ。彼女は、彼の死だけをしか受け入れられない。

その点では、『仮面の告白』の青年がペニス（男根）のなき愛を少女に捧げたのに類似する。だがそれならば、二つの小説はセックスの不可能において主人公を男性から女性に互換しただけの、中性小説かといえば、少し違う見方を私はする。

前々回からこの『書評』誌上で私は、武田泰淳や小島信夫という、戦後的な女性の欲望という異性の課題を、正面から引き受けた作家たちを取り上げた。けれど今回の三島において、男と女は、生理的にはむしろ互いを異物として拒否し合うのである。

男女が互いを必要としないというのではない。小説の悦子は、三郎という異性の背中の海に向かってこそ、溺れて果てたいと熱望した。

戦後の高度成長期と呼ばれたものの中身が、男女間の再生産による人口増加を現象したとすれば、それに対して三島は、男女が必ずしも生殖へは向かわない縮小の陰画を描いてみせた。だが、単に資本主義的な欲望の膨張を批判したのではないと思える。

弥吉老人がつぶやいたごとく、男たちを死へと追いやる「おそろしい」女性という新風俗を、仮面の作家は描き出したのかもしれない。

☆

一九五六年三島が三十一歳で発表した長編『金閣寺』は、日本という共同幻想の伝統美を炎に燃やすことで、戦後文学の代表作となった。

五〇年実際に起きた青年僧侶による国宝放火事件をモデルとした、暗く単純なストーリーだ。戦前、京都府の日本海側に貧乏寺の子として生まれた少年が、父の縁故で金閣寺の徒弟僧となり、金閣を妄想の対象としたあげく、戦後に焼失させてしまう結末に至る。

「私」は、吃りで自閉的な内面として設定されている。幼い頃から父に、金閣ほど美しいものはないと聞かされて育ち、超越的な美の幻影が膨らんでゆく。

しかし、徒弟として金閣の隣で住むようになった「私」は、ただの古ぼけて金箔を剥がれた小っぽけな三層塔の現実に幻滅させられる。そしてここでも主人公の内面を救済したのは、『仮面の告白』の場合と同じく、あの大戦争の破滅の予感であった。もしも金閣と「私」が、同時

に焼け滅ぼされるとしたら、永遠の美と自分は同じ彼岸で結ばれることになるだろうと。

けれどもちろん終戦が訪れた。主人公の「私」は金閣という内面的幻滅に始末をつけねばならない。

抽象的な「美」をめぐるこの観念的小説において、評者の私がこだわろうとする具体的描写が二つほどある。

一つは、少年が父に連れられ初めて金閣寺に訪れた際、展示されたガラスケースの中のミニチュアの金閣に目を見張る場面。彼は、この模型よりもさらに極小の小宇宙にこそ、無限に大きく完全な金閣の美があるはずだと妄想する。

二つ目は、母とよその男が交わる現場を少年が夢のように眺めている、夏の夜の場面。田舎寺の一つ蚊帳の中に、母の縁者の男と父母と子が四人並んで寝ていて、父は妻の欲望の地獄を子に見せまいとして、少年の瞼を手のひらで塞ぐのだ。父はその後、肺結核で急逝してゆく。

『金閣寺』
解説・佐伯彰一
新潮文庫　1960年9月刊
（本体価格552円）375頁

母が老婆となり金閣寺に訪ねて来るのを、「私」は嫌悪し続け、許さない。この徹底的な母性拒否の性格（キャラクター）を造形することで、作者の三島は何を示したかったのか？

たぶん、日本の戦後という母性（自然性）が否定されてゆく崩壊の地平にこそ、ミニチュアの金閣の人工美が虚空に向けて屹立されるべきだと、主張されている気がする。

この小説を率直に読んだ感想では、作家は、金閣寺という日本の伝統美が焼失されたことに、嘆き惜しんでなどいない。むしろ、放火を計画し実行に及んだ犯人の心理的な展開にこそ、戦後社会のリアルを描出している。

放火後裏山に逃げ出した青年に、明日を「生きようと私は思った」と語らせて、小説は終わる。明日の戦後社会においては、あのミニチュアの金閣を拡大したような、新しい金ピカに輝く金閣寺が、ただの観光名所として再興されることになる。この「仮面」の金閣寺という美の空虚こそが、戦後日本に対立した、三島からの反語（アイロニー）だ。

参考文献・村松剛著『三島由紀夫の世界』平成二年新潮社刊、猪瀬直樹著『ペルソナ　三島由紀夫伝』一九九九年刊文春文庫版

（いまむら　ひでお・関西大学卒業生）

マルクス主義の原則を索めて

――武井昭夫『〝改革〟幻想との対決』を読む

吉田　永宏

（カット・一瀬優紀）

（1）

武井昭夫『〝改革〟幻想との対決』（二〇〇九年十月刊）は、全4巻から成る『武井昭夫状況論集（1980～2009）』（スペース伽耶刊）のいわば第一巻に当たるもので、「改憲阻止、そして反撃に転じるために」とのサブタイトルを持っている。因みに続刊されるタイトルを掲げておくと、順に『1994～2001　闘いつづけることの意味』、『1980～1993　社会主義の危機』、『1980～1987　原則こそが、新しい』である。

『〝改革〟幻想との対決』には「まえおき」と題された一文が付されており、実は別刷りにされたこの「まえおき」が刊行前にわたし宛てにも著者から送付され、既にそれを読んでいたわたしには全4巻のこのシリーズを敢て現時点で世に問おうとする著者の決意とも呼ぶべき意図が痛い程に感じ取られていたのである。この重要な主旨を持つ「まえおき」をまず紹介しておきたい。

一九六〇年の日米安保条約改訂反対闘争に示された戦後日本の反体制運動のエネルギーについて、〈米帝国主義の支配と支援のもとに再建されてきた日本独占ブルジョワジーを、それなりに震撼させた。〉（傍点ママ）と、〈それなりに〉との修飾語を付しつつ評価した上で、武井昭夫は、〈所得倍増を掲げた経済高度成長政策に始ま

り、七〇年代から八〇年代初頭にわたる技術革新に支えられた経済・社会の構造転換は、国際的には最大限利潤を追求する資本間の競合力増強をめざしつつ、国内的には、抵抗勢力としての労働者人民の反体制エネルギーの抑圧―削減―消滅を図る政策の着実な遂行であった。〉と支配体制の権力の意図するところを冒頭で明確に位置づけて、この時期の政権担当者としての中曽根内閣の登場と三次にわたる政策――国鉄分割民営化を軸とした行革・合理化攻撃――は、言わばその仕上げであり、八九年の総評解体・連合制覇がその表徴であったと、反体制の側の後退戦であったことを明瞭にする。

そして、その動向が、〈八九―九一年に顕現したソ連―東欧の社会主義体制の倒壊、中国・ヴェトナムの市場経済への転換という世界情勢の大変転と、また見事に対応していた〉と見、この七〇年代、八〇年代の世界の歩み、更に九〇年代から二一世紀の今日までの時代の歩みを、武井は〈一貫して「地獄への道」と観じてきた〉と言う。〈思い上がった安倍晋三の「戦後レジームからの脱却」といった露骨な改憲実施宣言、加うるに中曽根――小泉の超反動コースの結果の酷(むご)たらしい出現〉、これらの動向が、呆けがちであった人民諸階層の尻を蹴り上げたと武井は断を下すのである。

大急ぎでここで著者・武井昭夫（たけい　てるお）について注釈的紹介を施しておかねばなるまい。武井は、一九六九年、日本の労働者の階級意識の再形成を目指すところの運動団体「活動家集団　思想運動」の結成に参加。その中心的存在として、新聞『思想運動』、雑誌『社会評論』に於いて政治・思想・文化の各分野にわたる批評活動を展開しており、現在、同会の全国運営委員会責任者の任にある。東京大学在学中の一九四八年、全学連（全日本学生自治会総連合）結成に努力し、その初代委員長として反戦・平和運動、学生の権利擁護等の大衆運動に献身。一九五二年に中野重治が書記長、花田清輝が編集長であった新日本文学会の常勤編集部員となり、のちには新日本文学会の事務局長、編集長を歴任するなど一貫して反体制の立場で現実変革の活動を続けてきた人である。

その武井の眼に映じた「地獄への道」は依然として続いているという。自らの思想的立場から、〈日本の労働者人民の反体制運動の弱点――というより致命的欠陥――への指摘とその克服の道〉を、武井が刻々の「地獄への道」の記録に繰り返し書き込み、それを改めて時系列に並べて上梓したのがこの『状況論集』全4巻というわけである。

繰り返すが、〈戦後の反体制の闘いの正しい総括とその継承の不足が、こんにちまでの政治状況を許してきた〉というのが武井の視点である。二〇〇九年九月二日の日付を持つこの「まえおき」は、〈わたしの考え、時代への考察はこんにちの支配的思潮とはまったく相容れざるもの。しかし、この頑固な少数意見の存在を主張したく、敢えて上梓した次第。〉と結ばれている。

『〝改革〟幻想との対決』の中から幾つかの論文を取り上げて以下に紹介してみよう。

（2）

「〝改革〟幻想との対決――労働者人民の闘う意識と態勢の確立をめざして」（『思想運動』第六五六号、二〇〇一年八月一日・十五日付）の冒頭で武井は、小泉政権の登場を指して、〈日本国家の公然たる〝帝国〟への復帰の志向を決定的に示した〉ものと位置づけている。その政治路線は〈グローバル化時代に対応する日本の〝普通の国家〟＝軍事大国化への急進の烽火（のろし）〉に他ならないと断定しているのであるが、これは帝国主義化の道を邁進し続けてきた戦後の資本主義国家体制が一層明確な段階に突入したことを意味する。新ガイドライン体制の確立というその対外路線は〈米政権と連携しての帝国主義的な侵略戦争・干渉戦争への参加態勢の強化〉の謂である。戦後四十有余年を経てその旗幟を鮮明にしたのである。

国際情勢に目を転ずると、〈世界の経済体制は総体としてみれば新たな資本制の一元支配の時代に転換し〉、それは、〈米帝国主義を先頭とする世界帝国主義と多国籍企業によるグローバリゼーションの展開、換言すれば新自由主義を梃子（てこ）とした独占ブルジョワジーによる残虐きわまりない世界支配の時代の開幕〉ということである。わたしもまた武井の国際情勢・国内情勢に関する基本的認識に同意する。

しかしその一方で、世界資本主義はその陥っている全般的危機から脱したわけでは決してなく、二〇世紀末に於ける一時的勝利は帝国主義間の新たな矛盾をより激化させ、独占ブルジョアジーたちの新自由主義支配に抗する世界人民の闘いを噴出・拡大させずにはいないとし、キューバを先頭とする中南米（まさに米帝国主義のお膝元である）諸国の人民の闘いを高く評価する。〈例えばキューバの革命的社会主義は、二〇世紀末一〇年の危機をくぐり抜けて生長を続けている。ただ生き抜くのではなく、その存在と活動は中南米地帯全体をおおうようにいま広がりつつある反米反帝の人民運動やその政権との連帯・連携を強めている〉。

『〝改革〟幻想との対決』所収「ポピュリズムの大波に乗った小泉政権」（『思想運動』六五二号）に於いて、小泉政権の登場の意味について、武井はそれが、経済危機の進行と深化に喘ぐ独占資本がその危機を労働者人民の肩に乱暴極まるやり方でまるごと転嫁するものであり、それ以前の自民党の揺れ動いていた経済政策をより露骨に且つより徹底して独占資本擁護に傾斜させたものに他ならないことを喝破していたのである。

キューバの革命的社会主義を先頭とする中南米に於ける反米反帝の動きに対する武井の評価については前に見てきた通りであるが、武井によれば〈西欧の労働者人民は、資本の危機の全面的転嫁に対して、それなりに力を尽して権利の擁護と防衛の闘いを展開してきた。（略）革命へ進む態勢は執りえないまでも、社民政権の資本擁護への傾きを下から突き上げる闘いをねばり強く進めている〉という。

武井たちの思想運動は、世界の人民を支配しようとする今日の帝国主義の主軸と主方向がどこにあるかを分析し、そこからこれと闘い抜くために次の三点が重要であると述べる。第一に、〈世界の労働者人民のインターナショナルな戦線がどのように再編されつつあるかを見るとともに、それと連帯する行動〉に立ち上がること。第二に、〈労働者人民の前衛＝先頭部隊の形成〉、〈その一翼を担う主体として自己の隊列の質的量的強化〉を進めること。しかもそれが〈人民攻撃への反撃のなかで進められるべきこと〉。第三には、〈帝国主義勢力による世界人民支配のためのグローバリズムの展開のなかでの日本帝国主義への要請にも応えつつ、また日本の多国籍企業自体の主体的要請にも基づく憲法改悪の断固阻止を目指して、人民の統一戦線の形成〉（傍点・引用者）を主張しているのである。特に、〈これらの課題追求を、いまさまざまに分散して闘われている――例えば反戦・反基地・反核・反原発、自然保護・環境保全、各種差別反対、第二次大戦の戦争責任追及、等々の――切実な闘いに参加し、その取り組みのなかから、これらを基礎として、さらにこれらを統合された反戦・護憲の統一戦線にまとめあげていくことをめざしたい〉と述べていることに賛意を表したい。

（3）

二〇〇一年九月十一日、ニューヨークの世界貿易センタービルとワシントンの国防総省の建造物（ペンタゴン）に米民間旅客機三機が突入するという大惨事を伴った「同時多発テロ」が発生し、ブッシュ大統領が直ちに

「対テロ総力戦」を宣言した。所謂「九・一一事件」と呼ばれるこの事件が誰によって計画されたかは現在に至るも不明のようであるが、政治的テロリズムによって惹起されたものであることは確かであろう。

数千人の人命が失われたことに対する憤りもさることながら、TV報道の画面でアメリカ市民の大群集が手に手に小さな星条旗をうち振りながら「USA！ USA！」と大唱和するのを目にして、そのナショナリズムの強力さに受けた衝撃の大きさをいまにわたしは忘れ得ないでいる。小さな星条旗が全米で瞬く間に売り切れ、生産が追いつかなかったという。

その九・一一の同時多発テロに対する「報復」として米英軍などがアフガニスタン攻撃を開始したのは、一カ月も経っていない十月七日のことである。十一月十三日にはアフガニスタンの北部同盟が首都カブールを制圧し、十二月二十二日にはアフガニスタン暫定行政機構が発足するという手際の良さである。

同時多発テロ発生の直後、武井が「九・一一事件について考えるべきこと――米帝の『戦争』計画阻止には反戦平和の大衆行動で！」（『思想運動』第六五八号・二〇〇一年九月十五日付）を書いている。冒頭に付されたゴシックによる見出しに〈われわれは政治的テロルに反対する〉とあるように自らの政治姿勢を明確に示した一文である。まずその一部を次に引いておく。

> われわれはいかなる政治的意図、いかなる目的を掲げるものであろうと、無辜の人命を犠牲にしてかえりみないテロリズムの行為に反対し、これを厳しく糾弾するものである。正当な政治的要求は正しい手段によって求められねばならない。いかなる切実な目的の追求といえども、非人道的な手段の採用を正当化し、その誤りを浄化するものではない。

右のようにまず政治的テロルに反対するという自らの立脚点を判然とさせた上で、〈事件悪用の「戦争」計画を阻止しよう〉との訴えを展開する。

日本のTVの映像から受けた印象をわたしは先に記しておいたが、武井は、〈米国では、それら（自国TVによって繰り返される煽情的コメントを伴っての映像等――引用者）によって煽られた米国民の憤激をいまイスラム教世界に向け収斂しつつある。とりわけ、一九九一年のいわゆる湾岸戦争による中東アラブ世界に対する米帝国主義の大破壊活動に反対して、その報復を表明してきたと伝えられるウサマ・ビン・ラディンのグループを、

正確な証拠も提示されないまま犯罪の首謀者と認定し、これへの攻撃がよびかけられている。〉と述べた上で、〈米大統領ブッシュがこのテロ事件を米国および米国民に仕掛けられた「戦争」と称し、（略）マスコミ報道に乗じて「報復」を強力に国民によびかける一方、世界の同盟諸国にむかって「戦争」への協力を押しつけつつ、これに疑問と批判を持つ国々への恫喝・脅迫をくりかえしはじめていることである。〉と事態を糾明し、〈われわれはそこに、この事件を悪しき政治計画に利用しようとする帝国主義の側の恐るべき陰謀の影とまさに新たな「世界戦争」の危険を見ないわけにはいかない。〉と警鐘を鳴らすのである。

武井がこの九・一一事件を通して主張したかったのは〈事件発生にいたる経過を、つねに合わせ見る歴史的観点を持たねばならない。〉ということであり、〈発生した事件を、孤立した特殊な事例として見るのではなく、その時代環境全体の中で捉える複合的な視点を持つべきである。〉との思考態度であろう。〈いまこそ、「理性」が人びとのものとならねばならない。情感的煽情は排さるべきである。まず、取り出されるべきは「歴史意識」である〉。この観点に立つならば、〈ブッシュによって措定されているイスラム原理主義者の「犯罪」なるものの背景に、あるいはその裏側に、しばしば米帝国主義の対外政策、とりわけ中東政策との角逐が複雑に絡んでいたこと〉を想起するのはさ程困難ではあるまい。

いまや反米テロの首魁としてまさに「国際手配」中の人物、イスラム原理主義者ウサマ・ビン・ラディンは、もともと米帝国主義者が反革命のために育成した人物群の一人であったという。彼はイスラム原理主義の一派に属してソ連軍のアフガニスタン進駐に反対してのゲリラ活動に参加していたが、彼の属していたグループは、米提供の武器で武装され、米国からの資金に援けられてパキスタンに基地を置く部隊の一つであった。タリバーンは原理主義勢力の後身に当たる存在と言ってよいものであり、これこそが米ーパキスタンで編成・訓練され、アフガニスタンに送り込まれたゴリゴリの反共・イスラム原理主義集団に他ならず、そのビン・ラディンがいま、反米のテロ組織者として立ち現われたというわけである。〈イスラム原理主義の政治にも、一筋縄ではいかぬものが潜んでいる〉というわけである。

（4）

「歴史と現状認識の再認識、および自己革新の課題」（『会報』第六四二号・二〇〇四年十二月二十七日付）は、

〈思想運動〉第三六年度第二回全国運営委員会における問題提起との説明の付されたものである。

ここで一番目の問題として武井は、世界情勢がこんにちみられるような、平和の危機の深化、人民の権利への圧迫の強化、途上諸国人民のいっそうの窮乏化――言葉を替えれば〈帝国主義の横暴なグローバル支配と搾取〉が急展開する時代の開始は、〈二〇世紀の末にソ連・東欧の社会主義世界体制が崩壊させられるという状態から生じた、という認識〉に立ち、〈この状況の出現は、まさに、第二次大戦後に築かれた社会主義世界体制――それをどう評価するかにかかわりなく――の崩壊から発している。〉と明言している。帝国主義者は、今日の支配的状況が九・一一から始まっているかのように説いているが、しかし現在の状況は、九・一一に象徴されるテロリズムによる復讐という人民の一部に存在する闘争形態が惹起したものでは決してなく、全くの逆である。〈帝国主義の暴虐がテロリズムをひきだしている〉のであり、その状況の根本にあるのは、〈社会主義世界体制の崩壊と、それに伴う帝国主義の一層の狂暴化、そして一時的とはいえ、それへの反帝闘争の世界的弱体化〉（傍点・引用者）にこそあると指摘しているのである。〈社会主義の後退は世界の人民の闘いにもその陰を色濃く落としている〉との受け止め方がそれである。

武井昭夫を代表者とする活動家集団思想運動は、会創立以来ここまでの三十五年にわたる活動の中で、〈現存する社会主義世界体制の内に弱点や欠陥があってもその存立を支持しつつ、弱点や欠陥はこれを克服して体制を強化するために、これと連帯して闘ってきました。〉と明言する。この、現存する社会主義世界体制に対する認識・評価とそれに基づく活動の方向が、形だけは勇猛でしかし労働者人民との真の連帯や責任をなおざりにしたまま泡の如くに消え去った凡百の所謂新左翼の集団と大きく異なる所であろう。〈連帯といっても、これはわれわれの側からの一方的なもので、われわれはわれわれの思考と実践のなかでこれを追求してきたわけです。〉と稍控え目な条件を付与した上で、武井は〈われわれは、たえず世界社会主義革命への潮流とみずからを結びつけ、インターナショナリストとして平和と独立、人権と民主の闘いの発展をめざしてきたわけです。〉と証言するのである。

但し、〈社会主義の体制にも、またそれとつながる勢力にも、さまざまな欠点や弱点はある。その歴史にもそれらの痕跡がある〉ことを十分に知り認め、〈その上でなお、現在ある社会主義陣営と連携し共に闘う必要性

を、われわれは断乎として確認し実践してきました。〉との証言に至るのである。そして次に引くように帝国主義者たちの積極的な攻撃姿勢を指摘し、そこから社会主義体制側の崩壊に至る道筋を明らかにしようとする。

世界の労働者階級と人民諸層が社会主義について失望し社会主義をその理想と理論もろとも投げ捨てることを、必死に願望しそのように人びとを誘導してきたしいまも誘導しているのが、マスコミの主導権を握っている帝国主義者たちです。（略）

帝国主義の側は、一九七五年以来毎年、G8として保たれている共同の戦略会議を開いてきたし、西のNATOと東の日米安保体制にみられるように軍事的にも共同してきたし、それに加えて七〇年代後半から八〇年代にかけての技術革新によって社会主義との経済競争における一定の優位をつくり出してきたのだが、かれらは刻々と進行する状況のもとで、矛盾を含みながらもつねに次の時代への対策を共同で講じてきたし、いまも講じている。（傍点・引用者）

それに対するに社会主義陣営の側はどうであったのか。

社会主義陣営は、六〇年代に発してその中葉から顕在化した中ソの対立を激化させ――それはついに全世界の共産主義陣営を真っ二つに割ってしまった――その対立は、あらゆる国家の革命勢力、平和と民主と独立諸運動に分裂をもたらしていった。共産主義運動の全世界的規模での分裂は、労働者・勤労人民の大衆闘争、各分野の市民運動、途上国の反帝独立闘争をも分裂させた。一口に言えば、まさにグローバルな階級闘争における支配階級と被支配階級間のこの差が、三〇年の間に決定的なものとなり、やがて九〇年代初頭の社会主義世界体制の崩壊につながり、それを導き出したのです。

長い引用になってしまったが、武井のこの確認を出発点の礎石に据えねばなるまいとわたしは考えている。

「歴史と現状認識の再確認、および自己革新の課題」が、思想運動の運動体内部に向けて武井の発信した一文であり、われわれ読者は当然それを前提として読まざるを得ないが、自己批判と相互批判の重要性に関して武井が「楕円の磁場」なる概念を持ち出していることが統一

戦線を追求する上でわたしにとって非常な関心をそそられざるを得ない。

武井はまず、〈運動体としての結合は、さまざまな楕円の複合的な結合であることが理想〉であると述べた上で、〈楕円には二つの中心点がある。そこには強力な緊張関係があるから、楕円の磁場が形成できる。重要な問題に、ときには二つの中心点に立っての緊張した協働が成立していいわけです。ときには、いくつもの楕円的な磁場をつくって真剣に討論しながら、もうひとつ高い次元に運動を持っていく。それによって運動の場も広げていく。〉――まさに弁証法そのものと言ってよい。イラク反戦や憲法問題で世話人として活動している「WORLD PEACE NOW」の高田健の〈共闘の原理として多中心点の同心円になることが必要だ〉との意見を批判して、武井は、〈「同心円」を追求していったら、統一戦線はできない。必ず排除の論理が働くことになるからです。もちろん、一致点があるから、共闘も協働も成立するのですが、違うものが一緒にやるには、違う点も認め合わなければならない。ダレた馴れ合いではなく、対立点では緊張したやりとりを含めて、その上で協力していく態勢が肝要なのです。〉と言い切る。相互の相異点を明瞭にした上で協働の一致点を求めて行く。統一戦線を目指すに当たっての原理原則であろう。〈日本国憲法の中心におかれている平和主義・基本的人権・主権在民という三つの原則を小泉は全部ぶっ壊す。（略）これに対置するわれわれの共同の目標は、九条をはじめとする憲法三原則の擁護、その実現の闘いで〉あり、〈その中でというか、その上でというか、わが会は、二一世紀にもう一度、新しい社会主義世界革命の地平を切り拓くことをめざす〉。これが武井たちの、弁証法に裏打ちされた政治理念である。

（5）

横田三郎（ドブロリューボフ翻訳者）が武井のこの書についての読書ノート「真摯で誠実な自己批判に則った言行」（『社会評論』第一六〇号・二〇一〇年一月）に於いて、〈階級や階級意識については、何をいまさら、と考える向きがあるかも知れないが、日本の現状から見れば、極めて重要だと私は考える。〉と記していることに同意しつつ、ここで横田の指摘に触れておきたい。

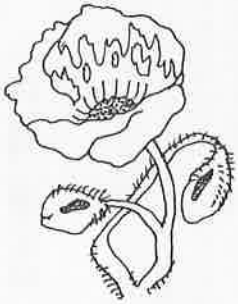
日本の農民の階級規定について、〈敗戦から数年後だったと思うが、共産党の、主として学生たちからなる山村工作隊が田舎で真剣に活動していたにもかかわらず無残な失敗をし、彼らの多くが転向したり、腐ったりし

た〉歴史を指して、横田は、〈党の頭――首脳部――の方が先に腐っていた〉と言い、〈山村工作隊を送り出した首脳部は農民がすでに生産手段を所有していて、プチブルになっている事実を見ていなかったのである。〉と述べている。五〇年代の初め頃の歴史的事実として、農民が大小の差異はあるにせよ土地所有者として変遷し、当然のことその意識もまた変化して行ったことを具体的に説明した上で横田は、〈だが、現在は当時よりも状況は一層悪くなっている。共産党だけでなく、共産党を批判する労働者たちの多くが階級とか階級意識などを真剣に問題にはしなくなっているからである。〉と言い切っている。重要な課題であること無論である。

『〝改革〟幻想との対決』所収の多くの論文で、武井は日本共産党に対する鋭い批判を浴びせている。是非触れたかったが、既に紙数も尽きてしまった。も早や他日に譲るの他はない。

（よしだ　ながひろ・関西大学名誉教授）

『"改革" 幻想との対決』
―武井昭夫状況論集
1980～2009―
スペース伽耶
2009年10月刊　476頁
本体価格 3,200円



（カット・一瀬優紀）

図書館資料紹介 ⑳

浅見絅齋著『靖獻遺言』

渡部 晋太郎

岩波文庫版
『靖獻遺言』

埴谷雄高の『死霊』第三章「屋根裏部屋」において、登場人物である黒川建吉は首猛夫との対話の中で歴史についてこう語っている。

――そう、私達の歴史は、逸脱の歴史です。

そして、暫く対話が続いた後、黒川は歴史の変革について次のように説明する。

歴史のながれのなかへ身を横たえた近代人のこのイロニイはそれ自身ひよわく、しかも、美しい。けれども、そんなものもやがては消えてしまうのです。この水流のなかには、あらゆる馬鹿げた、或いは、美しい声があとかたもなくのみこまれてしまう。だが――大きな石が落ちてくると、その流れ自体がすっかり変ってしまうのです。私達の歴史はそんな例に欠けてはいない。それは、そのひとが出てこなくても、そのときの社会的条件は必ずそれと同じような人物を生んだといったようなものではない。そのひとが現われて、どっかとそこに坐ったために、ただそのことのために、人類の全歴史が変ってしまったというような場合があるのです。そのひとの存在のみによって、それ以後の歴史の流れが一変してしまうのです。

この言葉を受けて、首猛夫は「それ以後の全歴史を変えてしまったというようなひとは、いったい、誰だろう?」と質問し、幾人かの名前が上がった後、「その次は君だろうか?」との問いに対して、黒川の口から次のような中二病全開のセリフが飛び出すのである。

――そういっても好いでしょう。一般

慶應元年刊
『靖獻遺言』

的にいって、私です。

――ふむ、私一般がそれ以後の歴史を一変させるのだって……？

――そうです。彼等からの迷妄の歴史はそこで終らねばならない。彼等からの迷妄の歴史は、そこでまた転回するのです。

普通、歴史を変え得るのは政治的指導者やカリスマ的宗教家等のいわゆる偉人と呼ばれる人達であると考えられており、特別な地位も無く力も無い市井の人間が先のようなセリフを発した場合、それは単なる電波発言と見做されよう。だが、豊富な歴史の蓄積のある社会では、レバレッジを効かせることにより一個人が歴史に対して大きな影響を及ぼすことはしばしばあり得た。そして、日本においては、浅見絅齋にその最大の事例の一つを見出すことができるのである。

ここで日本の歴史を簡単に振り返ってみると、現代の日本人にとって最も参考となる史書は嘉永元年（一八四六年）に著された伊達千広の『大勢三転考』である。というのは、是非善悪の判断を加えず日本の歴史をありのままに見、時代区分を行ったこの書の史観は、『日本人とは何か。』（ＰＨＰ研究所、一九八九年）（祥伝社、二〇〇六年）で山本七平も指摘するように、「当時としてはまことに独創的であり、それなるがゆえに現代的だからである」。

この『大勢三転考』の中で、伊達千広は徳川時代に至るまでの歴史を「骨の代」「職の代」「名の代」と三つに区分しているが、これは現代風に言い直すと「氏族制の時代」「律令制の時代」「幕府制の時代」となる。そして、その内実により更に敷衍すると、その三つの時代は「古代固有法文化の時代」、「シナを規範とした継受法文化の時代」、「新固有法文化の時代」とすることができるであろう。

では、ここでこの『大勢三転考』の史観を現代及び未来にまで適用するとどうなるであろうか？　その場合、まず、明治維新以降の時代をどう考えるかという問題が生ずるが、帝国憲法が採用されていた戦前であれ、日本国憲法が採用された戦後であれ、いずれも西洋を範に採りつつ近代法を導入した時代と見

慶應元年刊
『靖獻遺言』

做することができる。すなわち、明治維新から現代までは「西洋を規範とした継受法文化の時代」と考えられるのである。すると、伊達千広の史観が明治維新以降の時代をも視野に入れたとするとその内容は「大勢四転考」となり、仮に『大勢三転考』の呼称に則って明治以降の時代を呼ぶとするならば、主権者あるいは象徴として天皇を中心に据えた憲法が採用されていることから「帝の代」とでも名付けられるものになるだろう。従って、現代は「帝の代」という「西洋を規範とした継受法文化の時代」に属していると考えられるわけであるが、いかなる時代もいずれ終焉を迎えるとするならば、来るべき新しい時代は「大勢五転考」という考えに基づくと、新たなる固有法文化の時代、換言すると「新々固有法文化の時代」となるであろう。

ところで、「未来は神の御手にある」という言葉があるが、これは「人間は直接未来に触れることはできず、ただ言葉による構成しかなし得ない」との意に解釈することができる。すると、「大勢五転考」の史観に基づいて新たなる時代を迎え、現実的な対処をするにあたっては、その時代像を言葉を用いて具体的に描かねばならないことになるが、その際必要となるのが過去の座標である。歴史上の座標を灯台に見立て、その離れゆく灯台を計ることによってのみ、現在及び未来の歴史的位置が確認でき、時代の言語的再構成が可能となるからである。そしてこれは、未来に直接触れ得ず、ただボートを漕ぐように後ろ向きに未来へ進んでいくことしかできない人間がなし得る最も有効な方法の一つでもある。

さて、「大勢五転考」の史観に基づいて新たなる時代を迎えようとする場合、直近の座標にあたるのが「名の代」と「帝の代」の転換点に位置する明治維新である。では、この明治維新はどのようにして成し遂げられたかというと、それは単に黒船の来航といった外圧だけでは説明できず、その外圧が幕藩体制の強化ではなく倒幕へと作用する思想の介在があったからに他ならない。そして、三上参次博士が『尊皇論發達史』(冨山房、昭和十六年)で指摘するように、「石油に火をそゝぎし如く」倒幕への発火点としての役割を果たしたのが淺見絅齋の『靖獻遺言』なのであった。

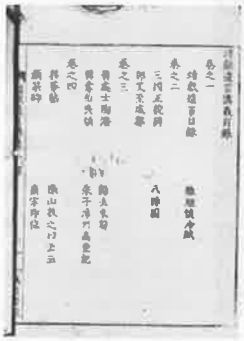
近藤啓吾著
『靖獻遺言講義』
（国書刊行会）

『靖獻遺言』は朱子学の一派である山崎闇斎学派の崎門三傑の一人に数えられる淺見絅齋（名は安正、小字は重次郎、絅齋は号）が貞享四年（一六八七年）に上梓した書である。その内容は、楚の屈平（屈原）、漢の諸葛亮（孔明）、晉の陶潛（陶淵明）、唐の顔真卿、宋の文天祥及び謝枋得、処士劉因、明の方孝孺の八名の人物の言行と参考とすべき事跡を集めたもので、この書によって淺見絅齋は朱子学的正統性を絶対とする者の規範を具体的に提示したのであった。なお、淺見絅齋は元禄元年十月から翌二年閏正月にかけて『靖獻遺言』の講義を行い、その講義は『靖獻遺言講義』と題して刊行されている。

明治維新を理解するための最重要文献であるこの『靖獻遺言』は、昭和十四年に岩波文庫の一冊として刊行されたが、現在は新刊書としては入手できない。また、近藤啓吾氏による注釈と口語訳を収めた『靖獻遺言講義』が昭和六二年（一九八七年）に国書刊行会から発行されているが、これも現在は新刊としては入手不可となっている。従って、その原文にあたるためには古書を入手するか図書館蔵書を閲覧するかのいずれかとなるが、幸い、関西大学図書館は岩波文庫版を除く各種の『靖獻遺言』及び『靖獻遺言講義』の活版本を所蔵しており、利用者への閲覧に供することができる状態となっている。のみならず、関西大学図書館は中村幸彦文庫の所蔵資料として両者の木版本を有しており、特別閲覧許可願の手続きを行いさえすれば、慶應元年（一八六五年）に風月堂から刊行された『靖獻遺言』、そして江戸中期に同じ風月堂から刊行された『靖獻遺言講義』を、吉田松陰等の維新の志士が読んだほぼ同等の版で閲覧することも可能である。

今年、アメリカで五〇〇行以上の銀行が破綻するとの予測が連邦預金保険公社のレポートでなされているように、二〇一〇年は間違いなく激動の年になるであろう。そのような激動の時代にあっては、人々の不安につけこんで『日米同時破産――中国覇権による恐ろしい時代がやってくる』（ダイヤモンド社、二〇〇九年）や『あと5年で中国が世界を制覇する』（ビジネス社、二〇〇九年）等、危

江戸中期刊
『靖獻遺言講義』



江戸中期刊
『靖獻遺言講義』

機を煽り、「バスに乗り遅れるな！」と唱える〝未来もの〟がますます幅をきかせることになる。そうした状況下で冷静に未来へと対処するには、前述の歴史の座標軸を活用する方法が有効ではあるが、もう一つ有効なのは、その社会が抱える課題を座標軸とする方法である。

測量学においては前方交会法という測量方法が存在する。この前方交会法では、二つの既知点に平板を据え、各点で求点を視準して方向線を書き、その交点を求めて求点の位置を決定する。ただし、二方向線は平行でない限り平板の標定に誤差があっても必ず一点で交会し、その誤差の有無を知ることができないので、図根点を決定する場合など正確な位置を定めることが必要な場合には、三既知点から視準線を書く。すると、誤差が無い場合には三方向線が一点に会するが、通常は誤差が生ずるため示誤三角形と呼ばれる三角形がつくられる。そしてこの示誤三角形に内接する円を作成し、その内接円の直径が許容限度のときには、その中心を正しい位置とするのである。

では、この前方交会法を戦後レジームと呼ばれる敗戦の結果生じたこの日本社会を把握するために応用するとどうなるか？　まず最初に平板を据える既知点、すなわち平板の整置位置を決めなければならないが、その場所として最も適していると考えられるのは次の三つである。

（一）国語国字問題
（二）憲法問題
（三）東京裁判史観

そして、上記三つに対応する正確な座標をそれぞれ一概念で表すと

（一）正統表記
（二）日本国憲法無効論
（三）パル判決書

となり、更にそれを具体的に確認する文献をそれぞれについて挙げるとすると、（一）については福田恆存著『私の國語教室』（新潮社、一九六〇年）（文春文庫、二〇〇二年）、（二）

明治13年刊　『靖獻遺言』

明治13年刊　『靖獻遺言』

については日本国憲法の原点であるいわゆる〝マッカーサー草案〟の原文及び翻訳を含む『日本国憲法制定の過程――連合国総司令部側の記録による――　Ⅰ　原文と翻訳』（有斐閣、一九七二年）、（三）については『共同研究　パル判決書』（講談社学術文庫、一九八四年）となるであろう。

さて、上記三つの課題はいずれも「正統性」の問題を内包しているが、その内、特に『靖獻遺言』との関連が深いのは憲法問題である。例えば、憲法学者で元枢密院議長でもあった清水澄（しみずとおる）博士は、日本国憲法が施行された年である昭和二十二年九月二十五日に次のような遺書を認（したた）め、熱海の錦ヶ浦で投身自決を行っている。

自決ノ辞

新日本憲法ノ發布ニ先ダチ私擬憲法案ヲ公表シタル團体及個人アリタリ其中ニハ共和制ヲ採用スルコトヲ希望スルモノアリ或ハ戦争責任者トシテ今上陛下ノ退位ヲ主唱スル人アリ我國ノ將來ヲ考ヘ憂慮ノ至リニ堪ヘズ併シ小生微力ニシテ之ガ對策ナシ依テ自決シ幽界ヨリ我國體ヲ護持シ今上陛下ノ御在位ヲ祈願セント欲ス之小生ノ自決スル所以ナリ而シテ自決ノ方法トシテ水死ヲ択ビタルハ楚ノ名臣屈原ニ倣ヒタルナリ

元樞密院議長　八十翁　清　水　澄

法學博士

昭和二十二年五月　新憲法実施ノ日認ム

このように、清水澄博士の自決には屈平（＝屈原）を取り上げた『靖獻遺言』の巻之一「離騒懐沙賦」の影響が見て取れるのである。

また、占領下においてGHQによる憲法草案を基に作成された日本国憲法は、徳川幕藩体制と同じく正統性の問題を根本的に抱えているが故に、正統論の古典である『靖獻遺言』はその重要性が増していると考えられる。かつて小林秀雄は再軍備問題について次のように語った。

敗戰といふ大事實の力がなければ、あゝいふ憲法は出來上つた筈はない。又、新しい事實が現れて、これを動揺させな

いとは、誰も保證出來ない。戰爭放棄の宣言は、その中に日本人が置かれた事實の强制力で出來たもので、日本人の思想の創作ではなかつた。私は、敗戰の悲しみの中でそれを感じて苦しかつた。（「感想」『小林秀雄全集』第十巻（新潮社、平成十四年）所収）

すなわち、『靖獻遺言』は「事實の强制力で出來た」幕藩体制を「思想の創作」により変え得た書であると考えられるのであり、その意味で日本国憲法の体制下において生きる日本人にとっては、『靖獻遺言』は生きた古典としての役割を果たし得る書だと言えるのである。

もっとも、内容が良ければたとえ外国人の手による憲法であっても構わないといった意見も当然あり得よう。ただその場合、『賭博黙示録カイジ』の主人公、伊藤カイジの次のセリフを口にする可能性が生じることを覚悟しておかねばなるまい。

この勝負は
重要だと……
大事な勝負だと……
わかっていながら
なぜ自分で考えなかった……？
決めなかった……？
なぜ他人に……

その行く末を委ねちまったんだ……！

京都大学文学部東洋史学科を卒業し、防空兵として入営して二十三歳で殉職した櫛田陽一は、昭和十七年一月二十九日の日記に次のように書いている。

最後の問――歴史とは何であるか。（『きけわだつみのこえ　日本戦没學生の手記』（東大協同組合出版部、一九四九年）、四三頁）

この問いに対して、例えば『死霊』の登場人物である黒川建吉のように答えることも一つの回答ではあるだろう。だが、現在生きている社会が歴史の所産であり、それを知ることによってその社会自体に対して影響を及ぼし得ることから、先の問いに対しては次のように回答することにしたい。それは「歴史とは力である」という回答である。そして、その証拠を求められた場合には、日本史を、引いては世界史を変え得た『靖獻遺言』を提示することによって挙証責任を果たしたいと考えるのである。

参考文献

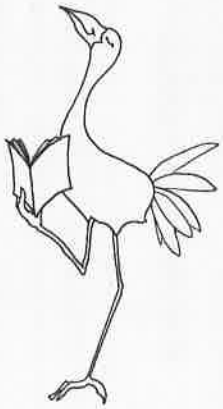
塞神雹夜著『中二病取扱説明書』（コトブキヤ、二〇〇八年）
近藤啓吾著『増訂　淺見絅齋の研究』（臨川書店、平成二年）
山本七平著『現人神の創作者たち』（文藝春秋、昭和五十八年）
丸安隆和著『大学課程　測量（1）』第2版（オーム社、平成三年）

（わたべ　しんたろう・関西大学事務職員）

旅と本・Ⅱ

アジアの本屋めぐり
日常生活の息吹を体験

下垣和美



（カット・槇原美奈）

✦宿のない恐怖心

旅の必需品のひとつがガイドブックである。何度かガイドブックを持たずに旅をしたが、初めて訪れた上海で宿がなく、ひやっとしてから手放せなくなった。そのときは夜の八時半ごろ上海に着き、地図を頼りにメモしておいた宿に行った。受付で宿泊料の安いドミトリーが空いているか聞くと「ない」とそっけなく言われた。他に空いている部屋はないかと聞くと大変面倒くさそうに一万円の部屋なら空いていると言う。宿泊代の予算は大体五百円前後である。他の宿を探すしかないのだが、調べていなかった。上海は安宿が密集していないのでどこを探せばよいのか見当もつかない。どこでも良いのならば、駅前に住宿と呼ばれる宿があるが外国人はあまり利用しないので何かあってからでは遅い。重い荷物を持ち途方に暮れてロビーでどうしようか困っていると、宿の二階から日本人の男性が下りてきた。これを逃したら宿が見つからない、と思いガイドブックを貸してくださいと頼んだ。事情を説明すると男性は上海に詳しく、安全な安宿に案内してくれた。その日はなんとかベッドで眠れたが、宿がないかもしれないという恐怖心が今でも強く残っており、行く可能性が低い場所の分までガイドブックを持っていくようになった。

しかし、持って行かずとも海外でガイドブックを買え

る場所もある。高い値段でも良ければ日本から輸入されたものがあるし、ヴェトナムではロンリープラネット（ロンプラ）というガイドブックの英語とヘブライ語の海賊版を売っている。ロンリープラネットは海外版「地球の歩き方」のようなガイドブックで欧米の旅行者を中心に絶大な信頼を得ている。夜に屋台などにいると東南アジアの各国はもちろんインドやアフリカ、南米のロンプラを一メートル以上積み上げ、紐で縛ったのを抱えて子どもが売りにくる。一冊五百円までで買えるので利用する人も多い。

上：中国の文様集、下：中国の絵本

✦飽きない文様、図案、絵本

海外の本屋にもよく行く。日本でもそうだが海外でも多くの本屋が文房具を扱っている。ヴェトナムでは正装のアオザイを着たかわいい少女の写真がプリントされたノートや鉛筆が売っておりお土産にも良い。最初はそういうものをときどき買いに行っていたのだが、旧正月の時期にはぽち袋を売ったりと期間限定の商品があるのに気付き足しげく通うようになった。本の方はどの国にいても言語の壁に阻まれ開いてみようと思わなかった。

しかし、あるときおもしろい表紙の本をヴェトナムで見つけ手に取ってみた。それは香港から輸入された花の文様集で中国の刺繍や陶器の図案や文様がびっしりと描かれており、大変興味をひいた。すぐにその本を購入し、よく眺めたのだがいくら眺めても飽きなかった。それからはどの国でも本屋に行き、絵のありそうなコーナーに行っては、文様や図案、絵本などの本をお金と荷物の許す限り買った。

✦人間模様がみえる中国の本屋

中国の本屋はおもしろい。大きい本屋から小さ

い本屋までさまざまあり、同じジャンルの本屋が集まっていたりする。上海には書道や美術用具のお店と芸術関係の書物を取り扱うお店がひとつの通りを中心に集まっている。そういう場所では価格競争のようになり新古本を扱うお店もある。ひとつのお店は狭いのだが、多くのお店が集まると活気があるので歩くだけでも楽しい。

品揃えの豊富な大きな本屋ではレポートに勤しむ学生をよく見かける。座り込んで、お目当ての本を開いて必死にノートに書き込んでいくのにはびっくりするばかりである。店員が注意するのだが悪いと思っていないのか、お金がないのか、去るとすぐにまたノートを広げだす。本屋にいる人々を見ているだけでもさまざまな人間模様が見えてきそうである。

また、中国にはたくさんの出版社があり、種類が豊富なのも良い。価格も手ごろである。日本で何千円かしそうな内容でも五百円から千円ほどである。買いやすさもあり最近では文様集だけでなく、ファッションや家具の本まで物色している。ファッション関係の本は日本のものを翻訳してそのまま売っているのをよく見る。正規のファッション雑誌もあるが、他の本や物価と比べると高い。そのためか海賊版があるのだが、プリントがずれたり、何冊かの雑誌を適当につなぎ合わせたりと質が悪い。

また、田舎に行けば行くほど、そこにいる若者の服装は日本のファッションからかけ離れており、いったい誰が買うのだろうかという気になる。最近流行っているのは日本のネイルアートの本の海賊版だが、道具のそろわない中国のネイルアートの質はまだまだ低く本の質と同じである。

家具の図案集も買った。『中国歴代家具図録大全』という偉そうなタイトルである。中国家具のデザインが延々と描かれている。家具に彫られたり描かれたりする文様に興味はあるが、家具の形そのものにあまり興味がない。

しかし、本が丁寧に作られていたため、今しか買えな

買った『中国歴代家具図録大全』

いという衝動が手伝い重たいのに買ってしまった。中国は土地が広いので一度お目にかかった本がどの土地でも手に入るわけではない。小さな出版社の本などはその地域でしか流通していない。そのため欲しいと思ったときが買うときなのだ。しかし、後日、『中国歴代家具図録大全』を関西大学の図書館で見つけてしまった。大学で購入するぐらい良い本だったのだ、という思いと、日本でも買えるのか、というちょっと残念な思いが入り混じった。

✦おもしろい絵本類

絵本もおもしろい。近年、中国の現代アートが盛んである。昨年上海を訪れた際、古い工場跡で建物を安く借り、現代アートを展示している一画を訪れた。彫刻や絵画など多くの若手の作品があり、勢いを感じた。また、展示品を見に来ている人も多く中国の人の現代アートへの関心の高さがうかがえた。あらゆる分野で模倣作品もあるが、芸術に関してはオリジナルの独創的な作品がどんどん増えているように感じる。イラストも多く見たので絵本なども良い作品が増えるのではないかと思った。今はまだ絵の拙い絵本が多いのだが、良い作品が出ないか楽しみにしながら絵本コーナーをのぞいている。同じ絵本でも中国に売っているチベット語の絵本はオリジナル作品がほとんどない。グリム童話や星の王子様など欧米の有名な物語が中国語に訳されたものを、さらにチベット語に訳していたりする。作品に使われている絵の中の中国語はそのままである。紙も粗く、あまり丁寧に作られていない。チベット好きの私としては少し寂しい。

チベット語入門書

✦ネパールの人々と違った本屋

ネパールでは、なかなかネパールで作られた本を見つけられなかった。唯一買ったメードインネパールの本はチベット語の入門書で表紙はプリントがずれており、中はわら半紙のような頼りない紙である。それでも中国でチベット語入門書を買うとチベット語――中国語となる

ところが、チベット語――英語になるのでありがたい一冊だった。

本屋にあるのは大半がヨーロッパで作られたネパールに関する本の輸入で価格も高かった。しかし、そのかわりに質が良いので財布とにらめっこをしながら本を探した。首都のカトマンズではツーリスト街に何件もの本屋が並ぶ。輸入本は儲けも大きい。そのため、それらを扱う本屋は照明が明るかったり、買った本をコットンバックに入れてくれたりと豪華である。一食三百円ほどでお腹いっぱいになる物価の中で、それらの本屋は一線を画した存在であり普通のネパールの人々が入ってこられないお店に違和感を覚える。

ネパールで買った本

インドのヘナ本

✦ヘナで描く模様―インド

インドでは、女性がヘナという染料で手や足に描く模様の図案集を探した。すべてぺらっぺらの単行本ほどのサイズの本で小さな日用雑貨屋で売られていた。二十ページほどで表紙にきれいなインドの女性のピンボケ写真がプリントされ一冊三十円ほどである。最初にヘナの取り扱い方法が書かれているのだが、それが英語なのが多文化社会であるインドらしいと感じる。図案はインドの人って器用なのね、と思わせる緻密なデザインが多い。

小学生ぐらいの少女が本と染料の入ったのチューブを持って友達同士で模様を描きあっている光景は微笑ましかった。手に模様を描くのは女性だけだが、ヘナを描いてくれる人の中には男性もいる。また、模様も地域によって特徴があるようなのでこれからも買い集めるつもりである。

✦海賊版でのおもしろさ

買わないのだが、最近気になっているのが日本作家のまんがである。まんがはどの国でも本屋には売っていない。売っているのだろうが、正規で訳されたものは高いせいかお目にかかっていない。私が見かけるのは日本のまんがを翻訳した海賊版である。

タイでは若者が集まるファッションビルで日本のまんがの全巻セットが売られていた。日本で少年まんがの海外での人気などをテレビでよく目にしていたのだが、タイで売られていたのは少女まんがであった。一度、篠原千絵のまんがが大好きだというタイの女性にあったのだが、真剣な表情で日本の男性はみんな彼女のまんがのような顔をしているのかと聞かれ笑ってしまった。

中国でも少年まんがと同じぐらい少女まんがが売られていた。私が南の景洪（シーサンパンナ）で入った本屋は学校の近くにあり、教科書の横で駄菓子のように本棚いっぱいにまんががあった。私の大好きなホラーまんが家である伊藤潤二の本があったのだが背表紙に「伊藤潤二大全」と書かれていた。手にとってめくってみると、なんと一ページに単行本四ページ分が印刷されていた。かろうじて台詞が読めるのだが、とても楽しさも恐怖も伝わってこなかった。どうやら単行本サイズで厚みが四センチほどのその本に伊藤潤二の本十冊ほどを凝縮しようとしたようだった。すごい発想だと感心した。伊藤潤二のようなマイナーではないが、メジャーでもないまんが家の作品まで中国では読まれているのかと不思議な感じがした。

✦猫耳のあるビルマのドラえもん

ビルマではおもしろいドラえもんのまんがを見つけた。ドラえもんは一冊に一話か二話が収録された印刷のずれたペーパーバックが、広げた風呂敷の上に山のように積まれて路上で売られている。そして、ビルマのドラえもんには、なんと猫耳があった。ドラえもんになぜ耳がないのかを知らないビルマの人々は、猫なのに耳がないのはおかしいと言ってすべてのドラえもんに耳を描き足してしまったのだ。さらに学校の先生が正装であるロンギーをはいていないもおかしいと考え、全てロンギーに描き直しているのである。ロンギーはビルマの民族衣装で男性がはくチェックの七分丈巻きスカートである。その結果、のびたの担任の先生はワイシャツにチェックスカートとサンダル履きになっている。正規では決して認められないであろうが、海賊版ならではで、おもしろい。

✦変化する本への楽しみ

どこの国に行っても本屋をのぞくのは、人々の日常生活を少し体験するようで楽しい。またアジアの本屋では、今ある本と十年後にある本は質や内容がガラッと変わっているのではないかと思い、それも楽しみである。私はたまたま本に着目したが、何かひとつの事柄をいろんな国で観察すればさまざまな事情が見えてくると思うのである。それは異文化の理解や考察と言えるのかもしれないが、ただ単におもしろくて止められないのである。

（しもがき　かずみ・関西大学政策創造学部四年次生）

（カット・城 万喜）

亀をめぐる造形

――アジア美術の世界（9）――

長谷洋一

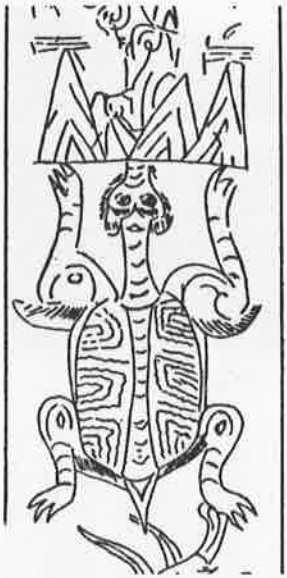
博物館に勤務していた頃、正月用の展示で悩むことがひとつあった。縁起の良い「松竹梅」を描いた絵画はいくつもあるが、「鶴亀」、特に亀だけを描いた作品がなく、いつも申し訳なく「鶴図」だけを陳列していた。「鶴は千年、亀は万年」と言われるように亀は長寿のシンボルとして知られるが、亀だけを描いた作品は意外にも少ない。亀の寿命は三〇年から五〇年ほどで決して長寿を誇る動物でもない。またヨーロッパではイソップ物語や「アキレスと亀のパラドックス」では、遅くとも努力を怠らない動物として登場する。

古代中国では、道教の神仙思想のなかで霊亀の甲羅の上には蓬莱山がのっており、そこには不老不死である仙人が住んでいるとされた。蓬莱山は想像上の山で、瀛州、方壺とともに三神山のひとつである。『列子』には、三神山を含む五山が大海に浮かんで漂流するので仙人がころころ落ち着かず、皇帝に実情を話して禺彊（北の海神）に「鼇」（大亀）十五頭の首の上に五山を載せて安定させたという伝説が記されている。仙人が住む蓬莱山との結びつきから亀は長寿のシンボルと考えられたのである。

大地を支える亀は、後漢末の山東省沂南北寨漢画像石墓の中室八角柱西王母像にもみられる。霊獣として亀は、長く水中に棲んだことから尻尾に髭のような藻が付着するとされ、また千年以上生きた亀には強い霊力を発揮し、将来の吉凶を予知できるとされた。古代神託の儀式として知られる卜占（亀甲占い）に亀の甲羅が用いられていることも故なきことではない。

蓬莱山に基づく亀のイメージは根強く、近年、奈良・明日香村から出土した亀形石造物もこうした神仙思想や蓬莱山を意識した造形とみられている。亀形石造物近くの多武峯に関して、「嶺の上の両つの槻の樹の辺に観を起つ。号けて両槻宮とす」（『日本書紀』斉明天皇二年是歳条）とあり、「観」とすることから「道観」（道教寺院）を示すのであろう。平安時代以降も鶴とともに蓬莱山の姿を文様化した蓬莱鏡が流行し、さらには亀の甲羅にみる亀甲文は吉祥文様として広く扱われた。

こうして長寿のシンボルとして亀の造形はアジア各地に広がるが、さらに三神山を支えることから大地や世界など大切なものを「支える（のせる）」というもうひとつの役割を読み取ることができる。『御伽草子　浦島太郎』で主人公の浦島太郎が蓬莱山に仮託した竜宮を往復する乗物として亀が登場し、その前段で亀が子供にいじめられることも神仙思想からみれば当然の存在とも思える。



沂南北寨漢画像石墓中室
八角柱西王母像（模本）

中国や朝鮮、あるいは日本でも江戸時代以降の墓碑、顕彰碑をのせる台座のひとつに亀の形をした「亀趺（きふ）」がある。亀趺は、冊封体制など中国の身分秩序に関わるもので、特に大名家の墓碑などに使用されている。亀趺の亀形は中国・明の楊慎が著した『升庵集』によれば、竜が生んだ九匹の子供（竜生九子）のひとりである「贔屭（ひき）」の姿である。贔屭はその形が亀に似て重きを負うことを好むことから、石碑を龍の子供である贔屭の背にのせることで遺徳を未来永劫に讃えることを願ったものと考えられた。亀趺には、怪獣

奈良・明日香村　亀形石造物

贔屭　河北省正定・開元寺

映画に出てくるような獣面と亀面とに分かれるが、龍頭にも似た獣面は贔屭の名残であろう。日本では、「重いものを下で支える」意味が「特定の人に特に目をかける」に転じて使われるようになった。

霊獣としての亀は方位とも結びつき、いわゆる「四神」のひとつで北を守る「玄武」でも登場する。玄武は、亀と蛇が絡んだ姿で表され、遅くとも前漢末には成立し、日本でも飛鳥のキトラ古墳、高松塚古墳壁画や奈良・薬師寺薬師三尊像台座にみることができる。

中国の薬学書である『本草綱目』には、中国古代辞典による亀と蛇を雌雄する説を退け、雄雌は腹の甲で見分けるとある。亀と蛇とを雌雄とする発想には驚くが、『淮南子』などには蛇身の女媧が大亀の足を切り取って天を支える柱としたという伝説もあり、古くから亀と蛇とは関係が深い。古代インドでも、中央に須弥山がそびえる世界は四頭の象が支えており、象は巨大な亀の背にのり、亀はさらに蛇にのる世界観であり、ここにも蛇と亀との関係をみいだすことができる。

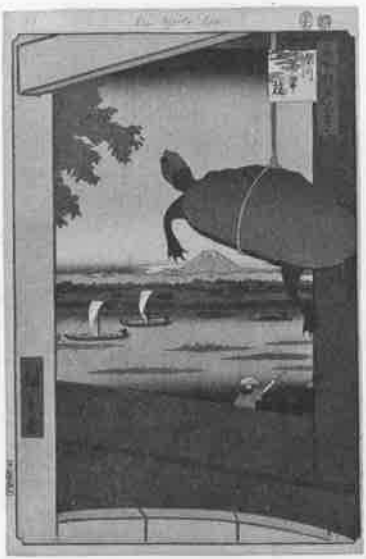
高松塚古墳壁画　玄武

聖徳太子の死去を悼んで妃が作らせたとされる奈良・中宮寺天寿国繍帳には、四か所に亀が刺繍され銘文が表されている。「天寿国」は阿弥陀仏が住む西方極楽浄土であるとする説が有力で、ここに仏教の須弥山と道教の蓬莱山との融合をみいだすことができる。亀はゆっくりと神仙世界から仏教世界へも移ってきたのである。

正倉院宝物にも写実的な亀形の合子（蓋物）が含まれるが、亀の造形はしばらく姿を消す。しかし空海以後、真言密教では仏教の須弥山世界は亀の背にのると説かれ、奈良・唐招提寺などには亀の背に舎利塔がのる金亀舎利

塔（鎌倉時代）が残っている。

歌川広重《名所江戸百景　深川萬年橋》には、手桶に吊り下げられたクサガメと思える亀が登場する。手桶と橋の欄干によるフレームに写実的な亀と遠望の富士山を描いた構図は秀逸で、「亀は万年」というしゃれでもあろうが、決して飼育用の亀ではない。後生安穏を願う信心深い人びとが、この捕らわれた亀を買い求めて川や池に放してやる。そのことで功徳を積む「放生会」と呼ばれる宗教儀式用の亀である。



《名所江戸百景　深川萬年橋》

霊獣のイメージを離れ、水棲動物として造形は、江戸時代後期における写生や博物学の流行をまたねばならない。亀は我々のごく身近にいる生物であるにも関わらず、多彩な造形を生み出す素材となるまでの歩みは、あまりに遅いと言わざるをえない。しかし遅いがゆえに、「長寿」のシンボルとしての亀は、古代より今日に至るまで連綿と長く引き継がれてきた。

亀の足と首尾にふれるとすぐに甲羅の中にひっこめてしまう。また小春日和のもと、池畔を歩くと、「甲羅干し」をするたくさんの亀をみかけることがある。亀は変温動物であるために自身で体温調整することが出来ず、日光を浴びて体温を上げているのである。これらは亀の生態に過ぎないのだが、「長寿」のシンボルとしての亀が定着してしまい、つい神仙思想に基づいていることなど忘れるほどに見え隠れし、また仏教やおとぎ話という外的な環境にも順応してきた道教そのものの姿とも重なる。

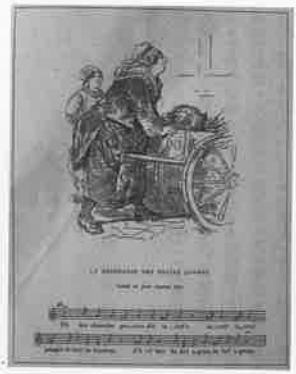
日常をふりかえれば、「即応力」や「成果主義」など目先ばかりが求められる時代となった。そうしたあわただしさのなかで、歩みは遅いものの、しっかりと努力を怠らずに大地を支える亀のような存在をつい見過ごしそうになるが、それは再び大海に浮かぶ五山の仙人と同じ心境に陥るような気がしてならない。

（はせ　よういち・関西大学文学部教授）

連載

本のいろいろ㊼　関大図書館―物売りの声―

仲井　徳



『物売り挿絵・楽譜付き』

『浄瑠璃床本・丸本』

音については古来、演劇、演芸、文学作品等数限りなく描かれているが、中でも「音」そのものを取り出して考察してみるのも面白い。

『身体のフランス文学』　吉田城、田口紀子編　二〇〇六年刊行

吉田はフランスの文学作品から、街中で起こる音・騒音・物売りの声などが惹起する感懐を考察する。中で、物売りの挿絵に楽譜が付いていることに驚いた。日本でも謡曲・謡本、浄瑠璃床本・丸本、歌舞・音曲、管弦など、様々な演奏があるが、符丁・符牒・ゴマ点などで音階・調子、呂律（りょ・りつ）低音と高音を表現していて、師匠の口移しによる伝授であった。

吉田城（京都大学教授一九五〇～二〇〇五）のユニークさについては別稿にて

楽譜つき

挿絵に物売りの図と下段に五線譜の音程が付いている。

ホーンブック売り　イギリス一五世紀半ば

紙に書かれたアルファベットや数字を熱湯で溶かした牛か羊の角(horn)で覆った羽子板状のもの。教科書の原型。

近年、江戸時代の物売りの声がレコードになっている。

夜鳴き蕎麦、貸本屋、蕎麦屋、竿竹屋、金魚屋、豆腐・納豆屋、鰯売り、辻占（つじうら）、按摩の笛、飴屋、門付け、三味線の音色、定斉屋（漢方薬売り）など、中で極めつけは「ドン」（正午の号砲）であろう。

近世・江戸時代初期に西洋から活字印刷術がもたらされたが、

『サクラメント提要』　一冊　キリシタン版

『貸本屋の図』

『定斉屋』

慶長一〇年刊（一六〇五）は、最初期の聖歌の楽譜であった。　ラテン語　鉛活字　二色刷り　楽譜付き

また、

サウンド・セラピー（サウンドスケープとも）の音によるヒーリング（癒し）がある。波動・音楽療法（ミュージック・セラピーとは、クラッシク音楽（例えばモーツアルトの曲）を聞かせることによって乳牛の乳の出が良くなったり、トマトの生育が活発になったりするという実験結果がある。「クラスター細分化」という現象である。

確かに、特定の音に関して臭いや既視体験が呼びさまされる。

ＮＨＫラジオ深夜便などで放送している

音の風景（「五分間のサウンドトリップ」）は、昭和六〇年（一九八五）にスタート、四半世紀に及ぶ歴史を持つラジオミニ番組である。その中で、残したい「日本の音風景一〇〇選」として、近畿地方では次のものがある。

大阪　淀川河川敷のマツムシ
　　常光寺境内の河内音頭
京都　琴引浜の鳴き砂
兵庫　灘のけんか祭りのだんじり太鼓

一方で、極力音を排除する芸能もある。茶道の世界がそれだ。茶道は、書院における茶事から四畳半の草庵（わび）の茶室を経て二畳台目（だいめ）へと縮小化し、ムダを廃して、ワビ、サビの世界を構築してきた。茶室で聞こえるのは湯釜にたぎる湯の音・松籟のみである。

（なかい　いさお・神戸女子大学文学部准教授）

（カット・一瀬優紀）

連載

本のいろいろ㊿　関大図書館―往来物―

仲井　徳

『庭訓往来』

『商売往来』

往来物とは江戸時代、寺子屋で手紙などの往復書簡のかたちをかりて、道徳や習慣、手習いや算数、地理や歴史などを教える教科書である。約七、〇〇〇種ある。

『庭訓往来図讃』一冊　編者不明　貞享五年（一六八八）刊　絵図五〇七枚

もとの『庭訓往来』二冊は南北朝時代に玄棊（一二六九～一三五〇）が著したとされるが定説ではない。江戸時代になって絵入り本として用語の解説がついた。庭訓とは、孔子が庭を走る息子を呼び止めて詩や礼を学ぶように諭したという故事による。父から子への教訓や家庭教育を意味する。約一七〇種ある。手紙は一年一二ヶ月に往復二通、それに八月一三日の一通を加えて二五通である。

『商売往来』一冊　堀流水軒著　元禄七年（一六九四）刊

商売に必要な言葉や文字、貨幣名、商品知識、そして商人の心構えを説いた教科書。堀流水軒は大坂の書家兼寺子屋師匠かとされるが、事跡は不明。

『百姓往来』一冊　禿箒子著　明和三年（一七六六）刊

農作業、納税、牛馬飼育など農家に必要な知識と文字を学ぶもの。

『和俗童子訓』五巻　貝原益軒著　宝永七年（一七一〇）刊

日本初の体系的な児童教育書。巻五の教女子法は『女大学』の原典。

『養生訓』八巻　貝原益軒著　正徳三年（一七一三）刊

貝原益軒（一六三〇～一七一四）は、江戸時代の本草学者、儒学者で実証主義者。

『世界図絵』

『伊勢物語』

ところで、江戸時代を通じてのロングセラーは『伊勢物語』である。

内容は、在原業平を主人公とする平安王朝の歌物語であるが、和歌と挿絵を通して日常生活の中で広く読まれる教養書となり、伊勢物語の上段を諸事日用のハウツーに使っている例もある。

『絵抄花王伊勢物語』　二冊　元文三年（一七三八）刊

上下二二図、下段は絵入りの伊勢物語、上段に図入りで婚礼作法等諸事の説明がある。

寺子屋　江戸時代の庶民を対象とした教育施設。六歳から通った。師匠には僧侶、武士、医師、神職が多かった。読み方、そろばんなどを教えた。

江戸時代には延べ一五、〇〇〇校ほどあった。

ちなみに、武士の通う藩校は各藩にほぼ一つはあって、二五〇校ほどあった。

ここでは、学問の官学（漢学）・四書五経を学んだ。幕府の学問所は昌平坂学問所（昌平黌）である。教授は儒者。

『世界図絵』　一冊　ヨハン・A・コメニウス著　一六五八年刊行

ヨーロッパでの初等教科書の嚆矢。毎項目ごとに挿絵入り。

ヨハン・A・コメニウス（一五九二～一六七〇）はボヘミアの教育学者。この教科書で、幼い子どもに勉強することの意味を豊富な挿絵を使って平易に説いている。

（なかい　いさお・神戸女子大学文学部准教授）

（カット・一瀬優紀）

連載

本のいろいろ 59

関大図書館 ― 叢書 ―

仲井 徳

『群書類従』

『東洋文庫』

叢書（双書）とはシリーズもののこと。岩波文庫や岩波新書、〇〇ライブラリーということもある。レクラム文庫など。

叢書で世界最大のものは中国清朝・乾隆帝時代の『四庫全書』である。

日本では、

『群書類従』 塙保己一編 文政二年（一八一九）刊
正編 一、二七三種 五三〇巻 六六六冊 二五部に分類

類従とは、多くの書物を種類ごとに集めてまとめたもの。

塙保己一（一七四六～一八二一）江戸後期の盲目の国学者。総検校。幕府保護のもと、和学講談所を建て和学の振興に努めた。また、『群書類従』の版木は二〇字×二〇行の四〇〇字詰めに統一されており、これが現在の原稿用紙の元になっている。この版木は重要文化財に指定されている。

続編 二、一〇三種 一、〇〇〇巻 一、一八五冊 二五部に分類
続々編 CD-ROM版 二〇〇四年 大空社

『群書類従』は二〇〇七年より八木書店が出版している。

『古事類苑』 一、〇〇〇巻 五一冊 神宮司庁編 明治四〇年（一九〇七）刊行 吉川弘文館

国際日本研究所センターで電子化されている。

『故実叢書』 八七冊 宮内庁書陵部編 昭和二七年（一九五二）刊行～

『群書索引』 四冊 物集高見、物集高量編 大正五年（一九一六）刊行

和漢書籍の五〇音順の解題書目。

物集高見（一八四七～一九二八）は『広文庫』（一九一六）も編纂した。

『丹鶴叢書』

『四庫全書』

『平凡社東洋文庫』　七五〇冊～　平凡社　昭和三八年（一九六三）～

アジア全域の古典作品を古代から現代まであらゆる分野に亘って刊行している一大叢書。一冊目はA・ヘルマンの『楼蘭』。

『日本随筆大成』　一～三期　九八冊　日本随筆大成編輯部編　昭和二～五四年（一九二七～一九七九）刊行

『続日本随筆大成』　一五〇冊　森銑三、北川博邦編　一九八一年～

『日本随筆索引』　正続二冊　太田為三郎編　岩波書店　一九六三年刊行

『丹鶴叢書』　一五四冊　水野忠央編　弘化四～嘉永六年（一八四七～五三）刊

国史、記録、故実、歌集、物語など古典的価値の高いものを選んで刊行した。校訂が厳密で版刻・造本が美しい。大正初年に国書刊行会が活字本を刊行した。水野忠央は紀州新宮城（丹鶴城）藩主、丹鶴と号す。

〔中国〕

『四庫全書』　七九、五八二巻　清　紀昀など編　乾隆四六（一七八一）成立

天下の書籍すべてを集めた、中国のみならず世界最大の叢書・写本。四部分類（経・史・子・集）によって分類整理されていて、それぞれは緑・赤・藍・灰色の絹布貼り表紙であった。

官の四庫（文淵閣・文津閣・文源閣・文溯閣）に加えて民間用に三庫（文匯閣・文宗閣・文瀾閣）都合七揃いの写本が収められた。しかし、相次ぐ戦乱のためにほとんどの蔵書が失われた。

『四庫全書総目提要』　二〇〇巻　清　紀昀など編　乾隆四七（一七八二）刊

四庫全書の解題目録

『百部叢書集成』　一〇一種の叢書

『四部叢刊』　一～三編　四六八種の叢書

張元済など編　一九一九～三六年刊

上海・商務印局館の影印（写真印刷）出版

（なかい　いさお・神戸女子大学文学部准教授）

連載

本のいろいろ⑥⓪　関大図書館―類書―

仲井　徳

「古事類苑」

類書とは、語句、用語・用例を音韻により配列、検索する現在の百科事典のようなもの。違いは門類別に分け、事項の解説は無く、用例・事例のみが示されている。

『古事類苑』　一、〇〇〇巻　五一冊　神宮司庁編　明治二九～大正三年（一八九六～一九一四）刊行。

明治期以前のにほんにおけるあらゆる部門の諸事象を対象とした、わが国最大の百科史料全書。三〇部門に分ける。文部省の官吏であった西村茂樹の建議により文部省が着手するが、途中神宮司庁が継承して完成させた。

西村茂樹（一八二八～一九〇二）は、中国の太平御覧やイギリスのブリタニカを目標に、和漢三才図会を手本にして事業を進めた。彼の死後も続けられ三五年かけて完成。

『広文庫』　二〇冊　物集高見編　大正五～七年（一九一六～一九一八）刊行　百科事彙（事典）　五万項目　五〇音順

ちなみに、現在の百科事典では、

『平凡社世界大百科事典』　全三五巻（二〇〇七年版）は小項目主義であるが、

『小学館日本百科全書』　全二六巻（一九九四年版）は大項目主義で医学・経済・法律などの主題全体が分かる便利さがあり、関連項目と参考文献も付いていたが、二〇〇八年からYahoo百科事典として無料のオンライン・マルチメディアになっていて、最新情報や画像・音声サービスまで付けられた。

〔中国〕

『北堂書抄』　一六〇巻　隋末　虞世南編　六〇五～六一一年成立　一九部門　現存最古の類書

『広文庫』

『古今図書集成』

『芸文類聚』　一〇〇巻　唐初　欧陽詢編　六二四年成立　四五部門

『初学記』　三〇巻　唐　徐堅など編　七二七年成立　二三部門

『太平御覧』　一、〇〇〇巻　宋　李昉など編　九八三年成立　五五部門

『冊府元亀』　一、〇〇〇巻　宋　王欽若など編　一〇一三年成立　二三部門

『永楽大典』　二二、九三七巻　目録六〇巻　明　解縉（かいしん）など編　一四〇七年成立　三一部門　最大の類書であったが、戦火で散逸し現存七九七巻。

『淵鑑類函』　四五〇巻　清　張英など　康熙四九年（一七一〇）刊　四五部門

『古今図書集成』　一万巻　清　陳夢雷編、蔣廷錫増訂　雍正三年（一七二五）刊　六部門（暦象、方世、明倫、博物、理学、経済）銅活字で印刷した。現存する最大の類書。

〔西洋〕

『百科全書』　全三五巻　フランス　ディドロー、ダランベール編　一七五一～八〇年刊行

事項をアルファベット順にならべ、知識を平等化、相対化することで、合理主義・実証主義の思想を生み出し、フランス革命を準備した。

『ブリタニカ』　全三巻　イギリス　一七七一年第一版刊行

現在はアメリカTBS資本の傘下になりオンラインで無料公開されている。

日本版『ブリタニカ国際大百科事典』二八冊　フランク・B・ギブニー編　一九七四年～

（なかい　いさお・神戸女子大学文学部准教授）

（カット・一瀬優紀）

文芸創作講座　小　説

clasp

大森紀子

夕方になっても、アスファルトの上には陽炎が見える気がした。彼は人気のない土手に車を停めた。エアコンをつけておくためにエンジンを切ることができない。走行中より控えめではあるが、しかし静寂をもたらしてくれないエンジン音と微かな振動。カーナビの無神経に眩しい無機質な光が、白々しく二人の輪郭を刻んでいた。

二人同時に煙草に火をつける。沈黙の中で煙草を吸うのが、私はとても好きだ。お互いに時間と空間を共有しているという意識。そして、そこに訪れる沈黙を、彼も心地よいと思っている確信。もちろん、私の錯覚であるかもしれないけれど。

彼はいつも私といることにうしろめたさを感じている。夜に向かう時間、人気のない場所に置かれた密室、そして男女。状況を並べれば、二人の関係もそこで行われていることも、たやすく言い当てることができるからだ。

私たちはいつも、誰にも邪魔されない場所を必要とする。だから場所探しは重要で、そして大変なのだ。ファミレスなんて論外だし、中途半端な田舎であるこの街には、使えそうなバーもない。カラオケは密室なのに騒がしい。

かといってラブホテルというわけにもいかない。実際

にやましいことがなくても、誰か知り合いに見られたら困る。だけど問題はそうではない。ラブホテルへ行っても、本来そこでするべきことをしないと考えるだけで、嫌になるほど悲しくなる。冗談でも口にする気にはなれない。

彼も私も、お互いに会うことを誰にも言っていない。今ここにこうして二人でいることを誰も知らない。言わないのは、隠す必要があるからだ。知られれば咎められるからだ。たとえ、それがただの「注意」や「勧告」程度であったとしても。そんな逢瀬は、少しだけ私を満たしてくれる。秘密。その言葉を思い浮かべて喜ぶ私は、幼い。しかし私は、少し満たされた心にはすぐに興味をなくす。決まって、満たされていない部分が気になって仕方なくなる。誰にでも言い当てられることは、ここでは一切行われていない。その事実がもどかしく、そして悔しい。それもまた、どうしようもなく私が幼いからだ。だから切に思ってしまう。

「注意」なんかでは済まされないような、逃げも隠れも言い訳もできないような、暴かれて困る秘密が、ここに存在すればいいのに。そんなことを考えては、過去を手繰り寄せる。起こり得ないあの時の続きを望んでしまう。もう何年経ったと思っている。この期に及んで、私は何を期待しているのだろう。

油断していた。

午後六時三十分の最終下校時刻を知らせるチャイムと共に、エアコンの電源は自動的に落ちていた。教室内を漂う涼しい空気は、ものの十分もしないうちに消え失せ、教室は遮光効果のない窓ガラスから差し込む西日によってじわじわと熱されていった。

私と彼から発される空気は、期末テストの全日程が終了した日の放課後には、まるで似つかわしくないものだった。

タオルもハンカチも持っていなかった私は、ブラウスの袖で、涙でぐちゃぐちゃになった顔を必死でこすっていた。手首の傷を隠すために、夏でも長袖を着ていたことが、初めて他の役目を果たした。一瞬、そんなことを思った。袖には涙と一緒に流れたアイシャドウが付着し、反射している。彼は表情一つ変えることなく、しゃくりあげる私を見ていた。嘘。実際は彼が表情を変えているのかなんてわからないし、そもそも最初からどんな顔をしていたのかさえ定かではないのだ。だけど私の予想は外れてはいない気がした。私はただうつむいて、まっすぐに向けられているであろう彼の目から逃れよう

と、視線と心を泳がせていた。
床には、乱雑に並べられた机と椅子の足、そして私の足が見える。綿埃の塊や砂、髪の毛などが床全体に散らばっていて、いつもいかに掃除がいい加減になされていたかということを実感した。今まで、放課後の教室を眺めたことなんてなかった。
それだけで視覚から得られる情報は尽きてしまった。彼は私がどんなに意識を逸らそうとしているかも知らず、同じ調子で言葉を続けている。ゆっくりと再生される、低く掠れた声は、ほぼ九十度に傾いた頭の真上から落ちてくる。彼がこんな声をしているということも、こんな話し方をすることも、こんな言葉を紡ぐことも、知らなかった。そしてそのひとつひとつがこんなにも私に響くということも。彼の前で、彼の言葉によって泣くことが、こんなに心地よいということも。
私は彼のことなんか見ていなかったし、彼も私を見ているはずがなかった。彼はいつも女の子たちから好かれていたし、そうやって彼を取り巻く彼女たちを私は、馬鹿みたいだと煙たく思っていた。何より、私と彼に何の関係も、接点すらなかったはずだ。少なくとも、こうして目の前で泣きじゃくることを許すような関係は。それなのに、どうして彼はいきなり私に声をかけてきたのだろう。
何に対して泣いているのかもわからない。ただ、彼が放つ言葉に、私の心の中にある融点の著しく高い、不純物でできた塊が、溶け出してしまったというだけだ。学校という場所にいる無数の人間の無数の心の中から彼に見抜かれてしまった塊は、彼に溶かされ、またそのことに心地よささえ覚えてしまったのだ。
さっきまで夏休み気分だったのに。そこにあるのは、眩しい夏空でもなければ開放的なエネルギーでもない。手首に張り付く濡れた袖、拭いきれず顎を伝っている涙、背中に滲んでいる汗。全身に湿りを帯びて、少し息苦しい。閉め切った教室でエアコンが停止してから、もう一時間近い。
田舎は都会に比べて、すべてが前倒しで進む。日が沈んで間もなく、空にはまだ赤みが残っている時間帯なのに、外を歩く人はほとんどいなくなり、代わりに、周辺の家の窓からこぼれる明かりが増えた。
外はまだ明るいけれど、車内は急速に闇を濃くしていっている。こんな、お互いの輪郭がわかる程度の暗さが心地いい。だけど、どんどん暗くなっていく場所で、私もまた、どんどん募らせていく感情がある。下心だ。

かつては暗い所で二人きりになると、いつもしてくれていたことがあった。半ば強制的に、あの頃と似た状況になっていると思い込む。室内灯をつけないのかと尋ねながら天井に手を伸ばす私を、彼は、車内が丸見えになるからと苦笑して遮った。見られたら困るのかと、純粋に疑問に思っている振りをして聞いてみる。それが言外に何を意味しているのかなんて、全部わかっているのに。暗くなった車内で、彼の困った表情や濁された言葉を求めて、わざと子供のように振る舞う。故意の幼さが、彼に通用しないことも、あの頃してくれていたことを、もうしてくれないということも、全部わかっているけれど。

言ってはいけないと自制し、喉元まで出かかっている言葉を飲み込んだ。

すると、見計らったように彼が口を開いた。あの時のことを、私がどう思っているのか、と。彼はいつも、言いにくそうにそのことを口にする。まだうっすらと表情を読み取れる明るさはあるが、わざわざ見なくても彼がどんな表情をしているかくらいはわかる。私はいつも、困ったように笑って考える振りをするけれど、決して答えることはしない。私がどう思っているか、それを聞いてどうしようというのか。私は意地でも言わない。だから彼も同じように笑って、私の返事を待たず、振り払うように話を終わらせる。その時の彼は、決まって罰が悪そうだ。彼は、自分の言いたいことを私が分かっていることを分かっている。そして、私からそれに対する何かを聞くことを恐れてもいる。まだきちんと話す時期ではないと、そう言い聞かせるのだろう。この話題は、いつだって二分と持ったことがない。

私はあの時のことを少しも風化させることなく、今も同じ思いでいる。それを飲み込んで飲み込んで、喉にたくさんのつかえが引っ掛かって息が苦しい。

それ以外にも、話すべきことならたくさんある。彼に話したいことが、私には困るくらいありすぎるのだ。それらを話しながらも、いつだって私はあの時のことばかりを意識する。

そんな悶々としている私の横顔を、車内も屋外も同じ色に溶け合った暗がりの中で、彼は何を思いながら見、また話しているのだろう。

日は完全に落ち、空の色はどんどん濃さを増してゆく。

通常の授業の後の補習に、私は出席していた。彼が出るから。それだけの理由だった。彼と同じ場所で同じ時間を過ごすことと、彼の視界に入ること、ただひたすら

にそれを求めていた。

一度溶かされ始めた塊は、彼によってのみ、そうされることを望んだ。そしてそれが際限のない作業だと次第に気づいた。塊は溶かされても溶かされても消失することなく存在し続け、彼は見切りをつけることなく私と向き合い続けた。その塊と私は、ひたすら彼を求めていた。そこには恋とか憧れとかいった言葉で表現されるような無邪気さはない。自分の中にあるもっとどろどろした感情に、彼と不可分になりたいかのような願望さえ感じていた。

授業が終わり、一斉に生徒が教室から出て行っても、私はのろのろと机の上のプリントや筆記用具をいじっていた。彼の前で泣いた期末テストの日以来、私はいつの間にか彼を目で追うようになっていたし、彼の視線もよく感じていた。だけどそれだけでは物足りなくて、私は常に彼と接触でき、なおかつ二人きりになれる機会をうかがっていた。そう考えていたのは彼も同じで、私たちはしばしば、二人きりで会って話すようになり、そして時折、手を握られたり頭を撫でられたりすることもあった。

彼は無遠慮に眩しい蛍光灯を当たり前のように消し、持っていたボトル缶のコーヒーを開け、煙草に火をつけた。教室での喫煙なんて言語道断だけど、もう学校には誰もいないから、ここにも誰も来ないと言って彼は手首を見せる。そこに巻きついた時計は、六時四十五分を指していた。ここには誰も来ない。その事実が嬉しかった。ここで煙草を吸っても、知っているのが私だけなら問題ないと言う彼に、自分が信用されていると錯覚してしまう。

まったく単純な女だ、私は。そう思いながら椅子を引きずって彼の正面に移動した。向かい合っても、なんてことはない。いつもの調子だ。彼が私の心の中の塊を溶かし、落ちてゆく雫を丁寧に受け止める。手首に巻かれた真新しい包帯にも、無神経に詮索はせず、私が傷つくのが嫌だということをきっぱりと伝えるだけだ。彼は一貫して私を肯定する。叱るけれど責めることはしないし、ため息はつくけれど呆れたりしないし、たまに嘆くけれど見捨てることはない。

私は彼と話さないと死んでしまいそうな気がする。私は彼の前では思う存分愚かになれるし、いつも泣いている気がする。それを恥ずかしいとは、もう思わなくなっていた。私は心のキャパシティが極端に狭くて、いつもオーバーフローしている状態だ。そんな自分が情けなくて仕方ないのに、どうやっても広げることができない

し、そこに蓄積されたものを逃がす術も知らない。気がつけば塊となって奥底にこびりついている。弱くて、馬鹿で、どうしようもない私。そう漏らすと、私を肯定する彼だけれど、それだけは否定する。お前は弱くない。馬鹿じゃない。繰り返されるとまた泣けてきた。私はきっと、誰かにそう言って欲しかったのだろう。その言葉を求めて、彼を求めているのだろう。

私は彼がいないと死んでしまいそうになる。時々、彼を自分のものにしたいのかもしれないという願望に気づくことがある。今みたいに、誰にも邪魔されない場所で、ずっと彼と一緒にいたいと思ってしまう。その思いを完全に自覚しないように努める自分が、ひどくいじらしく、そしてみじめだ。

そろそろ帰ろうか。彼は私にそう声をかけて立ち上がった。私は精いっぱい帰りたくない気持ちを表現したつもりで、時間をかけてゆっくりと重い腰を上げた。すると頭上に伸びる彼の手が視界に入った。ああ、頭を撫でてくれる。彼にそうされるのは、とても好き。そう考えていると突然目の前が暗くなった。私の顔は彼の胸に埋まっていたのだ。彼の手は私の頭ではなく、肩と背中に回されていた。

今、私は彼に抱きしめられている。驚いたけれど、瞬時に理解できた。抱き返そうとしたら、二人の体に挟まっているせいで、腕を動かすことができなかった。それに気づいた彼は少し体を離し、私の腕を体の間から抜くとまたすぐに抱きしめた。今度は私も同じことができた。お前はもう頑張らなくていいから。掠れた声が耳元で聞こえた。背中に回した手で彼のシャツをぎゅっと握ると、彼の腕には更に力が込められ、私の頬にはまた涙が伝った。鼻先にある彼のネクタイを濡らしてしまうのを頭の片隅で心配したけれど、与えられる体温と込められている力に思考が浸食されていくようで、何かを考えることを放棄した。柔らかくて温かい彼の手から、一か所だけ異物の感触が服越しに背中に伝わる。その金属だけが、どうしようもなく硬くて冷たくて、とても痛い。

どれくらいそうしていたのか。きっと大して長い時間ではなかっただろう。彼はそっと体を離し、何の言葉もないまま教室を出た。鍵を掛けて、先に帰るからと言って早足で歩きだした彼の背中に思った。

私は彼がいないと死んでしまう。彼を自分のものにしたい。一瞬だけでも、何も着けていない手で、私に触れて欲しい。安っぽい昼ドラにありそうなことを自分が思うようになるなんて。そう自嘲する冷静さは私にはもう残っていない。

薄暗いと思っていた空の色は、すでに濃紺になっていた。

空の青色や赤色が呑まれてしまうと、たしかに室内灯をつけては目立ってしまうと、先ほどの彼の言葉の意味がわかった。換気のために開けられた窓から流れ込む生温い外気が、冷房で満たされた車内を通り抜ける。私と彼だけの空間が歪められるようで、半分も吸いきっていない煙草を消した。

こうして私と会うことで、彼はいつまでも私に縛られてしまうのだろう。そして私は、いつまで彼を縛りつけていたいと思うのだろう。決着をつけたい。過去の過ちを、現在の正当な行為にしたくて仕方ない。私はもう大人になったから大丈夫。祈るように、縋るように、そう思っているけれど、彼は別の意味で、私がもう大人になったから大丈夫だと思っているのだろう。だけど彼は私以上に大人で、それはもうただの大人でしかない。彼も決着をつけたいと思っている。ただし、私とは別の意味で。

過去を共にした私と居させることで、彼を過去に引き戻したいと願う私は、やっぱり幼いのだろうか。

彼の手が私の体の前を横切る。運転席と助手席という位置関係でそうするのは無理があるとわかっているけれど、それでも私は一瞬期待する。いつもしてくれていたように、その腕にその胸に、抱きしめて欲しくて仕方なくなる。ちょっといいか。そう言って強引に、少しだけ私の体を引き寄せたけれど、彼の手は私の左手首を掴んだだけだ。カーナビの画面の前で手首の内側を見つめ、親指で何度も撫でるだけだ。それ以上は、そこ以外は、私に触れてはいけないかのように、ケロイド化して皮膚が分厚くなった部分をいつまでもそうしている。それでも久しぶりの彼の感触に、私は悲しいくらい欲情してしまう。私と目が合うと、彼は手を離して正面に向き直った。何故このまま車を発進させて、ラブホテルに向かわないのだろう。何故もっと強い力で私を運転席まで引き寄せないのだろう。何故車の外に出て、あるいは後部座席に移動して、真正面から抱きしめないのだろう。何故あの頃のように、人目を盗んで私に触れることをしないのだろう。今は誰も見ていないのに……。

私はすべてわかっている。もう彼が私に必要以上に触れないことを。そして、本当はあの時のことを話して清算したいと思っていることも。だけどその話をして、私が今も変わらない願望を持っていると知るのを恐れていることも。あの時の苦労を無に帰したくないと思っていることも。それでも私は求めている。口にすれば、この

逢瀬でさえ叶わなくなる気がするから、空気で目線で沈黙で、こんなにも求めているのに。あの頃の私ではない。男の誘い方も、情事への持ち込み方も、全部知っているのに。それを発揮できないもどかしさにさえ体が疼く。

誰も見ていない。誰も気づかない。もう辺りは完全に真っ暗になっている。

部活動を終えた生徒が一斉に帰っていくのを窓から眺めていた。夜の闇の中でたくさんの学ランがうごめいているのはなんだか気持ち悪い。生徒の歓声に混じってエンジン音がひっきりなしに聞こえる。車通勤の教師達も次々と帰宅しているのだ。気がつくと横に彼がいて、思いのほか早く来たことに少し驚いた。彼の後ろについて、二人無言で入った視聴覚教室は、普段の授業でもあまり使われていない。まして、下校時刻をとうに過ぎたこの時間帯に誰かが来るなんてことは、まずない。

彼に抱き締められて以来、私たちが交わす言葉は、以前より遥かに少なくなっていた。私の中の塊はなくなることはないし、語りつくせないほどの、語るべき言葉を持っているだろう。それでも言葉を並べるよりも確かで、より伝わる手段を知ってしまったのだ。私たちは少し会話を交わした後、いつも抱き合うようになった。それは放課後の校舎の片隅であることが多かったが、使われていない教室が並ぶ階の廊下や、たまたま来訪者や養護教諭のいない時の保健室だったりもした。初めは人の気配を気にしていたが、次第に確実に人のいない場所を選ぶようになり、体を合わせる時間もどんどん長くなっていった。正面からの抱擁だけではなく、私が彼の膝に座ったり、背後から抱きすくめられたり、そのたびに、私たちの境界は曖昧になり、私が彼の中に取り込まれていく気がした。いや、そうなればいいのにと思った。耳を当てた彼の胸から聞こえる鼓動が速くなっていったことに、戸惑いと嬉しさと期待を感じていた。私が求めていないのに、自分の欲だけでそうしているんだったら困るけど。そんなことも彼は言っていた。そんなわけがない。だって私はいつだって二人きりになれる状況を探しているし、いつだって全身全霊で彼に密着しようとしている。私は彼がいないと死んでしまうのだから。そんなことはない、むしろ私の方がして欲しいと思ってるの。彼の言葉を全否定すると、彼は、お互いが求めているかどうかわからないのが男女の難しいところだと言って苦笑いした。求めるとか求めないとかいった言い方。男と女、という表現。彼の使うその言葉に、嫌でも期待して

しまう。抱きしめ合うより先には一度として進んだことがなかったとしても、その先を望めるのではないかと。

みんな帰ったといっても、誰一人残っていないという保証はない。念のため、窓の外から見えないように、教室の隅の床に腰を下ろした。少しの会話——最近の気分や読んでいる本のことや勉強のことなど、雑談程度だった——を一通り終えると、早々と沈黙が訪れた。

彼は横に座っている私の腕を無言で力強く引き寄せた。私が身体を半回転させて彼と向き合う体勢になると、すぐに強く抱きしめられた。胡坐をかいた彼の脚の上で横座りになる。足下が少し不安定だったけれど、あまり気にすることもなく、彼の体だけを支えにしがみつくように抱きしめた。彼は腕の力を緩めてはまたきつくして、何度も何度も抱きなおした。背中、肩、腰、彼は私の体のあらゆるところに触れていった。私は彼の動きに応えるように、抱きつく力加減や位置を変えたり、彼の背中や胸に手を滑らせたりした。絡み合うたびに、私の体は火照り、濡れてくるのがわかった。もちろん今までも、抱きあうたびに濡れてはいたけれど。

やばい。私の耳を指でなぞりながらピアスに触れていた彼が、小さく声を漏らした。私はその声よりも、ピアスに当たってかちっと音を立てた彼の手にある金属の方が気になって、その音を掻き消すように、意識を逸らすように、必死で彼の首に手を回した。キス、したいなあ。そう思っても、今までキスはされたことしかなく、自分からどうすればいいのかわからなかった。その上、身長差があるため彼の唇はとても遠く感じられた。アイコンタクトで伝えようとしたけれど、彼と目を合わせるのがどうしても恥ずかしく、俯いたまま彼の背中にある手に力を込めることしかできなかった。彼からしてくれればいいのに。そう思っていると、そろそろ脚が限界であることに気がついた。下になっていた脚が痺れてきていたのだ。座り直そうと思って脚を動かした時に、気付いた。やばい。彼の言葉のその意味に。動かした脚に硬いものが当たった。彼は私がそれに気づいたことに気づき、ごめんね、と目で言った。私は気にしないふりをして、彼の膝の上に座りなおした。

彼は勃起していた。当然といえば当然だ。これだけ密着しているのだから。もしかしたら以前にも、私が気付かなかっただけでそうなっていたことがあったのかもしれない。スラックス越しに太腿に当たるそれは、少し私を混乱させた。今ある状況はもちろん嬉しい。そして望んでいたはずのことなのに、目の前にするとどうしていいかわからなくなる。キス同様、セックスだって今まで

は受け身でしかしてこなかったのだから。

そんなことを考えていると、彼の左手が私の膝に伸びてきた。欲望と後ろめたさが同時に存在しているのだろう。恐々と、太腿を撫でている。素肌に触れる彼の手の金属は、服越しに感じたよりもっと硬くて、体温で温かいはずなのに冷たくて、痛かった。初めは膝の少し上を撫でていた手が、スカートの奥に進むたび、躊躇いを感じていた。そのことが彼の手の感触からわかった。私が触れて欲しいのはそのもっと奥なのに。それもまた言うことができない。スカートの下で、太腿と下着の境目までは触れるのに、それ以上奥には行かない。ただ太腿をずっと往復するだけだ。濡れてる？　掠れた声でそう聞いてきた。濡れてます、なんて正直に言えず、頷くこともできず、口ごもって俯くしかできなかった。背中を抱き締めていた右腕が、ブレザーの下に滑りこむ。ブレザーという分厚い隔たりがなくなったせいで、さらに体温を近く感じられた。背中を撫でる彼の手は、指先でブラジャーの線をなぞっていうようにも思えた。このままホックを外してくれたらいいのにという期待も、期待のまま終わった。

触られることに夢中になっていたけれど、耳元で聞こえる彼の呼吸が荒くなっていることはわかっていた。時々私の足に当たる、勃起している性器。やりたくて仕方ないのは男である彼の方だ。キスすることも、彼の性器に触れることも、私からはできない。私がもっと男慣れしていたら、私にもっと行動力があったら……彼の体は小刻みに震えている。本当に、我慢しているのだろう。呼吸、鼓動、手の動き、体温。それらすべてから彼が欲情している事実と、それに対して彼が、痛いほどの罪悪感を感じていることがわかる。そんなに苦しんでまで、何故我慢するのだろう。抱ける女がここにいて、それだけ勃起していて、誰も来ない場所で。だから早くキスするとか、服を脱がせるとか、スカートの奥に指を進めるとか。それとも苦しさなんて問題じゃないほど、私を抱きたくないのだろうか。私がネクタイを引っ張って解けばいい？　股間に手を持っていけばいい？　ベルトを外せばいい？　そうすれば事を進めることはできるのに、私は怖気づいていた。ここから進みたいと願っているし、彼が進めてくれることを求めている。だけど私から何もできないのは、ただ度胸がないではじゃなく、進んではいけない境界をどこかで自覚していたのかもしれない。

自分の中途半端な幼さや聞きわけの良さ、無力さに戸惑っているうちに、彼は太腿を撫でていた左手も、背中をまさぐっていた右手も私の体から離し、さらに私自身

も彼から引き離された。それからしばらくすると落ち着きを取り戻したようで、私の火照りが治まるのを静かに待っている。不満げに睨み上げる私に、彼はひたすら謝っている。必死で私を宥めている。こんなことになって本当にごめん、と。ごめん？　こんなことで止めてしまったことについて、じゃないの？　なんでこんなにも煽っておいて責任を取ってくれないの？　なんで自分だけ理性を取り戻すの？　私には何もない。してくれなきゃ帰らない、とか駄々をこねる度胸も、自分から積極的に迫る知識も経験も、何も顧みずにいられる無神経さも、何もない。自分が情けなくて涙が出た。彼が二度と戻ってこない場所に、私は取り残されたらしい。彼は膝立ちになって、私を抱き締めた。ずっと謝罪の言葉を続けている。何に対しての謝罪なのかわからない。私を抱くことで私を傷つける。そんな詭弁を使われるほど、私は安く見られているのだろうか。傷ついたかどうかを決めるのは彼じゃない。その金属の女を言い訳にそんなことを言うのなら、そっちの方がよっぽど私を傷つける。私は自分がとてもみじめに思えて、馬鹿みたいで、彼が笑い物にさえしてくれないことが悔しくて、涙が止まらなかった。

もう随分遅いから送ると言った彼を拒み、荷物を引きずるように帰途についた。抱いて欲しいのに抱いてくれない男と、これ以上近くにいるなんて、そんなこと耐えられない。彼の思いに頑なに耳を貸さないでいられるほど子供ではなく、自ら行為に持ち込めるほど大人ではない自分。中途半端に未熟な自分を呪う思いは、夜の闇にどろどろと同化していった。

じゃあ、また連絡して。車を降りる私に、彼はそう声をかけた。次が約束されるこの言葉に舞い上がってしまう。まだチャンスはあるということだ。私は絶対に彼と寝る。あと何年かかっても、だ。私はもう後ろめたさを感じてはいない。すべてを理解した上で、覚悟した上で、私は彼を求めている。これからどれだけ逢瀬を重ねていっても、あのことを清算するための話だけは絶対にしない。いつまでも彼の中で燻らせていたい。あの日の続きをするまでは。それが私にとって彼との、一番強い繋がり方なのだ。あの日から何年もの時間を過ごして、どんなに満たされた幸せより、たくさんの思い出より、止め処ない愛情より、消えることのない罪悪が、何より強い絆となることを私は知ったから。

この漆黒の夜を、私はいつか彼と明かす。

（おおもり　のりこ・関西大学文学部四年次生）

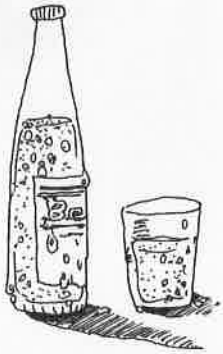
clasp

（カット・城　万喜）

文芸創作講座 小説

裏ドラ

岸田良太



リーチ棒を目前にしても、どの牌を捨てるか決めかねた。それどころか、手の中に並ぶ十三枚の牌に対して鬱陶しささえ感じ始めていた。

背にした壁が打撃音で震えたのに驚いて伍萬（ウーワン）を倒したのは、むしろ幸運だったかもしれない。さも熟慮した結果だ、という風に捨てられさえすれば良かったからだ。もちろん、「ローン！」と叫んだ青柳（あおやぎ）はもっと幸運だったろうけども。

「裏は……よしのった、ハネ萬！　黒木、一万八千な」

倒した手牌の上部にドラの表示牌をくっつけ、青柳が笑いながら手を出してくる。表面にはじわりと汗が浮いていた。少ない残り牌に焦りがあったのだろうか。点棒を渡す時に、微かな湿り気を指先に感じた。卓に擦りつけると、緑色のフェルトが毛羽だった軌跡を描いた。

青柳は点棒をそっとケースに仕舞うと、シャツの胸ポケットから煙草を引っ張り出して火を点ける。飛び退（すさ）っていく煙越しに、対面（トイメン）の赤坂が牌を次々に裏返していくのが見えた。頭上から降る照明のせいで、目の辺りが落ちくぼんでいるように感じる。そのうち、数珠が擦りあわされるような音が六畳の部屋を這い回り始めた。

「黒木、今のは見え見えだったじゃないか」

脇に置いたメモ帳に東三局の結果を書き込んでいた白河が、いつもの水面のような眼差で僕を射抜いた。そう言えば、捨てられていた牌は筒子（ピンズ）や索子（ソーズ）だらけだった

し、役牌が出始めるまで大分時間が経っていた気がした。
「テンパってたんだよ」伏せた手牌を赤坂のほうに押しやりながら、僕は言う。「大きめの手だった」
「なるほど」
白河はそれ以上、何も言わなかった。卓上に目をやり、サイコロを取り除いてから、牌の坩堝に手を入れた。あの目を憎いと思ったのは今日が初めてかもしれない。感情を読むには透き通りすぎて、よほど注意深く見ない限り振り込んでしまう、あの目を。おかげで何度トップをまくられたことだろう。しかも、決まってオーラスだった気がする。六畳間が歓声に包まれた場面まで記憶を掘り返したところで、牌をぐちゃぐちゃとかき混ぜるのに意識を戻した。
「あ、仕事しねーと」吸い殻を灰皿に押しつけながら、青柳が言う。「仕事しないとあがれねー」
その時、せわしなく動いていた赤坂の手が一瞬だけ止まった。まるでCDが音飛びした時のような微かな違和感だが、地震の前兆に似た言いようもない不吉さを伴っているように思えて、僕は生唾を飲む。白河もあの目に赤坂を映していた。青柳はどうだろうか、連チャンを目指し、牌を混ぜるのに必死になっているようだった。さっきのアガリがいかに訪れたかを喋りながら、両の手を縦横無尽に這わせていた。
赤坂はさっきの間を取り繕うように、さっさと牌を集めて卓の隅に積んだ。僕と白河もそれに続く。珍しく、青柳は手の間で牌を崩した。
「おっし、やるか」
白河が差し出したサイコロを受け取り、勢いよく卓上に手をふりだした青柳の背後には、ハンガーに吊された四着の黒いジャケットが見えた。
線香の匂いはもうとれただろうか。

三年ほど前、『安楽死の是非』についての講義を受けている時だった。
その頃の僕は大学生に成り立てで、サークルにも入らず、かといって女っ気もなかった。そして毎週金曜日は必ず、目前に横たわる週末をいかに過ごすかについて頭を悩ませていた。四十八時間もの自由は一人で消費するのにあまりも茫洋としていたからだ。僕は行く手に巨大な砂山を見つけたフンコロガシのような気持ちで、「Q・O・L、つまり『生活の質』が重要です」と語る教授を横目に、机の上に置いた携帯電話のディスプレイを睨んでいた。表示されているのは麻雀のゲームだ。一人で時間をつぶすのにも、頭を活性化させるのにも最適だった

のだ。
大きな教室に人の姿はまばらだった。初回は人いきれで窓が曇るほどだったのに、今や机や椅子、少数で固まって座る学生達の間を緩やかに薫風が渡っていた。いなくなった学生にとっては、生活の質をあげるのにこの講義は不要だったのだろう。そう思うと、ここにいる事自体がひどく自分を貶めているような気さえしてくるのだった。
そんな時、突然「麻雀できるんですか?」と、小声で声をかけられた。
大西と名乗ったその学生もまた一人で、三人がけの机の左端に座っていた。右端が僕で、真ん中の席は空いていた。
「ゲームでならできるよ」
大西は口をすぼめ、「じゃあ、これから、どうですか」と言って隣に移動してきた。「面子が一人足りなくて」
これが転機だった。
「どうして見ず知らずの僕を?」なんて疑問を挟むこともせず、僕はすぐさま荷物をまとめて大西の部屋に行った。講義を抜け出す口実が出来たことに少なからず興奮していたせいだ。そして、既に集まっていた青柳、白河との挨拶もそこそこに、初めて現実の卓を囲った。
あの時、何を話して誰が勝ったかを思い出すのは難しい。面子に赤坂が加わった後、暇さえあれば集まるようになった僕たちは、麻雀をやりすぎたのだ。おかげで記憶の密度は極端に薄くなっている。確実なのは、僕は金曜日に考え込むことがなくなり、『安楽死の是非』の講義は単位をとれなかったということだけだ。
大学から歩いて数分。大西の部屋はいつも紛争地帯のように散らかって、いつも両隣からは生活音が漏れてきていた。通い始めて数回目で、右隣の住人はハード・ロック、左隣はヘヴィ・メタルに心酔しているのを理解した。そんな彼らに対して、僕たちが持つ対抗手段は牌を強く混ぜることだけだった。
「これだけ仕事をしたらあがれるでしょう」
そう言えば、牌を混ぜる事を『仕事』と言いだしたのも大西だった。働けば運が巡ってくるというのはありそうな話で、一時期は皆が使った。
あれからもう三年経つ。あれだけハマっていた麻雀は次第に集まりが悪くなり、いつしか僕たちは、バイトや彼女とのセックスや就職活動や卒論といった、それぞれの週末を過ごすのが当たり前になっていた。
そして気づくと、大西は死んでいた。

見つけたのは赤坂だった。一昨日、部屋に行ってもなかなか出てこない大西に痺れを切らし、郵便受けから中を覗くと、ひと揃いの足が浮いていたらしい。二月にしては暖かいよく晴れた日、「大西死んでる」という簡素なメールを受け取った。

その翌日、つまり昨日、市営の小さな火葬場で僕たち四人は久々に顔を合わせた。どうやら大西は五日間もぶら下がっていたようで、仏さんをこれ以上傷めては不憫だという感情論と衛生上の理由から、荼毘が先になったからだ。検視をした警察からの連絡は、火葬の行われる数時間前という杜撰さだった。

「久々だな」と青柳。

「ああ」と応じる白河。

「うん」赤坂は腫れぼったい瞼をしょぼつかせた。

「そうだね」と僕が言ったか言わないかというあたりに、霊柩車が敷地へ入ってきた。

僕たちはもちろん、田舎から駆けつけた両親さえ、死に顔を見る事は許されなかった。締め切ったワンルームの中ではそれほど早く遺体が傷むのか、それとも首を吊って死ぬと肉親にすら見せられない顔になるのか。銀色の大仰なストレッチャーに載せられた棺は、霊柩車からドア・トゥ・ドアで焼却炉に入っていった。

それからおよそ二時間、青柳がずっと喋っているのを僕は控え室で聴いた。大西はいいヤツだった。麻雀をよくやった。一緒に外食企業の説明会にいって、業務紹介で出された料理を腹一杯食べた。旅行にいった。ビリヤードをした。部屋がすごく汚いから遺品の整理は大変だと思う。遊びに誘って絶対来てくれるのは大西だけだった。

取り留めがなかった。

焼き上がったのは正午を過ぎた頃だった。立ちこめる濃密な熱気の中、僕たちは不揃いの長い箸で、柩を支える鉄棒に分かたれた骨をいくらか拾った。真っ白な野太い大腿骨が眩しくて、目を細めながら箸を動かしているとすぐ、ソフトボール大しかない骨壺は一杯になってしまった。残りがどうなるかは聞かされなかった。大西の両親はそれを大事そうに抱いて実家へ帰って行き、後には僕たちとぼんやりした飢餓感だけが取り残された。

なぜ大西は死んだのだろう。

朝から何も食べていなかった僕たちは、火葬場からの帰りにチェーン店のハンバーグレストランに寄った。そして各々ハンバーグを食べながら、大西についての情報を摺り合わせた。

「流行りの硫化水素ならともかく、首吊りとか、なんで

そんな苦しいやつで死にやがったんだろうな」
「首吊りは上手く締まると楽に死ねるが、下手をすると身体が暴れて失敗すると聞いた。足がバタついて縄が解けるらしい」
「前に会ったとき、就活上手くいってないって話をしていた」
「赤坂、最近いつ会った？」
「一ヶ月くらい前かな。心療内科にも行っていたみたいだよ。眠れないって」
「卒論のゼミをよくサボってた、なんて話をサークルのヤツが言ってたな」
「そういえばあいつ、前にふられたって泣いてたぜ」
「本当に？」
「マジだ。あいつ彼女いたことあったっけか。てことは結局、ずっと童貞だったのか？」
「……そういえば、意味が分からないメールもきた」
「酒飲んでOD（オーバードーズ）とか？」
「考えられるな」
なぜ大西が部屋の中でぶら下がる気になったのかは誰にも分からなかった
僕はハンバーグをめちゃくちゃに崩したあげく、半分ほど残して帰った。

にわかに騒がしくなった青柳を尻目に、東三局は粛々と過ぎた。
赤坂と白河が牌を倒し、僕と青柳は牌を伏せる。青柳は唇をひん曲げながら点棒をばらまくと、手牌と山を引っかき回した。
「仕事だ、仕事が足りねえ」
やはり、一瞬だけ赤坂が止まった。白河に二人分の点棒を渡して腰を上げる。やけに喉が渇いていた。
冷蔵庫を開くと、茶色いビール瓶が三本、厳かに並んでいた。葬儀の帰りに大西の母から持たされたものだ。青柳の部屋に着いてすぐに冷やし始めたおかげか、引き出すと、液面の揺れと共に心地の良い冷気が手を撫ぜた。
「飲み頃か？」
室内に出した途端に白々と結露で染まっていく瓶を見せると、白河は無言で頷いた。
「栓抜きはどこ？」
「冷蔵庫の横に磁石でひっついてる。グラスは……赤坂、飲むか？」
赤坂は蝿でも追い払うように首を振った。車で来ているから、という理由だけでは考えられない力強さだった。僅かな沈黙を経て、青柳は幾分大きな声で、「三つ持ってきてくれ」と言った。

間の抜けた音に乗って、白い煙が瓶の口から漏れる。まずはグラスを差し出してきた青柳に注いでやる。黄金色の粒子がぐるぐるとのたうち、白い泡をグラスの縁ぎりぎりまで持ち上げる。続いて白河。僕の分は、白河が瓶をやんわり取り上げて注いでくれた。

「お疲れ」

青柳の音頭でグラスをかち合わせ、ぐいと呷った。キンと冷えた液体が、上顎の奥に痺れを残しながら胃袋に落ちていく。唇に這う泡を舐めとると、鼻腔を香ばしい湿気が抜けていった。青柳がわざとらしく「あー」と唸る。

卓は既に準備が出来ていた。僕の分まで誰かがやってくれたらしい。整然と並ぶ牌を見ているとゲップが出て、苦みが口に戻ってきた。思わず顔をしかめる。

「しっかし、壁薄すぎだろ、ここ」

唐突に、青柳がグラスを口にあてたまま焦点が曖昧な声で言った。視線は僕の背後へと注がれている。恐らく、あの打撃音のことを言っているのだろう。

「さっきのヤツか」白河が調子を合わせる。「あれはびっくりしたな」

「おかげで青柳に振り込んじゃったよ」ぷつぷつと泡の浮かび上がるビールの液面に目をやりながら呟いてみるも、白河がくつくつと笑うくらいだ。

「抗議なんだよ、抗議。隣人の無言の圧力」力強く断言した青柳は、グラスの残りを嚥下した。手で口元を拭って眉根を寄せる。「ちょい前には怒鳴り込まれたしな。騒ぐな！　眠れないだろ！　ってよ。実際、普通に喋ってただけだぜ？」

「そんなに神経質なのか、隣は」白河が目を見張る。

「病んでるんじゃね？　たまに廊下で出会すけど、朝は死にそうな顔してるくせに、夜中になるとレーザーでも出るんじゃねーのってくらい目がギラギラしやがってよ。たまに呻き声もするしな」

「呻き声？」

「うなされてる時みたいな、くぐもったやつだよ。すげぇ苦しそうな。まぁ、ああいうのは相手にしたくねーよマジで。病むのは勝手だけど他人様に迷惑かけんなよって話」

「そうか」

瓶の残りを青柳のグラスに継ぎ足し、白河はトイレに立った。青柳は恐らく隣人に対しての鋭い舌打ちをし、泡の目立つビールに口をつける。赤坂はずっと卓の上を見続けていて、たまらず、僕はまたゲップをした。

窓の外を見ると、既に雨は上がっているようだった。葬儀の時は雨が降っていたはずだ。

煙草を銜えながら「あいつ、空まで泣かしやがった」と呟いた青柳を覚えているし、部屋の隅に並ぶ四つの紙袋はところどころ、老人の頬のようにしわくちゃになっている。玄関には傘が四本。間違いなく雨は降っていたのに、その記憶や感覚が曖昧なのは、きっとあの数時間が僕の中に何も残してくれなかったからだろう。

「案外遠いんだな」という言葉から始まった青柳の話は、赤坂の運転するセダンの空気を耐え難いものにした。理由の一つはもちろん青柳の天井知らずな言葉の数だが、もう一つが、赤坂の様子だった。

昨日レストランを出てからというもの、赤坂は徐々に口数が減っていって、今朝会った時には旧式のコンピュータよりも受け答えがぎこちなくなっていた。しかしそれも、第一発見者ということを考えれば許せる範疇にあった。大西の遺体を一部とはいえ確認した人間である以上、そのショックは同情によって追体験できる程度のものではないからだ。

しかし、この二人が一緒にいたらどうだろう。サウナと水風呂を行き来しているように、じわじわと身体の芯が怠くなってくる。僕は青柳の言葉を半分聞き流しながら、ずっと窓の外を流れていく景色に目をやっていた。

葬儀は大西の故郷で行われた。海に面した、どこにでもあるような田舎町の斎場だった。

会場に入った僕たちを出迎えたのは、こぢんまりとした祭壇に針山のような菊の群れ、そして、僕たちを笑顔で見下ろす大西の遺影だった。

多分、いつか一緒に旅行に行った時の写真だ。石碑か何かの上に組んだ腕を敷き、笑みを湛えた顔を載せている、そんな絵面だったと思う。写真を探す暇がなかったのだろう。加工されたそれは、ちょうど額に寄りかかっているように見えた。

読経の時も、焼香の時も、喪主の挨拶の時も、その格好で大西は僕らに笑いかけていた。そして少し視線を下げると、あの骨壺が入っているらしい桐の箱が、まるでギフトボックスのように包まれ、漆塗りの台の上に鎮座していた。

僕は自分を遠くに感じた。そして、感覚的な自分のいる地点と、実際の自分がいる空間の隙間に大西を捜した。

空が泣くわけもなく、ただの雨だった。大西の父は喪主らしいことを言っていたが、半分は参列者への挨拶、もう半分はステレオタイプな悔み言だった。遺体の代わりに骨だけがあった。遺影が笑っていた。僕らは大西がなぜ死んだか分からないまま、死んだという事実を受け

入れざるをえなかった。つまり大西はどこにもいなかった。僕はもしかしたら、大西が死んだ理由が分かるかもしれないと思ってここに来たのに、待ち受けていたのは葬儀の形骸だけだった。

帰りに青柳の誘いを断らなかったのは、その隙間を誰かが埋めてくれる気がしたからかも知れない。「うちで麻雀やらねーか」という言葉に、僕は大西と出会った時を思い出していた。

でも結局、それは砂漠で見るオアシスの幻のような、勝手な想像だったのだろうか。僕に回ってきた二度目の親が終わった。しかし、これまで葬儀のことはおろか、大西の名前すら誰も会話に出さなかった。いや、出せなかったのかもしれない。現に僕はそうだ。口に出すと何かが壊れるような危うさがこの場にはあった。

もう諦めるしかないのだろうか。スムーズに進めば残りは二回だ。それが終わると、僕たちはまた「久しぶり」と言い合うくらい会わないかもしれない。その時まで大西のことを、そして今日のことをどれだけ覚えていられるだろう。

南三局が始まる。捨てられた牌が次々並べられていく。このままでいいのか。自問する。牌を捨てかねる。どれを捨てればいいか判断がつかない。白河が牌を捨てた。白河の目を見る。あの目と僕の目がぶつかり合う。分からない。青柳がなぜしゃべり続けるのか、赤坂がどうして無口なのか、白河が何を考えているのか、僕はどうすればいいのか。このままだと僕たちは麻雀を終えてしまう。

瞬く間に迎えたオーラス。捨て牌が増えていく様子に、僕はたまらずぎゅっと目を瞑る。地雷原のまっただ中にいるようだ。怖い。もし青柳が場をもたせるためだけに必死に喋っていて、赤坂は大西のことでひどく思い詰めていて、白河は気晴らしに麻雀をしているとしたら。このままやり過ごすしかない。動かず、その場で止まるほかない。

「リーチ」の声に、僕は目を開いた。

僕の左手の河に、牌が横向きに捨てられている。白河だ。その口元が緩み、くいっと唇の端が吊り上がる。嫌な予感が、した。

「そういえば」千点棒を出し、牌を伏せてから、挑むような口調で呟く。「どうして大西は死んだんだろうな」

地雷が作動する音を聞いた気がした。

「そう、それ、オレも気になってたんだよ！」声を弾ませ、青柳が膝を打つ。「なんでなんだろうな、赤坂」

そしてよりにもよって、青柳は僕ではなく、赤坂に話を振った。連鎖だ。誘爆だ。止まらない。白河は波乱を起こす才能がある。僕はそれを確信する。そして、この波乱は良い意味でも悪い意味でも、部屋を沸かせるものになると覚悟する。オーラスだから、間違いない。

「うるさい！」

ついに赤坂が怒鳴った。押し黙っていた間に溜まっていた怒気が声に乗って飛散し、窓硝子を震わさんという勢いで、よどんだ空気を膨張させる。

「ずっとべらべら喋りやがって！」

卓の端を手で叩くと、赤坂は勢いよく立ち上がった。青柳が目を丸くする一方、白河は表情をぴくりとも変えない。僕はまるで自分が怒鳴られているような気になり、卓に目をやった。牌は地震でも起きたかのようにぐちゃぐちゃに散らばっていて、赤坂のいやに大きな影が卓をすっぽり包んでいる。

「青柳、君、何日か前に大西から電話があっただろう」

「え？」

耳から飛び込んだその言葉は、僕の脳内を一撃で真っ新にした。電話？　少なくとも、あのレストランでそんな話は聞いていない。それに青柳の様子はいつも通りだったじゃないか。顔をあげる僕に、青柳がケージに入れられるのを拒む犬のような目を向けた。白河は黙って二人を見つめている。

「君のせいだよ、大西が死んだのは」

「何言ってんだよいきなり」

圧死寸前のカエルがする呼吸のような鈍い音がする。

「なんでオレのせいなんだよ」

青柳の開けたり閉じたりしている口の下の、ひくつく喉からそれは鳴っていた。多分、言葉になる前に声が喉笛で潰れているのだ。

「ふざけるな！」

赤坂が声を張り上げた途端、椅子が倒れるような硬質の音が、背後から浴びせられた。今回の隣人の抗議は正当だ。しかし、それは静謐をもたらす事なく、逆に赤坂を動かした。

赤坂は肩をぐっと後ろに引いたかと思うと、弧を描くように腕を振り出した。その先についた拳は僕の鼻先を掠め、呆けたように口を動かしている青柳の左頬を打つ。卓が飛び跳ねた。皮膚の弾ける音と野太い呻き声が部屋に反響し、衝撃が尻を撫でる。赤坂は仰向けに倒れた青柳の腹の上に座り、両手でシャツの襟を握りこんで、涙や打撲の痕で騒がしい顔を起こした。白河はそれを静かに眺めている。止めるそぶりすら見せない。

「調書とられた時に警察が言ってたんだ。大西の携帯を見たら、発信履歴に君の名前があったって。しかも首吊る直前あたりに。どうして止められなかったんだ。何を話したんだ。様子がおかしいとか思わなかったのか。どうしてこんな大事なことを黙っていたんだ」

赤坂の腕の動きに従って青柳は揺れた。「ごめん」という言葉の出来損ないが唇の隙間からはみ出す。擦り切れそうな声に言葉の輪郭が曖昧になっている。

「どうしてだ、って聞いてるんだ！」

熱気を孕んだ声が耳朶を叩いた。また青柳の野太い呻き声がして、赤坂がしゃくりをあげる。散らばった牌の中に千点棒が埋もれている。それを認識した途端、遠い日の光景が目前の現実を覆い隠す。そこには大西がいた。赤坂がいた。そして、僕がリーチ棒を警戒しながら牌を捨てたのと同時に手牌を倒す白河。オーラス、ハネ萬が親の僕を直撃して、部屋に満ちる歓声。口の端に笑顔の欠片をひっかけた白河が鮮やかに浮かび上がり、消えた。白河、僕はお前を恨む。最後の最後に場をひっかきまわすなよ。まったく同じ表情をして二人を見ている白河がいる。ああ、もうどうにでもなれ。隣の部屋からこれまでにない激しい抗議が来ている。壁材の内側で反響した音の波に乗り、衝撃が僕の背中に襲いかかる。まるで背中をバタ足の要領で、何度も蹴られているようだ。構うものか。どれだけ壁を殴りつけても、蹴りつけても、火種が燃え尽きるまで止まらないのだから。

「電話はとれなかったんだ」頬が痛み始めたらしく、間の抜けた声で青柳は呟いた。

「嘘をつくな」

「マジなんだ、信じてくれよ！」

青柳がスラックスから携帯を引っ張り出して、着信履歴の画面を見せる。そこには大西の名前と不在着信の文字があった。

「じゃあワザととらなかったんだろう。さっき言ってたよな。病んでるヤツは相手にしたくないって。青柳がツレなくなったって、大西がよく愚痴ってたよ。君、大西がうざくなって、無視したんだろう？」

「ちげぇよ、寝てたんだよ！　見ろよ、夜中三時だぜ、普通は寝てるだろ？　それに、ツレなくなったって言われても、都合が合わない時だってあるじゃねーか！」

青柳が胸ぐらをつかむ赤坂の腕に手を伸ばし、強くつかむ。

「大体赤坂、そう言うお前だってゼミメンと旅行だなんだって、よく言ってたじゃねぇか。白河はサークルに精出してるし、黒木は女が出来た。あの時とはもうちげぇ

んだよ赤坂。ちげぇんだよ。オレにだって、オレの生活があるんだ。なぁ、やっぱり、大西が死んだのはオレのせいなのか？」

赤坂の腕に食い込む青柳の指先は赤く色づいている。よほど強い力がかかっているのは間違いなかった。なのに、僕にはそれが抵抗ではなく、漂流者が流れてきた板をつかもうとしているかのように、儚く見えた。

「なぁ、オレのせいなのかよ」

繰り返す青柳の言葉は静けさの中に解れていく。腕が離れた。

「怖いんだよ。オレのせいかもしれない、って考えたら」

赤坂は立ち上がり、僕の対面に座り直す。そしてゆっくり、床にまで散らばった牌を拾い始めた。何かを探すように、一つ一つ、丁寧に集める。しばらくすると青柳も身を起こし、襟元をひとしきり弄ってから、胸ポケットの煙草を取り出して火を点けた。ジジッという音に先端が朱く燃え、天井に向かってのろのろと煙が湧き上がる。目一杯の煙にまみれて、「オレのせいなのかよ」と青柳は漏らした。

「違う」赤坂はぎゅっと牌を握り込む。「ボクだって、気づけなかった」

「電話、とりたかったよ。お前から連絡がきてからずっとそう思ってる。あの時オレが起きてたら、今日は久々に五人が集まって、麻雀してたかもしれねぇんだよな」

青柳の口から交互に溢れる煙と独白は、この部屋と僕の内奥にじんわり降り積もった。一本の電話をとれたとして、大西が思いとどまったかどうかは、自殺の動機が不明な以上誰にも分からない。それでも可能性だけは、癌細胞のように二人の心を蝕み続けていたのだ。

「青柳」気づくと、白河がビールを手にして立っていた。

「頬、これで冷やせ」

ちゃぽん、という音が青柳の手の中ではねた途端、赤坂が卓の上に泣き崩れた。

白河の後を追って出たベランダからは、雲一つない未明の空に抱かれてまどろむ町並みが見えた。冴え渡る空気が耳と鼻先を擦って、刺すような痛みを与えてくる。吐く息は気まぐれに吹く風に乗り、口から白い尾を引いてどこかへ飛んでいく。

隣人は結局眠れなかったのだろうか。隣のベランダからは明かりが煌々と漏れていた。

「煙草なんて吸ってたっけ」

「半年くらい前から、サークルの悪友の影響でな」

煙草をくわえて立つ白河は、じっと遠くを睨んでい

た。せわしなく親指と人差しが動くたび、手の中のオイルライターが開閉する透き通った音が、どこかでバイクや車のエンジンが放った雄叫びを無骨に切り刻んでいく。「二人、放っておいて大丈夫かな」と尋ねながら、大丈夫だと確信している自分をどこかに感じる。少なくとも、僕がベランダに出る時には憑き物が落ちたような顔をしていた。

「あれだけやりあえば大丈夫だろう」白河は肩をすくめた。

身体を預けるとアルミの柵は僅かに悲鳴を上げた。夜露がシャツの胸元を濡らし、さっきまで胸で渦巻いていた熱気を瞬く間に奪う。ふと、正面の家の中に明かりがともった。眼下の路地で猫が駆け、首をすっぽりマフラーに埋めたサラリーマンがゆっくり歩いていく。

「どこまで知ってたんだ?」

鈍い爆発音がして濃白色の煙が生まれ、かき消える。

「いや、何も知らなかった」

「まさか」僕は溜息をついてみせる。「冗談は良いよ」

「まさか、だ」一服。煙が流れる。「……様子を見てるうちに気づいたんだよ。覚えてないか? あいつはテンパってる時に限ってよく喋る。赤坂はその逆だ」

「そういえば」そうだったかもしれない。頻繁に卓を囲んでいた頃は、それを僕も覚えていて、振り込まないように気をつけていたかもしれない。あの時とはもうちげぇんだよ。青柳の言葉がそっと、脳裏にすり寄ってくる。「やっぱり、よく見ているんだな」

「なぁ、黒木。俺は最低だよ」

白河がすっと目を細める。

「いきなりどうしたんだ」

ひときわ大きな呼吸音の後、白い筋が目前で長くたなびいた。それのどこまでが紫煙で、溜息で、嘆きなのか

を僕が理解する前に、透徹した空気がどこかへ運び去った。
「俺は正直、ちっとも悲しくないんだよ、黒木。だから周りがよく見えた」
お前が話したがってるのも分かってたんだ、と言いながら、白河は顔をくしゃっと歪めた。精一杯自分を醜く見せよう、そんな意図があるように。
「俺は思うんだ。自殺をするのは、想像もつかないような深刻な理由のせいかもしれないし、その逆かもしれない。まあなんにせよ、自殺するやつにとっては致命的な問題なんだろう？　だから死ぬんだしな。なら、止められると思えない。電話が来ても、腹括られてたら無意味だ。同じ家に住んでても、部屋が違えば気づけない。壁一枚は思ったより厚いんだ。精神的にもな。どうしようもないんだよ、目の前で飛び降りようとしてるとかじゃない限り、物理的に止めようがない。なら受け入れるしかないだろう？」
長く伸びた灰が白河の手元から落ち、ベランダの外へ舞った。あの日見た大西の大腿骨の下に積もった灰よりも、いくらか軽そうに見えた。
「そうだね」
大西が遺した灰はどんな色をしていただろう。ふとそれが気になった。
名前の通り灰色だったのだろうか。それとも、拾った骨のように真っ白だったのか。そして今の僕にとっていずれ興味を失うこの問題は、誰かにとっては命すら蝕んでしまうものなのだろうか。例えば、青柳。五年後の赤坂。十年後の白河。
隣に佇む煙草を銜えた横顔を見た。額、鼻梁、口唇、頤（おとがい）……隆起した喉仏。その上辺りに、顎から耳の下にまで食い込む、細い縄を想像した。縄が白河の息の根を縊（くび）っていくと、首には血管や筋が荒々しく浮き出し、薄れる意識は生きようとする身体を抑える事が出来なくなって、腕や足が周囲の物に向かって最後の暴力をまき散らすうちに顔はみるみる鬱血。何度も僕を苦しめたあの目が濁りきった頃、白河という男は突如として、日々擦りきれていく記憶の中にしかいなくなるのだ。現に大西のことを思い出そうとすると、まず出てくるのはあの遺影の笑顔だ。他の顔を思い出すには少し時間がかかりつつある。
白河の手元からまた灰が落ちた。僕は必死に灰の行方を追う。風に乗った細かな粒子は、赤く色づき始めた夜の終わりにむかって飛び、朝靄の中に混じっていくところまで見届けられた。唐突に、鼻の奥が温（ぬく）んだ。
「いや」僕は頭を振った。「やっぱり自殺は嫌だな」

ポケットから取りだした携帯灰皿に吸い殻を入れ、白河はまた長い息を吐いた。

「そうだな」

その時、正面の家の雨戸が開いて、パジャマをはだけさせ、胸元が顕わな寝ぼけ眼の女性が顔を出した。一瞬の後、逃げるように部屋に入る僕たちの背に向かって、お化け屋敷から聞こえてくるような、やけに大げさな悲鳴が突き刺さった。

「声のわりには小さかったな」

後ろ手に扉を閉めながら白河が苦々しく呟いたのを聞いて、僕は笑った。

玄関から出ると、革靴の下で塩粒が砕ける感触がした。

「お疲れ」

左頬に青アザを浮かべた青柳が、玄関のドアを支えながら手を挙げる。低く射し込む朝日に目を細めたその顔は、まるではにかんでいるようにも見えた。

「次に集まるときはちゃんとやろう」

白河が手を挙げる。卓は今も、赤坂と青柳のせいで散らかったままだ。

「次は卓を崩さないように殴るよ」という赤坂に、青柳は「そうしてくれ」とぼやいた。

廊下にはまだ夜の残滓がこびりついているのか、まるで月の海の底のように静まりかえっている。耳を澄ませば隣人の寝息すら聞こえたかもしれない。もし、あの最大限の抗議の後に寝ることができていたらの話だけども。

「じゃぁ、また」

誰ともなしに言った。

青柳はゆっくり扉を閉め、僕と白河と赤坂は連れだって階段を目指した。廊下から見える空は、穏やかに青色を増していっている。

マンションの玄関を出たあたりで、近づいてくるサイレンの音を聞いた。それは徐々に大きくなり、駐車場で夜露にまみれた赤坂のセダンに乗り込む頃には、赤色灯を回すパトカーと救急車という形に結実した。

それぞれの車から警察官と救急隊員が二人ずつ出てきたかと思うと、担架やら人が入りそうなくらい大きな袋やらを担いでどやどやと玄関をくぐり、階段を駆け上がっていく。そして大声を張り上げながら、青柳の隣の部屋の扉を叩くのを、僕たちは曇ったフロントガラスごしに見た。

〈了〉

（きしだ　りょうた・関西大学文学部四年次生）

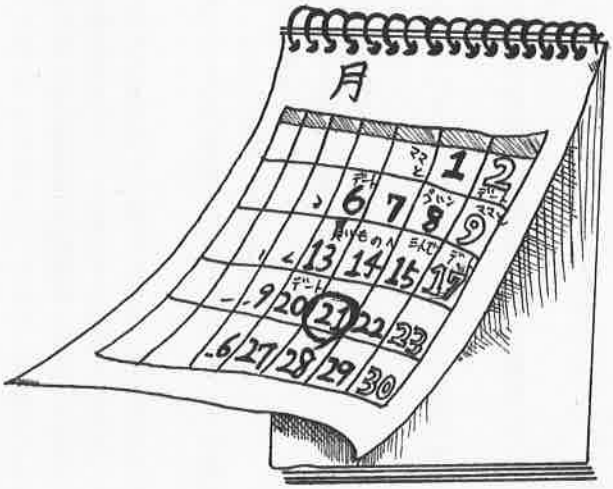
（カット・一瀬優紀）

掌編小説

フェイスフル

魚日記

「母さんね」
と母は浅漬けの胡瓜をしゃくしゃくと噛みながら切り出した。
「ここ、出ていくことにしたのよ」
私はその意味が飲み込めずに、箸を止めて母を見た。
「父さんと離婚して、ここを出ていくの」
母の話し方があまりに淡々としていたので、つられて私まで冷静になって、思わず、そうなんだ、なんて拍子抜けした相槌を打った。
「母さん、好きな人ができたのよ。……違うな、正確に言うと、父さんに出会う前から好きだった人がいたの」
母はまるで昨日見たテレビ番組の話でもするかのような口調でそう言った。その表情は懺悔でもするかのように、あるいはこの上なく幸福そうにも見えた。
母さんには好きな人がいたの。その人は当時、母さんの勤めてた会社の上司で、奥さんも幼い娘さんもいた。今どき珍しくもないけど、不倫だった。許されないことだけど、私たちは本当に愛し合っていたわ。出会うタイミングさえもっと早ければ、結婚していたでしょう。その頃一緒にバンドをやっていた父さんに、ずっとその恋の相談をしていたの。そうするうちに父さんは母さんを好きになってくれた。母さんだっていい歳して独り身でいたくなかったし、父さんの情熱に心打たれて結婚することになったわ。それを機に母さんは会社を辞めて、



きっぱりとその上司とも別れることにしたの。会わなくなれば気持ちも冷めるだろうと思ってた。実際、何年も会わないうちに諦めていたのにね、三ヶ月ほど前に、偶然その上司と駅で会ったの。彼、少し前に離婚したんだって。それにまだ、母さんのことを想っていてくれてた。母さんねぇ、それ聞いたらいてもたってもいられなくなった。十何年も我慢してきたものが溢れ出して。だって、本当に大好きだったの。心の底から。

そう話しながら、母の声はとうとう震えた。そんな母を見てようやく、ああ、私は置いていかれるんだなって、じわじわと理解し始めた。ロマンチックだなんて思える余裕は私には持てなかった。込み上げるもやもやとした哀しみに自分を見失いそうになる。

「だけどさ、私、朝だってよく寝坊するし、来年なんて受験だよ、それに誰がご飯作るの？」

整理の追いつかない頭の中で、母を引き留める方法を必死に探していた。

「父さんがいるじゃない。あの人、あんまり作らないけど、料理本当はうまいのよ。それに時々ミツルが交代して作れば、花嫁修業にもなるし」

母の表情からは迷いなんて一切見られなくて、小さな失望に胸が震える。無性に母が恋しく、そしてとても遠

く感じた。
それでも、母を非難する気にはなれなかった。十七歳とはいえ、人を好きになるってことわからないわけじゃなかったから。それ以上に、たぶん、非難することで母を本当に失ってしまうことが怖かったんだと思う。理解のある娘を演じよう、と私はその時心に決めた。
「時々会いに来るから。寂しいとか、思わなくていいように」
母ができるだけ何気ない声を出そうとしているのがわかった。けれどまだ、語尾が震えている。
「いつ引っ越すの?」
「ちょうどひと月後。名古屋に行くの」
「神戸と名古屋なら、何とか会えるね」
「そうね」
「でも会いたいときにいつでもってわけにはいかないね」
「そうね」
母がさっきから私の表情をいちいち観察しているのがわかる。
「そうだ、ひと月のうちに、二人でやれること全部やろうよ。一緒に暮らしてるうちに、できること全部」
母が今思い付いたように明るい声を出した。本当はずっとそれを言い出したかったんだろう。
「なんだか友達みたい」
「そうよ。ひと月だけ、ミツルと母さんは友達になるの。面白いと思わない?」
そうね、と頷いて母を見ると、母はどこか臆病そうな笑みを浮かべて私と目を合わせた。

まずは二人で計画を立てることにした。試験勉強と同じだ。私は試験の時、カレンダーの試験の日に丸をして、その日までにどんな勉強をするか毎日の計画を立てる。同じように、母の引っ越しの日に丸をして、ひと月の間にできることを毎日書き込んでいくのだ。何でもいい、母と一緒にできること。料理を教えてもらったり、学校帰りに待ち合わせてデートをしたり。そうだ、恋人の柊くんのこともまだ紹介していなかった。それを計画の一番最初に入れよう。それから、夕飯は必ず一緒に食べることにしよう。父が早く帰れる日には、三人で一緒に。そんな計画を立てながらも、私は心の中でくすぶり続ける矛盾した感情に耐えていた。
「彼氏くん、何ていう名前だっけ?」
計画表の一番目を見て、母が嬉しそうに聞いた。
「柊くんっていうのよ。柊貴志。かっこいい名前でしょ。うちなんて梨本だもんね。柊くんと結婚したら私、柊ミ

ツルだよ。芸能人みたいな名前になるわ」
「ふふふ、本当ね。柊くんかぁ。早く会ってみたいな」
「かっこいいよ。バスケ部のキャプテンで、成績だって私よりずっといいの」
「ミツルにはもったいないぐらいねぇ」
本当に、そうかもしれない、私にはもったいないぐらい素敵な恋人がいる。食べたり眠ったりするのと同じぐらい当たり前に、毎日柊くんのことを考えている。ただただ愛しくて、時々理由もなく泣きたくなる。そんな気持ちを知っているから、母の身勝手な恋をあっさりと許せたのかもしれない。ううん、本当は許したふりをしているのかもしれない。本心は縋り付いてでも母を引き留めたかった。もしも私が、柊くんとの恋を誰かに断ち切られたらと思ったら耐えられないから、母を許さざるを得なかっただけだ。
翌朝、卵焼きを頬張りながら、私は昨夜考えた「私との約束三カ条」を発表した。一つ目、夕飯は必ず一緒にとること。二つ目、八時には帰宅すること。三つ目、週に一度は私とデートすること。万が一、約束を破ったらお詫びにケーキを買って帰ること。うーん、と母はちょっと渋ってから、
「承知いたしました」
と大きく頷いた。よろしい、と私が冗談ぽく頷いてみせると、どちらからともなく声を上げて笑った。
二週間ほどしていとも容易く約束は破られた。八時頃に母から、「高畑さんといるの、ちょっと遅れる」という電話がかかった。誰だよ高畑さんて、と心の中で突っ込みながら、ああ、上司だったっていう人か、とすぐに思い当たった。父は今日も遅くなるから、私は一人夕飯を用意してテーブルに着く。あ、そうか、母がいなくなったら、こうして毎日一人で食べることになるんだろうな、なんて思ったら泣けてきた。味噌汁の湯気がゆらゆら消えていくのを見ながら、これはケーキ一個じゃ気が済まないな、と悪態をついた。
母が帰ったのは十時を回った頃だった。
「ごめんごめん、話し込んでたら、遅くなっちゃって」
「もう、真面目にやってよね。あと十八日しか一緒に暮らせないんだよ」
「本当ね、ごめん。明日ケーキ買ってくるから」
頬を膨らませる私に手を合わせてから、母はバスルームに向かった。間もなくしてシャワーの音が響く。私は歯磨きをしようと洗面所に行くと、隣のバスルームから母の鼻歌が聞こえてきた。呑気なんだから、とまた頬を膨らませたとき、洗濯機に入り損ねた母のパンティーが

目に入った。黒色のちょっとエッチなやつだ。たったそれだけのことで、なぜだか急に、バスルームの向こうにいる人が他人に思えてくるのだった。

次の日の放課後、携帯を見ると『今日、学校終わった後待ち合わせしない？　高島屋の前で待ってるから』と母からメールが入っていた。『了解、じゃあ四時半頃に』と短く返信すると、私は待ち合わせ場所に向かった。

高島屋の入口のところで、母が手を振っているのが目に入った。隣にいる男の人に気づくと、私はすぐに、母が私を呼んだ理由がわかった。

「こちら、高畑さん」

私が着くなり母がその人を紹介した。母より十歳は年上だろう、口の上に白髪まじりの上品な髭を生やした、温厚そうな男性が「どうも」と頭を下げた。

「娘のミツルよ」

母が私を紹介した。

「きちんと挨拶してね。母さんがこれからお世話になる人よ」

どっちが子供だよ、と複雑な気持ちになりつつも、形通りの挨拶をして頭を下げた。娘をお嫁に出す気持ちってこんなふうなんだろうか。

「突然で驚いただろうけど、昨日から出張でこっちに泊まってらしたから、ついでにと思って」

母が言い訳しながら、子供のように照れた仕草をするのが苛立たしかった。

それから三人で近くにある喫茶店に入ることになった。端から見たら親子三人連れに見えるんだろうか。それとも私と高畑さんとの間には誰の目にも、見えない距離があるように映っているんだろうか。

馴れ初めなんて話されたらどうしようかと思っていたけれど、幸いにも話題は昨日見たニュースとか、天気とか、学校のこととか、終始他愛ないものだった。

「ちょっとお手洗いに行ってくるわね」

母がそう言って席を立った。途端に私と高畑さんの間には気まずい沈黙が流れた。手持ち無沙汰に私は少し冷めたミルクティーを時間をかけて飲んだ。

「ミツルちゃんは、おじさんのこと恨んでいるだろうね」

高畑さんはふいに、少し申し訳なさそうな笑みを浮べた。自嘲とも媚びともとれる笑みだった。私は咄嗟に返事ができず、口を開いたまま声を出せずにいた。

「本当に申し訳ないと思ってるんだ。君がもし泣いて引き留めたりしていたら、僕は由紀さんが何と言おうと、一緒にはならないつもりだった」

言い訳だ、偽善者だ、と私は心の中で否定する。しかし目の前にいるこの人がどう見ても悪い人には見えないことも事実で、その事に私は苛立ちを感じて沈黙した。

喫茶店を出たところで、「ミツルも夕飯、一緒に行く？」と母が聞いたが、私はすぐに首を振った。

「私、先に帰ってる。宿題いっぱいあるの」

不満そうに見送る母を残して、私は先に家に帰った。歩きながら鼻の奥がだんだんと熱くなってきて、玄関の扉を開けた瞬間、とうとう声を上げて泣いた。体中の力が全部泣くためだけに使われているぐらい、一生懸命泣いた。

その夜は門限をきちんと守って、母が帰ってきた。右手にケーキの箱を持っていた。ショートケーキ、チョコレートケーキ、モンブランの三つが入っている。迷わずショートケーキに手を伸ばしていると、珍しく父が早く帰ってきた。

「父さんも食べる？　ケーキ」

「うん？　ああ、たまにはいいな」

私、先にお風呂、と言い残して母はバスルームへ向かった。

父の分の夕飯を手際良くテーブルに並べ、チョコレートケーキを添える。いつの間にか父の食事の用意をするのは私の担当になっている。

父が物静かに夕飯を口にする間、私はケーキを頬張りながらぽつぽつと続かない会話を繰り返した。

「お前はもう、会ったのか」

何気ない会話の合間に、父がふと思い出したように切り出した。

「うん？　ああ、あの人なら今日会ったよ」

主語がなくてもわかるのがおかしかった。いつの間にか夕飯を終えた父は、そうか、と気の無い相槌を打ちながら、ケーキを小さく切って口に運んだ。

「父さんは、いいの？　母さんのこと納得してるの？」

「納得するもしないも、仕方ないじゃないか」

「でも父さんの気持ちを無視してるでしょう？」

「母さんの気持ちを知った上で結婚したんだ。大事なのは母さんの気持ちだ」

「そんなに好きならどうして」

「そんなに好きだから」

父はそれ以上の会話をやめさせようとするかのように、強い眼差しで私を制した。父の目に威圧され、私は目を反らせなかった。やがて父が先に目を反らした。父さん、とその隙に私は口を開いた。

「私、父さんの子よね」
私が言うと、「馬鹿言うな！」と声を荒げて父は席を立った。

学校が終わって自宅に帰ると、一日の「計画表」を見るのが習慣のひとつになった。自分で書いたものもあるし、母が書き足した部分もある。その日の計画には、いつ書かれたのか、「母さんと一緒に寝る」と母の几帳面な文字で書かれてあった。キッチンで挽肉を捏ねていた母が、私の様子を見てクスクスと笑った。

「母さんと父さんはさ、どうやって出会ったの？」
真っ黒な天井を見つめながら、私は聞いた。暗闇と狭い空間が私たちを開放的にしていた。母はガサゴソと身動きして首まで布団をかぶると、私と同じように天井を見ながら話した。
「母さんたちは一緒にバンドをやっていたの。父さんがベースで、母さんがキーボード。母さんと父さんは帰り道が同じだったから、いつも一緒に帰ってた」
母は友達と恋の話でもするように、少し浮かれながら話を続けた。
いつも一緒に帰るうち、父は母に恋を意識するようになった。けれど母にはその頃好きな人がいた。それが高畑さんだった。
「今思えば、父さんの気持ちを知らなかったとはいえ、とても残酷なことをしていたわね」
と母は自嘲するように笑った。
父は母から恋の相談を受けながらも、母への気持ちを捨てられなかった。そんなある日、父は『スクリーン』という曲を作ってきた。
「「僕の心のスクリーンにはいつも君が映っている」っていう歌詞がとても印象的だったわ」
それは父の賭けのようなものだった。
「この曲は君のことを想って作ったんだ」
父は照れながらそう言い、母は泣いた。それから二人の付き合いが始まった。結婚もした。私を生んだ。
それを後悔したことは一度もない、と母は言った。けどね、と母は続ける。けどね、母さんの心のスクリーンには、いつまでも同じ人が映っていたの、そしてね、いつまでも消えることはなかったのよ。

見るたびに増えていく母の段ボール箱。部屋に収まりきらずに玄関先にまで進出してきており、玄関を開ける

と扉が箱に当たってガツッと音を立てる。

母と過ごす最後の日、家に帰りたいような帰りたくないような気持ちで放課後を迎えた。柊くんはいつもより優しくて、部活を休んで私の傍にいてくれた。学校帰りに一緒にケーキを食べて、高校から近い柊くんの家に寄るのが決まりのコース。柊くんのお母さんともすっかり顔なじみになった。「結婚してもうちじゃ嫁姑問題だけは大丈夫そうだな」なんて柊くんが笑っているぐらい仲良しだ。

ともすれば涙が出そうになる私を気遣って、柊くんは部屋に入ってもなかなか話しかけてはこなかった。じりじりと近づいてくる母との別れの時間を感じながら、私は柊くんにしがみついていた。

「今日は、早く帰った方がいいよな」

柊くんが宥めるように言った。そうだね、と返事をしたら、きっかけを待っていたかのように涙がほろりと落ちた。柊くんは体中で私を抱き締めて、大丈夫、大丈夫、と言いながら頭を撫でてくれた。柊くんまで涙を滲ませて、一緒に痛みを受け止めようとしてくれる。

もしも私が柊くんと結婚したら、絶対離婚なんてしない。母さんが父さんを好きでいてくれたらよかった。私が柊くんを思うほどに。母さんの一番好きな人が父さんならよかったのに。どうして大人って複雑なんだろう。好きな人とただ一緒にいることが難しくて。結婚したのに他に好きな人がいるなんて。結婚した人が一番に好きじゃないなんて。なんでだろうね。本当に、不思議。

通り過ぎてしまったんだよ、きっと、と柊くんが言った。

「それが幸せって気付かずにさ、きっとその向こうにもっと幸せが待ってるんだと思って、通り過ぎてしまったんじゃないかな。気付いたときにはもう、戻れないぐらい遠くに来てしまってたんだろうね」

だから、俺たちは間違えないようにしなくちゃな、と柊くんは透き通った目で私を見ながら言った。さぁ、と柊くんは気合いを入れるように私の両肩をポンと叩いた。

「もう行きなよ、ミツル。今日はさ、ちょっとでも早く帰った方がいい」

うん、と涙を拭うと、家まで送ろうかと聞く柊くんに首を振り、私はひとり家に向かった。最寄り駅からダッシュしてみると、ほんの少し爽快な気持ちになれた。

家に着くと、玄関で余った段ボール箱の整理をしていた母が、

「おそーい、荷物、手伝ってくれるって言ったじゃない」

と口を尖らせた。母がいつもの明るい声を装っているおかげで、私もすぐにペースを取り戻すことができた。ごめんごめん、と言いながら、私は母を手伝って段ボール箱を玄関に積み上げていく。

「明日、何時に引っ越し屋さん来るの？」

「九時よ。ちゃんと起きて、見送ってね」

「はやーい！」と文句を言ってみると、「いつもだらだら寝てるんだから、たまにはいいじゃないの」と母が叱る。母さんとの会話、こんな感じだったっけ。何だか急に話し方がわからなくなってくる。母との距離がつかめない。何気ない会話のはずが、手探り状態になっている。

朝八時、その日は珍しく三人で一緒に朝食の席に着いた。前にこうして三人で朝食を摂ったのはいつだったか、私はもう忘れてしまった。今日は朝から母が焼いたホットケーキ。最後の晩餐だね、って冗談を言ったら、最後の朝食でしょ、と母が訂正する。父は何も言わずにむしゃむしゃと頬張った。会話はもうそれ以上続かなくて、咀嚼音だけ響かせながら、私たちは朝食を平らげていった。もしも私が、悲しくて食事も喉を通りません、なんてキャラだったら、母さんは思い留まったりしたのかな。残念、もう今さらキャラチェンジなんてできないよ。

「最後に景色でも、見ておくかな」

朝食を終えた母がベランダに出ていった。

マンションの二階だし、別に景色なんて良くも悪くもないですから。道路を挟んで古ぼけたマンションがあるだけですから。突っ込みながらも、母の後を追ってベランダに出てみた。

隣に立って、見下ろしてみる。ああ、車が走ってますねぇ。ゴミがまだ回収されてないですねぇ。それだけですねぇ。ほらね、特に感動するような景色なんてないでしょ。

「ミツル、ごめんね。ずっと言いたかった、ごめんって。ああ、もうだめ」

そう言った瞬間、母は泣き崩れた。つられて私も号泣しそうになるのを懸命にこらえながら、気付けば母の頭にそっと手を置き、そして優しく撫でていた。涙を我慢しすぎて、吐息が何度も震えた。

「高畑さん、いい人そうだった。母さんが好きになっただけあるよ」

許すとか、許さないとか、私にはもうわからなかった。私は母という人が好きで、その母が選んだ道を、ただ見守ることしかできないと思った。

ベランダの下に、引っ越し屋さんのトラックが停まるのが見えた。

「あの引っ越し屋さん?」

私が指さすと、そう、と母が頷き、慌ててごしごしと顔を拭った。

「行かなくちゃ」

母はゆっくりと深呼吸をひとつした。

業者が何度か出入りを繰り返し、たちまち部屋の中は慌しくなる。母がてきぱきと業者に指示をする様子を、私と父は邪魔にならないようキッチンから見守っていた。

部屋はみるみる片付いていった。玄関の扉だって、もう荷物が当たらないよう慎重に開けなくたっていい。

いつの間にか、手荷物を持った母が私たちの前に立っていた。

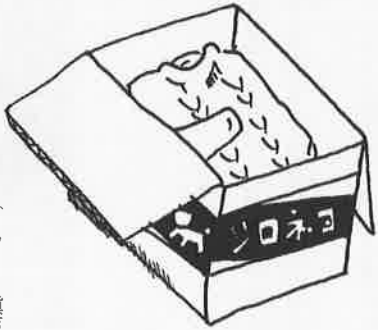
「それじゃあ」

母が私と父を交互に見ながら言った。それじゃあ、ちょっと出掛けてくるわね、とでも言うように、見慣れた動作で。

それにつられたふりをして、行ってらっしゃい、と私は手を振った。行ってらっしゃい、ケーキを忘れないでね、とでも言うように、いつもの口調で。

（完）

（さかな　にっき　筆名・関西大学卒業生）



（カット・槇原美奈）

書評

『夜は短し歩けよ乙女』（森見 登美彦著）

「妄想」と「リアル」の接合点

城内 裕樹

©角川書店・文庫
2008年12月刊 324頁
本体価格 552円

こんな突飛な大学生がいるだろうか。

森見登美彦が描く作品には、京都を右往左往する大学生が描かれる。彼らの屈折した青春生活は、読者を楽しませてくれる。処女作『太陽の塔』は第十五回日本ファンタジーノベル大賞を受賞し、『夜は短し歩けよ乙女』は、二〇〇七年・本屋大賞二位になり、第二〇回山本周五郎賞を受賞している。

去る二月二〇日に、私は出版文化産業復興財団（JPIC）が開催したイベント「中高生のための読書講座「オーサー・ビジット校外編」に大学生スタッフとして参加して、森見さんと中学・高校生が交流するシーンを見てきた。数人の高校生と話をしたのだが、誰もが森見登美彦が広げる世界観を愛しており、同時に京都や京都大学に関心を持っていた。

私も、トークイベントで一言質問をさせて頂いた。それは「マジックリアリズム」についてだった。マジックリアリズムとは、ラテンアメリカ文学に見られる表現形式で、日本でも、川端康成や安部公房の作品に、魔術的な表現と、現実の描写がインタラクティブに作用した表現が見られる。例えば、川端康成の『片腕』という作品では、男が女性から借りた腕を自分の腕と取り替えるという非現実な設定が展開される。しかし、魔術的な設定は一要素として機能するのみで、実際は現実の世界で展

開される物語なのだ。このように、非現実的な要素と、現実的な世界が一体となったような表現がマジックリアリズムと呼ばれる。森見登美彦の作品もマジックリアリズムとして分類されているようだ。

では、彼の作品において、どこが「マジック」であり、「リアル」なのであろうか。『夜は短し歩けよ乙女』には、奇妙なキャラクターが多く出てくるし、主人公が通う大学には、とても実際にありそうにないようなクラブサークルが登場する。読者が読んだとき、気になるのは「本当にこのような人がいるのか」、「こんな部活があればいいな」といった疑問や希望である。そして、それらの設定は、京都という舞台の上に構築している。

森見作品には、このような非現実的な設定と、それでいて綿密な京都の風景が平行して登場する。それを混合させることによって、独特の世界観を演出しているのだ。これから私は『夜は短し歩けよ乙女』を使い、マジックリアリズムの、「マジック」と「リアル」について分析を行いたい。そして、それらの要素が森見作品をどのように完成させているのかを述べたい。

「マジック」古本市の神・偏屈王

『夜は短し歩けよ乙女』には、特異なキャラクターが登場する。そもそも、主人公「乙女」ですら、達磨が好きで緋鯉の大きなぬいぐるみを背負ってしまうような特異な女の子である。そんな彼女を好きで、ほとんどストーカーのように付回す「先輩」も独特な性格をしている。

彼らを取り巻くサブキャラクターの方にも、非現実的な要素が取り巻いている。例えば、古本市に登場する少年は、若い年齢にも関わらず大人のような振る舞いをするし、乙女と先輩の行動を操作し、物語の進行役になっている。

> 少年は雨が上がりつつある空を指した。
> 「悪しき蒐集家の手から古書たちを解放する。僕は古本市の神だ」

まるで少年はこの場面の神であるような存在で、物語を導いていくのだ。現実にいないようなキャラクターなのだが、魅力的な人物となっている。

また、李白というキャラクターは、風邪を引けば暴風を起こすような超自然的な存在である。

> 看板や枯れ葉や貼り紙や空き缶などが空へ吹き上げられています。何かが砕ける大きな音が響いて来

ました。

「あれ、竜巻じゃないの」

羽貫さんが呟きました。「生まれて初めて見たわよ。得したわ！」

「あれは李白さんの咳だ。黴菌に充ちている。末期的であるな」

このように、サブキャラクターにも魔術的な設定を込めさせている。もちろん、人間が咳をしたとしても竜巻が起こるはずはない。ある種バカバカしいような設定も、登場人物が真剣に対峙し、それを乗り越えようとしているので、寸劇の効果的な要素となっている。

次に、作品内の固有名詞について注目したい。主人公の乙女は「おともだちパンチ」という奥の手を持っている。これは単に相手の頬を拳で殴るという行為なのだが、冒頭ではかなりの分量を使っておともだちパンチの説明をする。そのときの文体が独特である。

堅く握った拳には愛がないけれども、おともだちパンチには愛がある。愛に満ちたおともだちパンチを駆使して優雅に世を渡ってこそ、美しく調和のある人生が開けるのです

拳で人を殴るという行為に、何ら特別なところはないのに、真剣な書き口で、しかも愛や人生を語ることで、ただの固有名詞が作品内で特殊な意味を帯びてくる。森見作品には、真面目な語り口で、些細なことを面白く語ることが多い。これが魅力的な文体となって、読者に現象するのだ。

固有名詞の特異性は、文字の組み合わせにあるオリジナリティーにとどまらず、その名詞を彩る新たな言葉をも関連させる。例えば、学園祭に「偏屈王」というゲリラ演劇が登場する。この言葉は黒岩涙香の『巌窟王』が元になっていると思われるが、巌窟を偏屈へとずらすことで、新しい造語を誕生させている。これだけならば、単なるパロディに過ぎないのだが、その名詞を取り巻く設定を独特にすることで、偏屈王をより強い効果で演出している。演劇の主役が「プリンセス・ダルマ」であり、台本の中に「詭弁論部」や「桃色ブリーフ」という言葉が出てくる。それらは、森見の別作品『新釈　走れメロス』でも登場する言葉である。つまり、独特の単語「偏屈王」には、その設定に新たな別単語が関係してくるようになっている。そして、それらの言葉を真剣に使用する役者達が、コメディー色を作品内に彩ることになる。言語センスと、役者達の言葉という文体が、効果的に連

関して、独特の世界観を展開しているのだ。

マジックリアリズムの「マジック」の部分は、このように登場人物と固有名詞が常識から外れた言語空間で構成されている。まさにこれらの空間が森見の妄想力（空想力）なのだ。この後押しをしているのは、彼の膨大な語彙力である。それは時折出てくる文学の素養からも推測できる。

その谷崎を雑誌上で批判して、文学上の論争を展開したのが芥川龍之介だが、芥川は論争の数ヵ月後に自殺を遂げる。その自殺前後の様子を踏まえて書かれたのが、内田百聞の『山高帽子』で、そういった文章を賞賛したのが三島由紀夫。三島が二十二歳の時に会って、『僕はあなたが嫌いだ』と面を向かって言ってのけた相手が太宰治。太宰は自殺する一年前、一人の男のために、追悼文を書き、『君は、よくやった』と述べた。太宰にそう言われた男は結核で死んだ織田作之助だ。

この引用は、古本市の少年が延々と語る文学知識の連想の一部である。この箇所から読み取れるのは、森見には、深い文学素養があるということである。つまり、魔術的な表現の地盤には、自由に言葉を表現できる広大な言語の層があるからなのだ。

「リアル」京都という地盤・京大生

不思議な言葉が散りばめられている『夜は短し歩けよ乙女』であるが、作品の舞台は現実にある京都である。下鴨神社や先斗町は京都に存在する地名であるし、京阪電車のようなローカル線を作品に登場させている。あれほどに奇妙な「マジック」を使っているのにも関わらず、物語が完全に空想へと浮遊しないのは、場所が京都であるからである。実際に存在している京都の町を空想のキャラクター達が駆け抜けるのだ。

京都の風景は、かつて京都に住んでいた人には郷愁を、住んだことがない人には憧憬を抱かせる。この効果をもたらすのは、京都という地盤であるからに他ならない。

もし、作品の舞台が京都でなかったらどうなのだろう？京都は日本の中でも最も多い文化遺産を有している。それ以外の地方であれば、このような普遍性は生まれないように思われる。本来、実在する地名を使用した場合、それはリージョナルカルチャーであり、同時にサブカルチャーになってしまう。誰もが知っていることではないある地方の言葉を用いれば、全体性を確保することはで

きない。

しかし、京都は一地方でありながらも、古典的な文化を保持している。だからこそ、世界中から観光客が訪れる日本文化の歴史的拠点となっている。つまり、その地方独自の言葉でありながらも、日本人が共有できる言葉が京都には内在しているのだ。京都の言葉が私達と繋がることで、その言葉に、文化への憧れが、作用することになる。これによって、京都の地名や文化に関する言葉がとても力のあるものとして現象されるのだ。よって、事実の部分では、地名を使っているにも関わらず、京都文化という地盤により、サブカルチャーに留まらず、ハイカルチャーと結び付くようになっている。

また、京都大学をモチーフにした大学が登場することも、郷愁や憧れを生む要因となっている。森見の父も京都大学生であり、森見自身も京都大学のOBである。親子二代に渡って、京都文化で青春時代を送っている。京都で大学生活を送った人は、作品に登場する風景に共感するのだろう。

また、京都大学は高度な学術機関であることは、周知の事実である。元々、高学歴、アカデミックである京都大学に、奇妙な出来事が起こることで、読者に現実と非現実が混合された強烈な感覚を生み出させる。「京大生なのに、こんな人がいるの?」、「こんなに変なのに、でも京大生なんだ」というように、現実の京都大学と、魔術的な設定が交差し、私達は事実の地平と、妄想の青空を行ったり来たりすることになる。

「マジック」と「リアル」の接合点

このように、『夜は短し歩けよ乙女』は、魔術的な言葉と、現実的な世界が融合した物語になっている。これは作家としての想像力と、作家の経験が的確に使われたことにより実現している。奇妙な登場人物や、豊富な語彙力によって生まれた森見流の造語は、京都で過ごした大学生としての経験と結び付けられ、作品の舞台設定が整えられていく。マジックリアリズムと呼ばれるのは、この二つの要素が両義的に作用しているからである。

冒頭、私がイベントで質問した問い「森見式マジックリアリズムとはどのようなものか」に対して、森見登美彦は「私にとってのリアルは四畳半の部屋で生活する大学生像であり、空想の世界と、そのリアルが接合する点を探している」という文脈で答えてくれた。私はそのとき初めて、森見作品がどうしてこれほどの支持を生んだのかに気付いたのだった。

リアルな京都や大学生像は、実際に存在する経験でき

うる事象である。若い世代は京都の文化に触れ、現在に大学に通っている人は、大学生にはこのような部分があると納得する。上の世代も同様に、京都や大学への郷愁を感じる。そして、ここに空想の世界が接することで、気がつけば現実の地盤から離れ、森見が描く空想世界へと浮遊していく。森見式マジックリアリズムとはこのような虚像と実像が交差した世界観で成立している。

森見式マジックリアリズムがどれほど効果的であるかは理解できた。最後に一つ述べるならば、私が期待するのは、これからの森見作品がどのような「リアル」を設定するのかというところである。空想力はこれからも、半永久的に創造できるだろうが、リアルな舞台は依然として京都や大学生が使われるのであろうか。もし、今後京都や大学生から大きく離れたリアルを地盤にして作品を描くとするならば、新たな森見式マジックリアリズムが誕生するに違いない。マジックの部分は、森見が想像した独自の言語空間である。その空間が別のリアルと化合反応を起こしたとき、どのようなものになるのかを楽しみにしている。

リアルな舞台空間だけが消失してしまえば、マジックだけが残ってしまい、森見作品は単純な空想小説へと転換してしまう。別のリアルが機能することができれば、新たな森見作品が誕生することになるだろう。それが行われなければ、『夜は短し歩けよ乙女』のような妄想と京都の接合点上で、永遠と書き続けるような狭い作家で終わってしまう。新しい接合点の作品を、これからは読んでみたい。

確かに、『太陽の塔』、『夜は短し歩けよ乙女』などは名作であると思う。ただ、私はリアルな部分を新たにした、森見作品をこれから多く読みたいと思っている。森見の別作品『恋文の技術』や『美女と竹林』にはその傾向が見られるので、京都や大学生から離れたリアルと、妄想力が融合した作品を、期待したい。とはいえ、京都や大学生を使ったことで、多くのファンが付いている為、中々そこから離れることは難しいとは思う。

どちらにしても、注目すべきは「マジック」か「リアル」の新たな創造・使用なのである。新しい森見作品を期待しつつ、私はもう一度マジックリアリズムが絶妙に機能した『夜は短し歩けよ乙女』を読み直そうと思う。

（しろうち　ひろき・関西大学文学部四年次生）

原稿募集

「書評」誌では、広く院生、学生の原稿を募集しています。

おおまかな投稿要領を記します。

【投稿要領】

▽書評
二、〇〇〇字～四、〇〇〇字程度

▽映画・音楽などに関する評論など
二、〇〇〇字～四、〇〇〇字程度

▽評論・論文など
二、〇〇〇～八、〇〇〇字程度

▽創作（小説、戯曲、詩、短歌など）
小説、戯曲　一二、〇〇〇字程度

▽氏名、学年、連絡先をご記入下さい。

▽二〇一〇年七月末まで書評編集委員会宛にお送り下さい。

採否は編集委員会の判断によります。この点ご了承下さい。

問い合せ先
関大生協書評編集委員会宛
E・メール info@kandai.ne.jp

編集メモ

▼今号に寄せていただきましたCOP15、沖縄米軍基地、裁判員制度、教育への発信から、加害と被害の構造から、不安と恐れが鋭く刺す今日の社会へ一歩、二歩と踏み出す胎動が伝わり、学生からのことばと交差する誌面となっているのではと思っています。どうでしょうか。

▼今号で、映画の中の自転車で、映画女優原節子を紹介するとされていました「自転車のはなし」の丸山康裕先生は、私用が重なり、秋号に回りました。

▼昨秋号での「追想　鈴木祥蔵先生」の編集、発行以降、小誌に執筆頂きました先生方の訃報が続きました。

二〇〇五年四月刊より「読書甘露」を続けて執筆していただきました杉原四郎名誉教授が七月二四日に八九歳の生涯を閉じられました。六回目となる二〇〇七年秋号に、体調を悪くされ、残念なお気持ちで休載とされました。この時、八七歳のご高齢でした。その後、原稿の締切日の問い合わせの連絡があり、お元気に本を読まれているのだと思っていました。

八月一九日に六一歳で逝去されました木村洋二教授には驚きました。にこやかに熱を込めて話され、あごヒゲが動き回る様子から思いがけませんでした。二〇〇四年四月刊に「山桜の蔭に」、翌年四月刊に「愛される権利」と題し、寄せていただきました。亡くなられる前年に書評原稿をお願いしました。関心を示され、原稿を期待していましたが、「木村節」を落手できず残念な思いでいます。

木村先生を偲ぶ会が三月七日行われ、会場は暖かい風が吹いていました。

年の瀬三一日に森井暗名誉教授が亡くなられました。七八歳。二〇〇五年九月刊に「捨てし身の裁きにひろう いのち哉――「横浜事件再審開始決定」のその後――」を、翌年四月刊に「「官僚的司法」の改革未だし――「横浜事件」再審公判で免訴の判決――」を寄せて頂きました。読者から、先生の揺るぎない緻密な論理構成に接し、久し振りに講義を受けた感じとの声をいただきました。

二月四日、横浜地裁は無罪判断で司法の責任にも言及したとメディアが報じました。

同じ四日に、鄭早苗・大谷大学教授の訃報を新聞で知りました。「日本と韓国の歴史認識について――韓国内の史跡を通して――」と題し、二〇〇七年秋号にお寄せいただきました。

先生方、ありがとうございました。（M）

早わかり世界の文学
―パスティーシュ読書術

清水義範

田中 登

丸谷才一に『日本文学史早わかり』という、まるで学習参考書のような書名の本があるが、侮ることなかれ、これが古典和歌史を基軸に据えて日本文学の歴史を論じた、堂々たる評論書なのだ。一方、タイトルそのものも丸谷の本に倣ったとおぼしい『早わかり世界の文学』という文学案内書をものしたのは、『国語入試問題必勝法』『蕎麦ときしめん』『永遠のジャック&ベティ』など、一連のパスティーシュ小説で知られる清水義範だ。

中味は、三つの講演録とそれらに付した補講とから成るが、いかにも清水らしく「講義Ⅰパロディで文学はつながっている」が秀逸。そこで、清水は「芸術は模倣である」というアリストテレスの言葉を枕に置き、『聖書』は『ギルガメシュ叙事詩』の、ミルトン『失楽園』、ワイルド『サロメ』、スタインベック『エデンの東』は『聖書』の、そしてフィールディング『ジョセフ・アンドリュース』、ドストエフスキー『白痴』、マーク・トゥエイン『ハックルベリー・フィン』は、セルバンテス『ドン・キホーテ』のパロディとした上で、「文学というのはパロディのようなかたちで引用されたり模倣されたりして、よろこばしく継承されていくのではないか」「パロディというのは今まである作品にたいして、すごくいいから好き、というのと、ちょっと直したい、という二つの気持ちがあって書くものなのではないか」「今まである作品にたいする、「イエス」と「ノー」と両方もっているのがパロディであって、そのような形で次の作品が生まれてくる。それで文学史がつながっていく」と結論づける。

かく考えきたると、古典和歌の「本歌取り」はもちろんのこと、文学史における伝統という概念も理解しやすくなろう。読んで楽しい文学入門書の出現を歓迎したい。

（たなか　のぼる・関西大学文学部教授）

ちくま新書
2008年3月刊
197頁
本体価格 680円

「読楽」という言葉が
思い浮かんだ

心の中で洒落た会話を
繰り広げてくれる

ノリや感覚でだけ拒否することは
もはや現代社会において意味をなさない
自らの首を絞めている

そんなことを繰り返しながら
少しずつ成長してきたように思う
「正しい答え」などあるはずもなく

不安と焦燥感が募り
ついに爆発したくなる衝動に駆られる

人は空想だけにたよって
真実にたどりつくことはできないが
しかし　それなしには
また辿りつくことができない

子どもとはなんと美しいものだろうか
作為がないというか
計算がないというか
迷いがないというか
影の気配すらない
まっすぐさに
よくはっとさせられます

『書評』　通巻133号　2010年 春号

編集・発行　関西大学生活協同組合『書評』編集委員会
〒565-0842 吹田市千里山東3-10-1
TEL:06-6368-7527　FAX:06-6368-7555
info@kandai.ne.jp
発行年月　2010年4月
頒価　500円